昭和七年二月十五日印刷
昭和七年二月二十日發行
昭和十五年八月二十日再版發行

不許複製

國譯一切經大集部六

【定價金一圓五十錢】

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
株式會社　大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝（三三）〇九四〇四四番

兩角製本所　製本所

索　　引

（頁數は通頁を表す）

—— 大集部六索引終 ——

各至心もて、重ねて三寶に歸したり。時に會して法を聞ける無邊の衆生は、皆無上菩提の心を發したり。

復無量の諸衆生等の、悉く深く辟支佛の心を發したる有り、復無數の諸衆生等の、皆聲聞菩提の心を發したる有り、復無量の諸刹利王、婆羅門、毘舍、首陀、長者、居士など、皆悉く須陀洹果、斯陀含果、阿那含果を獲得せる有り。復無邊の諸衆生等の、皆無著阿羅漢果を證したる有りき』と。

爾の時、世尊、是の經を說き已りたまふに、一切の大衆、皆大に歡喜し、不空見等の、諸の大菩薩と大聲聞衆、及び諸の世間の人・天・八部、阿修羅等は、佛の所說を聞いて皆大に欣樂し、頂戴奉行したりき。（了）

も、苦を除くべし。

我れ須臾に、此の三昧微妙の經王を說き、世間に敎へたる時、一切の山河、及び大地は、皆悉く時を倶にして六種に震動したり。時に諸の衆生、皆善哉と稱したり』。

所以は何となれば、佛の此の菩薩念佛大三昧王なる、大乘方等微妙の經典の、無邊功德の大智海を說きたまへる時に當り、億百千數那由他等の、無數世界の佛の剎土は、皆悉く六種十八相に動じ、及び淨光大明を放つて普く照らしたればなり。

爾の時、無量の諸天、大天鼓を擊ちたるに、其の聲は雷の震ふがごとく、又和雅調暢の音を奏したり。

復八萬億那由他の地神天女は、衆の寶座を持つて、地より踊出し、世尊の前に至り、至心に恭敬して、以て奉獻したり。

復樂を主る乾闥婆王有りて、億百千那由他等の、種種の妙音の、愛樂すべきを作せり。

復諸の龍と龍の王子と有り、大密雲を興して、普く世界を覆ひ、天の曼陀及び衆の妙花を雨らし、普く大地に布いて、高さ百由旬なりき。

時に娑竭羅の諸大龍王は、虛空の中に於て、宮殿を變成し、衆寶もて莊嚴し、校飾微妙にして、殊特、天の栴檀末香を以て、此の剎を、三千大千の佛の世界とに散したり。

復色界の諸梵天王有り、如來の上に、寶華の蓋を作し、遍く三千大千の剎土を覆へり。是の蓋は、處處に、諸の寶鈴を垂れ、其の鈴は皆微妙の音を出だせること、譬へば他化自在天の樂の如くなりき。

爾の時、此の會の一切衆生、皆慈悲喜捨の心を修し、既に法音を聞いて、喜悅に勝えず、各

薩、是等は當に彌勒佛の時に於て、悉く不退轉地に住するを得べきを見たまへり。

是の時、東方に九萬九億百千那由他の、諸菩薩衆有り、梵上菩薩を首と爲せり。南方にも復、九萬九億の諸菩薩衆有り、持戒菩薩摩訶薩等を上首と爲せり。西方に復、九萬九千の諸菩薩衆有り、大智菩薩摩訶薩を上首と爲せり。北方にも復、九萬九千の諸菩薩衆有り、大光菩薩摩訶薩等を上首と爲せり。復彼の歡喜世界に住する、無量の菩薩有つて、皆悉く來集したり。梵身天王、大花梵王などの無量の梵王も、皆悉く來集したり。復無量百千那由他の、釋提桓因有り、衆念天首を上首と爲したり。復無量百千萬億那由他等の、四大天王有り。復無量の迦流夜叉・持鬘夜叉・常醉夜叉有り、復諸の餘の天・龍・夜叉、乾闥婆王、阿修羅王、迦留羅王、緊那羅王、摩睺羅王、羅刹、夜叉、拘槃荼鬼、富丹※那鬼、及び迦吒富單那鬼など、是の如き種々の、無數百千の大力鬼神も、亦來つて座に在りき。

爾の時、世尊、應・正遍知は、諸の大衆の、皆悉く已に集まれるを知りたまひ、將に此等の爲に、斯の經の、功德深重次第の法をば略說せんとしたまへり。諸の天と人とを調伏せんと欲したまへるが爲の故に、復師子謦咳の聲をば作したまへり。

即ち時に會せるものゝ爲に、未曾有を說いて『此の經法は、去・來・現在の、三世の諸佛の修行したまへる所にして、能く一切の諸大苦惱を滅す。是の故に諸佛世尊は、是の法を尊重して、已に行じ、當に行ずべく、今亦修行したまふなり。是の故に大士、我が身を求めんと欲すれば、應當にこの眞實の法を尊重すべし。法を敬事するは、當に佛を敬する如くなるべし。所以は何となれば、法は佛に異ならざればなり。是の人、法を求めんには、應に此に到るべし。『若しは天、若しは龍・人及び非人など、能く法を求むるには、疾く諸の苦を捨つべし。法を行ずるに

※丹の字は宋・元・明三本にて單に作る。

又天と世の位を　身肉及び筋骨とを捨て、
能く是の捨て難きを捨てなば　疾く正覺を成じ
施と戒とを最勝の果　忍と進と禪と慧等を得ん。
慈・悲・喜・捨を行じ　無上の智を求むるを以て
菩薩應に是を修すべし　衆生を利せんが爲の故に』と。

爾の時、世尊、卽ち偈頌を以て、諸の菩薩に答へたまはく、

『菩薩若し身劫のあひだ　修行せば是れ眞如に
異せず分別せざらん　此を以て菩提を說くなり。
其の性甚だ寂靜にして　得難く見るを得べきこと難し。
當に無盡の意を起し、　是の如きの行を修習すべし、
是の菩薩は則ち　進智を得て菩提に近かん』と。

爾の時、世尊、諸の菩薩の爲に、略して四法を說き、菩提を滿たさんための故に、之に告げて言はく『諸の善男子、當に戒品を學し、善く自ら防愼し、生智の方便を、守護し觀察して、常に勤めて乃至菩提を修習し、諸の衆生に於て、恒に慈悲の心を起し、最勝無上の菩提を求め、乃至身及び命と財とを捨すべし。應に是の如き四法と三昧の根本を守護し、成就し、增長すべし』と。

大集奉持品　第十六

爾の時、世尊、九萬億那由他等の、諸大菩薩摩訶薩衆、皆悉く已に集まり、復百千萬億の菩

童眞地に安住して　無生法忍を得
善く甚深の性に順じて、」　法に於て壞する所無し。」
其の餘の九方もまた等し　相貌も亦是の如し
悉く多億の衆、　那由他の諸佛をば見まつる。」
譬へば師子王の如く、　恐畏の所依たり
無漏の寂は等しき無く　第一の法輪をば轉じたまふ。」
是の處には去と來と無く　其の相も亦不住なり、
一切の法は實無し　性も空にして生滅無し。
衆生と及び壽命と　士夫とも亦是の如し、
一切の陰・界・入も　實無くして空[一]拳の如し。」
譬へば諸の野獸の　畢竟して所依無きが如く、」
諸法は實に無生なり　或は[二]身も常に不淨なり。」
穢心は生死に貪すること、」　彼の癡の嬰兒の如し。
多億那由他劫のあひだ　恒に苦んで而も厭はず。
是を以て佛は慈悲もて、」　此が爲に菩提をば說きたまふなり
是の故に諸の佛子、」　常に身・手・足を捨てよ。
頭目及び髓惱　妻・息と妙珍寶とを
皆悉く能く棄捨せば　此を以て菩提を行ぜん。」
旣に能く妻子と　眷屬と諸の外財と

【一】拳、麗本捲に作る、今三本に依る。
【二】身、麗本有に作るも、今三本に依る。

疾く勝菩提を得て　無上の法輪を轉ぜん。
是の菩薩則ち能く　法幢を建立す。
不思議の智を以て、　一切の法を分別せば、
皆是れ虚誑にして　畢竟不眞實なるを見ん。
我れ今汝の爲に　此の三昧を宣示すと雖も、
是の如き儀式の相もては、　其の義甚だ知り難し』と。

爾の時、世尊、此の法を説きたまへるは、諸の菩薩有つて、無生忍を得つ。又復念佛三昧に安住したり。是の諸菩薩、皆東方に、恒沙等の諸佛世尊、此の三昧の、清淨平等にして、增無く減無く、二無く異無きを、説きたまふをば見つ。

其の餘の諸方にも、亦復是の如く、皆、無量億那由他の、如來世尊有つて、倶時に皆、諸佛所説の念佛三昧をば演べたまへり。

時に諸の菩薩、佛の所説を聞き、身心歡喜して、快く安樂を得、踊躍に勝へず、卽ち佛前に於て、重ねて偈頌を以て、其の相貌を説かく、

『世の光明なる　正覺の牟尼尊、
大法の聖醫王、　釋迦佛の智海に歸命しまつる。」
人の依たる師子王は、　普く諸色の相を示したまへり、
彼の東方の刹を見るに　那由他の諸佛おはす。
衆生を愍みたまふが故に非ずして、　法を説きたまふこと師子の如し、
那由他をば調伏したまふに　是の如き諸の菩薩は、」

若し能く深く分別せば、　則ち此の三昧を得ん。
一切の諸入等は　皆空にして實有ること無し。
凡夫は尙ほ小兒の如し　癡惑もて身有りと計す。
貪愛に迷はされて　是の虛妄なるを知らざれば
是の身は空聚の如し、　衆の賊の止まる所なり。
思ふべし、虛誑の法や、　智者は常に厭離す
是の如く深く觀察すれば　則ち是の三昧を得ん。
陰・界・入の諸法は　皆空にして一も實なる無し。
若し人、能く分別せば、　此の三昧を生ずるを得ん。
炎、泡、聚沫、　幻化、芭蕉等の如し、
當に身の危脆なるを觀ずべし、　不實なること此にも倍す。
若し此の諸の菩薩、　是の如きの智を毀たずは
疾く一切佛所說の　深三昧をば得ん。
諸法は自ら生ぜず　亦他に從つても有らず
畢竟所住無し、　無漏の法も亦然り。
若し能く是の如く觀ぜば　則ち此の三昧を生ぜん。
一切有爲の相と　諸行の變異の相とを捨てよ。
此の法は虛空の如し、　生ずるも不可得なり、
菩薩は是の如く知つて　一切法を修學せば、

「常に能く一切を捨し、　有爲虛危の相もて、
諸法の性を得となさざれば、　則ち是の三昧を獲ん。
諸の誹謗と　及び憶想・分別に著する莫く
永く我と我所とを離れよ。」　是の如くせば三昧を得ん。
諸の陰の法に於て　衆生と壽命、
我・人及び起者　士夫・養育等を見ざれ。
亦分別の想無き、　是を名けて說法と爲す、
諸の法に於て染せざれ、　我性と及び我所とにも。
我は陰の生に非ずと見なば　則ち是の三昧を得ん、
色と受と想と行と識とは　一切空にして無相なり。
根本は皆不淨なる、　此を知れば三昧を得ん
諸の有爲の法を觀ずるに　緣に從つて、自在ならず。
一切は眞實ならず、　虛誑にして取るべからず、
彼の如きは緣に從ふ法なり　是を則ち眼入と名く。
耳と鼻等も亦爾り　皆自性有ること無し、
若し能く諦に分別せば、　此の三昧を生ずるを得ん。
是の身は虛にして實無し　陰の聚にして一の淨も無し、
九孔より膿血を流す、　誰か當に此の處を樂むべき。」
意入は念念に滅し、　虛妄なること常に幻の如し、」

菩薩念佛三昧經

正念品　第十五

爾の時、衆中に、思義菩薩、捨非義菩薩、心勇健菩薩、分別心菩薩、無慳意菩薩、拔煩惱菩薩、善思義菩薩、衆智菩薩、無縛菩薩、衆光菩薩、智燈光菩薩、造智知識菩薩、無等煩惱菩薩、帝幢天子、他化天子など、皆共に恭敬して、世尊に白さく『今、諸佛の所說と言ふは、何の故にか、名けて諸佛の所說とは爲す、云何が諸佛なる、何者か是れ佛、當に云何が念ずるを、名けて念佛とは爲す、身の念を起すと爲すや、法念を起すと爲すや』と。

爾の時、世尊、諸の菩薩に告げたまはく『善い哉、善い哉、諸の善男子、汝等の問ふ所は、甚深にして思し難く、皆是れ、佛の威神の力を承けて、此の樂說無碍の辯才をば生じつるなり。諸佛の所說をば、佛說と爲し、正しく諸法眞實の相を念ずる、是を念佛とは名く。

『何をか正念と謂ふとならば、一切の諸惡誹謗に著すること莫くして、應に一切の、譏謗無きの法を修すべく、當に我及び非我を離るべく、衆生・壽命・宰主・養育士・夫人及び生者を見ず、作者と使作の者、陰・界・諸入、想所緣の處などに著する莫く、一切の法に於て、今世・後世、乃至三界に、依る無く、染する無く、我見の諸行に、取無く捨無く、禪定、解脫及び六神通、如意、根・力、菩提覺分、毘舍羅等の、無量の善法——略說せば、九萬億那由他の、不可思議・甚深の三昧、一切諸佛の常に念ずる所の法、佛の方便の慧——などに隨ふなり。而も方等經典を書寫し、讀誦し、敷演して、佛の功德を說くをば、佛の所說とは名くるなり』と。

爾の時、世尊、卽ち偈を說いて言はく、

本經をその宋譯(五卷本)と對照すると、下表の如く、劉宋譯の最後の二本が、本經には闕けて居り、各品の頭目に見るが如く、兩者の譯文が極めて相近似して居るので、以下異譯に依つて、本經に闕けた二品を出して、參考に供する次第である。(譯者記)

菩薩念佛三昧經(五卷)	大集經菩薩念佛三昧分(十卷)
一、序品	序品
二、不空見本事品	不空見本事品
三、神通品	神變品
四、彌勒神通品	彌勒神通品
五、讚佛音辯才品	歎佛妙音勝辯品
六、讚如來功德品	讚如來功德品
七、如來神力證正說品	佛作神通品
八、不空見勸請品	見無邊佛請問品
九、讚三昧相品	讚三昧相品
十、正觀品	正觀品 思惟三昧品 示現微笑品
十一、微密王品	神通品
十二、三法品 十三、勸持品	說修習三昧品
十四、諸菩薩本行品	諸菩薩本行品
十五、正念品	
十六、大乘奉持品	

唯法を求め群生を樂利せんとて、　億數恒沙の佛を供養せん。
當來に佛の無邊の智を成じ、　能く多く利益して衆苦を滅せん、
諸の衆生を安樂にせんことを求むるが爲に、　無量無邊の佛をば供養せん。
當に佛の大名稱を成ずるを得べし、　彼の刹の莊嚴は、難思議ならん。
是の衆寶を盡して人を樂觀せしめんこと、　猶し安樂國の殊にして廣大なるがごとけん。
多億那由の諸の菩薩　成佛の記を受けて人中の尊たらん。
不思議なる諸佛の智を以て　是の如く大法王を讃稱す。
我れ今汝の爲にぞ説く、　一切の大衆、諸の天人など
其れ正覺の眞なるを求むる有らば　終に自ら彼の如來の證と同じからん。
若し能く勝菩提を願樂せば、　彼を上人を號し威護を蒙らん。
諸天の守衛及び龍鬼、　鳩槃・金鳥幷に夜叉などの。
若し祈願して菩提を成ぜんと欲しなば　心に常に樂うて佛の勝道を修すべし、
世尊の哀愍したまふこと一子の如けん　身は金色となり、力智多聞ならん』と。[二六]

大集經念佛三昧品卷第十

【二六】 宋譯は是に續いて、正念品第十五と、牽持品第十六との二品を加へたり。

彼の花如來、涅槃し已れば、
莊嚴如來涅槃し已れば
彼の輩、彼に於て亦法を求め、
勝智如來涅槃し已れば
善見如來涅槃し已れば、
善持如來涅槃し已れば、
彼れ亦三種の法を攝持し、
具威儀佛涅槃し已れば
無量威佛涅槃し已れば
勝王如來涅槃し已れば
現前如來涅槃し已れば
爾の時、此等は法の爲の故に、
是の如き未來の諸世尊の
己が身命をば愛惜する無く、
斯の如く勝善根を藉るに因り
是の佛は人中の最第一にして、
彼の殊勝の世尊の所に於て、
求法の爲の故に常に精勤し、
彼方の有らゆる諸世界に、

佛世尊有つて莊嚴と號けん。
佛世尊有つて勝智と名けん、
供養を興建して邊有る無けん。
佛世尊有り、善見と名けん、
佛世尊有りて善持と名けん。
佛有り名けて具威儀と曰はん
唯斯の菩提の道を證するを求めん。
佛世尊有り、無量威といはん、
佛世尊有り。勝王と名けん。
佛世尊有り、現前と名けん、
佛世尊有り、最熾王といはん。
廣く供養を設けんこと不思議なり。
世間の勝智は、一切に超えん
但だ佛の菩提を證せんことを求むるが爲に。
將來には勝威德に奉承せん
彼の調御阿彌陀の如くならん。
卽ち上菩提を修證せんと欲せん、
當に無邊の妙供養を設けん。
衰惱を遠離し五塵を除かん、

長く一切の外の論師に達し、
諸の功德を攝せること、說くべからず、
當來には彌勒尊に値ふことを得ん、
是に於て三業もて法を持護す、
復彌勒、涅槃の後は、
亦彼の法を求めて三業に持し、
當來の千の佛・無上尊は、
斯等の法師は世に恒に說かん、
是の賢劫の諸佛を過ぎ已らば
更に如來有り、厥の號は賢、
賢と毘婆尸との滅後には、
彼の時、智者は皆攝持し
婆羅世尊旣に涅槃せば、
斯の輩、彼に於て法を求むるが故に、
觀察如來涅槃し已れば
遍見如來涅槃し已れば、
花上如來涅槃し已れば
爾の時、諸の智、還法を求め
優鉢羅佛の涅槃し已れば

亦一切の邪智の友を捨し
此の福もて要ず登すに菩提を以てせん。
斯の輩、爾の時、皆集會せん、
此に因つて能く勝菩提を成ぜん。
佛有つて、師子・調御師といはん
此に因つて等正覺を成ずるを得ん。
即ち是に賢劫の衆生をば導く、
因つて無礙妙色の身を證せん。
復正覺あつて無量威といはん、
及び世尊毘婆尸なり。
復佛有つて出で、婆羅と名けん、
廣く衆具を設けて供養を興さん。
佛如來有つて觀察と名けん、
而も復、妙法王を供養せん。
佛世尊有つて、見と名けん、
佛有り、厥の名は蓮花上、
佛有り、稱して優鉢羅と號けん、
兩足尊をば承事供養せん。
佛世尊有り、名けて花と曰はん、

往にし積集の勝因緣に由り、
往昔の世尊をば善眼と號し、
斯の輩は彼の時、上首たり
往昔に佛有りて莊嚴王と號し
斯の輩は多く是れ最上の士たり、
過去に佛有り、放光と名け、
斯の輩は彼に於て已に上首と爲り、
大摩尼珠火光佛、
彼の時、法を攝せんとて首起たり、
大光・日光・不思議、
彼に於て攝法のために上首として起てり
善華香佛及び金華、
彼の時皆、護法の首たり
是の如き過去の諸如來は
彼に於て三種の攝持の故に、
八萬の丈夫・通達の士は、
斯の輩、是の勝善根に因り、
生ずる所、常に尊勝の家に處り
斯等の集會をば法朋と爲す、

今ぞ偈を獲て大法王を觀ずなれ
亦火幢と名けて無邊の威ありき。
無上の正覺を求めんと欲したるが故に。
刹は他化天の宮所のごとくなりき。
彼の時已に大菩提に就きつ、
亦無邊光無量相と[いひぬ]。
初より是の如き妙三昧をば求めつ、
普光明聚調御師などは、
菩提の安樂を求めたるが故に。
無量精進、無邊定など、
安樂の菩提を求めんが爲の故に。
無漏如來と無諍行など、
是の如き上菩提を求めんが爲の故に。
無邊智の尊にして[三五]兩足の尊たり
最上の佛の菩提をば祈願しつ。
第一の妙菩提を證せんとは爲しつ、
當來には人中の覺に奉持せん。
一切永く諸の惡道を除く、
終に世間の覺をば遠離せず。

【三五】兩、麗本、雨に作るも今餘の三本に依る。

世尊は自ら護持せん、　是の如き深妙の典をば。
我れ聞く、大名稱は、　終に厭倦有ること無けん、
不思議の法門は、　諸佛の所說たり。
汝聽け、今我れ說かん、　斯の諸の菩薩衆は、
但に一佛の所にのみ　此の誠敬の心を發したるには非ず。
我れ念ふに、往昔の諸の生處は　六十六億那由他なり
爾の時皆亦斯の如くに起てり、　唯此の深法を護得せんが爲に。
又復過去に、玆より前、　無量恒沙の諸佛の所に、
彼に於て首と爲つて虔敬を修し、　最上の妙法をば、我れ護持したりき。
斯の諸の大士は法の爲の故に、　能く重命をば捨てつ、豈に身を愛せん、
其れ何の甘法も、苦を憚らざるは、　獨り菩提無上の證の爲なりき。
思議すべからざる恒沙數の、　無量の威德ある諸の如來は、
彼の時上首として皆敬起しつ、　亦唯斯の法をば愛樂したる故なり。
寶光・火光・大光佛、　電光・普光・不思議など、
斯の輩は〔二四〕三もて等しく法を攝持したり　菩提無上の道を求めんが爲に。
唯我れ神力もて能く知る　汝の果報、今日皆明に現ずるを、
空しからざりき、汝の久しく斯の願を發しつ、　昔より無量百千生を經たることや。
汝は諸佛大師の前に於て、　不思議の行をば悉く圓滿し、
常業として兩足尊をば歌讚し、　苦行して諸の大誓を熏修したり。

【二四】三もて等しく。本文には斯輩三等云云とあり。宋譯相當文には、三業持此法、爲攝最勝道と云へり。本文に三等とあるは、或は三業の誤か。

彼の天、人の明照此のごとくなるを觀、　斯の人、今亦彼の天をば見る、
天と人と交希有の心をば發す、　何に緣つて今更に微笑を現じたまへる。
無上の大夫は世の依止たり　大尊、今日我が爲に宣べたまへ、
若し大慈の憐笑を聞かんには、　唯深く慶幸するのみ、豈に能く報じまつらん』と。

爾の時世尊、卽ち如意定智神通菩薩摩訶薩の爲に、大士所有の（三三）妙問を宣說し、亦卽ち彼の恒沙の諸如來・應供・等正覺の名號をば宣べたまへり。其の偈の詞に曰はく、

『諸の善男子等は、　法王の妙聲を聞くに、
光明と威德は十方に遍し　狀林間に開ける花樹の如くなり。
妙行圓滿にして智無邊なり　大威もて能く世間の益を爲したまふ、
最勝の方便もて願はくは演說したまはんを　今復微笑したまふは何の因緣か有る。
世尊は無等無邊の智あり、　衆の類に挺超したまひて誰か能くかんへ。
無上の威德、今應に宣べたまふべし　何に因つて今日復、微笑したまへるやを。
今此の世界、大千に遍じ、　花敷き盡して天帝の樹のごとし
一切の衆生は皆歡喜す　今更に微笑したまふは何の因る所たる。
盲者は能く視、聾も聞くを得　瘂者は言ふを得、蹇も能く歩まん、
狂亂失心せるもの、本念を獲ん　今復微笑したまふは何の因緣なる。
群獸喜躍して悉く鳴吼し　異鳥歡欣して淸音をば吐き、
彼の六十八千は　悉く菩提の願を發しつ。
亦當來の世に、　正法の毀壞せん時、」

【三三】妙問を宣說云云、宋譯によれば、かの請問を知りたまへるが故に、諸佛所說の偈をば宣べたまへるなり。

の大乘の〔二〇〕修多羅の中に於て、次第に修行し、聞き已つて書寫し、讀誦・受持・分別・思惟し、廣く他の爲に說き、亦他人をして、分別解說せしめんには、必ず阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得べきが故に』と。

爾の時、世尊、諸の菩薩摩訶薩の、一心に念求するを知りたまひて、遂に即ち微笑したまへり。諸佛世尊の法、是の如くなるが故に。即ち微笑したまへる時、世尊の面門より、種種の光を放ちたまひぬ。所謂金・銀・琉璃・頗梨・馬瑙・車渠・眞珠などなり。是の如き一切の諸光中より、各皆復、無量百千の異色の光明を出だしたるが、皆世尊の面門よりして出で、十方無量の世間を遍遊し、上は梵宮に至つて、還佛頂に住まり、帝釋建立の寶幢の如く、端直光華ありて、見る者歡喜したり。時に此の三千大千世界は莊嚴莊麗にして、微妙無比なりき。

爾の時、彼の諸の菩薩摩訶薩の衆は、是の神變莊嚴の事を見已り、咸皆驚歎すらく『奇なる哉、希有なり、世尊の神通や』と。是の衆中は、一の菩薩摩訶薩の、〔二一〕如意定智神通と名けたるが有り、即ち座より起ち、正しく威儀を持し、合掌して恭敬し、世尊を頂禮し已つて、天の沈水香、多伽羅香、多摩羅跋香、牛頭栴檀、末栴檀等を用て、佛の上に奉散し、復天の曼陀羅花、摩訶曼陀羅花、天の優鉢羅花、波頭摩花、拘物頭花、分陀利花、〔二二〕鷄婆羅花、摩訶鷄婆羅花等を以て、世尊を供養し已り、偈を說いて讃へて曰はく、

『世尊・調御は倫匹無し　金色の相好を具足したまへる人なり、
衆樂鼓せざるに自然に鳴る、　今何に因つてか佛微笑したまへる。
一切の樂音は時を同じうして作る　本天人の鼓する所には非ず、
而も人天をして安樂を獲しむ　今更に微笑したまふは何の所緣なる。

〔二〇〕修多羅 Sūtra 經の原語。

〔二一〕如意定智神通、宋譯には慙愧安定發衆意行に作る。

〔二二〕鷄婆羅 Kesara? 宋譯相當文、簡にして之を出ださず。本經序品には鷄婆羅に作る、婆或は娑の誤なるべきか。

『不空見、然も此の善男子・善女人は、但だ名を聞くのみを以て、獲る所の功徳すら、尚ほ前の福を超ゆること、無量無邊にして、稱量すべからず、挍比すべからざるなり。何に況んや、彼の善男子・善女人、具足して是の三昧を聞くことを得、能く即ち書寫し讀誦し受持し、義理を思惟し、善能く諸の天人大衆に、宣揚廣釋せんをや。

『不空見、汝今當に知るべし、我れ但だ、三昧の功德を略說したるのみを。若し廣く此の定の善根を說かんと欲せるに、假ひ多劫を經るも、終に盡す能はざらん』と。

諸菩薩本行品[一] 第十五

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、善現菩薩摩訶薩、[二]善喜光菩薩摩訶薩、[三]無邊見菩薩摩訶薩、[四]無邊莊嚴菩薩摩訶薩、無邊幢菩薩摩訶薩、無邊光明菩薩摩訶薩、[五]無邊稱菩薩摩訶薩、無邊禪菩薩摩訶薩、無邊智菩薩摩訶薩、[六]無邊發王菩薩摩訶薩、無邊自在王菩薩摩訶薩、思惟最勝無邊菩薩摩訶薩、思惟一切法意菩薩摩訶薩、思惟虛空意菩薩摩訶薩、[七]思惟無礙意菩薩摩訶薩、無邊寶意菩薩摩訶薩、[八]能滅一切怖畏菩薩摩訶薩、[九]善淨意菩薩摩訶薩など、是の如き等の、菩薩摩訶薩を首と爲し、九十億那由他百千の菩薩摩訶薩と俱に、座より起ち、偏袒右肩、右膝著地して、合掌恭敬し、佛に白して言さく『世尊、我等、佛より、是の菩薩念佛三昧の、功德利益を聞きつ。我等要ず當に、躬自書寫し讀誦して受持し、義理を思惟して、廣く他の爲に說き、亦他人をして、如說に修行せしめん。

『何を以ての故にとならば、我等は阿耨多羅三藐三菩提を攝受せんと欲するが爲の故なり。世尊、我等は、此の諸佛世尊所說の、三昧の甚深經典をば、諸の衆生をして、聞き已つて歡喜せしめん。我等亦當に、其の氣力を益し、其をして安樂ならしむべし。所以は何とならば、彼等若し能く、是

[一] 宋譯、第十四に作る。
[二] 善喜光、同に善歡喜に作る。
[三] 無邊見、同に無量示現に作る。
[四] 無邊莊嚴、同に無量力に作る。
[五] 無邊稱、同に無量勝に作る。
[六] 無邊發王、以下の三、同に無量修王、無量意、無量勝無量定とす。
[七] 思惟無礙意、同に、分別無著意に作る。
[八] 能滅一切怖畏、同に一切寂定自在に作る。
[九] 善淨意、同に善教詔意に作る。

此の三昧を具足するに因り、能く不思議の出世間の果報の聚を得るが故なり。

『不空見、彼の善男子・善女人も、若し但だ耳に此の三昧の名を聞くのみなるも、當に無量無邊の福聚を得べく、亦復當に無量無邊の福行を作すべし。然も彼れ所得の福聚の善根、福行の功徳は、廣大甚深にして、挍計すべからず、算數すべからず、稱量すべからず、知るを得べからざるなり。

『復次に不空見、粗なること此のごとき義を言つては、尙ほ未だ明さず、我れ今汝の爲に、更に譬喩を引いて、諸の智者をして、少分をも之を解せしめん。

『不空見、若し菩薩摩訶薩有り、專心に信樂して、檀波羅蜜を修行し、日に三時に施し、日の初分に於ては、神通力を以ての故に、卽ち七寶及び餘の衆具を以て、彼の恒沙の世界を充滿せしめ、還用つて、恒沙の如來・應供・等正覺、及び諸の弟子・聲聞衆等に奉上し、日の初分に、是の如く施を行ずるが如く、日の中・後分にも、施を行ずること、亦然り。日に是の如き三昧を別つて施を行じ、乃至彼の無量無邊那由他恒沙劫の劫を經るあひだ、常に是を行じて、休廢有ること無く、亦復阿耨多羅三藐三菩提を求めんに、不空見、意に於て云何、彼の菩薩摩訶薩、能く是の如き長時に施を行じて、獲る所の功德、多しと謂ふべきや不や』と。

不空見の言はく『甚だ多し、世尊、無量無邊にして、算數すべからず、稱量すべからず、思議すべからず』と。

時に佛、復不空見菩薩に告げて言はく『不空見、吾れ更に汝に語らん、汝宜しく諦に聽くべし。假ひ彼の菩薩摩訶薩、是の如く檀波羅蜜を修行して、種うる所の善根・獲る所の福聚は、實に廣大なりと雖も、然も猶ほ、斯の善男子・善女人の、但だ能く耳に此の三昧の名を聞き、或は時に書寫し、或は時に讀誦し、或は時に如來所說の甚妙の法門を信解する少功德にだも、及ばざるなり。

を聞いて、能く受持せんに、彼等善男子・善女人は、自然に疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんを。

『復次に不空見、汝應に是の如き三昧を受持して、常に念じて、彼の一切世間の、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、及び諸の國王・大臣・宰相、刹利・婆羅門・毘舍・首陀、一切の乞士、幷に餘の種種の外道、尼犍・遮羅迦・波利婆闍迦等の爲に、頌宣廣說すべし。何を以ての故にとならば、此の三昧の大德威力は、能く彼等をして、速に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしむるを以ての故なり。

『復次に不空見、若しは善男子・善女人有り、淨信と敬心ともて、分明に此の念佛三昧の、過去の諸佛の讃歎する所にして、一切の如來の、[一〇]印可したる所なるを知らんに、是の如く知り已らば、當に即ち讀誦すべく、當に既ち受持すべく、當に即ち修行すべく、當に即ち敷演すべく、復應當に是の如き思惟を作すべし「今此の三昧は、不思議の大功德聚たり」と。是の如く思し已つて、當に更に信敬すべく、當に更に尊重すべく、當に更に深入すべく、當に更に證知すべし。

『所以は何とならば、今此の三昧は、乃ち是れ、一切諸佛の所說たればなり。一切諸佛の所行の處なればなり、一切諸佛の印可する所なればなり、一切諸佛の正敎なればなり、一切諸佛の辯才なればなり、一切諸佛の覺する所なればなり、一切諸佛の選擇せるものなればなり、一切諸佛の所作なればなり、一切諸佛の財寶なればなり、一切諸佛の府庫なればなり、一切諸佛の伏藏なればなり、一切諸佛の倉廩なればなり、一切諸佛の印璽なればなり、一切諸佛の舍利なればなり、一切諸佛の體性なればなり。

『不空見、若し彼の善男子・善女人等、能く是の如く知らんに、即ち無量無邊の善根を得ん。此の功德に緣つて、生ずる所、常に大刹利の家、大婆羅門の家、及び餘の一切の大威勢の家、大尊重の家、大德の天の家に處り、乃至當に阿耨多羅三藐三菩提を證すべし。何を以ての故にとならば、不空見、

【一〇】印可、許可し、稱美すること。

しは善男子・善女人有り、此の菩薩念佛三昧を聞き、正意もて受持し、諦に善く義理を思惟し分別して、廣く他人の爲に、宣揚し解釋せんには、當に知るべし、彼の諸の善男子・善女人は、久しからずして、自ら阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。

『復次に不空見、譬へば人有り、金剛丸を呑まんに、當に知るべし、是の人、久しからずして必ず死せん、何を以ての故にとならば、彼の金剛丸は、消すべからざるを以ての故なるが如く、是の如く不空見、若しは善男子・善女人有り、但だ能く、是の如き三昧を聞き、或は復思惟し、或は常に親近し、或は亦修習し、或は能く宣說せんには、當に知るべし、彼の諸の善男子・善女人は、久しからずして、必ず阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。何を以ての故にとならば、此の三昧は、即ち是れ、過去・現在・未來、三世の一切の諸如來・應供・等正覺の、思惟し修習し、淸淨に成就したる眞實の金剛にして、虛僞有ること無く、破壞すべからず、復能く諸の菩薩輩を敎化して、其をして安住せしむればなり。諸の菩薩は必ず能く、安隱に大乘に住するを以ての故に。

『復次に不空見、譬へば三十三天の、歡喜園[九]を見て、皆安樂を生ずるが如く、是の如く不空見、彼の一切の菩薩摩訶薩は、皆此の三昧の名字を聞くに因り、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。是の三昧法門の名字は、往昔の諸佛の、讃歎する所、他の爲に廣說し、理義を釋解し、名味・句身を開發・顯示し、具足圓滿して、法界に安住し、諸大菩薩を擁護攝持して、敎化を增長し、眞道を樂うて、正道淳和ならしめ、常に安樂を受けしめたればなり。

『不空見、是の因緣を以て、汝應に此を知るべし、若し諸の菩薩、此の三昧を聞きて、暫く心耳を經んに、是の如き諸の善男子・善女人は、久しからずして、當に阿耨多羅三藐三菩提を證すべし。不空見、吾れ故に汝に語る、汝當に善く知るべし、若し諸の菩薩摩訶薩の、此の甚深なる念佛三昧

【九】歡喜園 Udyāna、帝釋の住居、喜見城の園なるべし。

稱揚し廣說せんをや。

『若し菩薩摩訶薩有りて、菩薩乘に住し、此の三昧の經を、心耳に聞かんに、彼れ亦久しからずして、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を成就すべし。復初めて菩薩乘に住する諸の菩薩等有らば、即便ち速に不退轉地を證し、阿耨多羅三藐三菩提に於て、亦、遠しと爲さず。

『復次に不空見、譬へば夜分の、將に盡きんとし、其の日、未だ出でず、東方の明相、始めて現はれん時、閻浮提の人、歡喜せざる莫きが如し。何を以ての故にとならば、彼の日輪、久しからずして、當に現はれ、廣く世間の爲に、大照明を作し、閻浮の人をして、咸若しは善、若しは惡などの、淨穢の諸色を覩見するを得、作す所有るを得しむればなり。

『是の如く、不空見、若し善男子・善女人有り、若し但だ能く此の念佛三昧經を耳に於て聞かんに、彼の輩は、久しからずして、盡く阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得ん。是の故に汝等、此の三昧に於て、決定の心を作し、不壞の信を起して、異見を生ずる莫く、疑網を懷く勿れ。

『復次に不空見、劫の將に盡きんとして、第六日の、世間に現はるる時、是の如く、一切の三千大千世界の大地は、盡く皆煙を出し、煙出で已るや、當に久しからずして、第七の日出でて、一切の世界、皆悉く炯然たるが如く、是の如く、不空見、若しは善男子・善女人有り、或は已に彼の菩薩乘の中に住し、及び未だ住せざるも、若し曾て此の、念佛三昧經を耳に聞き、或は時に讀誦し、或は受持する有り、或は義を思惟し、或は如說に行じ、乃至或は能く、他の爲に廣說せんに、彼等は決定して、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得ん。

『復次に不空見、人の井を穿つや、若しは濕土の、手足を黏汚するを見、或は時に復、水と泥と雜和するを見て、智者當に、水を去ること、遠からざるを知るべきが如く、是の如く、不空見、若

【七】炯、あつき貌。

【八】黏、ねばる。

し、彼の樹王比丘に事へて、此の三昧を求め、讀誦受持し、如說に修行して、諸の弟子に敎へ、終に暫くも懈らざらん。又彼の眷屬比丘の大衆も、勇猛に精進して、亦倦む心無けん。

『不空見、彼の天主比丘と、及び其の眷屬とは、樹王法師に於て、尊重の心を生じ、諸佛の想を起し、妙法を說くを聞いては、一心に受持し、長夜精勤して、初より休息せざらん。彼の樹王比丘は、皆悉く、彼の九十六億百千比丘の、菩薩行を行じて、不退轉地に住するを成就して、然る後、滅度し、彼の諸の眷屬も、皆亦命終せん。

『時に復、佛有り、閻浮幢如來・應供・等正覺と名くるが、世に出現せん。彼の天主比丘は、諸の眷屬と與に、更に彼の閻浮幢如來・應供・等正覺の所に於て、此の如き甚深三昧の經典を、勤求諮問し、讀誦・受持し、其の義を思惟して、如說に修行し、他の爲に解釋して、世間の一切天人を利益せん、無上の大菩提を證せんが爲の故なり。

『又彼の天主比丘、此の無上の勝三昧の爲の故に、廣く分別して、諸佛所宣の甚深の經典を說き、三千劫を過ぎ已つて、然る後に作佛し、又能く無量の大衆を敎化して、皆成熟を得しめ、畢竟して不退轉地に安住せしめ、悉く阿耨多羅三藐三菩提の記をば受けしめん』と。

佛の不空見に告げたまはく『汝今當に知るべし、爾の時の彼の天主王とは、豈に異人ならんや、卽ち今の最上行如來・應供・等正覺是れなり。是の故に、汝今應に疑惑すべからず。

『復次に不空見、汝當に一心に、此の三昧王の善根の淺深、功德の少多を、思惟し、觀察すべし。我れ今汝の爲に、少分を說かんのみ。若し彼の世間の、無量無邊億那由他百千の衆生、但だ能く耳に此の三昧の名を聞くのみにて、當來には必定して等正覺を成ずべし。我れ廣く此の三昧王を說くを聞いて、若しは讀誦し、若しは受持し、若しは義を思惟し、若しは修行し、若しは能く他の爲に、

『不空見、彼の天主王、此の三昧の名を聞くを得ん時に當り、卽ち能く受持して、思惟觀察し、幷に亦、彼の比丘の名を誦念し、是の夜を過ぎ已り、卽ち晨朝に於て、四天下の金輪王位を捨て、亦復八十億百千那由他の、後宮の妃后女侍の屬を棄捨し、又盡く五欲の衆具を放棄せん。斯れ皆、斯の三昧王の爲の故なり。

『王時に復、九十六億百千那由他の衆生と與に、彼の比丘を求め、家を捨てて出家せん。不空見、時に彼の樹王比丘は、四部衆と天龍・夜叉、及び人非人などの與に、周匝圍遶せられ、復九十億の欲界の諸天有りて、左右に聽法し、復八十那由他の諸菩薩衆有り、前に在つて、是の三昧王を讃説し、分別解釋して、其の義趣を顯はさん。

『彼の天主王、其の所に至り已り、卽ち衆寶を以て、比丘の上に散じ、然る後方に始めて、五體を地に投げ、一心に彼の比丘の足を頂禮せん。又八十の寶箱の、各一斛を容るるに、金花を盛滿したるを以て、其の上に奉散せん。復天花――所謂優鉢羅花、鉢頭摩花、拘物頭花、分陀利花、曼陀羅花、摩訶曼陀羅花――を以て、用つて其の上に散ぜん。復天の諸の妙香――所謂、天の沈水香、多伽羅香、多摩羅跋、牛頭栴檀、黑沈水、栴檀の末香等――を以て、用つて其の上に散ぜん。

『廣く是の如き供具を設け已つて、然る後、請ふて比丘の弟子と爲らん。卽ち是の日に於て、九十六億百千那由他の、臣佐・民人と與に、比丘の前に在り、鬚髮を剃除し、袈裟衣を服し、世を厭ひて出家せんは、皆此の妙三昧を求めんが爲の故なり。是の後、天主比丘は、常に彼の九十六億那由他百千の眷屬比丘と與に、恒河沙等の諸佛世尊に、親近し、供養するを得るは、亦皆此の勝三昧の爲の故なり。

『不空見、爾の時、彼の天主比丘は、八十四億那由他百千歳を經るあひだ、種種の衆具を以て供養

卷の第十

一　說修習三昧品の餘

『時に彼の慈行如來の大化、二將に末ならんとして、一比丘の、名けて樹王と曰へる有り、廣く衆生の爲に、此の三昧を說き、示敎利喜せん。彼の如來・應供・等正覺の、滅度の後、三正法の際には、轉輪王有り、名けて四天主と曰ひ、威德を具足し、七寶の金輪と正法とをもつて、世を治せん。

『不空見、彼の天主王所居の大城をば、名けて五因陀羅跋帝と曰ひ、從廣正等にして、十二由旬あり。其の城の內外に、樓觀臺殿は、皆七寶の雜色を以て成ずる所たらん。復金廓を以て、城の上に覆はん。不空見、彼の城の四面には、各三門有らん。若し其の城の、諸の莊嚴の事を說かんには、上に說く所の、精進力王の、善住大城の莊嚴の、華麗殊妙なる如くにして、差無けん。

『不空見、後一時に於て、夜半を過ぎ已り、彼の天主王、睡つて猶ほ未だ覺めざるに、淨居天有つて、王の所に下降し、王をして夢見せしめ、卽ち夢中に於て、王の爲に、此の念佛三昧法門の名字を說き、「大王、汝應に此の念佛三昧を求むべし。何を以ての故にとならば、若し諸の菩薩摩訶薩、能く此の三昧を成就するを得なば、六常に諸佛世尊を遠離せず、亦世間の、文字・章句・音名・語言に於て、皆悉く明了に、辯才を具足し、自然に速に、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん」と。

『不空見、時に天人輩、夢に天を見已り、卽便ち覺寤して、彼の天に白して言はん「諸の天人の輩、是の如き三昧をば、誰か能く持する」と。彼の天報へて曰はん「大王、汝寧ぞ聞かざるや。今比丘有り、名けて樹王と曰へるが、現に能く、斯の如き三昧を受持し、廣く世間の爲に、分別演說し、一切の人天をば利益するを」と。

【一】宋譯卷第五つゞき。

【二】將に末云云、同相當文は、般涅槃後に作る。

【三】正法の際、同は般涅槃後として、前文につゞけたり。

【四】天主、同は天幢に作る。

【五】因陀羅跋帝、Indradhvaja 本文には、隋名二天主城一亦名二帝幢一と註したり。宋譯は帝幢に作れり。

【六】常に諸佛云云、宋譯は、恒生二淨土一、不レ離二見佛一と云へり。

十三由旬、小なるもの、猶ほ高さ六由旬にして、大地に遍滿し、有らゆる衆生は、往返。周旋・行・住・坐・臥、皆各蓮花の上に在り。

『爾の時、世界を[二二]盛蓮花と名け、其の地柔軟にして、猶し羊の[二三]毳毛の如く、衆生[二四]觸るれば、天の妙衣の如く、其の色光澤あり、狀忉利天の黄白の石のごとくならん。彼の諸衆生等、快樂を受くること、亦他化自在天宮の如けん。彼の諸の衆生、東海を度らんと欲すれば、瞬息の間に、則便ち彼岸に到る。南・西・北海にも、駿速なること、亦然り。彼の諸衆生の生れて[欲する]所は、發心に從つて卽ち至る。

「而も彼の慈行如來の、初めて佛を成じたまはん時、其の地廣博にして、四海の邊を盡す。時に彼の大地は、從廣正等にして、八十億那由他百千由旬を滿たし、諸の聲聞、皆悉く充滿し、諸の阿羅漢は、多く[二五]一坐食ならん。唯侍者の阿難と、及び[二六]金剛密迹と、[二七]阿斯多等とを除く。

『復、八十那由他の、諸大菩薩摩訶薩衆有りて、一切皆不退轉地に住せん。彼の諸の菩薩、甚深の妙定い法門を請問せんに、彼の慈行如來、諸の菩薩の爲に、深法門を開發・顯示したまはん時、慈行世尊は、唯一音を出して、卽ち斯の偈を說かん

『若し人、方便もて出家を求めんには、　應當に一心に妙法を思すべし
彼れ必ず惡魔の軍を摧壞せんこと、　猶し[二八]香象の草屋を破らんが如くなり。
誰か疾く大菩提を成ぜんことを求めなば、　應に世間の爲に常に法を說くべし
而も斯の最勝地を淨めんと欲すれば、　此の三昧の樂こそ則ち能く爲さん』と。

大集經菩薩念佛三昧分卷第九

【二二】盛蓮化、宋譯、多蓮花に作る。
【二三】羊毳毛、同に鹿茸とす。毳は細く柔な毛。
【二四】觸るれば、麗本觸著に作るも、餘本觸者に作る、今後者に從ふ。
【二五】一坐食、不過中食、午を過ぎては食せざるをいふ。宋譯は、一食に作る。
【二六】金剛密迹、手に金剛の武器を執り、佛を警固する夜叉神。
【二七】阿斯多 Ajita また阿逸多に作る。譯・無能勝、彌勒の性、
【二八】香象 Gandhahasti 青白き色に香を帶べる糸なりと云はる。

て、諸の疑網を度し、教師の所に於て、法を聽受し已り、諸法の中に於て、無所畏を了し、大聲を發して言はく「是の如し、世尊、婆伽婆、是の如し、世尊、諸行は無常なり。是の如し、世尊、諸行は是れ苦なり。是の如し、世尊、諸行は暫く住するのみ。是の如し、世尊、諸法は破裂して、依止すべからず。是の如し、世尊、諸法は熾然なり、猶し草木、及び石壁の如くなり。是の如し、世尊、一切の諸行は、乃至放つべく、捨つべく、厭ふべく、脱すべし」と。

『不空見、時に彼の寶山莊嚴如來は、是の如き神通を以て、是の如き說法を以て、是の如き教詔を以て、三種に示現し、諸の聲聞衆を化して、三解脫門――所謂空と無相・願と――に入らしめ已るに、復三十億那由他百千の諸菩薩衆有り、皆當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べかりき。

『不空見、爾の時、彼の佛、彼の三十億那由他百千の諸菩薩衆の爲に、此の三昧寶王を說き、是の如く顯示し已り、復彼の天人世間に、利益を作さんが爲の故に、八萬四千億那由他百千歲を經て、正法輪を轉じ已り、然る後、彼に於て、無餘涅槃し、般涅槃したまへり』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、佛に白して言はく『世尊、彼の寶山莊嚴如來は、現前に幾の菩薩衆を教化したまひ、復佛滅度の後、法は幾時か住するや』と。

佛の不空見菩薩摩訶薩に告げて言はく『不空見、此の三千大千世界の、有らゆる星宿は、其の數知るべし。然も彼の寶山莊嚴如來・應・等正覺の邊際・數量は、知るを得べきこと難し。而も彼の如來、般涅槃の後、正法の世に住すること、八十那由他百千年を滿たし、像法〔二〇〕の世に住まること、二十億歲ならん。〔二一〕其の後、未だ幾ならずして、復佛有つて出で、名けて慈行如來・應・等正覺と曰ひ、世に出現して、壽命無量、其の佛の身量は、一由旬を滿たさん。

『爾の時、衆生の身は、量るに足を以てすれば、長さ六拘盧舍、其の蓮花の床は、大なるもの高さ

〔二〇〕 像法、像は似なり。正法に似たる法をいふ。

〔二一〕 其の後云云、宋譯は、「於二是中間一、有二佛出世一」と云へり。

純一無雜なりき。淸白梵行の相を具して、諸の衆生の爲に、常に是の如くに說けり。

『時に彼の寶山如來・應・等正覺、一の王城に住し、城を伏怨と名けたり。三十億那由他、百千の聲聞大衆と與にして、皆是れ[一九]學人、當に作す所有るべく、當に斷ずる所有るべく、當に得る所有るべく、應に世間天人の供養を受くべかりき。

『不空見、時に彼の寶山如來、三昧より起つて、是の如きの念を作しつ「今我が此の三十億那由他百千の聲聞は、皆是れ學人にして、所作未だ辨ぜず、未だ彼岸に到らず。我れ今應に、此等の爲に、如法に說くべし。當に一切をして、速に漏盡を得しむべし」と。

『不空見、爾の時、彼の寶山莊嚴佛、廣く是の如き大神通の事を現じて、彼の三千大千世界をして、盡く皆煙り、猛焰を出すこと熾然たらしめたり。不空見、爾の時、彼の聲聞衆、彼の如來の、廣く是の如き大空見の事を作したるを覩、見已つて歡喜し、踊悅身に遍きこと、猶し比丘の第四禪に入りたるが如く、彼の聲聞衆の身心快樂も、亦復是の如くなりき。

『復次に不空見、爾の時、彼の佛、靜夜の中に於て、是の如き神通の事を顯示し已り、因つて卽ち彼の聲聞衆に告げて言はく「汝諸比丘、應當に此の三千大千世界の、中に滿ちて煙の出で、又復猛火の焰熾烔然たるを觀るべし。諸比丘、一切諸行の無常なること、亦爾り。諸比丘、一切諸行の苦なる事、亦爾り。諸比丘、一切諸法は、我と我所と無く、堅牢有ること無く、虛妄にして眞ならず、破すべく、壞すべく、皆滅盡の相なり。諸比丘、我れ今、一切の諸行を略說せん。乃至一切を放捨して、著する莫く、深く厭離を生じて、自然に解脫せしめん」と。

『不空見、爾の時、彼の三十億那由他百千の聲聞衆、彼の如來の、是の如き法を說くと、是の如き敎誡とを蒙つて、皆漏盡を得、諸法に通達し、諸の法中に於て罣礙有ること無く、善く諸法に住し

【一九】學人、有學 Śaikṣa 卽ち尙ほ學修すべき所あるをいふ。小乘四果の中の前三果をいふ。

具を以て、持用て一切の衆生に供養せんに、不空見、汝の心に於て云何、彼の人、是の如く供養して檀を行じ、獲る所の功德は、寧ろ多しと爲すや不や』と。不空見の言はく『甚だ多し、世尊、無量なり、世尊』と。

佛の言はく『不空見、我れ更に汝に語らん。彼の善男子・善女人は、能く上の一切世界に盛滿せる七寶と衆具とを以て、一切衆生に供施するの功德は、廣しと雖も、然も故に、前の善男子・善女人等の、此の三昧寶王の名字を聞いて、三種隨喜の心を發起し、誓願して阿耨多羅三藐三菩提に廻向して、得る所の功德には及ばず。

『何を以ての故にとならば、不空見、彼の三種は多聞に由つて、生ずるを以てなり。彼の多聞は、正說より起るが故なり。不空見、彼の正說に由るが故に、能く一切の善根を生ずるは、即ち此の三昧なればなり。何等の三昧か、能く一切の善根を生ずるとならば、所謂即ち此の菩薩念佛三昧なり。

『又復能く一切の善根を生ずれば、亦即ち正說なり。何等か正說なるとならば、謂はく、正しく說く時、善く說くもの是れなり。是の義を以ての故に、彼の三種の隨喜所獲の功德は、布施の福に望むるに、稱量すべからず、校比すべからざるなり。

[一七]『復次に不空見、我れ往昔を念ふに、無量阿僧祇を過ぎて、復無量阿僧祇劫なるに、爾の時世界を動不動と名け、彼の界に佛有り、號して[一八]寶山莊嚴如來應供等正遍知明行足・善・逝去世間解・無上士・調御丈夫・天人師・世尊と曰ひ、世に出興して、大自在を得、一切を調伏し、解脫を具足して、永く彼岸に度り、最上最妙、最勝無比にして、能く衆生の爲に大歸依と作り、能く衆生の與に大覆護と爲り、能く衆生の諸煩惱の病を治し、三世に通達して、明了ならざる無く、自證の法を以て、衆生の爲に說きたるに、其の所說の法の、初・中・後善くして、其の義深遠、其の言巧妙にして、

【一七】宋譯、勸持品第十三、

【一八】寶山莊嚴、同には寶勝光に作る。

時、深く隨喜を生ずる、是をば第三の隨喜法を具足するとは名くるなり。
『不空見、是を菩薩摩訶薩は、三種の隨喜を具足し、成就して、獲る所の功德と、及び諸の善根ともて、衆生と與に同じく三昧を證し、亦速に阿耨多羅三藐三菩提を成就せんことを願ふとは爲すなり。

『復次に不空見、若しは復、諸の善男子・善女人輩の、此の三昧に於て、隨喜を生ぜん時は、所得の功德、眞實にして廣大、無量無邊にして、稱說すべきこと難し。我れ今汝の爲に、諸の譬喩を引いて、開示少分し、汝をして知らしむるのみ。

『不空見、此の三千大千世界の、其の間の有らゆる諸の恒河沙の如きを、若し人、彼の諸恒河沙の聚を取つて一處に置き、然る後、彼の大沙聚の中より、一一の沙を取つて、末として微塵と爲し、然る後、此の沙の一塵を將て、恒河沙の世界を過ぎ、更に復、彼の無量無邊阿僧祇、不可思議・不可稱・不可量の、恒河沙等の世界を過ぎ已つて、然る後方に乃ち一微塵を置き、是の如く次第して一切の沙塵をば、諸の世界を討して、悉く皆布き盡したりとせんに、不空見、汝の意に於て云何。假令彼の世間の人、頗し能く少しく、世間の數を知るありや不や』と。不空見の言はく『無きなり、世尊』と。

『不空見、且く是の事を置け、假使世の聰明にして、智慧第一なる算師、其の智力及び算術を盡さんとも、頗し能く稱量し、頗し能く思察するありや。復能く世界の數を數へ知るや不や』と。不空見の言はく『無きなり、世尊、無きなり、世尊。我れ今見る所のごとくんば、[一六]唯上座舍利弗と、及び上の不退轉地の、諸の菩薩摩訶薩の輩のみ、應に少しく髣髴すべき有るのみ』し。

佛の言はく『不空見、若し善男子・善女人有り、上の爾所の諸世界に、盛滿せる七寶及び餘の衆

【一六】唯上座舍利弗云云、宋譯には、唯舍利弗、不退菩薩、乃能知ニ此世界量一と云へり。

常に皆讃說し、亦誓願を發して、願はくは、我れ、今より、諸佛所獲の福聚と、所得の功德とを讃歎し、此の善根を藉つて、當に我をして、念佛三昧を得しめたまひ、復能く速に無上の道果を成ぜしめたまはんをと。不空見、是を菩薩摩訶薩、三法を成就して、能く三昧に入り、亦能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成ずとは爲す。〔一五〕

『復次に不空見、菩薩摩訶薩には、復三法有り、久しからずして、則ち能く三昧を成就し、亦當に速に、阿耨多羅三藐三菩提を證すべし。何等か三と爲すとならば、一に若し諸の菩薩摩訶薩、或は一切の佛世尊の所に從ひ、此の三昧の眞實功德を聞き、或は時に、但だ三昧の名字のみを聞いて、卽ち自ら思念すらく「彼の過去の、諸如來・應・等正覺の、本菩薩を行じ、菩提を求めたまひける時、彼の輩は皆、此の如き三昧を求めたまひ、是れ此の三昧を聞きたまへるを以て、卽ち隨喜を生じたまへるが如く、我れも今日、大菩提の爲に、亦應に、是の如き三昧を勤求すべし。大利益を成就し具足せんがための故に。是の故に我れ今、此の三の功德と名字とを聞きて、深く隨喜を生ず」と。是をば第一の隨喜法を具足すとは名くるなり。

『二には、彼の未來の一切の、諸如來・應・等正覺は、菩提を求めんが爲に、菩薩を行じたまはん時、此の三昧を修して、大利益を爲したまはんが如く、是の故に我も今、此の三昧を聞いて亦隨喜を生ずと。是を第二の具足隨喜法とは名く。

『三には今現の有らゆる十方の、無量無邊の、諸如來・應・等正覺の、現に世に住したまひ、已に諸有を度り、已に習の根を拔き、語言を遠離し、覺觀を斷滅して、甚深の定を證し、大慈悲を具したまへるが、亦往昔に於て、菩薩を行じたまひけるは、此の三昧を聞きて、皆隨喜を生じたまひけるが如く、我れ今既に、此の三昧を聞くを獲たり、何ぞ獨り隨喜を起さゞらんやと。是の如く念ぜん

【一五】、この段、三法の第二を說くものの如し。而も本文には、その第三を記さず。宋譯も亦、是が相當文を缺く。

を具足して、癡の不善根を斷除し、微妙甚深の智慧を成就し、一切の法に於て、了了分明にして、諸異論の門にも、罣礙有ること無けん。若しは他より問難せんも、辯釋せんこと疑有らず。不空見、是を菩薩摩訶薩、三法を具足して、此の三昧を證し、當に能く阿耨多羅三藐三菩提を證すべしとは爲すなり。

『復次に不空見、菩薩摩訶薩は、復三法有つて、能く三昧に入り、復能く速に阿耨多羅三藐三菩提をば成ず。何等をか三とは爲すとならば、一には一切行の無常なるを觀じて、如實に知るなり。二には一切行の苦なるを觀じて、如實に知るなり。三には一切法の無我なるを觀じて、如實に知るなり、菩薩若し能く、是の如く觀じ已らんに、久しからずして、卽ち能く此の三昧に入らん。不空見、是を菩薩摩訶薩、三法を具足して、能く三昧を證し、亦速に阿耨多羅三藐三菩提を成就すとは爲すなり。

『復次に不空見、菩薩摩訶薩は、復三法有つて、能く三昧に入り、亦能く速に、阿耨多羅三藐三菩提を證す。何等をか三と爲すとならば、一には如來現在したまふや、諸の供養を修し、若し滅度したまへる後には、或は時に、諸佛の舍利を供養するに、或は種種上妙の香・花を以て、及び花鬘・塗香・末香を以てし、衆の名香を燒き、然燈・幡蓋・寶幢・音樂等もて、若しは自ら供養し、或は復、他に教へて常に誓願を發さしめ、願はくは我が生れん所に、此の供養の行と、[一四]願の善根とを以て、我をして速に念佛三昧を得、亦當に阿耨多羅三藐三菩提を證成するを得べからしめたまはんをと。

『二には若しは佛、現在したまひ、及び涅槃に入りたまはんも、如來の眞實功德――若しは戒、若しは定、若しは智慧、若しは解脫、若しは解脫・知見、若しは威儀、若しは神通、若しは辯才、若しは無諍、若しは慈、若しは悲、若しは喜、若しは捨――を讃說し、及び餘の世尊の諸功德の法をも、

【一四】願はくは云云、宋譯に、「以二我善根布施因緣一、願得二諸佛所說三昧一」と云へり。

能く斯の念佛三昧には入る』と。

佛の不空見菩薩に告げて言はく『不空見、若し諸の菩薩摩訶薩にして、三法を具足せば、即ち能く此の念佛三昧に入るなり。何等をか三と爲すとならば、一には不貪の善根を具足すると、二に不瞋の善根を具足すると、三に不癡の善根を具足するとなり。若し能く三の善根を具足すれば、即ち六波羅蜜を成就するを得ん。而も彼の菩薩摩訶薩、能く彼の不貪の善根に住するを以ての故に、常に施を行じて、檀波羅蜜を具足し成就し、所生には、常に家產豐饒にして、財寶具足するを得、須つ所は便ち至つて、永く貧窮を離れ、大威德有り、大勢力有り、其の心弘廣にして、復狹劣なる無く、自然に彼の貪の不善根を攝し、能く諸の福德を具足するを以ての故に、衆生の見る者、尊敬せざる莫く、凡そ言說する所をば、人皆信行し、多功を用ひずして、此の三昧を獲、速に疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。

『又彼の菩薩、一切世間天人諸衆生の所に於て、瞋恚・忿恨の心無きを以ての故に、故に能く不瞋の善根を具足し、而も常に彼の尸波羅蜜・羼提波羅蜜に住して、能く具足して、彼の忍波羅蜜を滿たし已らば、或は罵詈・誹毀・楚撻・撾捶[一三]に逢ひ、手足を割截せられ、髓を挑り、腦を破するなどの、一切の諸苦、競ひ來つて逼切するも、怒らず、恨まず、恚らず、瞋らざらん。是に於て瞋と不善根とを除滅し、大悲の心を起して、遍く一切の衆生界を覆ひ已り、生ずる所に、諸佛世尊より離れず、夢寤にも常に安く、天神衞護し、刀杖も害せず、毒も能く中らず、火も燒く能はず、水も溺らす能はず、常に飲食・湯藥・衣服・臥具などの、種種の衆物に足り、一切世間の天人衆生の、見ん者讚美し、久しからずして、即ち能く此の三昧を證し、當に能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。

『又彼の菩薩、能く無癡の善根を具足するを以ての故に、長夜に、奢摩他・毘婆舍那を修習し、方便

【一三】撾捶、共にむちうつ。

若し人、此の三昧を說かん時、　其れ或は勝定を聞くを得なば、
三昧の威力もて菩提を證せん　彼の漏盡と正位の人とには非ず。
彼れ定んで功德、須彌に等し　若し人、證せん時、異相無し、
其れ或は能く往いて山所に到るに、　即ち其の色に同じて別知し難し。
若し人、三昧の聲を聞くを得なば、　諸定の中に勝るること猶ほ海の如し、
斯の三昧の威德力に由り　彼れ菩提を證せんこと復疑はじ。
亦衆流の大海に歸するが如く、　大河小河及び[二]陂池など
等同一味にして別知し難し、　彼も亦是の如く異相無し。
若し人此の三昧を聞かん時、　即ち十方一切の佛を念じ、
三昧の威力もて正覺に登らん、　彼の身證の富伽羅はさに非ず。
若し諸の菩薩、唯檀を修し、　無邊恒沙の恒沙を過ぎ
十方なる一切の佛、　下及び法界の諸衆生を供養し、
是の如く曠劫のあひだ布施を行じ、　獲る所の功德多しと言ふと雖も、
猶ほ妙定門を說き、　一念の慈を起して一切に被らしむるに及ばず。
三昧の善思は慈母の如く　聖德を光顯すること度量し難し、
智人若し能く一心に求めなば、　當に速に佛を成じて自在を具せん』と。

[三]說修習三昧品　第十四の一

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、佛に白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩は、幾の法をか具して、當に

【二】陂、池なり。

【三】宋卷卷第五、三法品第十二、

妙樂の不思議なるを得んと欲すれば、
若し盡く一切佛の
或は復妙法輪を轉ぜんことを求めなば、
若し諸の妙相を圓滿し、
及び清淨の家に其生することを求めなば、
汝、不空見、諸の衆生、
悉く下生の者を知らんと欲せば、
彼は一佛を供養するのみに非ず、
乃至億數那由他にも非ず、
彼れ諸佛に供すること僧祇に過ぐるは、
及び衆の欲する所を皆悉く得んに、
彼れ無量百數の佛を供[一〇]し、
常に歡喜尊敬の心を生じたれば、
彼れ無量千數の佛に事へ
精勤修習して懈倦無し
彼れ無量億數の佛を見るに、
厚く一切の諸善根を習し
又世間の攻戰場の如く、
彼れ或は遇藥鼓の音をするに
要ず先づ此の三昧を淨修すべし。
現在・未來及び十方なるを見んと欲し、
亦先づ此の三昧を修習すべし。
衆と上莊嚴とを具足せんと欲し、
必ず先づ此の三昧を受持すべし。
即ち諸の惡道を遠離せんと欲し
應に常に此の三昧を讃誦すべし。
亦二・三及び四・五にも、
方に斯の勝三昧を聞くを得んには。
無上の大菩提を證せんが爲なり、
乃ち此の勝三昧を聞くを得ん。
過去に久しく諸の善根を種ゆ。
方に此の勝三昧を説くを得つ。
天中にて天に勝れ能く光を放つ。
爾して乃ち三昧經をば讃誦しつ。
無邊の淨光は日輪の山とし
然して始めて妙三昧を聞くを得つ。
其の中に多く毒害を被る有らん
衆毒消除して、安樂を得ん。

【一〇】供、供養の謂、

諸法は興に非ず復喪に非ず、
一切の法は睡夢に同じと知る、
彼に於て差別の相を作さず、
猶し陽焔の如く及び鏡像のごとし、
法の想は平等にして高卑無く
彼の聲影と幻化との如く、
諸法は寂然として勝負無し
成就有ること無く復名も無し
比丘、是の如く專精に觀じ、
尊教を佛所に頂受せば、
彼れ此の三昧を證する時に當り
亦十方の一切の佛を見
是の六十億百千、
無量の諸佛に承事し已り
汝不空見、今應に知るべし、
智人、當に異見を生ずべからず、
我れ今汝輩を教誡す、
若し諸法の源を究竟せんと欲せば、
彼れ必ず大に功德聚を集めんこと、

本性清淨にして常に湛然たり、
是の如く見る者は三昧に逮ぶ。
本より滅を見ず亦生も無し、
能く是の如く見んに三昧を得ん。
亦存と亡と及び優劣と無し、
是の如く見ん人、三昧を證す。
外相と及び內心とを見ず、
是の如く見ん者は三昧を證せん。
初・中・後夜に常に思惟し、
久しからずして當に此の三昧を證すべし。
已に菩提に於て缺減無し
功德の大衆生を供養しつ。
那由他の劫を過ぎて諸行を修し、
然に後に彼の大菩提を證しつ。
爾の時の彼の王は其れ誰か是なる、
蓮花上佛こそ卽ち善觀なれ。
一切世間の諸天人
當に念じて速に此の三昧を淨くすべし。
算數すべからず、稱量すること難し、

鴦耆世尊は如如を宣し、
諸天斯の大神通を觀、
香花自然にして雨下したり、
彼の王、佛の神變を見たるが故に、
此の四天下は尊重すべし
佛前に髮を釋き袈裟を服し、
當に何等の勝法に住し已つてか
鴦耆世尊是の如くに說きつ、
當に自ら此の微妙の禪を證し、
王、蒙彼の佛の誠實の言をやり、
常に菩提を念じて諸佛に奉し、
若し能く如來の語を信受せんには、
佛の境界、深法門に入り、
若しは實際を聞いて驚疑せざれば
勤めて奢摩[八]、と毘婆舍[九]とを念じ、
慚愧と及び恭敬とに住して、
知り已つて現を惡み、恥心を生ずれば、
恒に諸法を觀じて增を見ず、
一切の法は虛空の如しと見る、

佛、衆生の爲に深厭を發したり。
百千の樂音を倶時に作すに、
異なる哉、希有にして思議し難し。
諸の供事を設くること量るべからず、
五欲を投棄すること脫屣の如しと。
便爾微妙の定を請問すらく、
丈夫能く三昧の門に入るべき。
二法に住して善く思惟せよ、
不思議最上の樂を得べしと。
深心歡喜して斯の定に觸れ、
卽ち、號を受くること上蓮華と。
是の經典に於て復疑ふ無かれ、
自然に此の三昧に入るを得ん。
法に於て亦我・人の想無けん、
是の如く深く思すれば勝禪に觸れん。
常に應に諸の正勤を修習すべし、
三昧王を證せんこと豈に能く久しからん。
亦自ら諸法の滅を知らず、
菩薩智人は此に通達す。

【八】奢摩、奢摩他の略、止と譯す。
【九】毘婆舍、毘婆舍那の略、觀と譯す。

彼の善觀作轉輪王は、寶駕を嚴備して自ら城を出づるに、
無量の臣民衆、圍繞し一切の衆生、皆愛樂したり。
王は世尊の心、寂靜にして身口清淨にして諸根調ひ、
勝妙の諸威儀を具足したまへるを見、彼の善觀王は轉敬を增しぬ。
王便ち彼の佛の所に往詣し、頭面もて世尊の足を頂禮し
口を啓いて、佛に其の供を受けたまはんを請ふに、世尊は許納の故に默然としたまへり。
王は如來の許受を以ての故に、即ち城內の諸臣民に勅すらく、
今宜しく微妙の具を具辦すべし、吾れ耆耆佛に奉献せんと欲すと。
衆事既に應じたれば王親しく告ぐらく唯願はくは哀愍して此の時を照したまへ、
大師世尊及び聖僧は我が今日の微末の飯をば受けたまふ。
耆耆如來は王の請に赴き、大功德聚もて廣く神を現じ、
遂に無量千億の光を作して、普く十方の諸佛土を照したまへり。
彼の一一の光より無量の百千億數の大蓮花の、
微妙・鮮明にて、人喜樂するを出したまへり、衆生の諸善本を發さんが爲なり。
汝不空見、知るべし、諸花より、各諸の如來の形を出し
意念現前して人瞻仰し、十方に同じく斯の如きの法を說けり。
諸行は無常にして亦實に苦なり復說くらく、無我にして極めて亡劣なり、
終に是れ破壞して堅牢ならず、孰か智者、貪樂を生ずと云はん。
諸行の焚燒すること猛火の如く、炎赫・猛熾にして甚だ當り難し、

【七】神、神通なり。

し、及び善說するを得なば、必定して當に、無量無邊、阿僧祇の、不可思議の大功德を得べし。何に況んや、彼れ能く、此の菩薩の念佛三昧の法門を善說して、獲る所の功德聚をや。

『不容見、假使無量無邊恒河沙の、菩薩摩訶薩の、復無量無邊恒河沙劫數を經て、布施を修行して、暫くも休廢する無からんとも、我れ若し是の、所得の功德の、不可思議なるを說き、今更に汝の爲に廣く分別して說かんに、若しは復一つ菩薩摩訶薩有り、能く斯の念佛三昧を聽受し、若しは讀誦し、若しは受持し、若しは少分修行し、若しは少分論說して、得る所の功德を、前の布施に望むるに、喩比すべからず、稱量すべからず、計校すべからず、算數すべからず。何に況んや、能く具足して、聽受修行し、演說せんには、是の功德の聚、校量すべからざるをや』と。

爾の時世尊、重ねて此の義を明したまはんが爲に、偈頌を以て曰はく

『我れ往昔を念ずるに、無量劫に、　佛世尊有つて鶩耆羅と號し、
一切世間の歸依しまつる所にして、　大慈悲を具して妙法を演べたまへり。
彼の所見に於ては、知らざる無く、　過去未來悉く明了なりき、
亦能く現在の事に通達し、　等しく幽微を見て斯れ覺察したまへり。
諸佛の智は思議し難し、　衆生を憐愍するが故に、爲に說く
愚癡の衆生は前に煎迫せらる、　彼の一切を觀じて悲心を興したまへり。
時に彼の如來には是の如き、　九十九億の聲聞衆有り、
咸自在を具して、生盡くる有り、　悉く共に正法王を圍繞しつ。
彼の境の東北に園林有り、　具足莊嚴して無畏と名けつ、
如來大仙は此に住したまひ、　兼ねて彼の億衆阿羅漢と與なりき』。

に、鬪陣の時、椎を以て撃打するに、假ひ彼の陣中に、毒箭・刀矟[五]の爲に傷けられたるもの有るも、彼の藥の力の故に、皆卽ち平復し、安隱にして患無けん。是の如く不空見、若しは善男子・善女人有り、但だ能く、耳に此の三昧王の名字の少分をも聞かば、彼等は此の三昧の名聲の威力を以て、皆當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。唯漏盡・身證の人をば除く。

『復次に不空見、譬へば須彌山王の、[六]四寶所成なるが如し。若し諸の衆生、其の所に至らん者、卽ち其の色に同ず。何を以ての故にとならば、彼の山の威光を以て、皆同一色なればなり。是の如く、不空見、若しは彼の善男子・善女人、耳に暫くも此の寶三昧の名を聞かば、彼等は皆、三昧名聲の威德力を以ての故に、自然に速に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。唯漏盡くると、正位の富伽羅とを除く。何を以ての故にとならば、不空見、此の三昧には、不思議の勝功能有るを以ての故なり。

『復次に不空見、譬へば一切の大河・陂地及び諸流の、皆大海に入つて、同一鹹味なるが如し、大海の德力、弘きが故に。是の如く不空見、彼の諸の善男子・善女人、但だ能く耳に此の三昧の名をば聞かんに、假令讀まず、誦せず、受けず、持せず、修せず、習せず、他の爲に轉ぜず、他の爲に說かず、亦復廣く分別して釋する能はざるも、然も彼の諸善男子・善女人は、皆當に次第に、阿耨多羅三藐三菩提を成就すべし。何を以ての故にとならば、此の三昧の名聲、勝れたるを以ての故なり、威德力の故なり。

『復次に不空見、若しは諸の善男子善女人有り、誠言する時、善說する時、但だ能く誠言すると、善說するとのみにて、諸佛の法門をば、必定して當に得べし。開示・興顯して、能く廣く諸の世間を利益するをば、是を誠言と名け、是を善說と名く。不空見、若しは彼の善男子善女人、能く正言

【五】矟、ほこ、

【六】四寶、金銀、頗梨、瑪瑙、

義理を解說するなり。

『復次に不空見、若しは諸の善男子善女人有り、但だ能く可に此の三昧を聞かん者は、當に知るべし、彼の諸の善男子・善女人の輩は、終に薄福に非ずして、少しく善根を種うるなり。亦一如來の所に、諸の善根を種うるのみならず、亦二・三・四・五の、諸如來の所に、諸の如來を種うるのみならず、亦一十・二十・三十・四十・五十、乃至百の諸如來の所に、諸の善根を種うるのみに非ず、亦二百・三百、乃至千萬億の諸如來の所に、諸の善根を種うるのみに非ず、是の如く、乃至亦、無量億百千那由他のみに非ず、乃至亦、無量阿僧祇のみに非ず、及び無量阿僧祇を過ぐる爾所の、諸如來の所に、諸の善根を種ゑ、厚く功德を集め、而も此の寶三昧王の、名字の少分をも聞くを獲ん。何に況んや、當に能く書寫し、披讀し・讀誦し・受持し、義趣を思して、如法に修行し、多人衆の爲に、分別解釋すべきをや。

『復次に不空見、若し彼の一切の善男子・善女人輩にして、但だ耳に此の菩薩の念佛三昧門を聞くを得るのみなるも、應に知るべし、彼の善男子・善女人は、是れ薄福に非ずして、少善根を種うる者なるを。當に知るべし、彼の善男子・善女人等は、卽ち是れ菩薩乘を具する者たり。何を以ての故にとならば、不空見、若し人、此の三昧王を聞くことを得なば、當に知るべし、彼の輩は、其の次第に依つて、自然に阿耨多羅三藐三菩提を證成すればなり。唯一切の諸漏盡の者をば除く』と。

爾の時、不空見菩薩、佛に向して言さく『大德世尊は、所住に阿耨多羅三藐三菩提を行じたまふ。大德世尊、彼等は常に此の三昧王を證するや』と。彼の佛報へて言はく『不空見、[四]是の如く、是の如し、彼等も亦、此の三昧王をば證するなり。

『復次に不空見、譬へば藥有り、名けて眞正と曰ふが如し。若し其の藥を以て、用て軍鼓に塗らん

【四】是の如く、麗本は汝見に作るも、三本は如是と爲す。今後者に依る。

法は、成就すべからざりき。彼れ是の如く見るに當つて、一切の法は、本來不生なりき。彼れ是の如く見るに當つては、一切の法、生の處有ること無かりき。彼れ是の如く觀るに當つて、一切の法は、皆悉く平等なりき」と。

『不空見、彼れ既に能く、是の如き觀を作し已り、亦即ち能く、是の如き修行を作し、久しからずして、便即ち能く是の三昧をば得たり。不空見、而も彼の善觀作王比丘は、此の三昧を得已りて、即ち能く無礙の辯才を成し、諸法の義を說いて、窮盡有ること無かりき。又彼の善觀作王比丘、即ち爾の時に於て、六十億百千那由他劫を經已り、然る後、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得たりき。

『不空見、汝今此に於て猶ほ疑心有るがごとし。我等汝の爲に釋して、除斷するを得しめん。不空見、當に知るべし、彼の時、善觀作王、四天下と五欲の衆具とを捨し、彼の八萬四千億那由他の臣民の大衆と與に、彼の舊者佛世尊の所に於て、同時に出家し、鬚髮を剃除し、精勤して道を修したるは、異人を謂ふに非ず。汝も亦應に、更に他の觀を作すべからず。何を以ての故にとならば、不空見、當に知るべし。彼の時の善觀作比丘とは、今の彼の蓮華上如來是なるを。

『又爾の時に於て、善觀作王、四天下と一切の樂具とを捨し、八萬四千億那由他の臣民大衆と與に、舊者佛の所に、出家修道して、慚愧の行に住し、正しく諸法を觀じて、一心に思惟し、未だ幾ならずして、即便ち此の三昧を證したるなり。

『復次に不空見、是の因緣を以て、我れ今に於て、慇懃鄭重に、汝の爲に、此の三昧門所作の功德の、甚深廣大にして、思議すべからざるを宣說しつるなり。當に知るべし。彼に能く、廣く勝妙の善根を植えざるに非ざる、諸の衆生輩にして、聽聞するを得、能く讀誦・受持修し、乃至他の爲に、

卷の第九

[一]神通品の餘

「[二]云何が慚愧するとならば、所謂常に[三]人に慚ぢ、亦自身に愧ぢ、一切不善の法中に住しては、常に慚愧を行じ、慚愧を成就し、不善を遠離し、念じて善事を求め、身には重擔を荷ひ、種性淸淨にして、虧犯する所無きをいふ」と。

『時に彼の善觀作王比丘、旣に彼の佛より、教慚を聞き已つて、慚愧に住し、一切不善の法を滅せんが爲の故に、勤めて精進と及び意欲とを求め、一心に迴向しつ、諸の善法に住し、又滿足せしめ、更に廣く思惟し、忘失せざらしめ、專精に心を攝しつ、正觀に住し、深く法界に入りぬ。是の如く比丘、法界を觀ずる時、一法の增すをも見ず、一法の滅ずるをも見ざりき。彼れ旣に、法の無きを觀じ已り、彼れ是の如く見つるに當り、一切の法には去來有ること無かりき。彼れ是の如く見つるに當り、一切の法は得無く喪無かりき。彼れ是の如く見るに當つて、一切の法は、生滅有ること無し。彼れ是の如く見るに當り、一切の法は、異有ること無かりき。彼れ是の如く見るに當り、一切の法は因緣より生じたり。彼れ是の如く見るに當り、一切の法は、猶し夢想の如くなりき。彼れ是の如く見るに當り、一切の法は、猶し陽焔の如くなりき。彼れ是の如く見るに當り、一切の法は、猶し鏡像の如くなりき。彼れ是の如く見るに當り、一切の法は、猶し形影の如くなりき。彼れ是の如く見るに當つては、一切の法、猶ほ聲響の如くなりき。彼れ是の如く見るに當つて、一切の法は、猶し幻化の如くなりき。彼れ是の如く見るに當つては、一切の法、勝負有ること無かりき。彼れ是の如く見るに當つては、一切の法、本より優劣無かりき。彼れ是の如く見るに當つて、一切の

【一】宋譯、卷第四のつゞき。品を分たず。

【二】寶者羅娑如來の、善觀作王に對する說法、前卷の終より、尙ほつゞけるなり。

【三】人に慚ぢ身に愧ぢ、宋譯にはかゝる區別を出さず。

提を成就すとは爲すなり。

「復二法有り、菩薩摩訶薩、具足修習せんに、此の三昧を得、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成就す。何等をか二とは爲すとならば、一には羞慚に住し、二には恥愧を修するなり。善觀作、是を菩薩摩訶薩、具足修習せんに、此の三昧を得、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成就すとは爲す」と』。

『復次に不空見、時に彼の如來、是の如く說き已りたまふに、彼の善觀作王比丘、復鴦耆羅婆如來に向して言さく「世尊、云何が菩薩摩訶薩は、慚愧に住して、能く斯の念佛三昧を得るや」と。

『爾の時、鴦耆羅婆如來・應等・正覺、即ち彼の善觀作比丘に告げて言はく「善觀作、[三五]若しは諸の菩薩摩訶薩、諸の所作に於て、常に慚愧を行ずるなり。謂はく、身に惡行を起しては慚愧の心を生じ、口に惡行を起しては慚愧の心を生じ、意に惡行を起しては慚愧の心を生じ、嫉妬を起す時、慚愧の心を生じ、懈怠を起す時、慚愧の心を生じ、諸佛の所に於て、慚愧の心を生じ、諸の菩薩摩訶薩の所に於て、慚愧の心を生じ、諸の菩薩乘に住する衆生の所にの於て、慚愧の心を生じ、諸の聲聞乘の所に於て、慚愧の心を生じ、諸の辟支佛乘の所に於て、慚愧の心を生じ、諸の天・人の所に於て、慚愧の心を生ずるなり」と』。

大集經念佛三昧品卷第八

【三五】若しは云云、以下の一段、宋譯は、菩薩應當下捨二三惡業、無慚愧等、諸不善法一、住中於慚愧恐畏之法上、……修二行善行一、應レ護二清淨身口意業一と云へり。

び諸の眷屬を棄て、深く生死を厭ひて、佛に、出家せんことを請ひ、卽ち蔦者佛・世尊の所に於て、鬚髮を釋除し、法服を身に著けぬ。時に八萬四千億百千那由他の人民有り、善根旣に淳熟したるが故に、亦深く世を厭ひ、王に從つて出家したり。

『復次に不空見、時に彼の善觀作王、旣に出家し已り、卽ち衆の中に於て、衣服を整理し、恭敬・合掌して、遂に便ち彼の蔦者如來・應供・等正覺に請ひて言はく「世尊、云何が菩薩は、念佛三昧を修習し、思惟するや。菩薩摩訶薩は、云何がして、此の念佛三昧を證し、卽ち不退轉地に住することを得、速疾に阿耨多羅三藐三菩提を成就し、現前に諸の功德の法を成就するや」と。

『不空見、時に彼の善觀作王比丘、是の如く問ひ已るに、彼の蔦者如來、卽便ち彼の王比丘に告げて言はく「善觀作、汝應當に知るべし、二種の法有り、菩薩摩訶薩、具足して修習せば、卽便ち此の菩薩の念佛三昧を得、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。

「何等をか[三三]二と爲すとならば、一には諸の如來を信じて、違逆を生ぜざるなり、二には佛の所說を信じて、敢えて誹毀せざるなり。是の如きの念を作すをば、是を諸佛の廣大境界の不可思議とは爲す。善觀作、是を菩薩摩訶薩、此の三昧を得、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成就すとは爲す。

「善觀作、復二法有り、菩薩摩訶薩、具足修習せば、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成就す。何等をか二と爲すとならば、一には奢摩他、二には毘婆舍那なり。善觀作、是を菩薩摩訶薩の、具足修習して此の三昧を得、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成就すとは爲すなり。

「善觀作、復二法有り、菩薩摩訶薩、具足して修習せば、此の三昧を得、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるなり。何等をか[三四]二とは爲すとならば、一には、斷見を遠離し、二には常見を除滅するなり。善觀作、是を菩薩摩訶薩、具足して修習せば、此の三昧を得、能く速に阿耨多羅三藐三菩

【三三】この二、異譯には、菩薩應ニレ信於如來所說經典、此大方等諸佛行處一と云へり。

【三四】この二、同に、捨我・無我、安ニ住慚愧恐畏等法一とあり。本經の次の段と並說せるを見る。

の衆生、咸益を得たるを見已つて、卽ち九十九億百千那由他の諸阿羅漢・比丘の大衆と與に、身を擧げて騰踊し、虛空を足歩して、淨花城を出で、然る後、還下り、常の如き威儀もて、前後圍繞せられて無畏園に入りたまひぬ。

『不空見、時に彼の善觀作王、旣に親しく、耆著羅婆如來・應供・等正覺の、廣く是の如き神通の事を現じたまへるを視るを得て、菩提心を發し、〔三〇〕更に誓を作して曰はく『當に我等をして、未來世に於て、悉く是の如き大神通の慧を獲したまふべけんを。復當に我をして、悉く是の如く、諸の大衆を統ぶるを得しめたまふべけんを。復當に我をして、未來世に於て、悉く是の如き天・人の衆の前に、大師子吼せしめたまふべきこと、一に今日の耆著如來・應供・等正覺の如くにして、異有る無からんを』と。

『不空見、時に彼の善觀作王、彼の世尊、耆著羅婆如來・應供・等正覺、及び諸の大衆の、空に乘じて返りたるを見、王も便ち駕を嚴じて、世尊に奉從し、本の住所に達し、然る後、乃ち還りぬ。

『復次に不空見、後に異時に於て、彼の耆著如來・應供・等正覺は、諸の大衆と與に、次第して行き、善觀王の宮殿中に至り已り、〔三一〕鋪に當つて坐したまへば、諸の比丘僧も、亦次第して坐しぬ。

『爾の時、彼の善觀作王、及び諸の大臣、其の眷屬の與に、各自圍繞せられ、城內の人民、及び其の眷屬も、亦各圍遶したり。又皆自ら有らゆる供食を持つて、各手づから、耆著世尊、及び諸の弟子・聲聞の大衆に奉りぬ。其の食、香美にして、衆味具足したり。意に隨つて奉上したるに、佛及び衆僧は、一切噉食して、皆充滿するを得たり。然る後、更に種々の妙香、種々の花鬘、種々の衣服、種々の珍寶、一切の樂具、微妙の音樂を以て、供養恭敬し已る。

『卽ち是の日に於て、太子を呼召し、加ふるに天冠を以てし、〔三二〕授くるに王位を以てし、四天下及

【三〇】更に誓云云、宋譯相當文缺。

【三一】鋪、しきもの。

【三二】授、麗本のみ受に作るも、今三本に依る。

間に於て、一切の諸天、所有の音樂は鼓せざるに、自ら鳴り、一切の樂具、作さざるに自ら現じたり。

不空見、時に彼の欲界の諸天、既に舊耆世尊の、是の如き大神變を、示現したまへるを覩たる時、卽ち天栴檀の末香、沈水、多伽羅香、多摩羅跋、牛頭栴檀、黑沈水香等を以て、佛の上に奉散し、復種々の妙華——所謂、鷄婆羅華、大鷄婆羅華等——を以て、彼の舊耆羅婆如來・應供・等正覺に奉散したり。

『復次に不空見、爾の時、舊耆世尊、彼の善觀作王に告げて言はく「大王、[二四]諸行は無常なり。大王、[二五]諸行は皆苦なり。大王、[二六]諸行は無我なり。大王、[二七]諸行は暫く住まるも、久しく停まるを得ず。大王、諸行は堅からず、是れ破壞の法なり。大王、諸行の熾然なること、猛き火焰の如し。大王、諸行の深奥なること、大火坑の如し。大王、乃至應當に、諸行を捨することを念ずべし、當に深厭を生ずべく、亦樂しむべからず、當に遠離を念じて、終に解脫せんことを思ずべし」と。

『不空見、爾の時、善觀作王、一心に合掌し・恭敬して、彼の舊耆如來に向ひ、頭を具して讃へて曰はく「是の如く、是の如し、大德婆[二八]修伽陀、大德[二九]婆伽婆、諸行は無常なり。大德婆伽婆、諸行は是れ苦なり、諸行は無我なり。大德婆伽婆、誠に聖教の如く、一切の諸行は、皆應に遠離すべく、亦須らく棄捨して、終に當に免脫すべし」と。

『不空見、爾の時、彼の舊耆羅婆如來、彼の善觀作王の爲に、斯の如きの法を說きて、其をして歡喜せしめ、其をして專念せしめ、其をして奉行せしめて、歡喜せしめ已り、專念せしめ已り、奉行せしめ已り、然も阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめぬ。

『復次に不空見、爾の時、舊耆羅婆如來、善觀作王の、法を聞いて歡喜し、菩提心を發して、一切

【二四】諸行、諸の、三世に遷流する、有爲の法をいふ。
【二五】諸行は皆苦、宋譯には、有爲皆苦、不實故空と云へり。
【二六】諸行は無我、同は、一切諸法、悉無ν有ν我に作る。
【二七】諸行は暫く云云、同には、此身不淨、九孔流ν穢云云と云ひ、主として身に就て述べたり。
【二八】修伽陀 Sugata 善逝の原語、
【二九】婆伽婆 Bhagavat 世尊の原語、

に、是の如く諸の供養を作し、然る後、上妙の飲食を奉獻して、世尊及び比丘衆を供養したり。

復次に不空見、爾の時、彼の善觀作王、廣く是の如き、微妙第一最上の衆具を設け、滿足して耆耆如來・應供・等正覺を供養し已り、更に異時に於て、大駕を莊嚴し、躬自彼の無量千數の諸の衆生等を率ひて、無畏園に詣り、彼の耆耆如來・應供・等正覺の所に至りて、尊の足を頂禮し、佛に白して言さく『世尊、今正に是れ時なり、唯願はくは慈を垂れて、應に作したまふべき所をば、作したまはんことを』と。

『復次に不空見、時に彼の耆耆羅婆如來、善觀作王の、慇懃なる請を聞き已り、諸衆生の、化を受くるに堪ゆるを知りたまへるが故に、是に於て、彼の如來の爲に、應に作すべき所の如く、種々の神通を作し、神通を現じ已つて、遂に九十九億百千那由他の諸阿羅漢等と與に、身を虛空に昇らしめ、虛空に住まり已つて、卽ち九十九億百千那由他の光明を放ち、東方無量の世尊を照らしたまへり。

『是の如く復、前の數の如き光明を放つて、南方及び西・北と、四維・上下とを照らし、十方に周遍すること、亦皆是の如く、彼の一一の方に、各九十九億百千那由他の諸大光明有り、彼の一一の光は皆、各八十億百千那由他等の大蓮華座を化作したるに、彼の諸の華座には、皆各一の化如來有つて坐したまへり。彼の諸如來の形量長短、乃至一切の威儀の多少は、一に耆耆羅婆如來・應供・等正覺の如くにして差別無かりき。

『不空見、彼の變化の諸佛世尊の如く、各無量億那由他の諸比丘衆有り、前後圍遶して、虛空の中に住しぬ。又亦各化の天帝釋、及び化の梵王有り、形量・大小など、今の此の無超勝の梵天、及び大供養の天帝釋等の如くにして、異有ること無かりき。

『不空見、時に彼の耆耆羅婆如來・應供・等正覺は、是の如き神通の事を示したまへる時、須臾の

の聲聞大衆の與に、左右圍遶せられて、淨華香城に入りぬ。不空見、時に彼の善觀作王、彼の世尊の、晨朝に入城したるを知り、卽時に自ら莊嚴して、大調象の、名けて樂手と曰へるに乘り、無量億百千那由他の衆の與に、前導後從せられ、彼の淨華香城より出でぬ。彼の佛世尊を迎へ奉らんが爲なりき。

『不空見、時に善觀作王、旣に遙に彼の耆耆世尊の、路を尋ねて來りたまへるを見るに、光儀端遠にして、狀金山のごとく、諸根寂靜にして、神志和穆なり、已に第一調柔の彼岸に達して、猶し大龍の、一切を降伏したるが如く、亦大象の、所爲自在なるが如く、又大池の、澄淸映徹なるが如くなりき。是の如きを見已り、乘より下り、進んで世尊に詣り、頭面もて禮を作し、右遶三周し、啓白して言はく「唯願はくは世尊、我に明朝に、設くる所の供養をば受けたまはんを」と。

『復次に不空見、時に彼の耆耆羅娑如來・應供・等正覺・善觀作王の、是の如き請を聞き已り、諸の衆生の爲に、利益を作さんがための故に、默受として、請を受けぬ。

『復次に不空見、時に善觀作王、彼の世尊の、其の請を許納したまへるを聞き、卽ち斯の夜に於て、速に廚官に命じ、衆種の上妙の善食を嚴辦し、人間の所有にして、畢具せざるはあらず。淨華城に於て、道路を平治し、諸の香泥を以て、其の地に塗飾し、所在の街巷には、寶幢を建立し、妙善の名幡を、處處に羅布し、兼ねて種々の金寶の器具を列ね、又上妙の牛頭栴檀を用て、以て香水と爲し、其の地に灑散したり。

『復種々の末香、種々の散華を以て、佛に上撒して、供養を爲し、然る後、彼の如來・應・等正覺の前に於て、種々の名香を燒き、種々の華鬘を積んで、供養を爲し、又種々の歌頌、讚歎の偈句・法言を以て、供養を爲したり。又種種上妙の樂音、及び諸の玩具を作つて、供養と爲したり。彼の王

中に轉輪王有りて、[一八]善觀作と名けぬ。彼の善觀作王は、德本を宿植し、大威德を具しぬ。

『不空見、時に善觀作王所居の大城をば、名けて[一九]淨華と曰ひ、妙香充滿しぬ。其の城は東西の廣さ、六十由旬、南北の長さ七十由旬、墻壁の周圍、一千二百重有り。彼の城の身量、純ら眞金を以て、衆具莊嚴し、間七寶を用ひたり。

『不空見、汝今淨華香城の善觀作王が果報と、衆具莊嚴の殊麗なるを知らんと欲すれば、[二〇]先に說く所の、無邊精進王の善住大城の如くにして、差異無かりき。

『不空見、彼の城の北面には、一の內門有り、名けて華鬘門と曰ひ、外に園有り、名けて[二一]無畏と曰へり。其の園縱廣四十由旬、周匝に皆、七寶の樹林有りて、圍遶を爲せり。一の大池有り、形量方廣にして、面は十由旬、八功德水、其の間に彌滿して、忉利天の[二二]鏝陀吉尼池の如くなりき。彼の池の四面には、周匝して皆寶多羅樹有り、其の金多羅樹には銀を花果と爲し、銀多羅樹には琉璃を華果と爲し、是の如く、乃至眞珠多羅樹には、金を華果と爲すこと、善住城の如く、一等にして、異無かりき。

『復次に不空見、爾の時に當り、佛世尊有り、[二三]鴦耆羅婆如來・應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御大夫・天人師・佛・世尊と號し、世に出世したり。

『不空見、時に彼の鴦耆羅婆如來、無畏園中に遊止し居止し、大比丘衆、九十九億百千那由他の人の與に、前後圍遶せられ、皆阿羅漢にして、諸の漏已に盡き、復煩惱無く、皆自在を得て、心善く解脫し、慧善く解脫し、所作已に辦じ、重擔を捐捨し、盡く己が利を獲、後有を受けず、正教に隨順して、彼岸に達したるものなりき。

『時に彼の鴦耆羅婆如來・應供・等正覺、晨朝の時に於て、衣を著け鉢を持し、九十九億百千那由他

【一八】善觀作、同に勝微密と云ふ。
【一九】淨華、同に拘修摩と云ふ。
【二〇】先に說く云云、本經、卷第一、參照。
【二一】無畏、同に安隱と云ふ。異譯には單に、其苑法式、猶二善建園一と云へるのみ。
【二二】鏝陀吉尼 Mandakini
【二三】鴦耆羅婆、本文、註して隋に分味と云ふといへり。宋譯には明相に作る。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、佛に白して言さく『世尊、云何がして、當に知るべき、菩薩摩訶薩の、慚愧に住し、彼の無慚愧を遠離し已つて、然る後、當に此の三昧を得べきやを』と。

爾の時佛、不空見菩薩に告げて言はく『不空見、若し菩薩摩訶薩有つて、常に慚愧を行ぜんに、是の菩薩、慚愧を行ぜん時、或は能く種種の惡事を造作せん。所謂身の惡行の時は、即ち慚愧を生じ、口の惡行の時も、亦慚愧を生じ、意の惡行の時も、慚愧を生じ、嫉妬の心を起しても、亦慚愧を生じ、慳貪の心を起しても、亦愧慚を生じ諸の如來の所に於ても、亦慚愧を生じ、大菩薩摩訶薩の所に於ても、亦慚愧を生じ、菩薩乘に住する諸の衆生の所に於ても、亦慚愧を生じ聲聞乘の人の所に於ても、亦慚愧を生じ、辟支佛乘の人の所に於ても、亦慚愧を生じ、人・天の所に於ても、亦慚愧を生ぜん。云何が慚愧するとならば、所謂常に他に慚ぢ亦自身にも慚づるなり。一切不善の法中に住するが故に、常に慚愧す。慚愧に住し已れば、一切の無慚無愧を遠離し、不善を除滅して、善事を思惟し重擔を荷負して、體性清淨に、終に毀犯する無く、他も能く謗らず。而も是の菩薩は、常に能く具足して、身業を毀すること無く、亦能く具足して、口業を毀すること無く、亦能く具足して、意業を毀すること無し。斯を具足し已つて、然る後乃ち能く、是の三昧に住す。三昧に住し已つては、常に一切諸佛を見ることを遠離せず、常に諸佛の所說の妙法を聽聞することを遠離せず、常に一切の聖僧を恭敬し供養することを遠離せず。斯の如きを具足し已つて、然る後能く疾く、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。

『復次に不空見、我れ往昔を念するに、無量無邊阿僧祇劫を過ぎて、時に[一五]大劫有り、名けて善來と云へり。彼の善來劫中に於て、[一六]復た第三劫有り、名けて寶炬と曰ふ。不空見、彼の劫中に、復小劫有り、九莊嚴と名けぬ。彼の時中を、多劫濁と名く。復次に劫有り、名けて[一七]千歲と曰へり。彼の

【一五】異譯によれば、初より第三劫を善生といひ、次の劫を寶炬、次を蓮華池と名けたり。
【一六】復、麗本のみ、後に作る。今餘本に從ふ。
【一七】千歲、異譯相當文には樂住といふ。

に皆、阿耨多羅三藐三菩提に於て、退轉せざることを得、然る後、彼の十方の國土に於て、皆成佛することを得、號して[13]難伏如來應供等正覺と曰ひ、世に出現せん。

爾の時世尊、重ねて此の義を宣べたまはんが爲の故に、偈頌を以て曰はく、

『百千の數に過ぎて、減少する無き　三種の三十と復九十との
是の如き一切、菩提を見たるは、　彼れ發心の利益の爲の故なり。
彼の十千に滿てる諸衆生と　復三萬とは、智もて淨眼を得、
聞き已つて等正覺を正思し、　人身と諸の惡道とを解脫したり。
復八億那由他に過ぐる　諸天は聖淨眼を獲たり、
如來の妙音を聞けるを以の故に、　永く惡趣を滅して遺餘無し。
忍を得しもの三萬億由他、　發心して卽ち惡道を離れたり
彼の輩は當來に悉く成佛せんこと、　其れ猶ほ盛春の草木の敷けるがごとけん。
復三萬億の衆生有り、　座より起つて大心を發しつ
此の威德を以て當に成佛すべく。　大地の上に於て世間を利せん。
復六萬の諸天子有りて、　皆無上菩提の心を發しつ、
彼等は斯れ彌勒尊に同じく、　樂の因を修したるを以て樂の處を證せん。
是の因緣を以て天・人の師は　斯の廣大の爲の故に微笑す
我れ已に微笑の旨を宣揚しつ、　阿難當に知るべし此の笑の緣を』と。

[14]神通品　第十三の一

【一三】難伏、同に、不退轉に作る。

【一四】宋譯、微密品第十一。

若し佛・尊の斯の妙音を聞かば、　天・人歡喜し、衆聖讃へまつらん』と。

尊者阿難、斯の問を設け已り。是に於て世尊、阿難に告げて曰はく『阿難、我れ當に、是の正念三昧法門の義を說くべし』と。

時に此の大衆中に、三萬の人有り、塵垢を遠離して、法眼淨を得たり。復八萬億百千那由他の諸天子有り、遠塵離垢して法眼淨を得たり。復三萬の比丘・比丘尼衆有りて、阿那含果を得たり。復三萬の、比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷有つて、無生法忍を得たり。

復三萬の衆生有つて、阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。此の輩は皆、星宿[8]劫中に於て、等正覺を成ずべく、此に卽ち前んで菩提心を發したる者是れなり。復九萬億那由他の菩薩摩訶薩有つて、菩提に安住し、退轉有ること無かりき。此の輩は、當來に皆成佛するを得べきなり。彼の諸の世尊は四種の號有り、或は[9]光明と號し、或は[10]毘盧遮那と號し、或は釋迦牟尼と號し、或は[11]日月歲星と名く。是の如き等の諸種の名號有り、其の剎土に隨つて、世に出現せん。復九十二億百千那由他の衆生有り、但だ聲聞の心を發したり。是の輩は、未來に皆、聲聞の果を得ん。

爾の時世尊、是の事を知り已りたまひ、淨天眼の、人眼に過ぎたるを以て、十方を觀察したまひ、九十億百千那由他の諸佛の世尊を見たまへり。應に是の如き大利益を作したまふべきが故なり。更に殊大・微妙の聲を出して、此の三千大千世界に遍ぜしめたまふに、咸聞くことを得已る。然る後、彼の諸佛の國土に及ぶに、有らゆる衆生、亦皆聞くことを得たり。

然る後、復眉間の白毫相の中より、大光明の[12]無邊威と名けまつるを放ちたまふに、此の光、遍く十方の佛國を照らし、無量億百千那由他の衆生をして、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得しめたまへり。復前の數に過ぐる衆生有つて、阿耨多羅三藐三菩提心を發したるに、彼等は當來

【八】星宿劫、未來の劫の名。
【九】光明、宋譯、放光に作る。
【一〇】毘盧遮那、同は離垢尊に作る。
【一一】日月歲星、同に日光相佛、月光明佛に作る。
【一二】無邊威、宋譯に明焔といふ。

但に十方の尊に奉するを得るのみに非ず、　彼れ當に勝三昧を獲べし』と。

示現微笑品　第十二 [六]

爾の時世尊、怡然として微笑したまへり。諸佛世尊の法、是の如くなるが故に。即ち微笑したまへる時、世尊の口より、種種の光明を放ちたまふ。所謂青・黄・赤・白・金色・頗梨なり。其の光遠く照らして、上梵宮に至り、復還下つて、右遶三周して、世尊の頂に入りぬ。

時に尊者阿難、斯の事を見已り、即ち座より起ち、衣服を整理し、右膝を地に著け、十指掌を合して、佛世尊に向ひ、偈を以て問ふて曰はく、

『最勝の世尊は因無きに非ず、
世間の調御、應に爲に說きたまへ、
金剛の色體・百福の身は、
一切世間の歸依しまつる所なり、
世尊は無上にして亦無比なり、」
功德備具して毀すべき無し
一切の世間は皆歸趣す、
誰か今日、大利をば獲る、
今日誰か當に大位を受くべき、
今日誰か安隱の王と爲り、
一切世間の歸依しまつる所、」

今現に微笑したまふ當に以有るべし、
而も復微笑したまふは何の因緣ある。
[七]眞如を證したるに由つて能く利益したまふ、
今此の微笑に何の緣か有る。
何處にか當に能く超勝する有るべき、
今斯の微笑は何の緣か有る。
調御丈夫、今當に宣べたまふべし、
世尊はゆへ無くして何ぞ微笑したまはん。
今日誰か眞の福聚を得る、
能く世尊に是の微笑を致さしむる。
天・人の大師、今應に說きたまふべし。

【六】宋譯、品を分たず。

【七】眞如、Bhūta tathatā 諸法の體性、虛妄を離れて眞實なれば眞といひ、常住にして不變なれば如といふ。

『若し能く我見を遠離せんとすれば、
世間の天・人を利せんが爲の故に、
彼れ若し、身を厭はんに、諸の不淨あり、
此の身、變壞して堅牢ならず、
暫住すること幻の如くにして實體無く、
長夜養育するも終に宜しき無く、
衆具を以て之に供贍すと雖も、
既に牢固の法を得る能はざれば、
地獄と畜生と餓鬼との苦、
世間の催切、百羅を超ゆるも、
我が身は今日、自ら空虚なり。
謂はく諸の衆生、肉を食せんとする者
我れ思ふに此の時常に發言して、
我れ爲に其の故に今放捨し、
當に一切の、身を寶とする者をして、
我れ今、命を驅つて敢て愛せず、
猶し彼の沫の如く常に破壞するも、
今の我が此の身は沫の團の如し、
若し能く身は水沫の如しと觀ぜんに、

一切、住著の處有ること無く、
當に離見の大菩提を證すべきなり。
癰瘡の處る所、膿血流れ、
無常羸劣にして斯れ破の法なり。
猶し彼の聚沫のごとく、空にして眞無く
鳥狗斯れ食して最も惡むべし。
是の身は當に敗滅に歸すべきに會はん、
多量劫を經るも唯苦有るのみ。
飢渇と衆惱とは恒に熾然たり、
初より彼の如實を覺知せず。
不常の體は須臾に變ず、
精氣・僕役にも我れ甘んじて爲さん。
其れ肉及び精血を食せんとする有らば、
我が此の身を噉食するに任從すと。
悉く我れ斯の命を捨するを觀するを得しめん、
願はくは速に彼の三摩提を成ぜん。
未だ曾て一の瞋恨の心を起さず、
豈に嫌怨の事を生ずる有らんや。
此の人必ず定んで菩提を求めん、

を證し、道を修すべき。

『今の我が此の身は、但だ是れ虚空のみ、誑曜・愚癡にして、一の堅法も無し。是を以て我れ今、當應に此の一切の身分を持つて、諸の衆生に施すべし。若し衆生有つて己が身を寶重せんに、我れ當に彼の爲に身命を放捨すべし。若し衆生有つて、我が精氣を須たば、我れ當に彼に精氣を給與すべし。若し衆生有つて、我が肉を須たば、我れ當に肉を以て、彼等に供奉すべし。何を以ての故にとならば、寧ろ我れ先づ施して、彼をして食を得しめ、施さずして彼をして自ら食せしむるを容す無けん。今我れ此の淨心を以て布施し、獲る所の善根もて、願はくは即ち我見の根本を滅除せんと。

『而も彼の菩薩、是の如く觀ずる時、我見に著せず、我見を滅し已つて、然る後身を捨し、衆生をして用ひしめ、命を惜む者の爲には、命根を棄捨し、精氣を須つ者には、授くるに精氣を以てし、肉食を須つ者には、便ち以て食を施し、若し衆生有つて、其の力用を須たば、即時に奴と爲つて、彼の驅策に充てん。不空見、是の因緣を以て、彼の菩薩摩訶薩は、我見を除捨し、我見に住せず、我見を證知し、而も能く此の不牢固の中に、牢固の身を求めん。

『不空見、譬へば都城・邑聚・村落の中に、多く童男有り、或は童女多く、舍より出で已つて、河の岸邊に至り、水の沫聚を見、彼の水沫を以て、更に相嬉戲せんが如し。所謂破壞の水沫、分段磨滅し、其をして消散して、遺餘有ること無からしむるに、彼の沫聚は、是の念を作さず「誰か今日、能く我を分散せしめたる」と。是の沫は壞すと雖も、惱恨の心無し。不空見、是の如く、菩薩摩訶薩は、自ら己が身の、無事にして破壞すること、彼の沫聚の如くにして、長久なるべからざるを觀ずれば、當に知るべし、是の人は此の三昧を得、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん』と。

爾の時世尊、重ねて此の義を明さんが爲に、偈頌を以て曰はく、

卷の第八

思惟三昧品の餘[一]

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩は、當に何がして、我見を證知し、捨離すべきや』と。

佛の言はく『不空見、若し諸の菩薩摩訶薩にして、證知を得んとする時は、住著する有ること無ければ、則ち我見を離る。是の如く、菩薩は著に住する無しと雖も、而も能く彼の一切世間の天人衆生の爲に、大利益をば作す。

『云何が利益するとならば、所謂大法明の爲に、大法炬を然し、大法蠡を吹き、大法鼓を擊ち、大法[二]䩜を奮ひ、大法船に乘じ、大法橋を設くるなり。方に一切の衆生を[三]度して、生死・四流の瀑河より出だし、涅槃無爲の彼岸に置かんと欲するに當つては、卽ち當に其の身の本性を觀察すべく、

『次には當に身の、不淨なると、臭穢あると、腐爛すると、癰膿・屎尿の盈溢すると、是の身は無常にして、暫くも停住せず、破壞枯槁して、長久なるべからず、[四]小兒を誑惑し、危脆不堅なること、猶し水の沫聚のごとく、戶には蟲充滿するを、筋骨相輔けて、空しく負ひて行き、實には用ふべき處無きに、或は百年、及び百千歲を經、八萬劫を縱るあひだも、一切の樂具はり、守護長養して、終には墮壞に歸するを觀ずべし。

『此の身は、長夜に煩惱を離れず、顚倒を出でず、恒に諸の惡鳥獸の爲に食噉せられ、叉亦常に地獄・餓鬼・畜生と共に行じ、生死・往來して、諸の苦惱を受け、或は奴隸と爲つて、種種に苦事し、常に他に繫がれて、自在を得ず。[五]而も彼の生ずる所には、云何が當に能く、苦を見、集を斷じ、滅

【一】宋譯にては、卷第四に在り、品を分たず。

【二】䩜、小鼓なり。

【三】度、麗本のみ渡に作る。今餘の三本に依る。

【四】小兒云云、本文に誑惑小兒とあり。宋譯相當文には、猶二嬰兒語一、虛妄無レ知と云へり。

【五】而も彼の云云、宋譯相當文には、而初不能知レ苦斷集云云と云へり。

色を以て等しく諸佛とは爲さず、」
無量數のあひだ正思惟して、」
身は草木及び石壁の如し
亦頑身と及び草木と無し、
是の心は相無く復形無し、
身に非ず心に非ずして能く證するを得、
即ち最勝の寂靜地と爲す、
若し此の法に於て正勤を求めば

亦陰を離れたるを如來とは名けず、」
不思議の智乃ち成就したり。
菩提は色無く寂にして生無し、
云何ぞ身もて菩提を證すと說かん。」
菩提は心に非ず亦狀無し、
亦證無きに非ざること思議し難し。」
外道は中に於て皆荒迷す、
必ず當に速に是の三昧を得べし」と。」

大集經菩薩念佛三昧分卷第七

思惟三昧品第十一の一

一二三

彼の生家と衆の妙相とを思せば、
亦諸の好と勝れたる莊嚴と、
微言の妙義の初・中・後とを念ぜよ
解脱の門と及び供養と、
應に諸根の具滿せる者を念ずべし、」
應に諸解脱の尊を念ぜんに、」
一切世間利益の念と
妙色と及び清淨の心と、
金剛身體には百福の相あり、
何[五九]等の法中にか如來と名けん
諸佛は色に非ず復受に非ず、
是の如き等の法は如來に非ざれど、
亦彼を離れたる、是れ如來にして、
諸佛は眼に非ず、耳・鼻に非ず、
亦彼を離れたるを如來と爲し、
唯大名有るのみにては眞の佛無き、
智人若し盡く和合するを知らば
若し諸陰を以て如來の爲さば、」
衆生卽ち應に是れ諸佛なるべし、

當に等覺を見るべきこと、難しと爲さず。
及び彼の本願もて先に行じたる所と、
彼れ皆善逝の解脱身なり。
正勤と彼の四の神足とに住し、
力と菩提分とも亦復然り。
久しからずして當に勝れたる寂地に到るべし、
善法の功德は思量し難し。
復世尊の衆の妙分とを思へ、
當に知るべし、如來は諸念滿つるを。
正しく當に無邊の處を觀察すべし、
彼の想行に非ず、識心にも非ず。
正見の智人は亦應に體あるべし、
應供善逝は但だ名有るのみに非ず。
舌・身・意及び法等に非ず、
正覺の莊嚴は惟名のみに非ず。
名を離れて何處にか實なる者有らん、
當に等覺を取らんこと實は難きに非ず。
彼の諸の衆生は皆陰有れば、
陰は平等に斯れ共有なるを以てなり。

【五九】等、麗本のみ、得に作る、今餘本に從ふ。

身もて得とせんに、今の此の身は、覺無く識無く、頑癡にして知無し。譬へば、草木の如く、若しは石のごとく、若しは壁のごとし。然も彼の菩提は、色に非ず、身に非ず、行に非ず、得に非ず、見聞すべからず、觸證すべからず。此の身は是の如し、云何ぞ能く菩提を成ずるを得ん。若し心もて得んに、卽ち此の心は、本より自ら形無く、相貌有ること無し、見聞すべからず、能證すべからず、執持すべからざること、猶し幻化の如し。菩提も是の如く、亦心有ること無く、觸對有ること無く、見聞すべからず、知證すべからず。此の心是の如し、云何ぞ能く菩提を成就することを得ん』と。

『不空見、是を菩薩の、正念の思惟もて、身心を以てせず、亦身心をも離れずして、而も能く阿耨多羅三藐三菩提を證得すとは爲す。

佛の言はく『不空見、然も彼の菩薩、常に應に是の如く思惟し觀察すべし「若し能く是の如く、諸法を觀ずる時、卽ち正法の中に安住することを得、心に遷變無く、移動すべからず」と。當に知るべし、爾の時、菩薩摩訶薩の法を具足し、自然に不善の思惟を遠離し、速疾に阿耨多羅三藐三菩提を成就し、正しく平等眞實の法界を覺するを』と。

爾の時、世尊、重ねて此の義を明さんが爲に、偈頌を以て曰はく

『過去未來の諸の世尊と　現在の一切の遍見者と「を念じ」
冥心空寂にして慈悲を行ぜば、　諸佛を覩んと欲するに艱難無し。
往昔の諸佛は大威光もて　世間を憐愍して等しく樂を與ふ、
彼の人中の分陀利　調御丈夫・功德の滿せざるを念ぜよ。
更に下生及び入胎をと、　住胎と尊母と皆是足するを念ぜよ、

すや。地界を離れたるを、是れ如來と爲すや。若し地界に卽するを、如來と爲さば、彼の內外の法は、皆地に屬すれば、是の如き地界は、應に是れ如來なるべし。若し地界を離れたるを、如來と爲さんに、地を離れたるをば、卽ち無因緣の法と爲し、彼の無因緣の法は、云何ぞ如來ならん」と。彼れ既に是の如く地界を觀察し、乃至彼の水・火・風界を觀ずること、亦復是の如くす。

『而も彼の菩薩、是の如き、正思惟を作す時、色を以て如來を觀察せず、色を離れて如來を觀察せず。是の如く、受を以てせず、受を離れず、想を以てせず、想を離れず、乃至識を以てせず、識を離れず、如來を觀察すること、亦是の如くす。

『又彼れ觀ずる時、亦眼を以て如來を觀察せず、眼を離れて如來を觀察せず。是の如く耳を以てせず、耳を離れず、鼻を以てせず、鼻を離れず、乃至身意を以てせず、身意を離れず、如來を觀察すること、亦是の如くす。

『又彼れ觀ずる時、色を以て如來を觀察せず、色を離れて如來を觀察せず。是の如く、色を以てせず、色を離れず、聲を以てせず、聲を離れず、乃至觸・法を以てせず、觸・法を離れず、如來を觀察すること、亦是の如くにす。

『又彼れ觀ずる時、地を以て如來を觀察せず、地を離れて如來を觀察せず。是の如く、水を以てせず、水を離れず、乃至風を以てせず、風を離れず、如來を觀察すること、、亦是の如くにす。彼の菩薩、是の如く觀ずる時、卽ち能く彼の一切法の中に於て、善く通達し、知ること明了にして無礙なり。

『爾の時、[五八]彼の菩薩、復應當に是の如き思惟を作すべし、「是の中、更に何等の眞法を以てか、能く彼の阿耨多羅三藐三菩提を得るや。身を以て菩提を得と爲すや、心を用て菩提を得と爲すや。若し

【五八】彼の菩薩云云、宋譯には、不空見、汝以二何法一能得二無上菩提道一耶といひ、佛の直接の說法とす。

復應に是の如き思惟を作すべし「是の中、何等をか名けて如來とは曰ふ。當に色に即するもの、是れ如來と爲すや、當に[五五]色を離れたるもの、是れ如來と爲すや。若し色法を以て如來と爲さば、彼の諸の衆生は、皆色陰有れば、一切の衆生は、應に是れ如來なるべし。[五六]若し色を離れたるを以て、如來と爲さば、離色は則ち是れ無因緣の法なり、無因緣の法は、云何ぞ如來ならん」と。菩薩は是の如くして、色を觀知し已る。

『復次に受を觀ずべし。彼の時、更に是の如き思惟を作さん「當に受に即するもの、是れ如來と爲すや、當に受を離るるもの、是れ如來と爲すや。若し受法に即するものを、如來と爲さば、彼の諸の衆生は、皆受陰有れば、一切の衆生は、應に是れ如來なるべし。若し受法を離れたるものを、如來と爲さんに、受を離れたるを、則ち無因緣の法と爲す。彼の無因緣の法は、云何ぞ如來ならん」と。彼れ是の如くして、色と受を觀じ、乃至識を觀ずること、亦是の如くならん。

『時に彼の菩薩、復斯の如く念ぜん「若し此の諸陰にして、如來に非ざれば、豈に彼の諸根は、是れ如來ならんや」と。是の如く念じ已つて、則ち先づ眼を觀ずべし。「當に眼に即するもの、是れ如來と爲すや、當に眼を離れたるもの、是れ如來と爲すや。若し彼の眼に即するもの、是れ如來ならば、一切の衆生、皆是の眼有れば、一切の衆生は、應に是れ如來なるべし。若し彼の眼を離れたるもの、是れ如來ならんに、眼を離れたるを則ち因緣の法に非ずと爲す。彼の非緣の法は、云何ぞ如來ならん」と。菩薩、是の如くして、眼を觀察し已り、耳を觀じ、鼻を觀じ、乃至、意を觀ずること、亦是の如くならん。

『時に彼の菩薩、復斯の如く念ぜん「若し是の諸根にして、如來無からんには、豈に彼の[五七]諸大にも、如來有らんや」と。是の如く念じ已つて、則ち先づ地を觀じ「地界に即するを、是れ如來と爲

【五五】色を離るる。宋譯相當文には異色に作る。
【五六】若し色……如來ならん。宋譯相當文には、若以二異色一、是如來者、除二十二蘊一、豈有二如來一と云へり。
【五七】諸大、地水火風の四大。

菩薩念佛三昧分　思惟三昧品第十一の一[五三]

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、佛に白して言はく『世尊、若し諸の菩薩摩訶薩にして、諸佛所說の念佛三昧を成就せんと念欲せんに、云何が思惟して、安住するを得るや』と。

佛の不空見菩薩に告げて言はく『不空見、若し諸の菩薩摩訶薩にして、必ず是の三昧を成就せんと欲すれば、先づ當に、正しく過去の有らゆる諸の如來・應供・等正覺を念じ、次で現在の有らゆる、諸の如來・應供・等正覺を念じ、次に未來の有らゆる、諸の如來・應供・等正覺を念ずべし。彼れ是の如く、一切の三世十方世界中の、是等の一切の諸の如來・應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊の、天より降ること成就し、入胎成就し、住胎成就し、出胎成就し、出家成就し、諸の功德成就し、諸根成就し、諸相成就し、諸好成就し、莊嚴成就し、戒品成就し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫知見成就し、四無畏と慈悲と成就し、喜捨成就し、慚愧成就し、威儀成就し、諸行成就し、奢摩他成就し、毘婆舍那成就し、明解脫成就し、解脫門成就し、四念處成就し、四正勤成就し、四如意足成就し、五根成就し、五力成就し、覺分成就し、正道成就し、往昔の因緣成就し、雙べて敎示すること成就し、諸通の敎示成就し、大通の敎示成就し、戒品成就し、一切の三昧成就し、無礙の利益成就し、他の爲の利益の無礙なること成就し、一切の善法成就し、清淨の色成就し、清淨の心成就し、清淨の智成就し、諸入成就し、金色と百福と成就したまへるを念ずべし。

『時に彼の菩薩、諸の如來の、是の如き相を念じ已りて、復應に常に、彼の如來・應供・等正覺の、心に動亂無く、亦[五四]常に無所著の心に安住するを念ずべし。心無著「なるを念じ」已らば、彼れ

【五三】宋譯、品を分たず。

【五四】常、麗本のみ、當に作るも、今餘本に依る。

[五〇]六受の處に於て心に正しく觀じ、　常に六種の愛を斷除せんことを念じ、
復六通を以て世に成就し、　亦六念と及び智明とを修せよ。
七覺と[五一]七聖財とを勤求し、　必ず須らく彼の疑惑の處を捨つべし、
三昧を得んと欲すれば、恒に斯のごとくし、　漸く當に諸の煩惱を散滅すべし。
彼れ常に七識住を遠離し、　斯の[五二]八顚倒をも亦拔除せよ、
若し能く八正道に住すれば、　自ら當に速に此の深定を證すべし。
恒に八大丈夫の行に住し　復八解を以て、自ら心を娛しめ、
八法に染せずして世間を離れなば、　最勝の智を獲んこと、當に遠からじ。
他人の所に於て瞋心無くし、　先づ應に此の九種の慢を除くべし、
九の歡喜の根本法を思ひ、　彼の次第の九種禪を得よ。
此の十惡不善の因を絕ち、　應に智人の十種の善を修すべし、
若し能く十種の力を修行せば、　是の三昧を得んこと、終に難き無し。
當に諸の善法を攝持することを念ずべし、　不善・衆惡の緣を放捨し、
前後に彼の正念を勤求せんに、　此の三昧を證せんこと、豈に能く久しからん。
若し是の如き三昧に住し已らば、　當に智力を轉ずること不思議ならん、
遍く諸佛金色の身を見、　生ずる所に常に正法を聞くを得ん。
若し彼の諸世尊の、　或は已に滅度し及び現在したまふと、
當來の一切の、世を愍みたまふ者とを見んと欲すれば、　應に此の勝三昧を思惟すべし』と。

【五〇】六受の處、六識。

【五一】七聖財、信、戒、聞、慚、愧、捨、慧。

【五二】八顚倒、凡夫の常樂我淨と、二乘の無常・無樂・無我・無淨との顚倒。

惡欲の意を起すを得ざれ、
若し彼の外道の法を學せざれば、
但だ能く佛の法言に隨順して、
常に布施及び戒・忍を行じ
恒に禪思と及び智慧とに處らば、
能く頭目を施して愛と畏と無く、
彼れ菩提に趣かんこと艱難無く、
若し能く心を持すること大地の如く、
更に虚空の邊崖無きに等しからしめば、
若し身・口・意を精誠にする有り、
其れ衆の具に於て既に求むる無し、
應に常に四正勤を專念すべし、
速に須らく顛倒の想を遠離すべし、
常に四流の河を杜絶することを念じ、
五根及び五力を具足して、
五種の欲事をば俱に懷かざれ
復當に五解脱を願求し、
應に速に五陰の處を觀知すべし、
彼の恭愼ならざるをば、應に遠離すべし、
應に諍競と睡眠とを滅すべし。
諸の是の戲論、自然に除かん、
此の三昧を求めんに、須臾に獲べし。
勇猛に精進して倦む時無く、
自然に斯の三昧行を得べし。
餘の諸物を捨して終に疑はざれば、
亦速に斯の靜定に凝るを獲ん。
又水火と及び風とに同じくし、
彼の人速に此の禪定を得ん。
彼れ、食と及び衣・財に貪せざれば、
能く是の如く修すれば三昧を證せん。
亦當に彼の諸の神足を成ずべし、
煩惱の棘刺をば先づ斷除すべし。
亦諸の渴愛を乾消せんことを思へ、
五蓋の衣を分裂し破壞すべし。
內心の幻僞をも亦宜しく捨すべし、
[四七]五身三摩提を思惟すべし。
正心もて[四八]六緣に和敬なるべし、
亦當に[四九]六觸の身を滅損すべし。

【四七】五身、戒、定、慧、解脱、解脱智見の五は、佛身を成ずれば、五分法身といふ。
【四八】六緣、六和敬の對象となり。身・口・意・戒、見（空等の見）、利（衣食等の利）の六を云ふか。
【四九】六觸の身、六根。

既に三種の不善根を拔き、
若しは[四五]三受の處を觀察することを知らん、
若し人、勝三昧を求めんと欲すれば、
自然に諸の邪見をば遠離し、
次第して受は斷れ皆苦なるを觀じ
若し人、三昧を思惟せん時には、
諸法の疑有るをば咸悉く除かば
亦應に善く四念處に通ずべく、
恒に解脫及び禪定を求め、
多聞を以て人を陵侮すべきにあらず、
正法を聞き已つては能く思惟し、
諸佛を尊重して深く法を敬ひ、
善知識の所に常に恩を念じ、
惡人とは坐起を同じくせず、
無上の菩提を求めんが爲の故に、
一切の衆生は皆平等なり、
彼の法の眞實の際を求めんが爲に、
彼の輕慢の意をば悉く能く除かんに、
明に我見と及び疑心とを識り、

即ち亦[四四]三の善本を思惟し、
斯の妙定を得んこと、良に雜に非ず。
先づ應に戒を持して後に智を修すべし、
亦戲の論及び語言無からん。
然る後、生滅の心を觀察すべし、
當應に深く出世の事を念ずべし。
此の三昧を得んこと、甚だ易しと爲す、
先づ當に身の、暫くも住まらざるを觀ずべし。
壽命をも愛せず、豈んや身を惜まんや、
寧ろ當に正法を誹謗すべきをや。
晝夜に受持して身ら誦する所とし、
僧衆に承事して敢て輕んぜざれ。
一切の諸惡友を遠離し、
彼れ衆の爲に法を說く處を除け。
終に阿蘭若を捨離する勿れ、
諸法の中に於て分別する莫れ。
諸法の相中に心を著する無く、
久しからずして必ず此の三昧を得ん。
亦當に諸の調戲を[四六]觀察すべし。

入る法。
【四三】十惡、殺生、偸盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、倚語、貪欲、瞋恚、邪見の十。之に反するを十善とす。
【四四】三善本、無貪、無瞋、無癡。
【四五】三受、苦・樂・捨（不苦不樂）。
【四六】觀、麗本、覺に作るも、三本觀となす。今之に依る。

利益の事を得べし、若し菩薩摩訶薩有らんに、應當に念佛三昧を修學すべし。是の如く修せん者をば、佛恩を報ずとは名く。是を思惟すれば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず、亦當に彼の諸佛の法を滿足し、乃至能く一切衆生の爲に、大依止と作るべし、亦無上の種智をも成就せしむるが故に。

『不空見、斯の諸菩薩摩訶薩は、大智有るが故に、乃ち能く思惟し、彼の聲聞辟支佛の人の、觀察し得るところに非ざるなり。不空見、若し人、此の念佛三昧に於て、或は時に親近し・思惟し・修習し、若しは受持し、若しは讀誦し、若しは書寫し、若しは教へて書寫せしめ、若しは教へて讀誦・受持せしめ、若しは少しく開發し、若しは爲に解說し、若しは能く廣宣せんに、彼れ少時のあひだ、勤苦・疲勞すと雖も、然し其の所作は、終に虛棄せず必ず果報を得、大義利を得ん。

『不空見、彼の菩薩摩訶薩、他の爲に法を受持するを以ての故に、速に不退の阿耨多羅三藐三菩提を得、當來の世には、決定して佛と作らん。

『不空見、當に知るべし、是の如く、念佛三昧は、則ち一切の諸法を總攝すと爲す。是の故に、彼の聲聞・緣覺の二乘の境界には非ざるなり。若し人、暫くも此の法を說くを聞かんには、是の人、當來に決定して成佛せんこと、疑有ること無きなり』と。

爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんが爲の故に、偈頌を以て曰はく

『若し人、此の三昧を修せんと欲すれば、　能く一切の諸如來を念ずべし、
彼れ既に是の法門を思惟すれば、　諸の非法の處をば、當に遠離すべし。
亦當に無慚愧を遠離し、　斷見と及び常見とを破除すべし、
復應に三の空門に安住すべく、　當に解脫の智を勤修することを念ずべし。

【三三】七界、本文に註して、害毒、恚界、出界、欲界、色界、無色界及び滅界を謂ふと云へり。宋譯は是を、註として出ださずして文中に插入したり。

【三四】七使、欲愛（欲界の貪欲）、恚、有愛（色、無色界の貪欲）、慢、見、邪見、疑（四諦の理をいふ）の七。

【三五】七識住、大集部、第二、二六一頁參照。

【三六】世間の八法、また八風といふ。同、第一、二〇八頁參照。

【三七】八大人覺、菩薩等の大力量の人の、覺悟する處にして、八法あれば八大人覺といふ。

【三八】八解脫、大集部第一、七九頁參照。

【三九】九衆生居、同上、二八六頁參照。

【四〇】九慢、我勝・我等・我劣、有勝我・有等我・有劣我・無勝我・無等我・無劣我の九種の慢。

【四一】九惱、また九難、九橫といふ。佛の現生に受けたる九種の災難、（智度論、九）。

【四二】九次第定、四禪、四無色、滅盡定の九種の禪定、他心を雜へずして、一定より一定に

正聞を禮すこと莫く、恭敬尊重して是の法を供養し、諸の欲求を捨て、諸の諍競を息め、諸の睡眠を除き、諸の疑網を滅し、迷惑を殄絶して、明に我見を識り、戲論に事へずして、尼乾・[一八]邪命・白活・遮羅迦・[一九]波梨婆闍の言語等を遠離すべし。

『常に應に善く檀波羅蜜の中に住し、尸波羅蜜を圓滿し、常に羼提波羅蜜を念じ、毘梨耶波羅蜜を捨せず、禪波羅蜜に遊戲し、般若波羅蜜を具足すべし。身命を棄捨して、愛惜の心無く、四大の性の如く、改變すべからず、地界の如く、平等心を起し、水・火・風界も、亦復是の如くにして、身業を成就し、心意精勤し、不活の畏無く、[二〇]衣食・湯藥・床鋪・房舍・殿堂など、一切の衆具に貪せず、樂つて頭陀を行じ、常に知足に住し、利養を求めず、名聞に事へざれ。

『凡て是の愛著、悉く滅して餘無く、四念處を觀じ、、四顚倒を斷じ、[二一]惡刺を念ぜず、永く四流を度り、[二二]四如意を修し、[二三]四威儀に住すべし。當に五根を具し、亦五力を增すべし。應に[二四]五蓋を滅し、[二五]五情を用ひず、[二六]五濁を遠離して、[二七]五解脫を成じ、內に入つて自ら思惟するを得、廣大の聖智もて、五陰を正觀し、[二八]六塵を行ぜず、六根を降伏し、六識を亡滅し、[二九]六受を斷絕し、[三〇]六渇愛を除き、[三一]六念處及び[三二]六智分の法を行じ、六通の力に於て、常に利益を求め、七覺分を修して、[三三]七界に通達し、[三四]七使及び[三五]七識住を滅除し、八怠惰を離れ、八妄語を除き、[三六]世間八法の所因を明了にし、應に八種の[三七]大人覺の法を種得し[三八]八解脫を證し、八正道を修して、廣大の分別に、親近し思惟すべし。專精に[三九]九の衆生居を遠離し、[四〇]九種の慢を滅し、[四一]九惱を捐棄し、常に九種の歎害等の法を思ひ、[四二]九次第定に親近し修習し、終に[四三]十種の惡業を念ぜず、勤めて十善の業道を造作し、常に如來十種の智力を求むべし。

『不空見、我れ今汝の爲に、是の如き菩薩摩訶薩の、念佛三昧の法門をば略說す。諸所に當に、大

【一八】邪命 Ājivika 邪法を以て生活するもの。
【一九】波梨婆闍 Parivrājaka 普行と譯す。
【二〇】衣食等、宋譯相當文に、於四供養心無「貪著」とあり。
【二一】惡刺、同に煩惱刺と云ふ。
【二二】四如意、大集部第一、四四頁參照。
【二三】四威儀、行・住・座・臥の四種の作法、宋譯、四五儀に作る。
【二四】五蓋、宋譯、五結に作る。大集部第一、四九頁參照。
【二五】五情、五欲。
【二六】五濁、同に五濁心に作る。
【二七】五解脫、五分法身ならん。
【二八】六塵以下の五に代へ、宋譯は六欲處、六身受、六愛身の三を擧ぐ。
【二九】六受、六根に受領する六塵をいふ。宋譯に六身受といふもの之に當るべし。
【三〇】六渇愛、六欲、宋譯に六愛身といふもの之に當るべし。
【三一】六念處、宋譯に六念と云へり。
【三二】六智分の法、同に、六識分と云ふ。

して、懈怠を除去し、廣大の心を發すことを念じ、常に〔一一〕三解脱門を觀察することを念じ、常に先づ〔一二〕三種の正智を生ずることを念じ、常に〔一三〕三不善根を斷滅せんことを念じ、常に諸の三昧聚を成就することを念じ、常に一切の衆生を成熟〔一四〕することを念じ、常に等しく衆生の爲に法を說くことを念ずべし。

『當に四の念處を觀ずべし。所謂身念處・受念處・心念處・法念處なり。當に〔一五〕四食の過患を念ずべし、所謂搏と觸と思と識等にして、是の食の中に、不淨の想を生ぜよ。當に四無量を念ずべし、所謂大慈を修し、大悲を行じ、大喜に安住し、大捨を具足するなり。當に諸禪を成就して、味著せざることを念ずべし。然も復一切の諸法を思惟し、常に其の身を惜まず、其の命を保せず、身と及び心とを捨て、多聞を攝受することを念ぜよ。

『是の如きの法を念ずれば、應に是の如く護られて、誹謗を得ざるべし。多聞の法財をば、所聞の法の如く、義の如く受持し、諸佛の所に於て、尊重の心を起すべし。人法と僧とに於て、肅恭の意を生じ、善知識に親しみ、惡友を遠離し、世間の無義の語言を除滅し、世の樂に著せず、空閑をば捨せず、一切に住して、平等の心を生じ、諸の衆生に於て、退沒有ること無く、損害の心無く、亦妬嫉無く、一切の法に於て、稱量の心を起し、罪惡を作さず、心に垢染無く、〔一六〕一切の諸法は、處として得べき無し〔と分別し〕、常に〔一七〕甚深廣大の經典を求め、中に於て、恒に增上の信心を起し、嫌疑を生ずる莫く、異想を爲す無かれ。

『是の如き經典は、最勝廣大なれば、常に誦持することを念じ、常に演說することを思へ。何を以ての故にとなれば、是れ諸佛世尊の道法と爲り、獨り能く佛の菩提を生成するが故なり。當來の世に於て、彼の無量の諸佛の功德を得べければ、應當に他の爲に、如法に宣說し、憍慢を降伏して、

【一一】三解脱門、空・無想・無願の三三昧。
【一二】三種智、世間智、出世間智（聲聞、緣覺の智）、出世間上上智（佛、菩薩の智）。宋譯相當文には又當三深知二三受生起一と云へり。
【一三】三不善根、貪・瞋・癡の三毒。
【一四】熟、麗本、就に作るも餘本皆熟とす、今是に依る。
【一五】四食、大集部、第二、一六三頁參照。
【一六】一切諸法云云、宋譯相當文に分二別一切無數諸法一と作す。
【一七】甚深廣大の經典、同には甚深方等の經典に作る。

遍く諸佛に諸論する有らんと欲し、　或は無量の難思の刹に生れ、
現前に一切の佛を供養せんこと、　三昧を成就せるが故に、斯のごときなり、
是の如き功德は說くべからず、　數の表を超過し、稱量を絕するも、
道樹等覺と恒に俱生す、　諸佛の諸嗟したまふは唯此の定のみ』と。

正觀品　第十 [10]

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、佛に白して言さく『世尊、若し諸の菩薩摩訶薩にして、諸佛所說の念佛三昧を成就するを得んと欲したらんに、彼の菩薩摩訶薩は、應當に何の法に親近し、修習してか、能く思惟三昧を成就するを得べきや』と。

爾の時世尊、不空見菩薩摩訶薩に告げて言はく『不空見、若し諸の菩薩摩訶薩にして、諸佛所說の念佛三昧を成就するを得んと欲し、常に一切の諸佛を覩るを得て、彼の諸の世尊に承事し供養せんと欲し、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得んと欲すれば、當に正念に住して邪心を遠離し、我見を斷除して無我を思惟すべし。當に是の身は、水の聚沫の如しと觀ずべし、當に是の色は、芭蕉の虛しきが如しと觀ずべし、當に是の受は、水上の泡の如しと觀ずべし、當に是の想は、熱き時の焰の如しと觀ずべし、當に是の行は、空中の雲の如しと觀ずべし、當に是の識は、鏡中の像の如しと觀ずべし。

『菩薩にして、若し是の三昧に入らんと欲すれば、當に深く怖畏の想を生ずべし、當に譏嫌を遠離し、他の訶責を免るることを念ずべし。當に無慚・無愧を除去して、慚愧を成就することを念ずべし。當應に奢摩他・毘婆舍那を成就すべし』。當に斷・常の二邊を遠離し常、に一心に、精勤・勇猛に

【10】 宋譯卷第四、つゞき。この說の所說は大集經第七卷、不眴菩薩品（大集部第一、一五頁以下）並同第二十七卷（同上第二、一八九頁以下）參照。

正思惟と大威德とを具し、
復大家及び尊姓に生れて、
彼れ有爲の中に處りと雖も、
生るゝ所には常に大功德を受け、
或は忉利なる[六]釋天尊と爲り、
凡そ出す所の聲、悉く比無く、
諸龍の美音のごとく、遍く中に行かん、
絃樂及び歌の聲を備へ、
能く義理に會して、衆をして歡ばしめん、
善く精雅にして及び好き聲を出し、
深婉の妙音幷に善語して、
行歩の擧動は龍王のごとく、
雨を降らすこと大地に[九]滂洽たり、
是の如きの人は、龍所遊の處にも、
無量無數の諸の化身もて、
偈頌譬喩をば諸種作すに、
彼れ常に法樂を衆生に與へんこと、
生る所、諸佛を離れず、
恒に利益に居して難處無く、
亦正修行に安住するを得ん。
衆事端嚴にして見る者喜ばん、
作す所の功德をば能く壞する無けん。
往來にて多く人中の王と作らん、
時には[七]光天及び[八]梵主と作らん。
梵天の好響、師子の音、
大功德の聲は牛王の吼のごとけん。
迦陵頻伽の音のごとく精妙にして、
三昧を獲るを以ての故に然るを得。
多く愛の言を用ひて一切を悅ばしめん。
彼の聲常に有つて未だ曾て絕えざらん。
普く電光を放つて一切を照し、
是を龍德と謂ひ、稱量し難し。
斯の妙定と勝れたる神通とに住して、
普く諸佛の前に、等しく供養せん。
言詞雅正にして理趣安く、
是の勝定を得たるが故に無礙ならん。」
亦菩薩及び聖僧を見、
三昧を成就して十方を照らさん。

【六】釋天尊、帝釋天の謂。
【七】光天、色界第二禪の天。
【八】梵主、色界初禪の天。
【九】滂洽滂、大に雨ふるさま。洽、あまねし。

當に速に諸の神通を獲、
遂に能く妙[土]に下生するを具足すべし、
胎に住する時は、比有ること無く、
一切の相妙をば咸具足せん、
家を捨てゝ出家し、衆の欲を離れ、
彼れ世間の爲に菩提を求め、
亦諸の通及び神足を得て、
多聞總持の大德の人として、
諸の大衆を統べて、義明了に、
諸法の行處を學して、皆悉く、
智人所知の智をば具足し、
有爲の法をば盡く皆捨して、
常に天眼を以て衆生を觀、
宿命には明白にして、過往の、
神通もて變化して自在に遊び、
大名聞を得て佛の國に行き、
明に是處及び非處に達し、
深く淨法及び垢染を照らし、
能く正行具足の人たるを得て、

是に因つて復、清淨の刹を覩、
入胎具足せんこと、亦復然り。
母は最も清淨にして、勝家に生れ、
亦當に彼の諸の行法を修すべし。
人の欲と及び天とを捐棄して、
生るゝ所には常に諸の甘露有らん。
智の圓滿なるをば、彼の世間に轉ぜん。
行行は斯れ多聞の海に由らん。
巧に衆生の方便を知り、
世間の法及び出世を知らん。
諸の業及び癡惱を遠離し、
常に無爲に親近せん。
復天耳を用つて法を聽聞し、
他の心を知り、善く前人の意にも達せん。
心能く巧に、轉じて所[五]用に隨ひ、
能く廣く諸の世間を利益せん。
一切の諸法を　知らざる靡けん、
以て常に勝三昧を修習せん。
彼の智慧、實に比ぶべき無く、

【五】用、麗本因に作るも、餘本皆用となす。今之に從ふ。

するを得るが故なり、則ち神通を具足するを得るが故なり、則ち尊勝の大家を、具足するを得るが故なり、則ち大姓を具足するを得るが故なり、則ち端正を具足するを得るが故なり、則ち大威を具足するを得るが故なり、則ち大光明を具足するを得るが故なり、則ち諸の功德を作すことを、具足するを得るが故なり、則ち大功德を具足するを得るが故なり、則ち大人・牛王を具足するを得るが故なり。

『則ち他をして歡喜せしむる音を、具足するを得るが故なり、則ち他をして深く歡喜せしむる音を、具足するを得るが故なり、則ち微妙の音を、具足するを得るが故なり、則ち梵音を具足するを得るが故なり、則ち相應の辯才を、具足するを得るが故なり、則ち無諍の辯才を、具足するを得るが故なり、則ち無著の辯才を、具足するを得るが故なり、則ち實に稱ふの辯才を、具足するを得るが故なり、則ち種種の辯才を具足するを得るが故なり、則ち一切音の辯才を、具足するを得るが故なり、則ち生ずる所、諸佛世尊を離れずして、常に恭敬・供養すること、具足するを得るが故なり、則ち邊地の生を離るゝこと、具足するを得るが故なり、則ち常に中國に生るゝこと、具足するを得るが故なり、則ち遍く諸の世界に遊び、諸佛世尊を禮拜し・承事し、論義を諮請すること、具足するを得るが故なり、則ち無量無邊の功德を成就すること、具足するを得るが故なり、則ち一切菩薩の功德莊嚴をば、具足するを得るが故なり、乃至則ち菩提樹下の道場莊嚴をば、具足するを得るが故なり』と。

爾の時世尊、重ねて此義を宣べたまはんが爲に、偈頌を以て曰はく、

不空見よ、斯れ勝れたる三昧なり、　我の如きは今智德の中に住す、
其れ菩薩有つて能く修行すれば、　彼は十方の一切佛を見ん。

根を增廣することを得るが故なり、則ち無癡の善根を增廣することを得るが故なり、則ち慚愧を具足するを得るが故なり、則ち神通を成就するを得るが故なり、則ち一切の佛法を圓滿するを得るが故なり、則ち一切の佛土を清淨にするを得るが故なり。

『則ち天より降つて下生することを、具足するを得るが故なり、則ち入胎を具足するを得るが故なり、則ち住胎の清淨を具足するを得るが故なり、則ち生母の、微妙にして清淨なることを具足するを得るが故なり、則ち大人相の清淨なるを具足するを得るが故なり、則ち諸の妙好の清淨なるを、具足するを得るが故なり、則ち出家を具足するを得るが故なり、則ち最上の寂靜を、具足するを得るが故なり、則ち大寂靜を具足するを得るが故なり。

『則ち諸通を具足するを得るが故なり、則ち一切諸衆生の爲に、歸依と作ること、具足するを得るが故なり、則ち多聞の具足を得るが故なり、則ち世間・出世間の法、具足するを得るが故なり、則ち一切諸法の住處、具足するを得るが故なり、則ち巧妙の方便もて、出世の法を知ること、具足するを得るが故なり、則ち善く一切の諸法に通達すること、具足するを得るが故なり、則ち巧に[三]前際・後際の法相を知ること、具足するを得るが故なり、則ち善巧もて、文・字・句の義を莊嚴すること、具足するを得るが故なり、則ち智慧の具足を得るが故なり、則ち微妙を、具足するを得るが故なり、則ち巧に轉變するの心を、具足するを得るが故なり。

『則ち善く他に教示することを、具足するを得るが故なり、則ち[四]他の衆生、及び富伽羅の爲に、勝負・白黑・上下・滿缺・增損に、勝力を具足するを得るが故なり。則ち是處と非處とを具足するを得るが故なり、則ち未だ阿耨多羅三藐三菩提を成ぜざるに、趣向せしむることを、具足するを得るが故なり、則ち正行を具足するを得るが故なり、則ち意を具足するを得るが故なり、則ち自在を具足

【三】前際後際、過去・未來と云はんが如し。有爲法の前後相起するに、前を前際と爲し、後を後際とす。

【四】他の衆生云云、本文には、得爲他衆生…增損勝力具足故とあり。宋譯には得レ知ニ他方諸菩薩等、及以衆生精麤白黑、長短大少一と云へり。

最上無上の戒聚を成就せんとする、諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。深忍に相應せんとする諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。勇猛に精進せんとする、諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。深き禪定を得んとする諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。智慧を深重ならしめんとする、諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。資財・方便を以て、巧に一切の諸衆生を攝せんが爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。

『又心を金剛の如くならしめんとする、諸の衆生の爲の故に、心を門閫の如く、不動・不轉ならしめんとする、諸の衆生の爲の故に、心を淨水の如く、塵垢有ること無からしめんとする、諸の衆生の爲の故に、心を迦耶隣提衣の如くならしめんとする、諸の衆生の爲の故に、樂うて深義に入る、諸の衆生の爲の故に、正法を尊重する諸の衆生の爲の故に、捨擔を能く擔ぐ諸の衆生の爲の故に、身命を惜まざる諸の衆生の爲の故に、一切の世間の有爲を樂はざる、諸の衆生の爲の故に、如來に是の如き大義をば請問しつ。不空見、汝は今、能く斯の如き、諸の大菩薩摩訶薩輩の爲に、如來に是の如きの義を請問したるのみ』と。

爾の時世尊、復不空見菩薩摩訶薩に告げて言はく『不空見、汝應に諦に聽き、善く之を思念すべし。吾れ當に汝の爲に、廣く分別して解說すべし』と。時に彼の不空見菩薩摩訶薩、卽ち佛に白して言さく『善い哉、世尊、聖說を蒙るが如く、一心に諦に受けまつらん』と。

佛の言はく『菩薩の三昧有り、念一切佛菩薩とは名く。當應に親近し修習し觀察し思惟すべし。是の如き三昧をば、旣に能く修習し、此の三昧を觀察し思惟し已らば、則ち現前の安樂行法を、增廣し成就することを得るが故なり、則ち無貪の善根を增廣することを得るが故なり、則ち無瞋の善

卷の第七[一]

讃三昧相品　第九[二]

爾の時、世尊、不空見菩薩摩訶薩を讃へて言はく『善い哉・善い哉、不空見、汝往昔に於て、乃ち能く、無量無數の諸佛世尊を供養し、諸佛の所に於て、諸の善根を種ゑ、具足して諸の波羅蜜を修行し、一切の法中に於て、所作已に辦じ、常に彼の諸衆生の輩の爲に、不請の友と爲つて、爲に大慈を行じたり。いま正信の諸衆生を成就せんがための故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。大鎧を被ん諸衆生の爲の故に、世尊に是の如き大義をば請問しつ。不退・不動の大菩提心「を得んとする」の諸衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。信・意を壞せざる諸衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。弘廣の大願を發し、諸の衆生を莊嚴せんが爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。

『不思議善根「を得んとする」の諸衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。不思議の鎧甲を著けんとする、諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。三界を超越せんとする、諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。實義に專精ならんとする、諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。大智に隨順せんとする諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。甚深の法・行を樂ふ諸衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。重ねて諸の衆生に布施せんが爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。重ねて諸の衆生に開示せんが爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。

「一切に能く內外の身財を捨せんとする、諸の衆生の爲の故に、世尊に斯の如き大義をば請問しつ。

【一】宋譯、卷第四。
【二】品名、亦同じ。

頭を捨つる時に當つても極めて歡喜するは、　無上の妙菩提を求めんが爲なり。
諸の衆生の爲には而も更に、　手足及び身の餘の肢をも捨てゝ、
天道を失せる衆生の數を救解し、　生死を除撥して正路に還らしむ。
又妻妾及び男女、　七寶の珠玉及金銀を施し
亦上妙の衆の器具を捨す、　我れ彼の爲の故に如來に問ひまつる。
身と命と財とを捨して厭倦無く、　長夜に說を聽くも疲勞せず
心常に寂滅にして頭陀を行ず、　我れ彼を以ての故に正覺に問ひまつる。
眞實の妙語をば恒に心に繫け、　麁鄙の惡言をば聞くも即ち離れ
而も他所に於て嫉恨無し、　我れ彼に緣るが故に自在に諮しまつる。
常に慈心を以て衆生を觀ること、　其れ猶ほ父母の一子を愛するが如く
而も怨親に於て行ずること平等なり、　故に我れ彼の爲に人王に請ひまつる。
現に斯の如き諸の功德有るに、　然も我れ今日以て宣陳するは、
其れ或は未だ具せざる諸の衆等あり　我れ亦是が爲に佛に諮問しまつるなり。
世尊、我れ善根あり、　初めて發問せる時、便ち剋く獲たり、
此の菩薩の諸功德を藉つて、　速に寂定三昧を證する王たらん』と。

大集經菩薩念佛三昧分卷第六

心は此の刹に住して他の緣無きに、
親しく承奉して彼の諸佛に事ふるは、
請ふ無きに我れ今、爲に慈を行じ、
自ら己を利するにならず、常に他を益せんとなり、　斯の爲に我れ、大名稱に請ひまつるなり。
諸の發心して佛智を求むるもの有り、
是の如き三昧をば、云何が修する、
此の忍の鎧を被るは衆生の爲なり、
彼等已に衆生の想を離る、
彼の輩は常に平等の心に住し
常に能く慈悲を成就せる者たり、
是の中に應に何等の法をか行ずべき、
得る所の功德、邊有ること無きためには、
弘誓の鎧を被たる勇猛の人は、
大地獄中に焰苦を受く、
彼等は睡る無く亦疲るる無く、
是の如く衆生を攝受する者たり、
呵責と毀辱と及び捶罵[三五]など、
他の奴婢及び僕隷と爲る、
無量百千數億の頭をも、

身をば十方無量の土に現じて、
悉く神通力の無邊なるに由るなり。
慚愧に住して修行するは、
善根成熟すること不思議なり、
我れこの故に、彼の爲に無著に問ひまつるなり。
我れ要ず當に諸の重要を拔くべし、
斯の爲の故に正眞覺に問ひまつるなり。
衆生を觀察するに異想無く、
我れ彼の爲の故に、如來に問ひまつる。
速に是の如き不思議を得、
我れ彼の爲の故に調御に問ひまつる。
一の衆生の爲に恒河の劫のあひだ、
善い哉、諸の衆生を安樂にすることや。
內外の諸物をば施さゞる無し、
我れ今彼の爲に同じく普く觀ず。
身に衆事の苦の煎迫するを受け、
皆斯の輩に由つて、世尊に請ひまつるなり。
來つて求索する有れば皆能く捨つ、

【三五】　捶、むちうつ。

「世尊、諸の菩薩摩訶薩輩有り、一切衆生の爲の故に、大勇猛を發して、諸の苦行を修し、身・手足・頭目、髓腦を捨し、或は時には節節の支より其の形を解し、骨を析き、髓を消すも、以て苦とは爲さず、休懈する有ること無く、方に更に阿耨多羅三藐三菩提の事を熾然せんと。世尊、我れ斯の如き諸菩薩の爲の故に、世尊に請ひまつるのみ』と。

爾の時、不空見菩薩、是の如く問ひ已り、重ねて此の義を宣べんが爲の故に、偈頌を以て曰はく

『我れ[三四]大師に問ひつまる、諸の勝智と　大智とをば、彼等を云何が成ずる、
云何が速智及び捷疾と　利智と聰明とに、能く通達する。
何に因つて彼の甚深の智と、　盡無邊の智とを得るや、我が爲に宣べたまへ、
弘廣・普遍の一切智をば、　是を最勝と爲して菩提をば求む。
云何が當に無怖畏を得べき　善巧を具足して、我が爲に說きたまへ。
云何がして金剛心を得て、　一切の法中に疑惑無き。
云何が是の柔軟の心を得て　戒行清明にして淨きこと海くなる、
云何がして山の如く動轉せざる　菩提を決定し、願もて莊嚴する。
云何が行を行じて他に隨はず、　義に於て明了にして安住をば得る、
云何がして不壞の信を得て、　諸佛の所作に復疑ふ無き。
云何が彼の生念の智を得、　一界に住して十方を現じ、
遍く諸佛を覩、及び法を聞き、　幷に大集の衆も亦明了なる。
其の身は一の刹を離れずして　而も能く十方の尊を供養するに、
妙華・衆香及び塗香と、　諸餘の衆具など說くべきこと難き。

[三四] 大、麗・宋・元三本、天に作るも、今明本に依つて大となす。

『世尊、諸の菩薩摩訶薩等有り、慈悲を行ずるの時、諸の衆生に於て、都て瞋・恨無く、設ひ諸の衆生、訶責し、罵辱し、〔三一〕楚撻し、〔三二〕撾打して、種種の苦に迫らるゝとも、是の如き菩薩は、衆生の所に於て、終に報答すること無く、乃至嫌心を起さず、本願を失せず、異の分別、及び餘の思惟無く、一心に大慈大悲をば修行す。世尊、我れ是の如き、大乘に住する諸の菩薩の爲の故に、如來に請問しまつるなり。

『世尊、諸の菩薩摩訶薩の輩有りて、衆生の爲の故に、己が樂及び諸の樂具を捨せんと欲し、一切熾然の大苦を受けんと欲し、斯の如き念を發しつ「我れ當に云何がして、一切の衆生をして、最勝の樂をば得しめ、一切の衆生をして、大法明をば得しむべき」と。世尊、彼の諸菩薩、是の如く念じける時、凡そ所有の物――若しは內、若しは外なる――をば、施さゞる者無く、捨せざる者無く、饒らさゞる無かりき。世尊、我れ斯の如き諸菩薩の爲の故に、如來に請問しまつるなり。

『世尊、諸の菩薩摩訶薩輩有りて、是の如き精進の鎧を被著せる時、斯の如き念をば發しつ「我れ今應當に、一一の衆生の爲に、恒河沙劫のあひだ、大地獄に住して、諸の苦惱を受け、猶ほ入出の息のごときも、以て苦と爲さず、亦菩提の心をも退沒せざるべし」と。世尊、我れ復、是の諸菩薩の爲の故に、如來に請問しつるなり。

『世尊、諸の菩薩摩訶薩輩有り、是の如き精進の鎧を被著し已り、斯の如き念を發しつ「我れ今當に、一切衆生の爲に、諸の事業・〔三三〕廝役を執つて服勤し、種種に承事して、以て苦と爲さゞるべし」と。是に於て或は奴婢と爲り、或は僕隷と爲り、或は僮徒と爲り、或は弟子と爲りつ。「我れ應に是の如くし、乃至種種の眷屬と作り、衆生を成熟せしむべし」と。世尊、我れ復是の諸菩薩の爲の故に、如來に請問しまつるなり。

〔三一〕楚撻、楚はしもと、撻はむちうつなり。鞭韃に同じ。
〔三二〕撾、うつなり。
〔三三〕廝、厮に同じ。しもべ、めしつかひ。

ば得べき。

『云何がして復、算數すべからず、稱量すべからざる諸の妙善根をば得べき。所謂心は金剛の如し、善根は一切の法を穿徹するが故に。心は[二七]迦隣提衣の柔軟なるが如し、善根は能く業を作すが故に。心は大海の如し、善根は諸の戒聚を攝するが故に。心は[二八]平石の如し、善根は一切の事業に住持するが故に。心は[二九]山王の如し、善根は一切の善法を發生するが故に。心は大地の如し、善根は衆生の事業を負持するが故に。

『心は他に從つて行ぜざるを得、善根は非法の教誨を遠離するが故に。心善く修行することを得、善根は一切の法を安住せしむるが故に。不壞の信を得、善根は如來所行の處に於て、疑惑せざるが故に。一の世界に住して、自然に遍く十方の諸佛を見、亦彼の佛の、妙法を宣說したまふを聞き、復菩薩聲聞の大衆を覩、又佛刹の清淨なる莊嚴と受用の事等を覩るに、悉く無礙なるが故に。乃至攝受決定す、善根は一切時に於て、自利利他するが故に。

『世尊、我の如きは今、實に自利の爲に、復諸の衆生を利益せんと欲するが故に、如來に請問しまつるなり。世尊、我れ今復、衆生の淨信心を弘廣せんが爲の故に、如來に請問しまつるなり。世尊、我れ今復、彼の諸菩薩摩訶薩輩の、不思議の善根を、具足し圓滿せんが爲の故に、如來に請問しまつるなり。世尊、我れ復、[三〇]斯の大精進・弘誓の鎧甲を被たる、諸の大菩薩摩訶薩の爲の故に、如來に請問しまつるなり。

『世尊、諸の菩薩摩訶薩の輩有りて、生死の中に於て、大精進を發し、一切衆生の爲に、亦衆生の相を取らず。然も是の菩薩摩訶薩は、生死・煩惱の中にありと雖も、長夜に一切の衆生を度脫して、實には生死・煩惱の想には住せず。世尊、我れ是の如き諸衆生の爲の故に、如來に請問しまつるなり。

【二七】迦隣提、迦遮隣提 Kācalindikāka の略、この鳥、身に細軟の毛有り、常の輕妙に非ずと。この毛羽を以て作れるを迦隣提衣といふ。
【二八】平石、宋譯相當文には盤石とあり。
【二九】山王、彌須山。
【三〇】斯の大精進云云、宋譯相當文に爲ニ被僧那忍苦大鎧一、悲ニ一切一故、請問如來と云へり。

而も彼の衆の華は、右遶三匝して、佛の頂上に住まりぬ。即ち彼の華中に、偈を以て歎じて曰はく、

『丈夫・大調御、　無上正覺の兩足尊に歸命しまつる
一切世間の天・人の輩には、　寧ろ以て比類すべき者有るべきや。
長夜黑暗の諸衆生は、　愚癡にして顚倒し、邪道に墮せるに、
極尊は明智あつて世間の限なれば、　能く復平正の路に還らしめたまふ。
清白の法の種子を失ひて、　衆生は煩惱のために內に心を燒かるゝに、
勝尊は猶ほ世の父母の如く、　能く白法の處に安止せしめたまふ。
善法と深利とを遺喪せる人は、　後世には方に將て怖畏すべし、
最尊は大慈の行を成就して、　諸の衆生の眞の導師とは爲りたまふ。
一切の衆生は善利無く、　覆護有ること無く、救ふ者無ければ、
希有の大悲ある救世の師、　世尊は眞に爲に救護を爲したまふ』と。

爾の時、華中より、是の偈を說き已るに、彼の華、方に如來の足上に至るに、須臾に即ち飛んで、遍く三千大千世界に往き、遍く諸佛の前に、施散し供養したり。

彼の寶蓋の中より、復栴檀の末團の、大さ車輪の如きを出し、如來の身に至るに、忽然として現ぜず。而も彼の旃檀の香氣微妙にして、三千大千世界に充滿するに、有らゆる衆生は、此の香を聞くを得、皆悉く上妙の快樂を受けたること、猶し菩薩の第四禪に入りたるが如くなりき。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、是の如き神通の事を示現し已り、即ち佛に白して言さく『世尊、是の諸菩薩摩訶薩等は、云何がして、當に斯の如きの智慧——所謂大智慧、速疾の智慧、機捷の智慧、猛利の智慧、無相の智慧、巧入の智慧、甚深の智慧、廣普の智慧、無畏の智慧、圓滿の智慧——を

云何が彼の無量の辯を得て、
云何が字句の義、深くして微なる、
云何が無上にして勝るゝを得難く、
云何が同義なるに根の性に稱ひ、
云何が未だ證せざるに梵音を具し、
迦陵頻伽の聲のごとく愛すべき、
云何が師子・大龍の音「を得」
云何が世尊は絃樂を得、
云何が彼の甜味の音を得て、
云何が功德の音は毀無く、
云何が多種の譬喩の音もて、
云何が出したまふところは善語言なり、
云何が中に宿命を獲たまふこと有る、
云何が修行して疲惓無く、
是の如き諸法は不思議なり、
世尊、我れ皆復疑ふ無し

有らゆる言論をば世に思するもの無き。
我れ今請ふ、護世者に問ひまつらんを。
眞辯に親近して遺忘無き、
若しは問ひ、若しは問はざるに斯れ相應する。
其の聲淸婉にして甚だ微妙、
大智雄の猛聲は遠く聞ゆ。
更に深重なる牛王の吼をば得る、
種種諸器の聲をば具足したまへる。
常に演說したまふに、衆欣樂する、
其の出づるや風の如く震雷のごとくなり。
能く甚深の諸言說をば宣べたまふや、
云何が諸法をば忘失したまはざる。
彼の諸神通をば、云何が修する、
遍く一切の諸善法をば知る。
自然に輪轉して十方に遍ず、
是の故に今、歸依處に問ひまつるなり」と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、慇懃鄭重に、是の如く問ひ已り、即ち神力を以て、身ら虛空に昇り、虛空の中に於て、自然に天の寶華蓋——微妙の七寶所成——を化作したり。所謂金・銀・琉璃・頗梨・馬瑙・車渠・眞珠など、是の如き等の、種種の寶飾あり。彼の寶蓋の中より、種種の華を雨らしぬ。

云何が彼の優曇華の如く、
云何が藥を施して報をば望まざる、
能く衆生の諸熱病を除き、
云何が當に如法の寶をば得て、
云何が甚深微妙の法は、
云何が此の師子音をば得、
云何が等しく益すること父母の如く、
云何がよく妙辯才を得、
云何が彼の最勝の道を說く、
云何が義に於て能く巧便なる、
云何が名・句・身を分別し
云何が正念と正行と[を得]、
云何が多聞なること大海の如く、
云何が彼の諸衆生に、
云何が諸法は無差別にして
云何が山の定んで動くこと無きが如く、
云何が一心に、餘の業無くして
云何が諸の威儀を具足し、
云何が常に大姓の家に生れ

勇健・勇猛にして不出世なる、
良醫のごとく苦を救ふ調御師は、
淨戒に安住して清涼を得しめたまふ。
無量功德もて彼岸に度るべき、
猶し蜜のごとく、[二六]甜味妙にして加ふべき無き、
能く衆生をして怖畏無からしむる。
彼の深樂の不思議なるをば得しむる。
菩提を行じて大名稱をば得る。
云何がして無礙の智をば得る。
云何が妙に諸法の相をば知る、
云何が出法及び出世[の法をば知る]。
云何が知足して思惟を具する、
云何が佛の眞實の德をば歎ずる。
生死の根本は實際の如くなると說き、
猶し大海の同一に鹹きが如くなるを說く。
不退轉の心は門閾の如くなる、
但だ無上の大菩提をば求むる。
身の相端嚴にして、見る者喜ぶ、
亦法王の大福聚をば受くる、

【二六】甜、あまし。

云何がすべき、當に諸善根の行具足して、他に讃へらるる音聲を得べきがための故には。是の如きを一切悉く皆具足せんには』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、是の如き等の諸の疑門を發し已り、重ねて此の義を宣べんがために、偈を以て問ふて曰はく、

『金色・百福の相をば具足し、　能く一法を覺して、利したまふこと邊無し、
最勝の功德に、我れ今問ひまつる、　何等の三昧をか、先づ當に思すべきを。
如來の妙智は等倫無し、　世間に寧ろ加上の者有らんや、
我れ今、尊に請ひまつる、何の定をか修して、　獲る所の功德、不思議なるやを。
天・人の大師、上調御の、　思惟したまふ是の定、何の功德かある、
菩薩、此に於て云何が修し、　而も能く一切に安樂なる。
云何が自然に多聞なること海のごとき、　[二四]云何が決定の心を守護して、
諸佛の功德處に住することをか得る。　云何が大鐵圍山の如く、
是の中に都て恚恨の心無く、　而も能く諸の外道をば降伏せしむる。
云何が無礙なること虚空の如き、　云何が復心の自在をば得る。
云何が日の如く復月の如くなる、　云何が炬に同じく、亦燈の如くなる。
云何が衆の爲に光明とは作る、　云何が復須らく三昧をば觀ずべき、
云何が諸の煩惱をば解脱する、　云何が能く生死の岸を度する、
云何が[二五]苦輪の中に發心し、　獨り三界を超えて與に同じきもの無き。
云何が波利質多樹のごとく、　大人の相好もて妙に莊嚴する。

【二四】云何が決定云云、宋譯相當文に云何獲不動、深妙之智慧と云へり。

【二五】苦輪、生死の苦果、輪轉してやまざれば苦輪といふ。

辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に[二一]所問に能く答ふる辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に無問自說の辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に不毀壞の辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に無退轉の辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に甚深の句・字を、種種に說く辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に無量無邊の[二二]譬況の辯才を得べきがための故には。

『云何がすべき、當に[二三]未だ大菩提を證せざるに、已に能く梵音聲を具足するを得しむべきがための故には。云何がすべき、當に第一微妙の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に迦陵頻伽の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に師子王の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に大龍王の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に大牛王の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に大鍾鼓の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に勝妙歌讚の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に樂位の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に哀婉清美の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に風雲・雷震の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に甚深莊嚴の辯才音聲を得べきがための故には。

『云何がすべき、當に諸の妙語言・文字・章句を、眞正に莊嚴する辯才音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に甚深にして能く大に巧說する音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に種種譬喩の辯才音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に一切世間最勝供養の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に他と共に論議する辯才音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に神通彼岸の音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に法を忘失せざる音聲を得べきがための故には。云何がすべき、當に少善法をも缺かさる音聲を得べきがための故には。

【二一】所問云云、同に問無問辯と云へぬ。此の句と次の句とを合せ擧げたるものなり。

【二二】譬況、同に譬喩となす。

【二三】未だ云云、同に未レ得レ道者、當レ令レ得レ道、及得ニ梵音一と云へり。

に善巧の說法を得、方便を具足する彼岸に至るべきがための故には。云何がすべき、當に[一六]了義を分別し、善く字句の法を知るを得べきがための故には。云何がすべき、當に正意正行にして、知是を具することを得べきがための故には。云何がすべき、當に大衆を統御して、畏るる所無きことを得べきがための故には。云何がすべき、當に如實の義を說き、實際に入ることを得べきがための故には。

『云何がすべき、當に大海の如く、一切の法、同一味なることを得べきがための故には。云何がすべき、當に大山の如く、三昧安靜にして、能く動搖するもの無きことを得べきがための故には。云何がすべき、當に[一七]門閫の如く、菩提の心動轉すべからざることを得べきがための故には。[一八]云何がすべき、當に堅固の力を、心志に具することを得べきがための故には。云何がすべき、當に威儀を具足し、虛諂を作さざることを得べきための故には。云何がすべき、當に端正の身もて、他の爲に歡喜して法を說くことを得べきがための故には。云何がすべき、當に最妙にして、最上の色相を得べきがための故には。云何がすべき、當に尊貴にして、大姓の家に生るることを得べきがための故には。云何がすべき、當に大法王の福報・功德を得べきがための故には。

『云何がすべき、當に無量の辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に不取著の辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に不錯辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に種種の名・字・句を分別すべき辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に不思議の辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に無邊の辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に解脫の辯才を得べきが爲の故には。云何がすべき、當に[一九]同義の辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に[二〇]他の意義に隨ふ辯才を得べきがための故には。云何がすべき、當に漸親近の

【一六】了義、顯了分明に、究竟の實義を說示したるをいふ。

【一七】門閫、本文に亦云二帝釋幢一と註したり。この句、宋譯相當文に道分不動、如二帝幢一と云ふ。

【一八】云何云云、同に得堅固力、身相莊嚴とあり。

【一九】同義、本文に亦云二成就一と註したり。宋譯相當文には成就勝辯とあり。

【二〇】他の云云、同に常忍辱辯と云へり。

『云何がすべき、當に[12]大炬の如く、一切の受陰滅することを得べきがための故には。云何がすべき、當に火聚の如く、一切の諸煩惱を焚燒するを得べきがための故には。云何がすべき、當に河・地・泉・源の如く、一切の衆生、意に隨つて受用することを得べきがための故には。云何がすべき、當に大船の如く、一切の衆生、彼岸に度するを得べきがための故には。云何がすべき、當に橋梁の如く、生死・煩惱の中に沒せざるを得べきがための故には。云何がすべき、當に衆敵を降伏して、魔軍と諸の憍慢とを破壞することを得べきがための故には。

『云何がすべき、當に波利質多羅樹の如く、一切諸方の有らゆる衆生、[13]七菩提の華を開き、香風普く熏ずるを得べきが爲の故には。云何がすべき、當に優曇鉢華の如く、希有にして得難きことを得べきがための故には。云何がすべき、當に藥王の如く、等しく一切衆生の病苦を療することを得べきがための故には。云何がすべき、當に大醫王の如く、大悲の心を起して、衆生を愍[14]傷することを得べきがための故には。云何がすべき、當に栴檀樹の如く、衆の熱惱を除きて清冷と作すことを得べきがため故には。云何がすべき、當に大雲雨の如く、等しく法雨を注ぎて、滿足せしむることを得べきがための故には。云何がすべき、當に蜜器の如く、能く具足して一味の法を說くことを得べきがための故に。云何がすべき、當に師子の吼の如く、能く一切の衆生に、無怖畏を與ふることを得べきがための故には。云何がすべき、當に父母の如く、等しく一切の衆生に、安樂と利益とを與ふることを得べきがための故には。

『云何がすべき、當に眞の法を見て、[15]如・法性・實際の彼岸に至ることを得べきがための故には。云何がすべき、當に深趣を解釋して、實義の彼岸に至ることを得べきがための故には。云何がすべき、當に法を巧說するの辯を得、能く分別する彼岸に至るべきがための故には。云何がすべき、當

【一二】大炬の如く云云、宋譯相當文には燒二一切陰一熾然と云へひ、本經の如く、ただ受陰のみを出ださず。

【一三】七菩提か七菩提分なり、七覺支ともいふ。

【一四】傷、麗本、痛に作るも餘本皆傷に作る。今之に依る。

【一五】如・法性・實際、共に眞如の異名。

久しく禪定に處りたまへるを見、默して言說する無きも、咸渴仰を生じつ。唯願はくは世尊、俯して斯の座に就きたまはんを』と。爾の時世尊、不空見菩薩摩訶薩の、彼の天人大衆の爲に請ひまつるを聞き已つて、端身正念にて、默然として之を許したまへり。

爾の時、不空見菩薩、旣に默許を蒙り、偏に右臂を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、復佛に白して言はく『世尊、我れ今問ひまつらんと欲す。若し聖、聽したまはば、乃ち敢て發言しまつらん』と。佛、不空見に告げたまはく『如來・應供・等正覺は、汝の所問に隨つて、當に汝の爲に說き、汝の疑ふ所を斷じ、爾の心をして喜ばしむべし。然も是の天・人・魔・梵・沙門・婆羅門等も、皆當に證知すべし』と。

時に不空見菩薩摩訶薩、佛の敎を承け已り、卽便ち白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩は、應當に何等の三昧をか思惟すべき、應當に何等の三昧にか親近すべき。應當に何等の三昧をか修行すべき。是の如き菩薩の、此の三昧を思惟し、親近し、及び修行し已つては、現に何の法をか見て安樂を得るや。

『云何がすべき、當に大海の如く多聞の受を得べきための故には。云何がすべき、當に須彌山の如く、菩提の心、安住して傾かざることを得べきがための故に。云何がすべき、當に大鐵圍山の如く、一切外道の邪論も、動かす能はざるがことを得べきがための故には。云何がすべき、當に虛空の如く、一切の法、無碍なることを得べきがための故には。云何がすべき、當に虛空の如く、心に染著無きことを得るがための故には。云何がすべき、當に日輪の如く、一切の無明の闇を破除するを得べきがための故には。云何がすべき、當に月輪の如く、白淨の法、圓滿するを得べきがための故には。云何がすべき、當に燈輪の如く、法の光明を作すことを得べきがための故には。

世尊、手もて我が頂を摩したまへる時、　是に於て諸の佛刹を見ることを得つ、』
彼に或は身を燒き、或は苦を辱を受くるなど、　種種の行類は宣ぶべからず、
各自刹に於て若行を修せること、　[一〇]晝夜有ること無くして救然の如し。
勇猛の弘誓もて衆生を度したまふも、　皆無上菩提の爲の故なり。
我れ又十方の刹を覩見するに、　諸の菩薩有つて常に辛勤し、
自ら身の內を剜つて多くの燈を然すも、　彼れ菩提の光明の爲の故なり。
我れ復又見るに、清淨の身もて、　諸佛の前に於て常に立住して
彼の世尊の、涅槃し已りたまふに至るは、　菩提の大德を求めん爲の故なり。
我れ又復見るに、法の爲に、人の、　香油を身に灌ぎて燈炬を然し、
苦身精意して十方に遍く、　終に心を財・食の類に繫けざるあり。
我れ又更に見る、諸の丈夫の、　恒に頭目及び身手、
妻子、王位と國城とを捨てて、　群生をして安樂を獲しめんと志すを。
我が所見の如きは、遺餘無く、　口言にて宣說すべからず、
我が知見する所は最勝にして等し、　佛の威靈を蒙るが故に遍く覩ぜるなり。
世尊の威神の加持の故に、　我をして斯の希有の事を見せしめたまへり、
吉祥第一の天中の天なり、　我れ今、最無上に歸依しまつる』と。

[一一]見無邊佛・廣請問品　第八

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、佛に白して言はく『世尊、今此の一切天人の大衆は、旣に世尊の、

【一〇】晝夜云云、宋譯相當文に、晝夜常勤心と云へり。

【一一】宋品、卷第三、不空見勸請品第八。

彼の當來の一切の事の如きは、
過去の諸佛をば我に已に見まつりつ
十方三世の諸の如來の、
世尊の手を以て我を摩したまへる時
並に諸佛の淸淨の刹を覩まつり、
諸佛の神通は思議し難し。
諸の餘の功德も說くべからず
如來の、手を下して我を摩したまへる時、
衆の寶金色にして恒沙の如く
諸佛は皆大名稱を具したまひ
百千の樂音、以て供養しつ、
彼の刹には復諸佛の塔有り、
高丈なること一由旬に過ぎ
復大尊の諸塔廟を見るに、
亦虛空の中に住まるも有り、
我れ復、彼の諸勝塔を見るに、
[九]彼の諸佛所名の燈然の
世尊、手を以て頂を摩したまへる時、
彼の佛には各大名稱有り、

了々明白にして、復疑ふべき無し。
未來と現在とも亦復然なり、
神通と德力とは稱說しがたし。
普く十方の救世者を見、
我れ因つて更に最上の願を發しつ。
戒と定と智慧とも亦是の如くなり、
唯願はくは今の如く常に敎示したまはんを。
卽ち十方の諸塔廟を見たるに、
種種微妙の供をば具足したり。
彼彼の相好、十方に充ち、
我れ彼の刹を見まつるに悉く是の如くなりき。
金縷は寶頗梨と間錯し、
端正の莊嚴、皆此のごとくなりき。
衆寶雜廁して甚だ精華なりき、
常に天華を以て其の上に散ぜり。
涌出すること高さ十二間に過ぎつ、
光明は遍く十方の刹を照らしつ、
我れ妙塔の說くべからざるを見つ、
其の間、皆如來の力を悉す。

【九】彼の諸佛云云の二句、宋譯相當文に「及覩三燈明佛、淨光照二諸刹一」と云へり。

日輪は圓滿にして空中に處り、
是の如く阿羅仙の種姓は、
又秋月の[五]昴宿に合しては、
是の如く滿月の大法王は、
優曇華の甚だ希有にして、
諸天中の天、調御師は、
世尊の妙手もて我が頂を摩したまふや、
毀壞すべからざるを、悉く具足したまへり、
世尊は眞言及び實語あり、
普く十方の世界中に遍じ、
世尊の手もて頂を摩したまふを蒙る時、
恒河中に沙數を說くが如く、
大牟尼尊の、手を我に加へたまふや、
猶し恒河中に沙數を算するがごとく、
[八]如來の慈手もて親しく摩したまふに、
阿閦應供兩足尊の、
我れ世尊の神手の觸れたまふを蒙りて、
一念の頃に恒沙の如き、
世尊の、手を以て我を摩したまへる時、

淸淨の光明は世界に遍し、
此の天衆に於て曜暉すなり。
威光、世に超えて衆星を挺づるが如く、
炎赫として獨り天・人の上に出でまたふ。
時に乃ち一たび遇ふも[常に]世に出でざるがごとく
時有つてか現はれ、意に從つて[六]感じたまふ。
金色百福の相の莊嚴、
其の利益を爲したまふこと斯れ是の如し。
人中の法王は正輪を轉じたまふに、
甚だ利益を爲して悉く自在なり。
我れ十方の最上人を見ること、
大威德の仙衆は、彼よりも多かりき。
[七]卽ち諸佛の彌陀の如くなるを見まつること、
人中の最勝の衆、彼よりも多かりき。
安樂世界を覺し、我れ
大悲の光明もて饒益を作したまふを見知しつ。
盡く世間より滅度したまへる尊と、
大慈もて諸根を降伏したまへる者とを見つ。
亦彌勒の昔の諸願を觀つ、

【五】昴宿、大集部第三、一四四、一五〇頁參照。

【六】意に從つて云云、佛は意に隨つて諸種の身を現じて、世に出でたまふをいふ。

【七】卽ち云云、宋譯相當文に「悉覩恒河佛・猶如阿彌陀」と云へり。

【八】如來云云の二句、原文に「如來慈手親摩覺、安樂世界我見知、阿閦……、大悲光明作饒益」とあり、宋譯相當文には「一念摩我頂、得見不動界、阿閦……、大悲所行處」といへり。

の音聲を聞き、亦彼の刹には、淸淨の莊嚴、種種に具足したるを見せしめたまへり。是の如く、乃至南西北方と、四維上下との、十方の有らゆる諸佛の淨土と、一切の境界とも、明了に現して、掌中の菴摩勒果を觀るが如くなりき。

又復世尊、手を以て、彼の不空見菩薩摩訶薩の頂を摩したまへる時、佛の神力と、及び不空見の本願の因緣とを以て、一念の間に、卽ち十方の無量無邊・阿僧祇・不可數なる、過去諸佛の、涅槃に入りたまへる者、乃至彼の刹の淸淨なる莊嚴を見せしめたまへること、了了分明にして、手掌を觀るが如くなりき。又佛力を蒙つて、亦當來の諸佛世尊と、淸淨なる刹土の、莊嚴具足したるをも見せしめたまへり。

『爾の時、不空見菩薩摩訶薩は、本願力と、佛の威神を承けたるとを以て、盡く十方三世の諸佛、及び彼の佛刹の淸淨莊嚴を見已り、重ねて此の義を宣べんが爲に、卽ち坐より起ち、正しく威儀を持し、偏袒右肩し、右膝を地に着け、合掌して佛に向ひ、偈頌を以て曰はく、

『三千世界の有らゆる水は、　若し人、量らんと欲すれば、皆知るべし
調御丈夫、天・人師の、　戒行深遠なること、孰か能く測らん。
須彌は高廣にして最も巍巍たるも、　羸老の病人は口もて吹散せん、
世尊の初めて禪定に入りたまふや、　億百千劫にも了すべきこと難し。
虛空は足もて量り、能く邊を盡し、　四方も亦、其の際まで步すべし、
世尊・大師・等正覺の、　智慧は甚深にして源底無し。
虛空は平等にして罣碍無きも、　暴風の爲に飄動せらるべし
如來の本性には煩惱無ければ、　貪・恚・癡の毒、何所にか居せん。

愧・羞恥の大師有つて、世に出で、無慚愧を除きたまはん」と言はんに、不空見、當に知るべし、即ち是れ善く如來を說くものなり。

『復次に不空見、若し復說いて、「世間の衆生、多く憍慢・貢高の事を行ぜんに、是の時必ず、和敬・調柔の大師有り、出世して、爲に憍慢を除きたまはん」と言はんに、不空見、當に知るべし、是れ即ち善く如來を說くものなり。

『復次に不空見、若し復說いて「世間の衆生、慈悲有ること無く、喜捨する能はず、瞋恚を行ずる穢濁の毒心多からんに、是の時必ず、瞋毒を斷除し、[三]四等を具足したまへる導師有つて、出世し、慈悲と大利益の事とを修することを教へたまはん」と言はんに、『不空見、當に知るべし、即ち是れ善く如來を說くものなり。

『復次に不空見、若し復說いて「世の多惡無善の衆生のごときは、其れ能く數ふる有つて、善根を生ぜしめ、先に善根有らば、其をして增廣せしめて、是の如く利益したまふ大師、出興したまはん」と言はんに、不空見、當に知るべし、則ち是れ善く如來を說くものなり。

『復次に不空見、若し復說いて「[四]五濁惡世に、衆生病增さば、世に大人有りて、能く利益を行じ、導くに出の法を以てし、衆生を安樂ならしめたまはん」と言はんに、不空見、當に知るべし、是の言は則ち我を謂ふなり。所以は何となれば、吾れ今、五濁の惡世に出で、妙法を宣揚して、邪垢を斷除し、能く多く諸の衆生を利益するが故なり』と。

爾の時世尊、手もて不空見菩薩の頂を摩したまへる時、即ち神力を以て、一念の間に、此の大衆をして、咸東方の無量無邊・不可說・阿僧祇なる、現在の一切諸佛國土を見、彼の國土の中なる、諸佛世尊の、未だ滅度したまはざる者、及び彼の衆生と一切の境界とを、皆悉く現前し、亦彼の佛の說法

【三】四等。慈・悲・喜・捨の四無量心を云ふ。平等にこの心を起すが故に、四等といふ。

【四】五濁。劫・見・煩惱・衆生・命の五種の穢濁なり、五滓ともいふ。

卷の第六[1]

作佛神通品第七[2]

爾の時世尊、袈裟の内より、金色の手を出して、彼の不空見菩薩摩訶薩の頂を摩し、復廣長の舌相を出し、卽ち不空見菩薩に告げて言はく『善い哉、善い哉、汝不空見、汝今乃ち能く、諸の衆生の爲に、是の如く、如來・應供・等正覺の、眞實功德を歎說したることや。

「不空見、若し有が說いて、「世間の衆生、救護無き時は、是の中に必ず能く救護したまふ者有り、世間に出現して、爲に救護を作さん」と言はんに、不空見、當に知るべし、卽ち是れ善く如來を說くものなり。

「復次に、不空見、若し復說いて、「世間の衆生、歸趣無き時、是の時には必ず不思議の辯才、無量の辯才有つて、世に出現し、能く衆生の與に「大歸依と作りたまはん」と言はんに、不空見、當に知るべし、卽ち是れ、善く如來を說くものなり。

「復次に不空見、若し復說いて、「世間の衆生、貪欲の行多く、瞋恚の行多く、愚癡の行多からんに、是の時必ず、欲・恚・癡無き大師有り、出世して、爲に三毒を除きたまはん」と言はんに、不空見、當に知るべし、卽ち是れ善く如來を說くものなり。

復次に不空見、若し復說いて、「世間の衆生、慳悋多き時、嫉妬多き時、是の時必ず、慳嫉を遠離し、好んで布施を行じたまふ大師有り、出興して爲に慳嫉を破したまはん」と言はんに、不空見、當に知るべし、卽ち是れ善く如來を說くものなり。

「復次に不空見、若し復說いて、「世間の衆生、慚愧・羞恥の行有ること無からんに、是の時必ず、慚

【一】宋譯、卷第三。
【二】宋譯、如來神力證正說品第七。

大醫王の如くに良藥を施し　調御して能く衆の疾苦を除きたまふ。
猶し龍王の、大雨を降らして、　能く一切の諸大地を滿すが如く、
諸佛も是の如くに慈悲を行じて、　一切業法の者を充足したまふ。
大師子王の震吼する時や、　世間の諸惡獸を降伏す、
世尊も斯の如くに決定して說き、　外道の我慢心をば破除したまふ。
大舟船は常に往返して、　一切の諸去來するものを濟度するが如く、
諸佛も是の如く遍く周旋して、　彼の常に[四四]四流に沒したる者を拔きたまふ。
優曇鉢華は世に希有なり　此の閻浮提には最も見難し、
天・人・世の尊は難中の難なり、　一切世間の歸依處たり。
波利樹の華、現ずる時や、　三十三天、甚だ愛樂するが如く、
大人の相好、世に出興したまへば、　衆生覩見して悉く歡喜す。
世尊の神變は窮盡し難し　我の如きは今、宣說を[四五]請ふなり。
我れ佛の諸功德を歎ずるところを以て　畢竟、諸の群生をを利益せんとなり』と。

大集經菩薩念佛三昧分卷第五

讃如來功德品第六

八五

【四四】四流、大集部第一、三六七頁參照。

【四五】請、麗藏謂に作るも、他の諸本請に作る、今是に從ふ。

已に神通第一の岸に度りたまふ、　智慧無礙にして亦無邊なり。
及び奢摩他・毘舎那など、　法王に斯の自在に通達したまふ。
大海の水は廣くして且つ深きも、　其れ或は毛端を以て測るべし、
調御丈夫の清淨なる戒は、　曠劫を經と雖も、知ること能はず。
須彌は固しと雖も、猶ほ動かすべく　手を以て投擲して梵宮に至らしむべきも、
諸佛初めて定・禪に住したまふ時、　已に自ら能く動亂する者無し。
虛空は其の邊を得ること有るべく、　四方も亦其の限を知るべけんも、
終に能く正覺の境を見、　此彼の處を思惟し分別するもの無し。
尊者、大地は寶に弘廣なり、　然も指を以て遍く度量すべきも、
煩惱を捨離したまへる人中の尊の、　彼の心・意・識は盡すべからず。
日輪の光、衆の闇を破しては、　諸の善惡を現じ、若くは色を見るが如く、
是の如く自在の世間師は、　能く巨黑なる無明の雲をば破したまふ。
猶し秋月の、重雲を出づるに、　衆生の見る者、皆歡喜するが如く、
法王の智光は滿月の如く、　妙色を視るが如くにして、樂まざる無し。
冥寂なる長夜の、明燈の如く、　恒に法の光を以て衆生を照したまふ。
世間の智者は能く暗を除き、　諸の眼目と爲つて、先導を作したまふ、
能く法炬を設けたまふ自在尊、　天人大師は他の爲に作したまひ、
一切諸有をば皆滅盡したまふ、　是の故に佛をば光明王と稱しまつる。
聖智は河及び泉水の如く、　能く生・老・病・死の塵を盪したまひ、

足・無足、二足・四足乃至身足——と、有色・無色・有想・無想、非有想・非無想など、此の如きの世界、及び十方無量無邊の諸世界中の、有らゆる衆生など、設使盡く皆一時に成佛せんに、彼の諸の世尊、無量劫を經るあひだ、皆還佛の一毛の功德を歎ぜんも、終に亦盡さざらん。尊者阿難、當に知るべし一切の諸佛世尊は、乃ち是の如き不可思議の具足功德有るなり』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、重ねて此の義を明さんが爲に、偈頌を以て曰はく、

『尊者當に觀ずべし、法王の來りたまへるを、一切の世間は應に供養しまつるべし、

功德・威光は殊に顯赫たり　一切の智滿ちたまひて、傾くべきこと難し。
最上の妙言もて、佛は眞に說きたまふ、　實語と及び如と無異との言もて、
善く聖法を說き、眞實に知りたまふ、　身・口は過を離れ、意も亦爾なり。
心に異念無く、分別を絕し、　戒行最勝にして、三昧深し、
智慧・解脫悉く倫を超え、　解脫知見も比すべき無し。
威儀具足したまふこと不思議なり　無上の神通あり、如實の智あつて、
世間を利益したまふこと量有ること無く、　辯才・妙行と亦類無し。
天より降つて、象・牛王と生れ、　入胎成就したまへること世中に勝れ、
住胎殊異にして、等しきもの有ること無く、　家に生れては母の尊高なるを具足したまふ。
衆の根を成就したまふこと最第一たり、　勝相圓滿なること不思議なり、
妙好威備はつて莊嚴を極め　一切分明にして世の瞻仰するところ、
眞心を具足したまひて信淸淨たり、　禪定もて垢を除きたまひて大威有り。
世の欲を放捨して出家を樂み、　菩提成就して五種を得たまふ

『尊者阿難、若し人說いて、彼の無歸の衆生、無依の衆生、無救の衆生、無護の衆生、無憐愍の衆生には、如來出世したまひて、歸と爲り、依と爲り、救と爲り、護と爲り、憐愍者と爲りたまふと言はんに、是を則ち名けて、善く如來をば說きまつると爲す。

『尊者阿難、假使我れ今、若しは一劫、若しは減の一劫のあひだ、長時に諸佛世尊辯才の功德を歌讃するも、終に一をも得べからず。又復無量の劫數を經て、具足して如來・應供・等正覺の、辯才の功德を演說するも、終に亦其の少分の邊をも得ざらん。

『尊者阿難、譬へば人有り、老病にて羸瘠したるが、大衆の中に至り、是の如き言を發さんが如し「諸人當に知るべし、我れ年邁ぎ、病の爲に摧かると雖も、猶ほ能く一毛端の勺を以て、大海を渧取し、即ち乾枯せしむべし」と。是の人、素より神通・呪術無きに、而も能く是の如く、果して壯言を決せんや。尊者、意に於て云何。彼の人の言義、取信すべきや不や』と。阿難答へて曰はく『不とよ、大士』と。

不空見復言はく『尊者、彼の人の言をば、一切世間の諸天及び人、頗し曾て驚歎して「此の事希有なり、是の如きの困人、[四三]能く毛端を以て大海の水を盡さんとす」と、斯の如く念ずるありや不や。阿難答へて曰はく『不、大士』と。

『是の如く、尊者、此の事は本より依無し、何ぞ取信すべけん。我れ今諸佛世尊の辯才功德を讃說するも、少邊をも得ざらん。其の事此のごとし。尊者阿難、且く斯の事を置け、假令佛今還、自ら毛分の功德を讃說したまふに、億百千那由他劫を過ぐるも、亦盡したまふ能はざらん。況んや餘人をや。

『尊者阿難、且く斯の事を置け、我れ今更に說かん、假使大地所生の一切の衆生――若干種類の有

【四三】能く云云、原文に頗曾……能以毛端盡大海水、如斯念不とあり。

者阿難、諸佛世尊は、那羅延の如し、能く一切世間の大力を伏したまふが故なり。

尊者阿難、諸佛世尊は、優曇華の如し、一切世間に、見るを得ること難きが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、〔四一〕波利質多樹の如し、三十二大人の相、愛樂すべきが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、父母の如し、能く一切衆生に、安樂と利益とを與へたまふが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、利益を作し、安樂を作したまへばこそ、能く今、一切の衆生は、住することを得るが故なり。

『尊者阿難、若し人說いて、如來出世したまへば、無量の辯才有りと言はんに、是の如く說かば、是を則ち名けて、善く如來を說くとは爲すなり。如來出世したまへば、不思議の辯才有り」と言はば」、是を善說とは名く。

『尊者阿難、乃至是の如く略說せん。如來出世したまへば、無邊の辯才有り、如來出世したまへば、無礙の辯才有り、如來出世したまへば、無取著の辯才有り、如來出世したまへば、勝解脫の辯才有り、如來出世したまへば、義に隨順するの辯才、義に相應するの辯才、微妙にして淨なる辯才、巧問の辯才、不問の辯才、上辯才、無上の辯才、慈辯才、大慈の辯才、悲辯才、大悲の辯才、喜の辯才、大喜の辯才、捨の辯才、大捨の辯才有り。佛出世したまへば、利益の辯才あり。尊者阿難、若し人說いて、如來出世したまへば、具足して一切衆生を利益したまふと言はんに、是を則ち名けけて、善く如來を說くとは爲すなり。

『尊者阿難、〔四二〕若し人、正言・同義の辯才もて、衆生を利益せんに、是れ則ち如來、世間に出でたまふなり。又說いて、若しは彼の利益の辯才は、一切の衆生、利益を得んが爲の故なりと言はば、當に正言音を、悉く具足せしむべし。是れ則ち如來世間に出でたまふなり。斯の人を亦、善く如來を說くとは言ふなり。

【四一】波利質多樹云々、宋譯に其の花敷榮、馨香殊特、佛大人相、明發亦然とあり。

【四二】若し人、以下の一段、宋譯に相當文を闕く。

なる不思議威儀の彼岸に到りたまへるが故に、已に第一なる慚愧の彼岸に到りたまへるが故に、已に第一なる、一切法に於て自在なる彼岸に到りたまへるが故に、

『已に第一なる、過去智の知見の無礙なる彼岸に到りたまへるが故に、已に第一なる未來智の知見の無礙なる彼岸に到りたまへるが故に、已に第一なる、現在智の知見無礙なる彼岸に到りたまへるが故に、已に第一の、身業は智慧に從つて行ずるの彼岸に到りたまへるが故に、已に第一の、口業は智慧に隨つて行ずる彼岸に到りたまへるが故に、已に第一の、意業は智慧に隨つて行ずる彼岸に到りたまへるが故に。阿難、如來・應・等正覺は、一念の中に於て、能く具足して、一切衆生の心・心所の行の、若しは善、若しは惡、若しは淨、若しは垢等をば知りたまふなり』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、復尊者阿難に告げて言はく『尊者阿難、諸佛世尊は大海の如し、淨戒の聚に、底るを得べからざるが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、須彌山の如し、三昧の聚は、動搖すべからざるが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、虛空の如し、智慧の聚は、邊有ること無きが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、虛空の如し、一切の衆生を攝して、障礙無きが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、日輪の如し、諸の世間の爲に、法の光明を作したまふ故なり。

『尊者阿難、諸佛世尊は、大火聚の如し、一切衆生の諸煩惱の薪を焚燒したまふ故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、河の如く、波の如く、池の如く、泉の如し、衆生の生・老・病・死の垢を洗盪[三九]したまふ故なり。尊者阿難、諸佛世尊は良醫の如し、能く一切衆生の、諸の疫病の苦を癒したまふが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、大雲雨の如し、能く法の水を以て、衆生の枯槁[四〇]するを潤澤したまふが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、師子王の如し、能く一切衆生の大我慢を破したまふが故なり。尊者阿難、諸佛世尊は、大船の如し、能く衆生をば、生死の河を度らしめたまふが故なり。尊

【三九】盪、あらふなり。

【四〇】槁、かれるなり。

を具足したまふが故に、最上第一の威儀を具足したまふが故に、最上第一の神通を具足したまふが故に、最上第一の利益を具足したまふが故に、最上第一不思議の辯才を具足したまふが故に、最上第一の成就を具足したまふが故に、最上第一の微妙を具足したまふが故に。

『最上第一の[三六]天退を具足したまふが故に、最上第一の入胎を具足したまふが故に、最上第一の住胎を具足したまふが故に、最上第一の生家を具足したまふが故に、最上第一なる圓滿功德を具足したまふが故に、最上第一なる不思議の諸好を具足したまふが故に、最上第一なる過去の業を具足したまふ故がに、最上第一の善根を具足したまふが故に、最上第一なる具足の發心を具足したまふが故に、信心を具足したまふが故に、煩惱を破することを具足したまふが故に、大に煩惱を破することを具足したまふが故に、捨家を具足したまふが故に。

[三七]『五種を知ることを具足したまふが故に、所謂第一の戒身を具足したまふが故に、第一の定身を具足したまふが故に、第一の慧身を具足したまふが故に、第一の解脫身を具足したまふが故に。第一の解脫知見身を具足したまふが故に。

『已に第一の神通の彼岸に到りたまへるが故に、已に第一の、無餘智もて證する彼岸に到りたまへるが故に、已に第一の法を分別法する彼岸に到りたまへるが故に、已に第一の、義を分別する彼岸に到りたまへるが故に、已に第一の、辯才を分別する彼岸に到りたまへるが故に、已に第一の、寂靜なる定の彼岸に到りたまへるが故に、已に第一なる明達の彼岸に到りたまへるが故に、

『已に第一なる[三八]根・力・覺・道の彼岸に到りたまへるが故に、已に第一なる慈及び大慈の彼岸に到りたまへるが故に、已に第一なる悲及び大悲の彼岸に到りたまへるが故に、已に第一なる喜及び大喜の彼岸に到りだまへるが故に、已に第一なる捨及び大捨の彼岸に到りたまへるが故に、已に第一

【三六】天退、降神母胎を意味するなり。宋譯相當文には善知生死、無能過者と云へり。

【三七】五種云云、宋譯曰ふ、五分法身、清淨具足と。

【三八】根等、五根・五力・七覺支・八正道をいふ。

は、喪失して現ぜざりき。復是の如き無量無邊、不可思議・阿僧祇・恒河沙數の、諸梵天宮の有らゆる威光も、悉く皆晻晦なりき。乃至色界の一切天宮も、佛光を蒙るが故に、亦皆現ぜざりき。諸の光沒し已るに、唯佛世尊の神光のみ、唯獨り盛なりき。

爾の時世尊、大慈熏心もて、諸の衆生を饒益せんと欲したまへるが爲の故に、[三四]禪定より起ち、安詳として徐々歩し、彼の大衆のところに詣り、周旋して、是の不空見菩薩摩訶薩等を、觀察し已りたまふ。

是に於て一切世間の諸天及び人、若しは梵、若しは魔・沙門・婆羅門、諸龍・夜叉・阿修羅の輩、佛の光明に遇ひ、咸各自ら彼の蓮華座より起ち、前んで佛所に詣り、躬を曲げて合掌し、世尊を禮敬して、各還退き坐しぬ。

爾の時、不空見菩薩、摩訶薩、遙に世尊の、身相分明にして、端嚴殊特、諸根寂靜にして、調象王の如く、心意朗然として、澄淨なる水のごとく、一切の種具足し、一切の智圓滿し、彼より來つて、深く喜を生じたまへるを見已る。

是に於て不空見菩薩、卽ち尊者阿難に告げて言はく『阿難、汝は世尊の、禪定より起ちたまへるを觀たるや。如來世尊は、靜室より來りたまふ。必ず當に[三五]第一誠諦の、終に虛妄無きを開演したまふべし。如來世尊は、是れ妙語者なり、是れ眞語者なり、是れ實語者なり、是れ如語者なり、是れ不異語者なり、是れ善語者なり。心善く思惟し、常に善事を行じたまひ、身業に失無く、口業に失無く、異業に失無く、一切の功德をば、斯れ皆具足したまふ。

『所謂最上第一の戒聚を具足したまふが故に、最上第一の定聚を具足したまふが故に、最上第一の實慧の聚を具足したまふが故に、最上第一の解脫聚を具足したまふが故に、最上第一の解脫知見聚

【三四】禪定、宋譯には卽從ㇾ臥起と云へり。前註參照、

【三五】第一誠諦、宋譯には、最勝の第一義諦となす。

多くの衆生罵るも瞋惱せず　果報を求めたまはざること、智の稱する所たり。
內に過失無く、外に毀無し　假ひ彼の天・人及び梵魔、
或は復沙門・婆羅門など、　能く譏訶するもの無くして常に清淨なり。
虛空は猶ほ其の界を盡すべく、　諸方も亦其の邊をば極むべきも、
無上の調御・天人師の、　清淨なる戒行は孰ぞ能く測らん。
大海は口を以て飲み乾すべく、　無邊の水聚も亦復爾らんも、
諸佛の光明は識るべからず。　清淨の戒行には誰か邊くを得ん。
須彌は口を以て吹散す可く　大小の鐵圍も亦復然らんも、
諸佛の妙行は知るべからず。　清淨の戒行には底ることを得難し』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、是の思惟を作しぬ『今や如來・應供・等正覺の、若し威神を降して、斯の會に俯臨せしめたまはんには、善哉と謂ふべし。斯の今我れ亦當に、諸の菩薩摩訶薩の爲の故に、世尊に一切菩薩の念佛三昧微妙の法門をば請問しまつらん。如來は先に已に、[三二]其の名をば顯示したまへり。今や應當に諸の弟子の爲に、斯の法をば演說し、義理を宣明したまふべし。世尊は寧ろ當に、安き禪寂に過したまふべきや』と。

爾の時世尊、彼の不空見菩薩、是の如くに念ぜるを知り已り、佛の神力の故に、時に應じて、此の念の三千大千世界の大地をば、六種に震動せしめたまへり。所謂[三三]動と涌と起と震と吼と覺等なり。是の如くして、十八相の、動乃至湧・沒を具足したまふに、是の如く動じ已りぬ。

時に佛世尊、復神力を以て、大光明を放ち、此の三千大千世界を照したまへり。彼の光出づる時、能く一切の星宿の天宮――月天子の宮・日天子の宮――乃至欲界諸天の宮殿などの、有らゆる光明

【三二】其の名云云、宋譯には、雖レ說二其名一、竟不二敷演一、便入二靜室一、右脅而以とあり。

【三三】動等、本經卷第一、註三七以下參照。

世尊の具足したまへること、此のごとくなるを』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、重ねて此の義を明さんが爲に偈頌を以て曰はく

『世尊は天より降り・胎に入りたまふ時も、　住したまふも不思議なり、亦でたまふこと亦爾り、
生家は最勝にして、母は比無く、　最上第一の諸功德[を具したまふ]。
體には衆の相三十二を備へ　諸の好をも具足して、身を莊嚴したまふ
諸佛の作したまふこと不思議なり　皆曠劫より久しく修集したまふところに緣る。
人中の勝上にして出家を求め　禪定と大三昧とを成就したまひ
正心・淳信斯れ堅固にして、　一切の方便をば知りたまはざる無し。
戒行・三昧をば皆具足し、　皆慧成滿したまひて、倫比無し
解脫知見をも亦已に獲たまひ、　神通・威德は彼岸の邊にあり。
能く熾なる苦を滅して衆生を救ひ、　慈・悲の要行をば最も首と爲したまふ、
喜・捨も亦妙等にして平等なること、　諸佛世尊は自ら證知したまふ。
身・口は常に意の行と合し、　所行は智に隨つて思量し難く、
威儀比無くして世間に超ゆ、　法王の神力は彼岸に到りたまふ。
無諍の三昧もて、法の如なるを見、　是處と非處と皆明了なり、
禪定と解脫とは測度し難く　普く能く諸の衆生を饒益したまふ。
定・慧と止・觀とを斯れ成就し、　光明もて普く滅垢の心を覺したまふ。
貪恚と衆の過愆と有ること無く、　解脫と無畏とを皆善く學したまへり。
戒行に破無く亦羸も無く、　濁無く、雜無くして盡く清淨なり、

【三】曠劫、極めて過去に於ける、極めて長時期をいふ。

處・非處の力第一の彼岸に至りたまふが故に、諸の開道もて利益すること第一の彼岸に至りたまふが故に、奢摩他・毘婆舍那第一の彼岸に至りたまふが故に。一切の禪定・解脱・三摩跋提第一の彼岸に至りたまふが故に。

『無貪・無瞋・無癡・無慢・無放逸・無嫉妬・無恚に至り、諸過を捨離して、[二八]五道より解脱し、[二九]四無畏第一の彼岸に至りたまふが故に、一切の衆生をして諸の善根を種え、業の果報を受けしめ、教論發起第一の彼岸に[至りたまふが]故に、一切の衆生をして、諸戒行の聚に、不破・不缺・不濁・不雜ならしめ、丈夫の志を成して、觸犯する所無からしめ、智者の所讃に過愆有ること無からしめ、一切世間の、若しは天、若しは人、若しは梵、若しは魔・沙門・婆羅門など、[三〇]乃至能く、如法に訶責する無く、[訶責すれば]非理の毀をなす者たらしめたまふ。

『阿難、諸佛世尊は、功德殊勝なり、一切世間の衆生の類中、乃至能く測量して、如來の戒等の功德を宣說し、其の少分を知るを得るもの有ること無し。何處にか復人の、能く過ぐる者有らん。阿難、汝等今より當に、斯の如く觀ずべし「此の虛空界は、是の如く廣大なり、此の四方の界は、是の如く弘寬なるも、我れ皆、限量・邊際を了知すれども、諸佛の功德は、測量すべからず」と。

『是の如く、阿難、諸佛世尊所有の戒聚、所有の定聚、所有の慧聚、及び解脱聚、解脱知見聚、乃至切の威儀・神通・利益は無礙にして、宣說すべからず、顯示すべからず、知るを得べからず、入るを得べからず。

『所以は何とならば、阿難、諸佛世尊所有の功德は、皆邊有のこと無ん。何を以ての故にとならば、諸佛世尊は無量の戒行有り、無量の定行有り、無量の慧行有り、無量の解脱行有り。無量の解脱知見有り、乃至無量の諸功德有つて、悉く等しければなり。是の故に阿難、當に知るべし、諸佛

【二八】五道云云の句、宋譯に度脱五道四毘舍羅と云へり。
【二九】四無畏、大集部、第一、一二六頁參照。
【三〇】乃至云云、宋譯には、一切世間之大法主に作る。

直に不空見菩薩の所に詣りぬ。復二億那由他百千の女人有り、皆阿耨多羅三藐三菩提に於て、諸の善根を種えたり。

讃如來功德品第六[二四]

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、復尊者阿難に告げて言はく『阿難、諸佛世尊は甚だ希有なりと爲す。諸の如來は、功德を具足したまへるが故に、[二五]天より降下すること具足したまふが故に、胎に入ること具足したまふが故に、胎に住すること具足したまふ故に、胎より出づること具足したまふが故に、母より生るること具足したまふが故に、善根をば具足したまふが故に、衆の相をば具足したまふが故に、衆の好をば具足したまふが故に、[二六]莊嚴をば具足したまふが故に、出家すること具足したまふが故に、定に入ること具足したまふが故に、大入定を具足したまふが故に、深心を具足したまふが故に、至心を具足したまふが故に。眞の信を具足したまふが故に、無畏を具足したまふが故に。

[二七]『戒身を具足したまふが故に、定身を具足したまふが故に、慧身を具足したまふが故に、解脫身を具足したまふが故に、解脫知見身を具足したまふが故に、諸通を具足したまふが故に、證智を具足したまふが故に、一切證知第一の彼岸に至りたまふが故に、慈と大慈との第一の彼岸に至りたまふが故に、悲と大悲との第一の彼岸に至りたまふが故に、喜と大喜との第一の彼岸に至りたまふが故に、捨と大捨との第一彼岸に至りたまふが故に。

『最勝無等の第一の彼岸に至りたまふが故に、諸の威儀第一の彼岸に至りたまふが故に、諸の神通第一の彼岸に至りたまふが故に、一切の諸法、無礙なること第一の彼岸に至りたまふが故に、是

【二四】品名、宋譯全く同じ。

【二五】天より……善根をば具足云云の句まで、同には具足深知生死往來、憶念識生處親戚眷屬、善知煩惱諸惡過患とす。

【二六】莊嚴以下八句、同相當文に具足行捨大捨意念とす。

【二七】戒身等、戒・定・慧・解脫・解脫知見との五を以て、佛身を成ずるが故に、之の五をば、五分法身といひ、その一一にも身の字を加ふ。

尊者、設ひ我れ一劫を滿し、
[一四]生生に其の邊をも得る能はず、
假使十方の諸衆生、
終に亦能く少分を致す莫し、
假彼の行住の諸衆生、
[一五]彼の諸佛の說亦盡し難し、
世尊は是の如き衆の妙音もて、
[一六]若し人但だ能く喜心を生ずれば、
佛音は是の如く思議し難く、
若し菩薩有つて[一七]斯の喜を得なば、

或は復百劫のあひだ其の聲を歎ずるとも、
佛の不思議の聲も是の山とし。
各各恣に口に長く歌歎するも、
佛音は是の如く思議し難し。
或は一時に皆成佛するも、
佛の聲は是の如く思議し難し。
莊嚴具足したまいて倫匹無し、
彼等は終に惡道の畏無けん。
第一微妙にして比すべき無し、
久しからずして則ち佛法王を成ぜん」と。

爾の時、[一八]四天王、天主帝釋、[一九]須夜摩天王、[二〇]兜率陀天王、[二一]化樂天王、[二二]他化自在天王、[二三]魔王の息導師太子、娑婆世界の主大梵天王、乃至淨居天王、及び餘の一切の大威德ある諸天等、不空見菩薩摩訶薩の、世尊音聲の功德を稱讚するを聞き已り、一切皆、不空見の所に於て、尊重の心を起し、歡喜踊躍して、自ら持する能はず、咸天の妙栴檀の末香、天華及び鬘、天の妙衣服、寶蓋幢幡、雜色の彫綵を以て、施散して不空見菩薩摩訶薩の上に懸置したり。

時に會衆の中に、六萬億那由他百千の、欲・色界の天有り、如來音聲の功德を說けるを聞き、當に得べきが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を發して、諸の善根を種ゑたり。復五千の比丘有り、精進の鎧を被、阿耨多羅三藐三菩提に於て、諸の善根を種ゑたり。復七百千萬の諸比丘尼有り、阿耨多羅三藐三菩提の心、及び弘誓の願を發しぬ。復百千の優婆塞有り、皆各彼の寶蓮華の座より起ち、

【一四】生生云云、宋譯に、不レ測二其始終一とあり。
【一五】彼の云云、同に不レ測二聲涯底一とあり。
【一六】若し云云、同に若能隨順念とあり。
【一七】斯の喜云云、同に聞二佛具足音一とあり。
【一八】四天王、大集部、第一、一〇五頁參照。
【一九】須夜摩、Suyāma 欲界六天の第三の天の名、妙善、妙時分と譯す。宋譯に焰摩天子とす。
【二〇】兜率天 Tuṣitā 欲界の第四天、上足、妙足など譯す。
【二一】化樂天王、Nirmāṇa-ratāya 欲界第五天、宋譯に自在王とす。
【二二】他化自在天、Paranirmitava Śavatina 欲界の第六天。
【二三】魔王の息、同に其子名曰二商主一に作る。

若しは十・二十より五十に至り、　百千・億數の、復前に過ぎたらんに滿たさんと欲し、
若しは復彼の恒沙の土を過ぎしめんとしたまふに、　皆能く一切の刹に充滿せしめ、
彼の衆生をして異心無く、　咸是の念を作さしめたまふ「但だ我が爲なり」と。
譬へば日輪の出現する時、　能く閻浮の爲に明導を作すが如く、
是の如く世尊・天人師の、　法聲の光明は世間を照らす。
猶し秋月の衆星のあひだに處るに、　其の輪圓滿にして明淨を異にするが如く、
彼も閻浮の爲に大利を興し、　衆生覩見して皆歡喜す。
世尊には是の滿月の如き聲あり、　不思議にして世間を淨くして勝れしむ、
其れ聞く有る者は心に厭くこと無く、　諸の衆生の爲に饒益を作したまふ。
猶し大海の水湛然として、　深廣無邊にして底にいたり難く、
其の間常に衆の異寶を出し、　諸の世間の爲に利益を作すが如く、
[二二]是の如く諸佛に大名稱あり、　其の聲深遠にして亦窮め難し、
恒に教證したまふ彼の清淨音は、　不可壞の一切の樂をば與へたまふ。
此の三千の諸大地の、　能く異類の諸衆生を持するがごとく、
是の如く諸佛の普載の聲は　一切の衆生を生成して饒益す。
譬へば虚空の能く究受し、　飛鳥・群生など皆益を得るが如く、
是の如く[二三]足尊の廣納の音は、　恒に勝れたる善を以て衆生を利す。
猶し忉利の質多雜の、　華ひらく時已に彼の諸天を樂しましむるが如く、
是の如く諸佛の甘露音は、　能く衆生に畢竟の利を爲す。

【二二】是の如く云云の三句に宋譯相當文に大勝佛如是、最上無過者、有教無教等、音聲甚難解とあり。

【二三】足尊、二足中の尊の略。

衆生をして、多く作す所有らしめ、受用去來に、利益せざる無きが如く、其の義亦爾り。

『復次に、阿難、譬へば三十三天の、波利質多羅樹の如く、其の華敷く時は、能く三十三天をして、皆歡喜を生じ、多く適樂を受けしむる如く、是の如く、阿難、諸の如來・應供・等正覺の、聲輪を開發したまふや、能く一切の爲に、甘露の門を啓き、諸の衆生等をして、常樂を證せしむること、其の義も亦爾り』と。

爾の時、不容見菩薩摩訶薩、重ねて此の義を明さんが爲に、偈頌を以て曰はく

『世尊の眞善の大梵音は、　師子の妙音・牛王の吼なり、
最上の龍吼にして世界に滿ち、　器度雄朗にして丈夫の聲なり。
雲・雷・風等の弘壯の聲なり、　彼の不思議なること、悉く無量なり、
轉ずれば十方無邊の界に行き、　至る所無礙にして皆悉く聞く。
如來の出聲は甚だ圓備なり、　世間に未だ能く其の聲を障ふるもの無く、
亦迦陵頻伽の音の如く、　聞く所淸婉にして甚だ微妙なり。
〔一〇〕聖にして報を望まず、物に喜を生ぜしめ、　教へて此を證せしむる最勝の聲なり、
〔一一〕解脫の深句は比有ること無く、　世間に能く毀壞するもの有ること無し。
不破・不缺・微妙の聲、　相續して斷ぜず、和合して出で、
世間を救護して窮已無く、　一切功德を具足するの音なり。
丈夫を調伏すること意の如くなる聲なり、　其の聲遍く三界に聞ゆるに、
彼の諸の衆生は斯の念もて喜び、　各「我が爲に妙聲を宣べたまふ」と言ふ。
若し聲をば一の世界、　若しは二・三・四・及び五、

【八】 波利質多羅 Pariciitra 忉利天上の樹の名、香遍樹と譯し、又天樹王と稱す。

【九】 婉、溫和なること。

【一〇】 聖云云、この二句、宋譯に聖喜無濁聲、教與無教聲とす。

【一一】 解脫云云、同に、甚深無爲聲とす。

ふ」と。阿難、諸佛世尊には、是の如き等の不思議の聲有り。阿難、諸佛世尊には、是の如き聲、是の如き利益有るなり。

『尊者阿難、譬へば日輪の、閻浮提の諸衆生輩の、眼目有る者の爲に、大利益を爲すが如くなり。云何が利益するとならば、所謂光明もて、一切を照了するなり。是の如く、阿難、諸の如來・應供・等正覺の、清淨の聲輪、凡そ所至の處には、能く一切の信根ある衆生の爲に、宜しきに隨つて宣說し、大利益を作したまふこと、其の義も亦爾り。復次に阿難、譬へば秋月の如く、十五日の夜、彼の月の光輪は、清淨圓滿にして、閻浮提の人、見る者歡喜す。是の如く、阿難、諸の如來・應供・等正覺の、圓滿なる聲輪は、能く一切の法音の光明と爲り、聞く者、歡喜して大利益を得ること、其の義も亦爾り。

『復次に、阿難、譬へば大海の水、平等一味にして常住堪然、入り難く度り難く、其の間に多く諸の異珍の寶有り、而も能く彼の一切衆生の若しは人・非人の爲に大饒益を作すが如く、是の如く、阿難、諸の如來・應供・等正覺の圓音、平等一味、堪然として、入り難く測り難く、微妙にして能く、一切の衆生を安樂ならしむること、其の義亦爾り。

『復次に、阿難、譬へば大地の、一切の山林・河海・王都・大城・人民・聚落を任持し、復能く諸の種苗・稼・根・莖・華・果を生長し、一切の衆生を安樂にし、饒益するが如く、是の如く、阿難、諸の如來・應供・等正覺の、普載の聲輪は、一切を任持して、壞損すること無からしめ、復能く衆生の善根・功德の華果を生長して、世間を饒益すること、其の義亦爾り。

『復次に、阿難、譬へば虛空の、一切を容受し、能く衆生をして、種種興作し、往來・遊處に、大利益を爲すが如く、是の如く、阿難、諸の如來・應供・等正覺の廣大なる聲輪は、一切に遍滿し、多く

【六】清淨の聲輪、宋譯には音聲の法輪に作る。

【七】普載佛の清淨法輪をば、大地が總てのものを普く載するに譬へて云へるなり。

卷[一]の第五

[二]歎佛妙音勝辯品之餘

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、復尊者阿難に告げて言はく『阿難、諸佛世尊には、是れ大梵聲あり、是れ大師子聲あり、是れ大雄朗聲あり、是れ大龍王聲あり、是れ大[三]妙鼓聲あり、是れ大妙歌聲あり、是れ妙好聲あり、是れ[四]大風聲あり、是れ大雲聲あり、是れ大雷聲等あり。阿難、諸佛世尊には、是れ大善聲あり、不思議聲あり、是れ無量聲あり、是れ無邊聲あり、是れ不可稱聲あり、是れ滿足聲あり、是れ無礙聲あり、是れ迦陵頻伽聲あり。

『阿難、諸佛如來には、是れ圓滿聲あり、諸の如來には、是れ可證聲あり、諸の如來には、是れ可知聲あり、諸の如來には、是れ深音智聲あり、諸の如來には是れ不可壞淸聲あり、諸の如來には、是れ無垢聲あり、諸の如來には、是れ無譏訶聲あり、諸の如來には、是れ無[五]斷破聲あり、諸の如來には是れ妙好聲あり、諸の如來には、是れ最上妙好聲あり、諸の如來には、是れ無缺聲あり、諸の如來には、是れ不怯弱聲あり、諸の如來には、是れ具足一切功德聲あり。

『阿難、諸佛・如來・應供・正等覺の、音聲を出だしたまふ時、若し一音もて、一佛世界に遍滿せしめんと欲したまへば、卽ち能く遍滿し、若し能く二佛世界、若しは三、若しは四、若しは五、若しは十、乃至百千の世界、乃至は億・那由他、乃至無量無邊・阿僧祇・不可數知の世界に遍滿せしめんと欲したまへば、如來世尊は還、是の如き無量無邊、阿僧祇・不可數・不可知なる、殊異の聲音を出したまひて、皆悉く彼の諸世界に充滿し、彼の衆生——諸の如來の聲を聞くを得ること有る者——をして、咸是の念を作さしめたまふ「今や世尊は、獨り我が爲に、斯の如きの法輪をば轉じたま

【一】宋譯、卷第三つゞき。
【二】同に品を分たず。
【三】妙鼓聲、宋譯には弦聲に作る。
【四】大風聲等、同に大風、大雲、大善の三を缺く。以下宋譯と比するに出沒あり。
【五】斷、しはがれる。

廣く諸の善根を集め、
響無く復礙無きこと、
解脫の義に和合したまへり。
善く說きて疑網を斷ち、
種種深密の教、
具足莊嚴して辯じたまふ、
清淨に咸相應し、
不思にして能く壞すること無く、
妙音は智と俱にして、
無錯の莊嚴句は、
諸方に惑はず、
過去と當來、
凡聖平等に轉じ、
近遠同時に聞き、
海水は量を知る可く、
諸佛大名稱の、
虛空は邊を盡す可く、
無上天人師の、

彼の難思の辯を得たまへり、」
無量にして亦無邊なり。
尊勝の無上人は、
問に隨つて皆能く釋したまふ。
及以び諸譬喩をば、
妙音は量る可きこと難し。
（法を云々？）
決了して法に安住したまふ、
亦懼畏の心無し。
驚かず毀損せず、
安樂にして忘失無し。
無滓にして心淨を致す、
現在も罣礙無し。
辯才他の生に非ず、
佛音說時に出づ。
毛滴は數を知る可きも、
辯才は邊を得難し。
須彌は稱量し易し、
辯才は深くして測り難し』と。

大集經菩薩念佛三昧分卷第四

彼等既に清淨の音を聞くや、　其れ誰か菩提道に趣かざらん』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、復尊者阿難に告げて言はく『阿難、諸佛世尊は、殊特希有なり、如來・應供・等正覺には、能く是の如き熾然の善根有り。所以は何となれば、諸佛世尊は、久遠より來、乃し能く、無量無邊・過恒沙數の、諸如來等を供養し、又復常に、施・忍・精進の諸事を行じたまひ、謂ゆる身命・頭目・髓腦を捐捨し、作し難きに、能く種種の苦行を作し、身心を調伏し、然る後、方に阿耨多羅三藐三菩提を證したまひ、菩提を證り已つて、則ち能く、無量の辯才を具足し、他の爲めに說法したまふなり。

『云何が辯才なるとならば、謂はく、[三〇]不思議辯才、無上辯才、無勝辯才、無取著辯才、妙解脫辯才、無障礙辯才、善和合辯才、相應辯才、熾盛辯才、無有問辯才、豫知辯才、作相辯才、無作相辯才、靜默然辯才、不怯弱辯才、除恚辯才、種種文字莊嚴辯才、種種詞句莊嚴辯才、義句莊嚴辯才、甚深句莊嚴辯才、顯現深義辯才、於深示淺易知辯才、無邊譬喩辯才、捷疾辯才、善決疑辯才、成就無際辯才、能問辯才、略問廣答辯才、利益辯才、無毀辯才、善思量辯才、無[三一]謇塞辯才、無恥辱辯才、具足成就離謗辯才、具足成就智人所讚辯才、具足無畏心辯才、具足不狹劣辯才、具足不錯文句辯才、具足不忘辯才、具足無失辯才、具足隨心說法辯才、具足知他至心爲說辯才、具足開發無穢濁辯才、具足莊嚴音句能說辯才、具足能說過去辯才、具足能說未來辯才、具足能說現在辯才、具足聖者辯才、具足知無生妙知辯才、具足能令一切衆生歡喜辯才などなり』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、重ねて此の義を宣べ、而して偈を說いて曰はく、

『最勝尊を供養しまつること、　無數無邊量なり、
能く無上道を證したまへり、　世間の大道師は。

【三〇】以下の諸辯、前後は、宋譯と略一致するも中間の約三分の一は出入有つて對照し難し。

【三一】謇、なやみ。

と。尊者、乃至諸の衆生有つて[二九]種種の法を樂はゞ、如來は則ち爲めに、種種の法を說きたまひ、

彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、種種の法を說きたまふ」と』。

爾の時、不空見菩薩、重ねて此の義を明さんと欲して、偈を說いて言はく、

『諸佛世尊は圓音を具し、　衆生の類に隨ひて自然に出したまふ、
彼が意樂に聞かんと欲するの所をば、　如來は隨順して說くことを發起したまふ。
或は衆生有つて布施を樂はゞ、　如來則ち爲めに檀度を讚じたまひ、
或は衆生有つて持戒を樂はゞ、　如來復爲めに尸羅を讚へたまふ。
或は衆生有つて忍辱を樂はゞ、　如來則ち爲めに羼提を讚じたまひ、
若し衆生有つて精進を樂はゞ、　如來爲めに毘梨耶を讚へたまふ。
或は衆生有つて三昧を樂はゞ、　如來則ち爲めに禪定を讚じたまひ、
若し彼の衆生智慧を樂はゞ、　如來則ち爲めに般若を讚へたまふ。
若し彼の衆生解脫を樂はゞ、　如來爲めに解脫を讚じたまひ、
若し彼の衆生、無常を修せんに、　卽ち彼をして無常法を聞かしめたまふ。
彼れ若し苦・不淨を聞かんことを樂はゞ、　亦苦不淨の音を聞かしめたまひ、
彼れ若し空・無我を聞かんことを樂はゞ、　不思議の音もて空・寂をば讚へたまふ。
彼れ若し緣覺乘を聞かんことを樂はゞ、　世の師妙音もて緣覺を說きたまふ。
彼れ或は諸の佛乘を聞かんことを樂はゞ、　兩足尊は菩提道を讚じたまひ、
乃至彼れ天宮に生ぜんことを樂はゞ、　音中に亦生天の事を顯はしたまふ。
是の如きの妙音は思議し難く、　諸類の感に隨つて便ち應現す、

【二九】種種の法云云、宋譯には樂下聞二無上道一得中解脫上者、卽生二念言一、如來今者、爲レ我讚二歎諸佛功德一、說二大乘法一云云と云へり。

まひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は精進を宣說したまふ」と。或は時に衆生の、禪定を習せんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、禪波羅蜜を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は、我が爲めに、禪法をば宣說したまふ」と。或は時に衆生の、智慧を求めんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、般若波羅蜜を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、智慧を宣說したまふ」と。或は時に衆生の、解脫を求めんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、解脫を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、解脫を宣說したまふ」と。或は時に衆生の、解脫知見を修せんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、解脫知見を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、解脫知見を宣說したまふ」と。

或は時に衆生の、天に生ぜんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに生天を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、生天を宣說したまふ」と。諸の衆生有つて、無常を修せんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、無常を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、無常を宣說したまふ」と。諸の衆生有つて、苦を修せんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、衆苦を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、苦の法を宣說したまふ」と。諸の衆生有つて、無我を修せんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、無我を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、無我の法を宣べたまふ」と。諸の衆生有つて、空寂を修せんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、空の法を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、空の法を宣說したまふ」と。諸の衆生有つて、不淨を修せんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、不淨を讃說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、不淨を宣說したまふ」と。[二八]諸の衆生有つて、生天を樂欲せんに、如來は則ち爲めに、生天の法を說きたまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、生天の法を說きたまふ」

【二八】諸の衆生云云、生の天のこと、宋譯缺。前文既に是を出したれば、重ねて說くこと、然るべからざるに似たり。

一切の聲聞をして同じく已に證せしめ、　轉變を開示したまふこと不思議なり。
人の草を把りて恒河を塞ぐが如き、　尊者は我れ難しと爲さずと謂はん。
正覺もて彼の無生の輪を轉ぜんこと、　我れ此の事を持つて彼よりも難しとすと。
若しは人、手に五色の筆を執り、　種種衆綵もて虛空に畫かんも、
語言無き中に語言を置くは、　我れ此の事を持つて彼よりも難んずと。
若しは人手無く亦足無くして、　須彌を負ひ、大海を度るを求めんも、
無相の法中に相の輪を轉ぜんこと、　我れ謂ふに此の事彼よりも難しと。（音とあるもあり）
若しは人、舌無く復口無くして、　一言もて恒沙の界に遍滿せしめんも、
無證の法中に能く證せしめんこと、　我れ謂ふに斯の事彼よりも難しと』。

[二六]爾の時、尊者不空見菩薩摩訶薩、阿難に告げて言はく『尊者、諸佛如來・應供・等正覺は、甚だ希有と爲す、能く無量阿僧祇劫に於て、一切諸法をば、覺了し通達して、彼岸を究竟したまへるを、佛世尊とは號けまつる。[二七]然も諸の如來・應供・等正覺は、衆生の諸根の差別、樂欲の所應に隨順し、微妙の圓音を自然に出したまふは、普く種種の句門を、宣說したまはんが爲めなり。

『謂ゆる、若し諸の衆生布施を行ぜんことを樂はば、如來は則ち爲めに、檀波羅蜜を讚說したまひ、彼れ亦隨つて、世尊は我が爲めに、施の法をば宣說したまふことを念ふ。諸の衆生有り、禁戒を修せんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、尸波羅蜜を讚說したまひ、彼れ復、念を生ぜん、「世尊は我が爲めに、戒の法をば宣說したまふ」と。時有つて衆生、忍辱を行ぜんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、羼提波羅蜜を讚說したまひ、彼れ亦念を生じて、「世尊は我が爲めに、忍の法をば宣說したまふ」と。時有つて衆生、精進を行ぜんことを樂はゞ、如來は則ち爲めに、毘梨耶波羅蜜を讚說した

【二六】宋譯卷第三、讚佛音聲辯才品、第五の二。

【二七】然も諸の如來……爲なり。同には、戒・定・慧・解脫・知見等、衆二一切法相一、無二取者行一、建二勝寶幢一出二一大音一

法に、名相を以て說き給はんこと、其義も亦爾りと。
『復次に、阿難、亦人有り、大海の際に至り、或は一板を取り、或は小筏を持し、或は身ら渉らんと欲し、或は身ら浮ばんと欲し、廣く方便を施して、是の如きの言を發するが如し、「我れ大海を度り、彼の岸に登陟せん」と。意に於て云何、彼の人の所作、爾る可しと爲すや』と。阿難答へて曰はく『不るなり、大士、一切世間に、本より斯の事無し、何ぞ可不を云はん』と。不空見の言はく、『是の如し、阿難、如來・應供・等正覺の、諸聲聞の爲に、[二四]言說無き中に、更に言を以て宣べ、名相無き法に、名相を以て說きたまはんこと、其の義此のごとし』と。
爾の時、不空見菩薩摩訶薩、重ねて此の義を明さんが爲に、偈を以て頌して曰はく、

『諸佛の大慈は思議し難し、　常に悲光を以て一切を照し、
無量億那由[二五]他に於て、　正しく是の如きの深法門を覺したまふ。
諸法は本より性として生の處無し、　因緣もて集會し往來するも空なり、
無上天師善く宣べたまふと雖も、　然も彼の自性は常に寂滅なり。
諸佛の正法は稱量し難し、　世尊は慈愛の故に宣演し、
能く是の如きの離見の法を開き、　世間の諸天人をば利益したまふ。
不可說の法は値ふて聞き難きに、　十方の雄猛能く廣說し、
最上清涼の道を顯示して、　世間の天人衆をば安隱にしたまふ。」
世尊は巧みに無相の法を說き、　無師にして自然に能く覺知し、
一切諸外道を破壞したまへり、　凡愚此の實際を知ること莫し。
諸佛の智海は測量し難く、　法界を宣說したまふこと亦無盡なり、

【二四】言說無き云云、宋譯相當文には、以二未學一法、作二有學一說、又離二於彼一と云へり。
【二五】他、麗等の三本劫に作るも、今明本による。

『復次に、阿難、譬へば人有り、一束の草を持し、恒河の大流をば、堰塞(てんそく)せんと欲すと、言はんが如し。意に於て云何。彼の人、是の如くして、其の事可ならんや』。阿難答へて曰く、『不るなり(しからざる)、大士、何を以ての故にとならば、彼の人の所作は、世間に本より無し、何ぞ可不を論ぜん』と。不空見の言く『是の如し、阿難、如來・應供・等正覺の、諸聲聞の爲に、〔二〇〕無言の法に於て、更に言を以て宣べ、無名相の中に、名相を以て說き給ふ、其の事此の若しと。

『復次に、阿難、譬へば人有りて、本より口舌無くして、一音を以て諸の世界に遍じ、咸聞知するを得しめんと欲するが如し。意に於て云何。彼の人の所作、其の事可ならんや』。阿難答へて曰く、『不るなり(しからざる)、大士。何を以ての故にとならば、彼の人の作す所、世間に本より無し、何ぞ可不を論ぜん』と。不空見言はく、『是の如し、阿難、如來・應供・等正覺の、諸聲聞の爲に〔二一〕言說無き中に、更に言を以て宣べ、名相無き法に、名相を以て說き給はんこと、其の事亦爾りと。

『復次に、阿難、譬へば人有り、手に綵筆を持し、虛空に書畫して、文字を成さんことを望むが如し。意に於て云何、彼の人の所作、成就す可きや』と。阿難答へて曰く、『不るなり(しからざる)、大士、彼の人の所作は、世間に亦無し。何ぞ成不を問はん』と。不空見言はく、『是の如し、阿難、如來・應供・等正覺の、諸聲聞の爲に、〔二二〕無言の法中に、更に言を以て宣べ、無名相の法に、名相を以て說き給ふこと、其の事此の若しと。

復次に、阿難、譬へば人有り、先づ手足、呪術の伎能無くして、大唱して「我れ能く須彌山王を擔負せん」と言はんが如し。意に於て云何、彼の人の所作、其れ遂ぐ可きや』と。阿難答へて曰はく『不るなり、大士、是の人の所作は、世間に既に無し、何ぞ可不を論ぜん』と。不空見の言はく、『是の如し、阿難、如來・應供・等正覺の、諸聲聞の爲に、〔二三〕無言の法中に、更に言を以て宣べ、無名相の

之法、令レ得二修習一。無相之法、作有相說、略說少法、啓悟弘他云云と云へり。

【二〇】無言の法云云の句、宋譯はたゞ、說二未レ聞法一、倍難二於彼一と云へり。

【二一】言說無き云云の句、宋譯はたゞ、爲二諸聲聞一、不思議法、作二思議一說、尤難二於彼一と云へり。

【二二】無言の法中云云、宋譯はたゞ、令二諸聲聞一、所レ未レ得法、今當レ令レ得、彌難二於彼一と。

【二三】無言の法中云云、同はたゞ以二無相法一、作二有相說一と云へり。

『阿難、諸の如來應供等正覺は、能く是の如き、阿耨多羅三藐三菩提を證したまへる時、一切法の、生有ること無きを覺したまふが故に、一切法の、作有ること無きを見たまふが故に、一切法の、不可得を知りたまふが故に。然る後、彼の波羅奈城なる、古仙の住處、[一三]鹿苑林中に於て、三たび十二行・無上の妙法輪を轉じたまふ。而も是の法輪は、初めより未だ曾て、一切世間の、若しは梵、若しは魔、若しは天、若しは人、若しは沙門、婆羅門の、能く如法に、斯の轉を爲す者有るを見ざるなり。『何等をか名けて、三轉法輪とは爲し、云何が復、十二行とは稱するといはば、謂はゆる[一四]此は是れ苦、此は是れ集、此は苦の滅、此は苦滅の道なりとし、[一五]乃至[一六]此の苦已に知り、此の集已に斷じ、此の滅已に證し、此の道已に修したる、是を三轉とは爲す。是の如き三轉を、名けて[一七]十二行と爲すを得るなり。又[一八]此を八聖道分と爲す。是の中に、無量の文字、無量の言音、無量の義趣、無量の解釋有り。然も斯の義を說きたまふは、開示せんが爲の故なり、論義せんが爲の故なり、分別せんが爲の故なり、深義を顯示せんが爲の故なり、知り易からしめん爲の故なり、具足せしめんが爲の故なり』と。

時に彼の不空見菩薩摩訶薩、復尊者阿難に告げて言はく、『阿難、是の故に我れ言つて、諸佛世尊は、甚だ希有と爲し、大慈大悲有りて、功德を具足したまふと。諸佛世尊、既に阿耨多羅三藐三菩提を證得し已り、然る後、[一九]諸の聲聞衆等の爲に、彼の無敎の法中に於て、敎を以て說きたまふが故に。無言の法中に、言を以て說きたまふが故に。無相の法中に、相を以て說きたまふが故に。證得無き中に、敎へて彼の法をば證得せしめたまふ。語言の說く可く、相貌の得可き無しと雖も、而も諸の智者は、已に覺悟し、諸賢善人も、亦證知することを得、諸阿羅漢も、咸彼の無始の生死中より、解脫することを得たり。

【一三】鹿苑 Mṛgadhāva 佛成道の後、始めて四諦・八聖道の說法を爲したまへる所。古來仙人の住する處なれば、古仙の住處とは云ふ。

【一四】此は是れ苦云云は、四諦の相を示したるものなれば之を示轉といふ。

【一五】乃至、右の示轉の次に、苦は當に知るべし、集は當に斷ずべし、滅は當に證すべし、道は當に修すべしとの、四諦の修行を勸むる勸轉あるなり。

【一六】此の苦已に知り、云云は、佛自ら己を擧げて、證をなしたまふ證轉なり。この示勸、證の三を三轉といふ。

【一七】十二行、四諦の各に就いて三轉有り、合して十二行となる。

【一八】是を八正道と爲す。四聖諦は、釋尊の悟りの內容を四の範疇に示したるもの。是を實行的方面に移して示せるもの、これ正見等の八正道なるを以て「是を八正道云云」と云へるなり。

【一九】諸の聲聞衆の爲に、云云、宋譯相當文には、今此大會諸聲聞衆、未レ曾レ聞法、當令レ聞レ之、先所レ未レ說、今當二爲說一、不二思議一法、當二思議說一、未レ所レ得法、今當使レ得、末學

我れ蓮華上佛の所に於て、　三昧を得たるが故に神通を現じ、
七萬の諸衆生を滿足せしめつ、　皆我に因つて菩提の道に住したり。
我れ又最上如來の前にて、　彼に於て精勤に梵行を修しつ、
所得の三昧は實に端正にして、　能く深樂を施すこと稱量し難し。
我れ最上行佛の所に於て、　一の三昧の普明と名くるを受け、
月上佛の時勝禪に住し、　迦葉佛の前にて深定を獲たり。
阿難、是の如きの大神通をば、　皆往昔に於て成就するを得たり、
此の神通自在力を以て、　我れ修する所に諸如來を見まつる。
若し人、諸の世尊を見まつらんと欲し、　無上妙法輪を轉ぜんと欲し、
衆生を拔きて苦海を出さんと欲せんに、　是の人は應に斯の妙定を學すべし』と。

爾の時、衆中の梵・魔・沙門・婆羅門、天・人・阿修羅、一切の世間など、彌勒菩薩摩訶薩の師子吼を聞くことを得たる時、皆大いに歡喜し、奇特の心を生じ、未曾有を歎ぜり。

[三]歎佛妙音勝辯品　第五の一

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、諸天・人・梵・魔・沙門・婆羅門・諸龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅等、未曾有を得、奇特の心を生じ、或は時に驚怖して、身毛皆竪てるを見たり。是の事を見たるが故に、一心安詳にして、三昧より起ち已り、即ち尊者阿難に告げて言はく『大德、善い哉、妙なる哉、諸佛世尊は、甚だ希有と爲し、甚だ希有と爲す。所以は何とならば、諸の如來應供等正覺は、乃至能く、大慈大悲有りて、無量の諸功德等を具足したまへばなり。

【三】品名、宋譯は讚佛音聲辯才品第五の一、

天人大衆等を利益せよ、
彼の婆羅門、復我に要むらく、
我が此を以て恒沙の尊に供へよ、
我れ便ち彼の婆羅門を許せり、
吾れ汝の供を以て諸佛に奉り、
時に婆羅門更に誠に誓へり、
諸佛勝尊若し受けたまへば、
彼の婆羅門我を信じて言はく、
我れ彼を持して恒沙の尊に供へ、
彼れ既に我の大神通を覩、
我を供養すること畢りて佛の所に至り、
時に婆羅門發心し已り、
若し菩薩有りて聞くことを得ん者は、
我れ昔佛然燈の前に於て、
彼をば菩薩諸佛を念ずと名け、
昔然燈世尊の所に於て、
我れ登りて十方佛を見まつることを得たり、
若し人此の三昧の中に住せば、
百僧祇劫の諸の所作は、

然る後、我れ方に汝の食を受けんと。
汝阿逸多、今若し能く、
是の如くせば我れ菩提の志を發さんと。
汝菩提に於て愼みて退くこと莫れ、
終に汝の身をして大果を獲しめんと。
願はくは我が爲めに諸如來に奉れ、
我の菩提を行ずること疑惑無けんと。
誠至の心を發して我が食を受けよと。
婆羅門をして須臾に見せしめたり。
或は驚き或は喜びて珍膳を増し、
便ち無上菩提の心を發したり。
復廣弘の誓の不思議なるもて、
彼れ世界に於て速かに成佛せんをと。
此の微妙の勝三昧を得たり、
能く妙樂を與ふること稱量し難し。
此の勝念三昧を受くるの時、
彼の威德を以ての故に能く覩まつりぬ。
能く無邊の諸神變を現ぜん、
皆諸の衆生を利益せんが爲めなれば。

此の神通を以て、無量無邊の衆生を教化し、悉く阿耨多羅三藐三菩提の中に住せしめたること、猶し今王舍城中の、大婆羅門の如くなりき。

『阿難、復念ずるに、往昔、彼の蓮華上如來・應供・等正覺の所に於て、一の神通を以て、彼の三萬億百千の衆生を教化し成熟し、皆阿耨多羅三藐三菩提の中に、住せしめたり。阿難、我れ又曾て[九]最上不退轉行佛世尊の所に於て、一の三昧の、名けて普明[一〇]と曰ふを得、三昧を得已りて、六萬八千の、欲界の諸天をば、教化し成熟し、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたり。阿難、當に是の如く知るべし、菩薩摩訶薩には、一切皆、不可思議大神通力の第一彼岸有るを知るべし』と。

爾の時、[一一]彌勒菩薩摩訶薩、重ねて此の義を明さんが爲めに、而も頌を說いて曰く、

『我れ曾て晨朝に衣鉢を整へ、　釋師に明行を教へたまはんことを請問したり、
是に於て頂禮して如來に辭さく、　世尊、我れ今將に食を求めんとすと。
大師是の如く我を誡めて曰く、　汝去りて當に衆生を利せんことを念ずべし。
我れ涅槃の後、汝成佛して、　諸種の功德皆圓滿せんと。
阿難、我れ時に是の如く念ぜり、　未だ知らず、今前に食せる所に往くべきやを。
當に誰の家に初めて食を受くべき、　我れ應に教へて菩提に住せしむべしと。
我れといて乞食したるに所遇有り、　遂に大姓の婆羅門に逢へり、
恭敬の心を以て稱すらく、　善來希有なり、遠く至りつ、阿逸多と。
我れ今自ら仁の來れることの晩きを悔ゆ、　唯願はくは時に坐して我が食を受けよ、
大士の妙法は難思議なり、　我れ當に上精の美膳を奉るべしと。
我れ時に彼の婆羅門に語るらく、　汝能く先づ菩提の意を發し、

【九】最上不退轉行佛、宋譯には最高如來に作る。
【一〇】普明、同に普世と云へり。
【一一】彌勒、宋譯は阿逸多に作る。

種種上妙の飲食を持し、我に奉施し、我に飽食を勸む。我れ時に受け已り、自ら恣に之を食したり。

彼の婆羅門は然る後に方に一切の珍寶、一切の諸香、一切の衆華、一切の華鬘、一切の上妙の諸瓔珞具を持し、我と相隨ひて、世尊の所に詣り、恭敬合掌して、佛足を頂禮し、即ち佛前に於て、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、復是の願を作したり。「其れ衆生有つて、我の此の[7]摶食を施すの善根を聞かば、皆即ち不退轉地に住せんを。世尊、我が此の願のごとく、必ず阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得なば、此の善根を以て、我が未來に、菩提を成ずるの時、亦是の如き無量無邊の諸聲聞衆有らんに、皆是れ淸淨の大阿羅漢にして、今の如くにして異なる無からしめん。若し我が此の誓、眞實にして虛ならずば、是の因緣を以て、此の三千大千世界の、一切大地をして、六種に震動せしめんを」と。

『而して彼の大婆羅門、是の願を發すの時、佛の神力の故に、時に應じて、此の間の三千大千世界の、所有一切の大地、六種震動したり。阿難、今此の衆中の、若しは天・若しは人の、我が此の事に於て、疑心を生ぜんに、世尊の出でたまふ時、應當に諮問しまつるべし。

阿難、我れ今未だ、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜざるに、已に是の如きの大威德力を具し、一切神通の彼岸に到りぬ。

『阿難、我れ念ずるに、往昔、無量無邊阿僧祇劫に、佛世尊有し、號けて[8]然燈如來應供等正覺と曰ひ、世間に出現したまへり。我れ時に、彼の然燈佛の前に於て、是の如き、一切菩薩の、念佛三昧をば獲得しつ。三昧を得已るに、諸方の有らゆる、一切の諸佛の、現に說法したまふもの、彼の諸の世尊は、常に前に現在したまへり。又我れ此の三昧門を得已るに、即ち無量無邊の劫中に於て、

【七】摶食、Piṇḍa 香味觸を體とする、吾人常用の食物。

【八】然燈佛、宋譯造光佛に作る。

『阿難、時に婆羅門、卽ち我に答へて言はく、「仁者、若し能く此の食を持ち、分ちて遍く十方恒河沙等の、一切の諸の如來應供等正覺に奉れば、然る後我れ當に、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、力を盡して、諸の菩薩行を勤修すべし。所以は何んとならば、我れ亦先に、諸如來の所に於て、彼の一切の諸善根を種ゑたるが故に」と。

阿難、我れ時に復、婆羅門に語りて言はく「大婆羅門、汝今必ず、能く斯の志を建立したり。我れ當に、食を受けて分布し、恒沙の如來・阿羅訶・三藐三佛陀に供養すべきこと、疑有ること無し」と。

『時に婆羅門、復我に語りて言く、「聖者阿逸多、但だ我の食を受け、分ち張して、恒沙の如來に奉献せよ、我れ便ち誓を發し、亦誓の如く行ぜん」と。阿難、我れ復、彼の婆羅門に語りて言はく、「大婆羅門、汝今審かに能く、斯の如きの誓を發し、誓の如く行ぜば、我れ汝の食を取りて分散し、恒沙の如來を供養せん」と。阿難、彼の婆羅門は、乃至三反、我が供養を要め、我れ亦慇懃に、其れをして發心せしめたり。

『阿難、我れ時に是の如く婆羅門と、反覆周旋、相に約束し已り、然る後、彼の婆羅門に告げて言はく、「大婆羅門、汝の言ふが如くんば、速かに食を將つて來れ、吾れ當に汝の爲めに、分布して、恒沙の世尊を供養せん」と。

『阿難、時に婆羅門、我が言を聞き已り、便ち我に食を授く。我れ既に受け已り、則ち其の前に於て、彈指の如き頃に、分布して恒沙の如來を供養したり。阿難、我れ爾の時に於て、彼の食を分布し、恒沙の諸世尊を供養し已り、然る後、彼の婆羅門の家に還りぬ。阿難、時に婆羅門、是の如き無礙の神通を見、心に驚怪を生じて、身毛皆竪ち、然る後、歡喜踊躍すること無量なりき。卽ち

佛、大聲を放つて誠告して曰はく、
是の如し、阿難、汝受持せよと。
我れ[五]衆生と及び我心と、
乃至佛の想とを滅して遺行無く、
無諍空行には倫比無し、
我れ實に此の三摩提に住せり』と。

彌勒神通品　第四

爾の時、彌勒菩薩、是の如きの念を作しつ『今世尊の、諸の大聲聞弟子衆の輩、大威德有りて、神通を具足し、各〻皆自ら師子吼の事を陳べたり。我の如きも、今亦應に、此の一切世間の天・人・梵・魔・沙門・婆羅門の諸大衆の前に於て、少しく神通の事を現ずべきのみ』と。

時に彼の彌勒菩薩、是の如く念じ已り、卽ち尊者阿難に告げて曰く『我れ念ずるに、昔曾て晨朝時に於て、衣を著け鉢を持して、世尊の所に詣り、佛足を頂禮して、白して言さく「世尊、我れ今、此の王舍城に入り、如法に食を求めんと欲す」と。言ひ已りて卽ち行けり。阿難、我れ爾の日に於て、復斯の如く念じつ「今誰が家に於ても、初めて食を施す者をば、我れ要ず當に、是の人をして、先づ阿耨多羅三藐三菩提に住せしめ、然る後に於て、方に斯の人の食を受くべし」と。

『阿難、我れ時に、念じ已り、卽ち大城に入り、次第に乞食し、一の大姓たる婆羅門の家に至り、彼の門下に於て、默然として立ちて住したり。阿難、時に彼の大姓の施婆羅門は、我の乞食せるを知り、我の默住せるを見て、則ち我れに告げて言はく「善く來れり、[六]阿逸多、聖者阿逸多、今日何が故に、自ら屈して此に臨める、其れ須つ所有らば、願はくは我が食を取れ」と。阿難、我れ卽ち彼の婆羅門に告げて言はく「大婆羅門、汝今若し能く阿耨多羅三藐三菩提に於て、善根を種うれば、然る後乃ち當に、汝の施食を受くべし」と。

【五】我れ衆生と云云、宋譯相當文には、我無衆生想、亦無無生想、無佛無法想、一切無相故とあり。

【六】阿逸多 Ajita 無能勝と譯す。彌勒の姓なり。

至世尊の諸弟子等にして、尙ほ是の如き、勝妙の神通大威德力有り、何に況んや、諸佛所有の三昧神通の境界にして、而も思量す可く、而も宣説す可きをや』と。

爾の時尊者須菩提、諸の世間の天・人・梵・魔・沙門・婆羅門の、希有を生じたるを見已り、重ねて此の義を明さんが爲めに、偈を以て頌して曰はく、

「我れ禪定解脱の門に住し、　無諍三昧最第一なり、
我れ昔曾て世尊の所に於て、　神通力を現ずるに邊有ること無かりき。
我れ三千世界の地を轉じ、　一切をして毛道の中に入らしめ、
彼の陶輪の如くして窮已無からしむるに、　衆生安然として往を覺らざりき。
我れ昔如來の前に於て、　諸山及び大地を分散しつ、
時に彼の衆生損減無かりき、　是の如き神通の門に住せるを以てなり。
我れ此の界及び衆生を以て、　皆掌中に置きて後[有]頂に入り、
乃至還た下るに彼れ覺らざりき、　一切咸是れ斯の神通なり。
我れ曾て定に入りて東方を觀るに、　彼の六萬の諸世尊を見たてまつる、
南西北方も亦是の如く、　六萬の如來闕有ること無く、
又彼の四維及び上下も、　諸佛亦六十千に足り、
平等に相を具する金色の身に、　我れ天香を以て遍く散じ、
彼の衆生をして悉く知見せしめたるに、　各〻言へり、我に須菩提有りと。
亦此界を領したまふ牟尼尊も、　聲聞禪中最第一なりと。
我れ今此の師子吼を作す、　時の衆若し疑はゞ當に佛に問ひまつるべし、

此の如き三千大千世界の、其の間の所有一切衆生を以て、皆悉く一指節の端の上に安置して、有頂[四]に至り、然る後、還り來りて本の處に住し、彼の衆生をして、寂然として聲無く、相逼迫せず、往返の想無からしめん』と。

『阿難、我れ念ずるに、一時、三昧に宴坐し、彼の東方を見るに、現前に則ち、六萬の諸佛有り、是の如く南・西・北方・四維・上下の、無量無邊百千の世界に、各々六萬の諸佛世尊有り、昔より未だ見まつらざる所、今皆見知しつ。阿難、我れ彼の時に於て、閻浮提に住したり。是を以て、定心もて、復神力を發し、須彌の頂、天帝釋の邊に至り、一掬の栴檀末香を撮り、彼の無量諸佛の世界中に往いて、向の時の爾許の如來應供等正覺を供養し、彼彼の世界の、諸の衆生等、皆悉く明了に、我れ是の閻浮提界に住して、彼の諸世尊に供養し、承事せるを見、我は是れ此の娑婆世界なる、釋迦牟尼如來應供等正覺の、聲聞大弟子の上座、須菩提にして、空・無諍・三昧門中、最第一なる者なるを知りぬ。

『阿難、我れ是の如き、神通の彼岸に到り、神通波羅蜜を具足し成就せり。阿難、今此の衆中の、若しは人、若しは梵、若しは魔、若しは沙門、若しは婆羅門等、我が所説に於て、尙ほ疑心有らんには、彼れ若ち能く、我が師世尊に問ひたてまつれ。今寂定に在りて、自ら當に證知したまふべし』と。

爾の時、佛の神力の故に、虛空の中に於て、大音聲を出し、阿難に命じて曰はく『阿難、是の如く是の如し。上座須菩提の、向の師子吼の如し。汝是の如く持せよ』と。

時に彼の天・人・梵・魔・沙門・婆羅門・阿修羅等、是を見聞し已り、身の毛皆竪ち、希有の心を發し、未曾有を得、是の如きの言を作せり『甚だ希有と爲す、實に未だ曾て、是の如き大事をば覩ず、乃

【四】有頂、色界の第四なる色究竟天をいふ。これ形有るの極まりなれば有頂といふと。

卷の第四[一]

神變品之餘[二]

爾の時、阿難、復是の念を作せり『尊者須菩提は、善く無諍の行を修し、一切の法に於て、已に彼岸に到り、大威徳有りて、神通を具足せり。或は能く、是の不思議の變を爲さん。我れ今應當に其の作不を問ふべし』と。

時に阿難、是の如く念じ已り、而して復、彼の須菩提に白して言さく『大徳、我れ親しく佛より、是の如きの説を聞けり「我が聲聞大弟子の中、解空第一なるは、則ち須菩提其の人なり」と。是の不思議大莊嚴の事、將に大德の所爲に非ずとせんや』と。

時に須菩提、阿難に答へて曰はく『阿難、世尊は我を無諍の空行を修すること、第一なりと說きたまふと雖も、然も是の神通は、我の能く作すところに非ず。所以は何んとなれば、我れ念ずるに、一時三昧に入りて、此の如く、三千大千世界の弘廣なること、斯のごときをば、一毛端に置き、往來し旋轉すること、陶家の輪の如く、爾の時に當り、一の衆生も、驚懼の心有ること無く、亦己の所處を覺知せざりき。

『阿難、我れ念ずるに、往昔、如來の前に於て、是の如きの大師子吼を作さんと欲し、白して言さく「世尊、此の如く、三千大千世界の寬廣なること、是の如きを、我れ能く、口の微氣を以て、一たび吹いて、皆散滅せしめ、復其の中の、所有衆生をして、驚かず迫らず、往來の想無からしめん」と。阿難、我れ爾の時に於て、世尊の前に在り、已に曾て是の如きの神通を示現しつ。

『阿難、我れ念ずるに、一時復、佛前に於て、師子吼を作し、白して言さく「世尊、我れ今能く、

【一】宋譯卷第二つゞき。

【二】同には品を分たず。

【三】無諍、諍は煩惱の異名なり。無諍の行、宋譯には阿蘭若行に作る。

の如く大師子吼したり』と。

大集經菩薩念佛三昧分卷第三

神變品第三

五一

一切皆毛孔中に入りぬ、　阿難、是れ我が神通の力なり。
此の須彌山は甚だ高廣なり、　鐵圍・衆山も宜しきに隨はされど、
皆悉く一毛孔中に置きぬ、　阿難、我が神通力を知らんと。
彼等皆各ゝ迫笮すること無く、　而も我一毛中に入るを見つ、
時に我が身體疲を覺えず、　彼れ亦[二七]毛道に處るを知らざりき。
三千大千の諸の水聚と、　衆流陂・河及び大海とを、
一時に之を吸ひて毛孔に置く、　我れ但だ是の大神通有り。
此の界の是の如き衆の水聚と、　大海・諸河及び細流など、
彼等皆各ゝ相知らずして、　而も我れ能く毛孔に入らしめつ。
阿難、我れ此の神通の事、　昔曾て數ゝ世尊の前に現じたり、
此の衆に如し疑惑する人有らば、　當に如來・無礙眼に問ひまつるべし。
阿難、我れ大蓮花に處し、　彼の十方の諸菩薩を見るに、
頭目及び妻子を捨施し、　悉く無上菩提尊に祈る。
我れ神變を見て希有を生じ、　決して世尊の所爲とは爲す、
或は不空見、彌勒の輩、　亦は或は聲聞大弟子か』と。

爾の時、尊者羅睺羅、是の如き等の師子吼を作せり。時に彼の大衆中に、八十七億百千那由他の諸天人等有り、遠塵離垢して、法眼淨を得たり。是の諸天人、法の證を得已り、天の栴檀末香を以て、慇懃に再三、尊者羅睺羅の上に散じたり。是の如く供養し已り、復是の言を發しつ、『希有なるかな、希有なるかな、淸淨の佛子、眞に大乘を行じ已り、諸法に於て、衆の善根を種ゑ、今能く是

【二七】毛道、毛孔の中と云はんが如し。

生にも害無く、諸大海水及び與河流、乃至陂池の、細微の水聚も、各〻皆本の如くにして、相漂迫すること無く、所居皆身の水中に在るを知りぬ。

「阿難、我れ昔一時に、此處にて禪に入り、既に入定し已つて、即ち東北に於て、一世界の――彼の佛世尊をば、[二四]難勝威如來・應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號したる――[佛]所に至り、身を現はして禮敬し、敬し已つて即ち復、此の世界の[二五]迦維羅城なる、[二六]淨飯王の前に還り、一掬の栴檀末香を求索し、得已りて還た持し、彼の佛刹に於て世尊を供養したるに、香氣遍滿したり。

『時に即ち、彼の難勝威佛の爲めに、樓觀・像輦を化作したるに、分明にして、高さ萬由旬、一切の妙寶を以て、莊嚴し間錯したり。復天香を以て、七寶の蓋と爲し、佛の頂上を覆ふこと、高さ一萬億八千由旬、廣さ八千由旬なりき。又彼の界に於て、一切衆生の爲めに、各各栴檀の樓觀・像輦を化作し、高さ百由旬、廣さ五十由旬ならしめ、四柱方整にして、意の所樂に隨ひ、彼の衆生をして、備さに莊嚴を具へしめ、各〻皆自ら相障礙すること無からしめたり。

『阿難、我れ但だ、是の如く、聲聞の神通の、彼岸を究竟せるのみ。今此の衆中に、若し我に於て、疑惑を生ずる者有らば、世尊に諮るに任せん。世尊は寂定に處すと雖も、尙ほ當に證知したまふべし』と。

爾の時、羅睺羅、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を說いて曰はく、

「我れ曾て此の三千界の　百億の四天と鐵圍とを取り、」
一切悉く毛孔中に入れたり、　阿難、我は斯の如き力有り。」
此の閻浮提は是の如く大なるも、　彼彼各〻住して相知らず、」

【二四】難勝威、宋譯は難生に作る。
【二五】迦維羅城 Kapilavastu 釋尊所生の處。妙德と譯し、黃頭居所ともいふ。上古に黃頭仙人有つて、此處に在つて道を修したるが故に、因んで名と爲すと。
【二六】淨飯王 Śuddhodana 釋尊の父王。また白淨ともいふ。

是れ世尊とせんや聲聞とせんや、　而も我れ佛を見たてまつりて斯に滅度せん』と。

爾の時、阿難、復是の如く念ぜり『彼の尊者羅睺羅は、世尊の子なり、一切法に於て、已に彼岸に度し、大威德有り、大神通を具す。或る時能く、斯の如きの大事を作したり。我れ今亦、當に其の作不を問ふべし』と。

尊者阿難、是の念を作し已り、卽便ち彼の羅睺羅に白はく『大德、我れ親しく佛より、是の如きの言を聞く「我が諸の聲聞大弟子の中、持戒第一なるは、則ち[三]羅云其の人なり」と。是の不思議莊嚴の神變は、將に大德の所爲に非ずとせんや』と。

時に羅睺羅、阿難に答へて曰はく『阿難、世尊の大悲は、普く一切を覆へり。我が持戒精進の具足と、神通とを稱讃したまふと雖も、然而も今現ずる所の神變の事、特に非常にして、測度す可からず。我れ生れてより來、未だ嘗て見覩せず、亦未だ思惟もせず、又分別も無し。況んや復た、能く斯の如き神變を爲さんをや。

『阿難、是の大莊嚴は、實に我が作す所に非ず。所以は何となならば、我れ念ふに、往昔唯だ、此の三千大千世界の廣大なること是の若し、謂ゆる百億の四天下、百億の日月、百億の大海、百億の須彌山、百億の大鐵圍山など、是の如きと及び餘の黑山の類とを、一切皆一毛孔の中に納めたり。爾の時に當り、我が身本の如く、衆生も異ならず、諸の四天下の有らゆる大地・須彌・諸山、乃至大海及び衆流と、咸皆安穩にして、相[三三]振觸すること無く、一切は逼迫・損傷有ること無かりき。阿難、我れ但だ、是の自在神力有るのみ。

『阿難、我れ昔一時に、此の三千大千世界の、有らゆる大海及び餘の小海と、大河・小河・乃至陂池の、微細の水聚を取り、是の如き一切を、悉く毛孔に入れつ。爾の時に當り、我が身に損無く、衆

【三】羅云、羅睺羅 Rāhula を舊には又羅云に寫したり。

【三三】振、ふれるなり。

我れ此の界及び諸山を取り、
彼の時一の衆生をも動かさゞりき、
三千世界の諸の水聚を
我れ彼の水を一指の間に內るゝに、
我れ初夜に於て天眼を以て、
其の善根及び諸法を求むるやを觀じ、
我れ是の如く念を生じたる時に於て、
已に爲めに正道の法を宣說し、
我れ是の如く說法しつる時に於て、
三萬の諸人は禁戒を護り、
我れ復念ずるに、彼の初夜の時、
北方の三萬を過ぐる界を觀じ、
彼の佛界中の諸の衆生に、
我れ時に起ずして彼に現じて說き、」
阿難、我が智、正しく此の若し、」
衆生若し疑惑する者有らば、
我れ今斯の蓮華上に坐し、
彼の佛火に處して闍維に就きたまふ、
我れ心に佛を觀じ希有を生ず、」

手を以て廻轉し亦摩抹したるも、
我れ但だ斯の神通力有り。
此の刹、若しは見、若しは聞かずして、
諸の衆生に於て損減無かりき。
何等の衆生か心に疑惑し、
神力を以て決除爲んと欲したり。
本坐を離れず亦往くこと無く、
彼をして聞くことを得、心の疑を破せしめたり。
萬四千をして聖法に住せしめ、
六萬のもの正信して[三]三歸を受けたり。
出す所の神通甚だ微妙にして、
一佛刹の、伏怨と名くるを見たり。
獨一人有つて深く疑惑したり。
彼をして各ゝ已れ獨り聞くと謂はしめたり。
是の如きの神通は佛自ら知りたまふ。
但だ當に決定して世尊に請へ。
一世尊の般涅槃したまふを見るに、
自外の諸方亦皆爾り。
是れ誰の所爲なるかを測る可からず、

【三】三歸、佛・法・僧の三寶に歸依するなり。

三寶に歸依せしめたり。然して始めて、安詳として三昧より起てり。阿難、[一九]我れ唯だ是の說法の餘功もて疑を決したる事有るのみ。

『阿難、我れ又復念ずるに、此の世界に於て、天眼を以て、彼の北方を觀見したるに、三萬の佛刹を過ぎて、一の世界有り、其を[二〇]伏怨と號しつ。彼の世界の中に、一の衆生有り、諸法中に於て、多く疑網を起したり。時に彼の衆生、聲聞有りて、化を受く可きこと易かりき。然も彼の世尊は、般涅槃し已りたまひたれば、我れ卽ち念を生ずらく「我れ今亦、應に此の坐[座]より起たず、彼の刹に往かずして、而も衆生の爲めに、疑網を解釋せん」と。是の如く念じ已り、卽ち三昧に入り、三昧中に於て、彼の世界の、無量無邊・不可稱數・阿僧祇の諸衆生輩の爲めに、正法を演說し、彼をして皆、諸法の光明を得しめたり。

『阿難、我れ但だ、是の聲聞の神通を具するのみ。今此の衆の中に、若し疑ふ者有らば、世尊の出でたまふを須ち、請問して、自ら知れ』と。

是の如く語る時、佛の神力の故に、虛空に聲を出し、阿難に告げて曰はく『阿難、是の如し、是の如し、富樓那の大師子吼の如し、汝當に憶持すべし』と。

爾の時、諸天・世人・阿修羅等、一切の大衆、是の事を聞き已り、希有の心を發し、奇特の想を生じ、是の如きの言を作しぬ『希有なるかな、希有なるかな、聲聞にして、尙ほ能く、斯の大事をば建つ。況んや彼の菩薩、諸佛世尊をや』と。

爾の時、尊者富樓那彌多羅尼子、重ねて此の義を明さんが爲めに、偈を以て頌して曰はく、

『我れ說く事に於て悉く通達し、　諸の漏と有との生、皆滅除するも、
佛如來に望むるに分毫も無し、　大尊の神變は獨り世に超えたまへり。

[一九] 我れ唯云云、宋譯に、我如レ是神通變化、悉能斷ニ除衆生疑一と云へり。

[二〇] 伏怨、宋譯には除怨に作る。

何んとならば、我れ念ふに、昔時、諸の衆生の、應に神通を以て教化を得べき者有り、我れ便ち彼が爲に、此の三千大千世界を取り、手を以て之を摩して、彼等に開示したり。爾の時に當り、一の衆生も、驚怕の想有ること無く、亦覺知せざりき。唯だ彼の衆生の、應に此の化に在りて、神通に與るべき者は、乃ち能く我が手の、世界を摩するを見たるのみ。

『阿難、譬へば壯士の、右手を以て、一の[一八]迦梨沙般那を取り、左手もて迴轉するに、以て難しと爲さゞるが如し。是の如く阿難、我れ此の三千世界を取り、手を以て迴轉するに、以て難しと爲さゞること、亦復此の如し。阿難、我れ念ふに、一時世尊の前に於て、一指節を以て、此の三千大千世界の、一切の水聚を取り、皆我が手の指節の間に入らしむるに、一の衆生も、損減の想有ること無かりき。

『阿難、我れ往にし一時、初夜の中に於て、淨天眼の人に過ぎたる眼を以て、此の三千大千世界を觀、是の如きの念を作しつ「是の中、復何等の衆生が有りて、諸法の中に於て、心に疑惑を生ぜんに、我れ當に解釋して、除斷を得しむべし」と。我れ卽ち、三千大千世界を觀たるに、有らゆる一切の、諸の四天下の無量の衆生、諸法を疑惑したり。我れ復念を生ずらく、「我れ今、應に是の坐を離れず、是の定を出でずして、諸の衆生の爲に、疑網を斷除すべし」と。阿難、我れ時に、念じ已り、便ち定に入り、心清淨明了にして、光澤成就し、寂然不動にして、彼の衆生の爲めに、諸法を宣說し、疑網を決斷して、滯礙有ること無く、彼の衆生をして、各〻斯の念を生ぜしめたり、「我等今皆、各各此の尊者富樓那彌多羅尼子の、獨り我が前に在りて、我が爲に宣說するを蒙る、と。

『阿難、我れ初夜に、說法した時に當り、卽ち一萬四千の衆生有りて、皆佛の正法の中に、安住することを得たり。復三萬の衆生有りて、禁戒を護持したり。復六萬の衆生をして、佛法僧を信じ、

【一八】迦梨沙般那 Kārṣāpaṇa 錢の量、具當と譯す。慧琳によれば、その値、四百錢の一顆金に當るべし、大さ江豆の如しと云へり。

衆生有らゆるもの須彌と、　及び餘の諸山不動の處に住したるに、
爾の時、彼をして損と覺と無からしめたり、　智者、我れ是の如きの通を有す、
我れ神通を以て此の刹を燒くに、　口の風一たび吹けば皆熾然なり、
彼等衆生は覺知せず、　爾の時に當つて毀壞する無かりき。
我れ昔此の佛刹の中に於て、　遙か東方に、刹に滿てるの火を見、
口氣を以て吹いて能く彼を滅したり、　我が通は是の如く難思議なり。
我れ今此の大神通を見、　心に殊特と大希有とを生じつ、
諸の佛弟子は思議すべからず、　一切の諸行も亦是の如くなり。
我れ今此の蓮華の上に處し、　彼の衆の刹の妙莊嚴を觀る、
菩薩は兜率天より降りて、　母胎に入りて生際を盡しつ。
當に定んで此の聲聞の輩の、　心に自在を得たる神通人とや爲ん、
是を菩薩不空見、復は彼の彌勒、　文殊等とや爲ん』と。

爾の時、阿難、復是の念を作さく『此の富樓那彌多羅尼子は、一切の法に於て、已に彼岸に到り、大威德有りて、神通を具足す。或は時に、能く是の如きの大事を作す。我れ今亦、應に其の作不を問ふべし』と。

尊者阿難、是の如く念じ已り、卽便彼の富樓那に白して言さく『大德、我れ親しく佛より、是の如きの語を聞く、「我が大聲聞諸弟子の中にて、說法第一なるは、則ち富樓那彌多羅尼子其の人なり」と。是の不思議なる莊嚴神瑞は、將に大將の所爲に非ずとせんや』と。

時に富樓那、阿難に答へて曰はく『此の瑞は異常にして、我の能く及ぶところには非ず。所以は

爾の時、大迦葉、是の如き等の、諸の七寶の蓋を見、遂に阿難に告げて曰はく、『阿難、今此の大衆中には、決定して、[一七]大乘高行の菩薩摩訶薩有り、能く是の如きの、大神通の事を作すを知る。然も今復、斯の大神變をも現ず。阿難、我れ今、此の大蓮華座に坐して、見る所、諸方の無量無邊不可稱數の諸佛世尊あり、又彼の剎は、皆七寶を以て成じ、殊麗の莊嚴、眞に瞻覩す可く、彼の諸の衆生、復是の如きの勝上の果報有るを見る。我れ今悉く見ること、猶し忉利の如し。一切の諸天は耽醉し、花冠は常に瓔珞を帶び、諸天の身色は、月光の明なるが如く、虛空の中に於て、化の寶蓋有り、彼の諸の衆生は、一一頂上に寶蓋有つて、我が頂上に覆へる、七寶の蓋の如くにして、別異無し。

『阿難、我れ又、彼の諸佛剎土を見るに、諸菩薩有りて、兜率天自ら降り、母胎に入りぬ。阿難、我れ是の如きの神通の事を見るの時、深く歡喜を生じ、踊躍すること無量なり。阿難、我れ復思念すらく、「是の如きは奇異なり、是の如きは希有なり、豈に彼の隨宜凡劣の衆生の、能く是の如きの大師子吼を作し、能く是の如きの、大神通の事を現ぜんや」と』。

爾の時、尊者大迦葉、重ねて此の義を明かさんが爲めに、偈を以て頌して曰はく、

『阿難、十方の大水聚、　大海・巨河・諸流等
我れ口の風を以て一たび往いて吹き、　彼をして枯竭して遺滯無からしめたり。
曾て正覺世尊の所に住し、　此の剎中に於て神度を作し、
我れ能く水聚を乾凋せる時、　衆生は損する無く亦覺らさりき。
世界の有らゆる一切の山、　須彌・鐵圍・黑山等をば、
能く口の風を以て吹いて散ぜしめたり、　仁者、我れ是の如きの通に住す。

【一七】大乘高行、宋譯には「此衆決定大乘之行」と云へり。

阿難、我れ念ふに、一時此の世界に於て、天眼を以て、彼の東方を觀見したるに、億百千の世界を過ぎて、一佛刹有り、洞火猛然たり。我れ既に見已りて是の如く思惟すらく、「而も今應に、神通を示現すべし」と。既に思惟し已り、即ち三昧に入り、三昧中に於て、口を以て一たび吹くに、東方千億の世界を過ぎ、熾然の猛火を、即ち消滅せしめたり。彼の火滅し已りて、我れ便ち定より出で、即ち彼の界を見るに、還つて復た本の如くなりき。阿難、我れ今但だ、是の如き神力有るのみ。阿難、今此の衆中には、諸の衆生の、若しは天、若しは人、若しは梵、若しは魔、若しは沙門、婆羅門など有るも、多く疑心有つて、我の妄言なりと謂ふ。彼れ若し信ぜずば、世尊後の時、三昧より起ちたまへるとき、自の諮問に任すのみ。而も今世尊、三昧に入りたまふと雖も、是の事を知るに足り、亦我が聲をも聞きたまふ』と。

爾の時、世尊、尚ほ本處に住し、三昧中に住したまひて、遙かに阿難に命じて曰はく、『是の如く是の如し、大迦葉の師子吼の說の如きは、眞實にして、虛に非ず。汝當に憶持すべし』と。時に諸の天人、一切の大衆など、佛の教を聞き已り、方に迦葉に於て、希有の心を生じ、難遭の想を起しつ。

時に彼の尊者摩訶迦葉、是の如き等の師子吼を作せる時、三億の人有り、諸法中に於て、遠塵離垢し、復た八十五那由他百千の諸天有りて、遠塵離垢し、法眼淨を得たりき。

爾の時、不空見菩薩、彌勒菩薩、文殊師利菩薩、越三界菩薩、是の如き及び餘の、無量無邊の諸大菩薩摩訶薩等、皆久しきより來、是の如き大弘誓の鎧を被服したるが、大迦葉の師子吼を作すを聞き、便ち化したる華聚の、須彌山のごとくなるを、乃至再三、迦葉の上に散じ、復多く、大七寶の蓋を化作し、虛空中に住して、大迦葉の頂を覆ひ、並びに一切の聲聞大衆を覆ひぬ。

摩訶迦葉に白して言さく、『大德、我れ親しく佛より、是の如きの說を聞く、「我が弟子中[一五]頭陀第一なるは、則ち大迦葉其の人なり」と。是の不思議の大神變の事、將に大德の所爲に非ずとせんや』と。

時に大迦葉、阿難に答へて言く、『仁者、此の變は、常に殊なつて、我の能作に非ず。所以は何んとなれば、我れ念ふに、一時輒ち、自ら量らず、、世尊の前に在りて、師子吼を作しつ。阿難、我れ時に、三千大千世界に於て、須彌山王及び大鐵圍、乃至諸の餘の黑山の屬をば、一たび口を以て吹き、能く破散せしめたるに、乃ち微塵許の如きも、有ることなからしめたり。其れ衆生有つて、彼の山に住したる者を、損害せしめず、亦覺知すること無く、是の如く、諸山をも、皆悉く滅したり。

『阿難、我れ又一時、此の三千大千世界に於て、一切の大海・大河・小河、陂(ひち)池の諸水、乃至無量億那由他百千の水聚を、口を以て一たび吹き、皆乾竭せしめたるも、而も彼の衆生は、知らず覺らず亦苦惱無かりき。阿難、我れ又一時、如來の所及び諸の天人・梵・魔・沙門・婆羅門・一切世間の、諸の大衆の前に在りて、師子吼を作し、廣く神通を現じたり。阿難、我れ今唯だ、斯の如き威力有り、能く是の如き自在神通を作すのみ。

『阿難、我れ念ふに、一時、如來應供等正覺の前に在りて、諸の世間の天人・梵・魔・沙門・婆羅門など、一切大衆の爲に、師子吼を作しつ。「世尊、我れ能く此の、三千大千世界の內に於て、口を以て一たび吹きて、即ち大火熾然として、遍滿すること、[一六]劫燒の如くならしむるも、終に亦一衆生をも損せしめず、亦衆生をして、竟に覺知せざらしめたり。阿難、我れ眞に是の如きの神通を具足せり。

【一五】頭陀、大集部、第二、一九五頁參照。

【一六】劫燒、劫末に起る火炎によつて、世界の燒かるるをいふ。

諸法の底を求めて邊を得ざるも、」　我の智慧は彼に過ぎたり。
今佛世尊の前に在りて、　此の智を以て師子吼せんと欲す、
且く一切の諸の外道を置き、」　唯だ大聲聞の我身を求むるに、
終に能く我が身と、　及び所作の諸神變を見る有ること無し、」
唯だ如來等正覺、　並びに諸佛子、大菩薩をば除く。
是れ乃ち我身の所在を知る、」　彼の外道及び聲聞のごときに非ず、」
禪定・解脫不思議にして、　是の心我に任せて廻轉す。
我れ丈夫は眞空の行を修す、　仁者我業は常に是の如し、
我に是の如き勝神通有り、　一切の聲聞入ること能はず。
然も我が今見る所の十方には、　斯の若きの神力ありて我れ貪羨す、
我れ今大蓮華座に處し、　遍く諸方の無量土を見るに、
無量の刹中には成佛有りて、　各佛樹に詣り道場に坐したまふに、
彼の刹の衆寶もて異に莊嚴し、　端正微妙なること甚だ愛す可し。
我れ時に亦是の如きの念を作せり、　決定して如來神通を現じたまへるとか。
或は大弟子の所爲か、　或は諸菩薩不空見か』と。

爾の時、尊者舍利弗、是の如きの師子吼を作す。時に衆中に一萬三千人有り、遠塵離垢して、法眼淨を得たり。

爾の時、阿難、是の如く思惟せり、『此の大迦葉は、大威德有りて、神通を具足しつ、今是の變化は、或は其の所作ならん、我れ今亦、當に其の作と不とを問ふべし』と。是に於て阿難、即ち尊者

はざりき。阿難、我れ常に大丈夫の行を奇特し、亦復大智人の事をば成就す。阿難、[一四]我が心は我が行に隨ふも、我は心の行に隨ふに非ず。

『阿難、我れ今自ら分身の大蓮花座に處するを知り、亦一切の天人大衆、皆悉く彼の大蓮花座に、坐するを見る。阿難、我れ復彼の、一切十方無量無邊不可思議の、諸世界の中を見るに、皆諸佛世尊有りて、悉く菩提樹下に在り、道場に坐して、等正覺を成じ、無量無邊の大威力を、具足し成就し、諸天大衆、恭敬し圍遶し、大梵天王は、法輪を轉ぜんことを請ひて曰く「世尊、若し當に法輪を轉ずべくば、我等隨順せん」と。阿難、我れ是の聲を聞き、我れ是の事を見たり。今是の如き、無量無邊の、諸佛國土は、皆是れも寶雜色の繒綵に、諸の金鈴を懸け、羅網を以て上を覆ひ、種種の宮殿は、微妙に莊嚴せること、此の娑婆世界の如くなり。

『阿難、我れ向の時に於て、亦是の念を作しつゝ、「今此の不思議大莊嚴の事、將に世尊の大神通力の作に非ずや。或は是れ、諸の大菩薩摩訶薩の輩、厚く善根を集め、福智を具足し、能く斯のごときの、大神變を現ぜるのみ。亦或に、世尊聲聞衆中の、諸大弟子の、久しく善根を種え、大威德を具するものゝ所爲ならん」と』。

爾の時、尊者舍利弗、重ねて此の義を明さんが爲めに、偈を以て頌して曰く、

『世尊の神力は思議し難し、　及び如來の功德を求むるもの、
所有聲聞大弟子、　此の佛刹に滿つる學、無學など
彼の智中に於て我れ第一なり、　何云が我に勝る者有らん、
唯だ諸佛如來の輩、　及び諸菩薩の菩提を行ずるものを除く。
自ら我れ諸法の相を觀じ、　具足すること二十年に滿つ、」

【一四】我が心云云、同は我今更有二心自在力一我能伏レ心、心不レ伏レ我。

我が諸の聲聞大弟子中、智慧第一なるは、則ち舍利弗其の人なり」と。今此の神變は、將に大德の所作に非ずとするや』と。

時に舍利弗、阿難に語つて言く『阿難、此の瑞は常に殊なり、我の及ぶ所には非ず。所以は何んとならば、我れ念ふに、二十年より來、精勤にして毘婆舍那を修習し、一心に觀察して、法の[一]實相を求むるも、終に諸法の邊際を知ること能はざればなり。阿難、又念ふに、我れ昔一袈裟を取り、地上に投置しつるに、時に大目連は、第一上座にして、威神是の若くなるも、既に取る能はず、乃至擧げて地を離れしむる能はざりき。云何が手もて擊げんをや。

『阿難、又念ふに、昔世尊の前に居して、師子吼を作し、亦一切の神通を具足せる諸大聲聞、及び學・無學、天人・梵・魔・沙門・婆羅門、乃至一切の諸龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅等諸の大衆の前に於てせり、時に彼の外道波梨波闍、我が所に來至し、我と諍ひて、諸禪定に入り已り、復た我と共に、其の身を隱さんことを較べ、師子吼を競はんと欲したり。我れ彼の時に於て、丈夫の志を建て、丈夫の事を行ぜじ、遂に此の如き諸の不思議を作しつ。

唯だ世尊の一切知見、及び彌勒菩薩摩訶薩と諸の是の一生補處の者とを除き、又彼の甚深法忍を成就せる、諸の菩薩摩訶薩を除き、又海德三昧を得たる、諸の菩薩摩訶薩を除き、又善住三昧を得たる、諸の菩薩摩訶薩を除き、又諸佛現前三昧を得たる、諸の菩薩摩訶薩を除き、是の如き等の諸の大菩薩摩訶薩を除き已り、自外の有らゆる如來世尊、聲聞大弟子など、[二]若し來りて我に隱身の時の事、乃至外道波梨波闍等のことを問ひ、而して更に我に身を隱沒したる時は、何れの處にか住したりと爲すやを問へり。[三]我れ是の如き大神變を作せる時、一切の聲聞、設しは辟支佛は、皆我が身の所在を知る能はず、及び其の說く時、空に我が聲を聞けども、終に我が身の所在を知る能

【一】實相、眞實にして虛妄に非ざるを實と爲す。實相とは諸法の本體の、眞實にして常住なるをいふ。

【二】若しは來つて云云、宋譯相當文には、如レ此身者、何者是我、爲レ可レ見耶、不レ可レ見耶、又問ニ異學諸外道等一、汝所計身、有ニ神我一者、爲ニ是過去一、爲ニ當現在一、と云ひ說相、本文とやゝ異る。

【三】我れ是の如き……能はざりき。宋譯相當文には、我如レ是相、種々神通變化非レ一、聲聞緣覺、所レ不レ能レ知。亦不レ能レ見。何者是我、所レ言我者、爲レ住ニ何處一、問ニ如是義上

『我が成就する所の[九]四神足には、　同類の孰れか能く相比校せん、
唯獨り世尊天人師のみ、　餘人の神通寧んぞ我に及ばん。
我れ曾て此の佛刹を呑合したるに、　大地の衆生覺すること無し、
我れ又曾て梵天宮に至り、　一音もて此の世界に充滿したり。
我れ又曾て世尊の前に於て、　須彌を呑噉して若ち劫を經たり。
我れ又炎界に大聲を發し、　此の佛刹をして遍く聞聽せしめたり。
我れ又天帝宮を震動し、　彼の天女衆の中に坐しつ、
我れ又難陀の所に往詣し、　斯の如きの大毒龍を降伏したり。
我れ又念ふに、昔神變を作し、　身此に住して東方に現じ、
我れ六萬億千の家をして、　彼彼各〻我身を見ると謂はしめたり。
阿難、我が今親る所の變は、　初より未だ是の大神通を觀ず。
我れ唯大希有心を生じつ、　然も是の神通は我が作には非ず。
我れ今大蓮花座に處し、　亦衆生の花中に坐するを見る。
復た諸佛大威王を見、　觀察して十方界を盡すに、
決定して自在天尊の作なり、　或は[一〇]能大士の所爲なり、
是の如き非常の大神變は、　昔より來未だ見ずして今方に觀たり』と。

爾の時、尊者大目乾連、是の如き等の師子吼を作しつ。時に彼の大衆中の、十千の天人、諸法中に於て清淨眼を得たり。

爾の時、阿難、尊者舍利弗に白して言さく『大德、我れ親しく佛より、是の如きの言を聞けり。

【九】四神足、四如意足ともいふ、大集部第一、四四頁參照。

【一〇】能大士、釋迦牟尼佛の謂。

の三千大千世界を取りて、悉く口中に內れたるに、其の時、衆生乃至一念も、驚懼して、往來の想を覺ゆること有ること無かりき。阿難、又念ふに、我れ昔、梵天宮に住し、一大聲を發したるに、此の三千大千世界に遍じたり。阿難、復念ふに、我れ昔、世尊の前に在りて、師子吼を作し、能く須彌を以て、口中に入れ、能く一劫若しは一減劫を過ぎつ。是の如きを常と爲す。阿難、又念ふに、我れ昔、[7]陽炎の世界に至り、彼に於て、聲を發したるに、此の世界に遍じて、咸聞知することを得たり。阿難、又念ふに、[8]我れ昔、身の此の閻浮界に住して、能く遙かに忉利天宮の、難勝大殿を動かしたり。『阿難、又念ふに、我れ昔、彼の難陀、優波難陀などの、諸の龍王の所に至り、彼の龍は是の如く、炎熾巨毒なるも、我れ時に降伏して、戒に住して善ならしめたり。又亦曾て、惡魔波旬を辱かしめつ。

阿難、我れ念ふに、往昔東方に至り、彼の第三千世界に住したるに、一大城有り、名けて寶門と曰ひ、彼に於て、凡そ六萬億千の家人有り、我れ卽ち彼の六萬億千の家中に於て、一一皆我が目連の身を現じ、彼の衆生の爲に、諸法無常・苦・空・無我を演說し、皆是の如き正法に安住せしめたり。阿難、我れ能く曩の變化を爲すと雖も、初めより未だ曾て、是の如き神變をば見ず、云何が作さんや。

『阿難、今我れ此の大蓮華座に處して、十方一一の佛土、無量無邊を觀見するに、我が世尊釋迦の號に同じき者は、皆本室に還り、默然として寂坐したまふ。而も我れ、彼の諸佛國土を見るに、亦此の娑婆世界を觀るが如くなり。阿難、我れ向の時に於て、亦天眼を以て、周遍に是の變因緣を觀察し、而も終に從來する所の處を知らざるなり』と。

爾の時、大目連、重ねて此の義を明さんが爲に、偈を以て頌して曰く、

【七】陽炎の世界、宋譯は炎天に作る。

【八】我れ昔云云、同に我能移ニ於火神堂閣一置ニ閻浮提一而不ニ動搖一と云へり。

後に復た是の如きの神通を作し、此の三千大千世界の、遍き虚空中に熾然の火を雨らし、衆生の身心をば、滅壞せしめず。彼の衆生、火の身に觸るゝを蒙るに、皆斯の微妙の勝樂を受くるを得ること、猶し比丘の、火三昧に入り、恬然として、安樂なるが如く、火に觸るゝ衆生の怡悅も、亦爾なりき。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、三昧力を以て、復是の如き大神通の事を作し、此の三千大千世界に、天栴檀の細末の香を雨らしむるに、其香微妙にして、三千大千世界に遍滿し、若し衆生、此の香を聞かん者、皆是の如き、第一の勝樂を得ること、猶し釋迦如來應供等正覺の、其の往昔に、菩薩を行じたまへる時、彼の然燈佛世尊の前に在りて、菩提の記を受け已り、不思議希有の、妙樂を得たまへるが如くなりき。時に諸の衆生、天の妙香を聞き、不思議の樂、身心に遍滿せること、亦復此の若くなりき。

爾の時、衆中の尊者阿難、是の如きの念を作さく、『今何の因緣ぞ、忽ち是の如き、不可思議希有の莊嚴を見るは。此の大神變は誰の致す所なる。然も我が世尊は、房に還りて[六]宴寂したまふ。是の若きは、斯れ大神通に當らずんば、豈に我が大聲聞衆の中に、能く作す所ならんや。此の會衆たる、諸大人多くして、猶し龍象の如くなれば、或は其の作得する所か。彌勒菩薩、文殊師利菩薩、越三界菩薩、乃至不空見等に非ずば、亦或は是れ、餘の諸大菩薩摩訶薩の輩の、威光を具足して、斯の事を現ずるならんのみ』と。

爾の時、尊者阿難、是の如く念じ已り、卽ち尊者大目連に白して言さく、『大德、我れ聞く、世尊常に是の如く說きたまふ、「我が弟子中、神通第一は、則ち目連其の人なり」と。今是の瑞を現ずるは、將に大德の所爲たる無きや』と。時に大目連、阿難に答へて言はく、『仁者、此の瑞は常に殊なり、我れ能く作すところに非ず。所以は何んとならば、憶念するに、我れ昔、一時の間に於て、此

【六】宴寂、やすみしづかなるをいふ、入定の謂。

復種種微妙の莊嚴を以て、世尊の住處をば、周匝圍遶したり。一切多く是れ、愛す可きの衆花なり。謂ゆる優鉢羅花・波頭摩花・拘物頭花・分陀利花なり。是の如き等の花、皆悉く此の世界に充滿したり。具足せる莊嚴、清淨にして微妙、其の事亦爾り。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、三昧力の故に、復是の如き花果の事を現じ、此の三千大千世界の、有らゆる大衆乃至天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦・人・非人等、一切の衆をして、故らに衆寶の大蓮花座を化作せしめたり。其の花、具さに無量千葉有り、清淨柔軟なること、譬へば[三]迦耶隣尼天衣の若くなり。諸の衆生をして、各〻相見て、彼此を知り、咸花座に坐することを得しめたり。

復定中に於て、更に是の如き、大神通の事を現じ、此の三千大千世界の、大地をして、六種に震動せしむ、謂ゆる動・遍動・等遍動・涌・遍涌・等遍涌・起・遍起・等遍起・震・遍震・等遍震・吼・遍吼・等遍吼・覺・遍覺・等遍覺などなり。是の六各〻三あり、合せて十八相なり。是の如く乃至中涌邊沒、邊涌中沒あり、猶し摩伽陀國の赤白銅鉢の、石上に置くに、傾き轉じて定まらず、自然に聲を出すが如くなりき。此の如く三千大千世界は、扣かず、擊たざるに、自然に聲を出すこと、其の事此の若くなりき。

震吼の時に當り、彼の諸の衆生、聲を聞きて覺悟する者、一切皆上妙の觸樂を受くること、猶し東方[四]不動世界の如く、亦西方[五]安樂國土の如く、其の中の衆生等、快樂を受け、聲を聞きて安を獲ること、亦復是の如くなり。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、三昧に住するが故に、心轉清淨にして、垢濁有ること無く、隨順調柔にして、麁獷を遠離し、寂として變動無し。心深く、潤澤にして、普く安樂ならしめたり。然る

【三】迦耶隣尼衣　迦遮隣地 Kācalindika の誤なるべし。この衣は迦遮隣地なる鳥の羽毛を以て作れるもの、最軟極妙にして、最上の服たり輪王の服する所なりと云はる。

【四】不動世界、阿閦 Akṣobhya の世界なり。譯して無動と云ふ。

【五】安樂世界、西方の彌陀の淨土。

卷の第三[一]

神變品第三[二]

爾の時、尊者舍利弗・尊者目乾連・尊者大迦葉・尊者阿難、及び諸の天人・梵・魔・沙門・婆羅門等、咸是の念を作さく『何の因、何の縁ぞ、今我が、世尊如來應供等正覺は、天人大衆の中に在りて、諸の梵・魔・沙門・婆羅門・諸の龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅、及び人・非人等の爲に、斯の念佛三昧の法門の名を宣說し已りて、未だ解釋したまはざるに、卽ち坐より起ちて、本の住處に還り、默然として、寂に坐したまふや』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、是の如く思惟す『今此の天人・梵・魔・沙門・婆羅門、及び彼の一切諸の龍・夜叉・乾闥婆等、大衆咸集るに、而も我が世尊、本處に入定したまふ。我れ今亦應に、少しく神通を現ずべし。神通を現じ已るは、種種に世尊の大慈、功行を、稱歎せんが爲なり』と。

爾の時、不空見菩薩摩訶薩、是の如く思惟し已り、卽ち三昧に入る。三昧力の故に此の三千大千世界をして、莊嚴微妙ならしむ。凡そ諸の所有、皆七寶もて成じたり。謂ゆる金・銀・琉璃・頗梨・馬瑙・車渠・珊瑚・眞珠など、是の如き衆寶の、嚴飾する所たり。其の地平正なること、猶し手掌の如く、一切の大地と、咸是の如きの寶有り、諸の多羅樹、八道に間錯して其の中に羅布したり。彼等の諸樹は、端嚴愛す可く、金多羅樹には白銀の葉華、銀多羅樹には琉璃の葉華、琉璃樹には頗梨の葉華、頗梨樹には馬瑙の葉華、馬瑙樹には車渠の葉華、車渠樹には眞珠の葉華、赤眞珠の樹には黃金の葉花あり。是の如く、處處に繒綵の蓋を懸け、諸の金鈴を垂れ、寶網もて羅覆し、幢幡を建布するに、皆雜寶を用ひたり。

【一】宋譯、卷第二。
【二】神變品、同には神通品第三に作る。

汝、勇猛精進の時に於て、
斯等も皆當に法王と成るべけんをと、
汝、先の無量世の生處に、
我れ今汝に實の功德を說く、
若し禽獸及び餘の衆有らんに、
諸の是の汝の身肉を食する等（ともがら）も、
我れ知る、汝に千數の行有るは、
若し聞者有つて或は疑を生ずれば、
凡そ我の說く所の汝が諸事は、
彼彼皆佛を得ること必ず疑無し、
若し人、救世の尊を見まつらんと欲し、
聞つ已つて能く諸の苦惱を破せん、
若し人三世佛を見まつらんと欲すれば、
具足して諸の功德を積聚するには、
二八 世間天人を利せんが爲の故に、
遂に法座を下りて徐ろに行き、

具さに誦を愛憎するの所作あらんに、
彼の現在の得證者はさに非ず。
彼に於て恒に菩提を求めんことを願じつ、
當來必ず無上尊をば獲ん。
彼れ必ず成佛すること復疑無く、
一切自然に法身を證せん。
皆諸の衆生を利益せんが爲なるを、
時未だ至らざるを以て我れ說かず、
其れ或は衆生の樂聞せんことを願はんに、
餘の現在身に證する者はさに非ず。
此の淸淨の勝法輪を轉じたまふを、
菩提を證せんが爲の故に樂聞す。
恭敬し供養して福田を上れ、
必ず先づ此の三昧を受持せよ。
世尊は此の事を宣說し已り、
即ち還歸して本室に寂したまひぬ。二九

大集經菩薩念佛三昧分卷第二

【二八】世間以下の誦、宋譯は散文なり。文意より判すれば、後者の方、妥當なり。
【二九】宋譯は卷第一終。

汝、[二四]普密佛の前に於て、
其れ修行の如く成佛すれば、
汝、雲雷佛音佛の所に於て、
若し衆生有つて我が名を聞かんに、
復た[二五]帝釋幢佛の前に於て、
[二六]凡そ我れ所處に若し見聞せんもの、
汝、日燈如來の所に於て、
無邊威所大明佛に、
常に勝處に妙莊嚴を施さん、
汝、月上如來の所に於て、
佛尊中に處して遊化したまひ、
汝、澡浴善逝の前に於て、
若し夏日盛暑の時に於て、
汝、[二七]鴦祇羅佛の所に於て、
恒に長夜黑闇の時に於て、
若し我れ身命を捨施するの處、
必ず皆成佛すること疑有ること無からんを、
或は覺悟に及び夢裏に於て、
一切成佛すること疑有ること無からんを、

發す所の誠願を我れ今說かん、
我が散ずる所の華大地に徧からんと。
世間の爲の故に斯の願を發したり、
願はくは彼れ咸卽ち佛道を成ぜんをと。
廣く供養を興したるは誓願に因る、
彼彼皆佛道を成ずるを得んをと。
七寶の經行處を奉施したり、
汝、爾の時に當つて發願して言はく、
願はくは我が佛刹も亦是の如くならんをと。
願ずるに、第一最天宮を得、
衆生の遊ぶ者悉く成佛せんをと。
實に是の如き至誠の願を作せり、
衆生の身心熱惱を離れんをと。
亦是の如き增上の願を發せり、
願はくは燈明を施して迷惑を除かんと。
其れ食肉の諸衆生有らんに、
彼の現在、身に證する者はさに非ず。
若し衆生有り我が名を聞かに、
彼の現在身に證する者はさに非ず。

【二四】普密佛、宋譯は普密王佛に作る。

【二五】帝釋幢佛、宋譯は帝幢佛に作る。

【二六】凡そ我云云、同に若眼見レ我者に作る。

【二七】鴦祇羅佛、宋譯には盎身に作る。

時に不空見、衆の所に於て、
天尊調御師に請問せらく、
大仙、我れ曾て何をか誓願して、
惟願はくは、世尊少分を聞きたまへ、
不空、汝の往昔に於ける、
汝、[二二]雲音如來の所に於て、
諸佛若し菩提を證せん時、
又帝幢音眼佛に於て、
世間に若し最導師有らば、
汝、[二三]日燈如來の所に於て、
汝不空見、惟我れ知る、
或は壯麗たる佛の精舍を營み、
彼れ皆微妙の七寶もて成じ、
不思議〔と名けまつる〕衆の所尊、
七寶の蓋及び衆具を持し、
彼の普眼如來の所に於て、
貴く燈明を施し衆供を調へ、
汝、是の如き無量の佛に於て、
自ら勤苦を受けて衆生を安んぜんと、

恭敬し合掌して佛を頂禮し、
慈悲もて衆生を利益したまはんを。
能く無量の生を捨棄したる、
我れ聖說を蒙りて乃ち能く了せん。
吾れ今汝が爲に粗ゝ之を說かん。
已に是の如き廣大の願を發しつゝ、
當に今の我が身、常に奉覲すべきを。
彼の時亦大誓願を發し、
當に我をして卽ち斯の道に同ぜしむべしと。
亦勝妙の諸の行願を發したり。
衆寶の經行處を造作し、
若しは殊異なる僧伽藍を搆へしを。
一切の資具を諸佛に奉りぬ。
人中の師子善生佛に於て、
超世の天中の天に供奉したり。
爾の時又妙なる願行を起し、
世間天人師に奉獻したり。
千萬億那由他を過ぎ、
彼の莊嚴弘廣の誓を發したり。

【二二】雲音、宋譯は雷音に作る。

【二三】日燈、宋譯は日光に作る。

大梵天王は供養を設け、　兩足尊を恭敬し頂禮し、
法輪を轉じて世間を利せんことを請ふ、　佛は心の淨なるを知りて默然として許し給ふ。
梵王法を聞いて大いに歡慶し、　身に安樂を得、心恬然たり、
更に殊常の大誓願を發し、　不思議の衆善根を植ゑ、
一劫に五千の佛に値遇し、　皆親承を得て供養を與しぬ。
智者應に更に他を疑ふべからず、　彼の時の師子とは汝卽ち是れなり。
不空見、時に吾が息爲り、　汝後に佛に事ふること五千を經たり、
我れ皆明かに汝の身を燒き、　斯の無上菩提道を求むるを見たり。
汝復無量千の佛所にて、　彼の滅度し、舍利あるの時に、
亦無量の所愛の軀を燒けるは、　皆他の樂の爲に自ら苦を受けたるなり。
我れ知る、汝の今及び異世に、　無量千生のあひだの長時に修し、
或は佛の現在にも、或は涅槃にも、　汝常に斯の誠實の語を建てたるを。
昔無量百千生を經るも、　惟我が神力をもつて能く汝を知る、
不空、汝久しく斯の願を發したるに、　果報今皆明かに現ず。
汝諸佛大師の前に於て、　不思議の行悉く圓滿し、
常業に兩足尊を歌讃し、　苦行もて諸の大誓を薫修したり。
今偈もて大法王を歎するを獲るは、　斯れ往に積める勝因緣に由る、
又普密王佛の前に於て、　最上無邊の願を攝取し、
汝今果として斯の如き報を獲、　佛如來の威神を現じたまふを蒙る。

我が凡そ所有の諸誓言の、
若し我れ當來に必ず成佛せんに、
佛智は清淨にして障礙無く、
師子の淳淨心に照明して、
不空見、此の願力を持せば、
玆に因つて更に莊嚴なる誓を發しつ、
世尊彼の火より起つの時、
又淨意を以て讚音を發さん、
無邊相好の火盛んに然えるや、
佛世尊神變を現ずるを以て、
汝不空見、知れるや、師子、
世尊の此の神變を見るに由り、
大悲もて世の爲に利益し已り、
師子は是に於て身を放捨し、
即ち梵宮より佛所に還り、
微妙の天華香を奉持して、
彼の寶聚尊涅槃の後、
復普密天人師有り、
道樹に坐して〔二〕等至眞なり、

冀くは其れ一切皆和會せんを、
願はくは猛焰に於て世尊を見たてまつらん。
彼の三世に於て坦然として平かなり、
佛は精誠を以て火より現はれたまふ。
護世も須臾に念に應じて起たん。
不思議の願は實に測り難し。
一切皆厭離の心を得、
佛威希有にして測る可きこと難し。
法王念に應じて忽ち便ち起ちたまへり、
千數の衆、解脫心を得たり。
大慈應感して忽ち還た坐すを、
千數の衆、菩提心を發したり。
還復猛火の中に偃臥したまへり、
一念に大梵の處に往生しつ。
具足して人中の尊を供養し、
彼の佛碎身の地に投散しつ。
其の間の時節幾何も無くして、
世間を利せんが爲の故に世に興り、
是の天中の天を大覺と號す。

【二】等至、Samāpatti の譯、定をいふ。定に在つては、身心平等に安和にして、定能く之に至らしむるが故に等至といふ。

衆寶間廁して奇光耀たるは、
一一城中の寶塔の所には、
香華・音樂・鼓・鐃・鈴ありき、
是の如き勝善根を種えしに因り、
悉く皆供養し親しく承事したるは、
汝不空見、復疑ふこと勿れ、
彼の深智の王とは我が身是れなり、
常に華香を以て供養を修し、
具さに無量百千の燈を然し、
財寶を施與して、未だ曾て休まず、
精進苦行して暫くも捨てざるは、
汝は寶聚如來の所に於て、
猶し燈炷に膏油を塗るが如くにして、
汝時に身火熾んに熖盛んなるに、
彼の人寶滅度の日に於て、
猛火斷の如く煎迫するの時、
願はくば世尊の火より起つを見まつらん、
我れ今所願成就して、
但だ能く暫し見ん往昔に、

但だ人の寶として餘の身を遺さんが爲なり。
各〻無量百千の燈を然し、
彼の王は佛の爲に斯の供を與したり。
次第に六萬の佛に遭遇し、
無上大菩提を求めんが爲なり。
曩時統領の大地主たる、
其號は無邊精進力たり。
一切の諸群生を教化したり。
世の爲に闇を除き、光明を作し、
正法を聽聞して亦厭くこと無く、
無上大涅槃を證せんが爲なり。
衣を以て身に纏ひ火洞然たること、
須臾にして火至り即ち燋燼しつ。
毛・色動ずること無く神驚かざりき。
爾躬ら是の如くしたるは世間の爲なり。
汝猶ほ方便して勸請すらく、
大悲の護世、本形を現したまへ。
方に意の如くなるを得ば身命を捨てん、
獲る所の功德の如く不思議なるを。

子とは、卽ち汝不空見菩薩是れなり。汝彼の賓聚如來の佛法の中に於て、大誓願を發し、一たび身を捨てたるを以ての故に、能く三萬の天人大衆として、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめたり。彼の輩は、終に必ず大菩提を證せんこと、疑有ること無し』と。

爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べたまはんが爲に偈を以て頌して曰はく、

我れ過去久遠劫を觀ずるに、　佛を賓聚無上尊と號し、
無師にして自覺し、世間に現じ　能く天人群生の類をば益したまへり。
百福金色の相を具足し、　慈心をもつて實義門を顯發し、
衆生に菩提の路を開示し、　吼唱して能く衆苦の源を盡したまへり。
賓聚は挺特にして人中の勝なり、　七十二億衆の賢聖は、
三明六通[18]あり、八解[19]を具し、　佛に隨ひ城に入りて分衞[20]したり。
我れ今日に於て勝王と爲り、　無邊の精進と大威力とあり、
恆に二子を將ゐて左右に從へ、　因つて巡遊して觀るに高樓に處り。
遙かに見る、調伏大仙神の、　比丘僧衆悉く圍遶せるを。
我れ時に子と趨りて疾く下り、　馳せて無等尊勝の前に詣る。
既にして大師善逝の所に至り、　諸種の妙供具を施設し、
尊足を頂禮して口に發言すらく、　如來及び僧衆に啓請しまつらん。
衣食・衆具をば盡形に奉り、　八萬四千年を滿足せん、
幷びに是の二子の淨信心は、　無上菩提を求めんが爲の故なり。
人中の極尊既に涅槃したまふや、　八萬四千の塔を興起し、

【一八】三明六通、大集部第一、八八頁參照。
【一九】八解脫、同第一、七九頁參照。
【二〇】分衞 Piṇḍapāta 乞食と譯す。

弘誓の本は世間を度せんが爲にして、　歸依無き者に覆護と作りたまふ、
昔の所願の如く今既に滿ち、　已に寂靜無爲の處に到りたまふ。
今當に速かに甘露の門を開きたまふべし、　能く三縛を壞し、衆惱より出でたまふ、
梵王の陳請、義已に周ねし、　如來是に於てか默然として許したまへり。
須臾の頃に於て、普密佛は、　遂に彼の梵をして極めて歡喜せしめ、
及び無量億の天人衆は、　以て善逝の法輪を轉じたまふを聞けり。
時に彼の梵天、說を蒙り已り、　廣く衆具を持つて報恩を報じ奉る、
是に於て復弘誓の願を發し、　無上菩提の處を求めんが爲に。
今普密世尊の前に於て、　我が作す所の諸功德を陳べ、
此の善根を以て所生の處に、　常に十分の諸世尊を奉じまつらん。
我れ昔、道場に佛を供養し、　慈說を請聽して衆生を利したり、
是の微善に因り、凡ての所居に、　願くは佛前に於て、常に歌讃しまつらんを」と。』

『爾の時、世尊、復不空見菩薩摩訶薩に告げて言はく、『不空見、時に彼の精進王の子、師子梵天は、燒身の善根を以て、梵宮に生ずることを得、次第に五千の諸佛を供養し、正法を聽聞して、善根を增長し、常に廣大不思議の願を發したり。不空見、汝今當に知るべし、爾の時の無邊精進王とは、豈に異人ならんや、卽ち我が身是れなり』と。

『時に彼の不空見菩薩、復佛に白して言はく、『世尊、彼の王の二子、師子及び師子意――は、今何れの所に在るや、現世に於て、諸佛を供養すると爲んや、已に滅度して、他世に在りと爲んや』と。

佛の言はく『不空見、汝知れ、爾の時の師子意とは、今此の彌勒菩薩摩訶薩是れなり。爾の時の師

して、是の法を受持しつ。

『彼の精進王、斯の善根を以て、八萬四千劫に於て、惡道に生ぜず、及び師子意も、亦果報を同じくしたり。[一六]王の大夫人、名けて善意と曰ひ、其の最大の臣を、名けて無瞋と曰へるが、亦八萬四千劫中に於て、勝果報を受けつ。彼の王は、是の如く、諸劫中に於て、次第に六萬の諸佛を供養し、生ずる所には、常に轉輪王の身を受け、正法をもつて治化し、衆生を利益したり。

『復次に不空見、彼の寶聚佛の滅度したまへる後、時節未だ幾ならずして、一菩薩摩訶薩有り、普密王と名け、現に世間に生れ、世間の爲の故に、家を捨て出家して、苦行を修することを示し、菩提樹に詣り、道場に坐し、一念の慧を以て、無明煩惱の習氣を斷除し、即ち阿耨多羅三藐三菩提を證したり。

『不空見、時に彼の師子大梵天王天眼を以て、普密王如來應供等正覺の、世に出興せるを觀見し、即ち復還下りて虛空中に住し、天の衆香及以妙華を持て、佛に散じ、然る後、地に至つて、右に遶ること三周、恭敬し合掌し、頭面もて禮拜して、世尊に大法輪を轉したまはんことを勸請したり。時に彼の師子梵王、佛前に住し、偈を以て請じて曰く、

[一七]『世尊、今應に妙法を闡きたまふべし、　我等衆生は聽聞するに堪ふ、
智慧もて敵を摧き今適に與りたまふ、　一切世間に能く毀るもの莫し。
如來は無上の調御者なり、　至眞の十種の號をば具足したまふ。
利世の大師今已に起ちたまふ、　自然の正覺妙菩提なり。
功德圓滿して人中の上なり、　聖智は久修にして始より然るに非ず、
世尊は但だ爲に妙音を演べたまふ　今此の大衆は樂うて聞受せん。

【一六】王の大夫人と大臣とのこと、宋譯夫。

【一七】この偈、宋譯は散文を以てす。

『復次に不空見、時に大梵王、是の如く念じ已り、眷屬の天と、彼の宮に於て沒し、猶し壯士の、臂を屈伸する頃の如きに、卽ち人間に至り、寶聚如來應供等正覺の、闍毘身の處に往詣し、天の衆香謂ゆる天の末栴檀及び天の牛頭・沈水・多摩羅跋香等を以て、供養を爲し、復種種なる天上の、妙華の、華は車輪のごとく、猶し雲の遍滿せるがごときをば散じて、供養を爲しぬ。

『師子梵天、佛を供養し已り、方に其の父、精進王を慰めて言はく、「大王、當に知るべし、王子師子は、身を燒きて命を喪ひしも、今の我れ是れなり。我れ時に、卽ち大梵天の中に生じつ。願くは大王、復憂悲痛惱すること勿れ。惟應に歡喜して、深く自ら慶快すべし。何を以ての故にとならば、大王は今已に、第一大利を獲たればなり。所以は何んとならば、諸佛世尊は、遭ひ難く遇ひ難し、而も王は已に、世尊寶聚如來應供等正覺に、値遇しまつることを得、尊重し恭敬し、具足して供養したり。是を希有第一の大利とは爲すなり。是の故に大王、今より已後、惟當に、一心に是の法を受持すべし。弟師子意も、亦應に是の如くなるべし。此の法を受持し、復應に、世尊の[一五]舍利を供養し、處處に流布して、廣く塔廟を興すべし。我れ梵宮に於ても、亦常に是の如く、斯の如法を持し、舍利を尊奉しまつらん」と。是の如く言ひ已り、忽然として現ぜざりき。

『復次に不空見、時に彼の精進王、梵の語を聞けるが故に、卽ち其の子師子意と、寶聚如來・應・等正覺の、舍利の所に往詣して、恭敬し禮拜し、歌誦し讃歎し、一切の香、一切の華鬘、幷びに諸の音樂を以て、復諸種の幢幡・寶蓋を持し、奉獻し供養したり。又少時の間に、彼の八萬四千の諸城に於て、純ら七寶を以て、八萬四千の塔を興起しつ。高さ一由旬、面各〻廣長一拘盧舍なりき。殊特に端嚴光耀愛す可く、舍利を安止して、咸く供奉せしめたり。又一一の寶塔の所に於て、常に八萬四千の燈明を然し、各各一切の名香、一切の妙華、及以華鬘、一切の幢幡、一切の寶蓋、一切の樂音、鼓・贏角・貝・鐘・鈴・磬・鐸を以てし、凡て是の衆具、畢く備はざるは莫かりき。是の如く供養

【一五】舍利 Śarīra 佛の身骨をいふ。

滅度して能く厭離を生ぜしめたまふ　　今我れ普眼觀に歸依しまつる。
一切を慈悲したまふ最尊勝は、　　能く自心を以て他心を知り、
悉く無邊界の衆生を治したまへり、　　無等善逝者に歸命しまつる。
諸醫中に於ける第一の尊は、　　常に妙藥を以て衆生に施し、
能く無量の衆病の苦をば除きたまへり、　　憐愍救護人に歸命しまつる。
我が稱讚しまつる諸善根と、　　恭敬供養する諸功德と、
愛身を放捨して獲る所の福とを以て、　　先づ願くは諸の衆生を利益せんことを」と。

『不空見、時に彼の王子師子、斯の大願を發し、以て自ら莊嚴し、然る後に火を增して、卒に身命をば捨てつ。時に諸の世間の天人・梵・魔・沙門・婆羅門、乃至一切の人・非人等、斯の事を見已り、咸世間に於て、重き厭離をば生じたり。

『復次に不空見、時に彼の王子、身命を捨て已つて、卽ち梵天に生じ、大梵王と作り、諸梵の中に於て、最尊最勝にして、大威德有り、大神通を具へつ。

『不空見、時に彼の王子、梵宮に生じ已り、卽ち自ら思惟すらく「我れ何處より、何なる善根を作してか、此に來生し、是の如き功德・果報と、大神通力有ることを得たる」と。是の念を作し已り、便ち自ら了了分明に、知見すらく、我れ人間に於て、精進王の子爲り、我れ父王と、衆具に寶聚如來を供養し、恭敬謌讚し、世尊の滅度したまふや、我れ卽ち身を焚き、彼の熾然の猛火中に於て、大誓願を發し、佛の功德を歎じたり。此の善根を以て、今梵宮に生じつ。然も我れ今應に、還た人間に下り、我が父を開慰し、所生の恩に答ふべし。復當に、寶聚如來の、涅槃に入り、身を燒きまつれる處を供養すべし』と。

今我れ誓ひて精進の事を行ずるや、
我をして速かに調御師たるを得しめたまへ、
我れ無上正覺を求むるの時、
即ち世間に於て疾く佛を成ぜん、
我が今の所願と及び未發のものと、
若し此の誠誓必ず虛しからずば、
我の如きは暫く世尊を覩まつるを得つ、
今我れ復盛んに焦然すと雖も、
世尊の智慧は障礙無く、
昔廣く諸の衆生を利したまへるが如く、
濟世の大師若し暫く起たば、
佛は[13]師子の心を知りたまふこと精誠なり、
廣く世間の爲に變事を興し、
畢竟諸の衆生を利益し、
大衆は佛の巨なる神變を覩、
諸佛の妙法は難思議なり、
智慧・解脫量る可からず、
已に滅度して能く我を淨めたまふと雖も、
世尊の威德は比有ること無く、
或は毀罵し或は輕訶する有らんも、
彼の現在身に證する者にはさに非ず。
其れ或は慈心をもつて相觀視するもの、
彼の現在身に證する人はさに非ず。
是の爲に所愛の身をば焚燒す、
我をして還滅度の佛を見せしめたまへ。
何ぞ天師に異して重ねて出世せん、
猶ほ身存して佛を觀まつる得んことを冀ふ。
常に三世に清淨の輪を轉じたまふ、
我をして佛の火より起つを見せしめたまへ。
先の威力普眼尊の如し、
之が爲めに暫く起ちて神力を[14]現じたまへ。
無量の衆生をして患身を厭はしめ、
還つて復た身を焚きて寂處に入りたまふ。
清淨の意を以て妙音をば讃ふ、
戒及び禪定も亦復然り。
神通・變化も亦測り難し、
今故らに歸命して身を焰熾す。
神通をもつて已に彼岸の邊に達し。

【一三】師子、王子の名なり。
【一四】現、麗本覩に作る、今三本に依る。

是の如き大菩提を吼宣したまふと、
不可思議の大導師は、
一切の天人、諸の魔・梵は、
能く貧窮に法財の寶を施し、
諸天・龍・鬼・人・非人など、
世間には今より所依無し、
並びに師子意も覆護を失ひ、
我れ寧ろ軀及び壽命を捐て、
是を以て今所愛の身を滅し、
我れ佛の所に於て善根を種ゑ、
先づ願はくは此の諸の功德を以て、
不思議の諸佛の所に於て、
普く願はくは群生と斯の福を同じうし、
世尊は滅度したまひ我れ身を焚く、
一切皆同じく等正覺せん、
若し人覺悟及び夢中にも、
彼れ必ず成佛せんこと疑有ること無し、
我が此の愛身、終に敗壞せん、
願はくは彼の我を食する諸蟲獸、

長へに復た衆の圍遶するとをば見ず。
法を說きて能く聞く者をして喜ばしめたまへり、
今より永く絕えて聲を聞かざらん。
衆の爲めに演說したまふに、皆樂聞しつ、
此れより長へに往いて歸趣すべき無し。
偏へに悼む、我が王何をか恃怙とせん、
永へに佛說法の音を聞かざらん。
獨り世間に住するを用とすること無し、
茲に因つて更に廣弘に誓願す。
父王も亦常に三寶を尊びたり、
王及び我れをして法身を證せしめたまはんを。
供養して衆の善業を修行しつ、
亦我が誓をして虛言無からしめたまはんを。
其れ聞くことを得、或は親しく見る有らんに、
〔三〕彼の現在身に證する者はさに非ず。
但だ我が今の所作を見せんに、
彼の現在身に證する者にはさに非ず。
事水沫の堅牢無きに同じ、
皆速かに菩提道を成することを得んを。

【三】彼の現身云云、宋譯相當文には唯除下邪謗人、及證二正位一者上と云へり。

度、一に何ぞ駛き哉、大聖涅槃して我等を遺棄したまへば、世間方に盲ひ、導師長逝したまへば、衆生貧困して、商主終を告げ、世界將に昏んとし、慧灯忽ち滅しつ」と。

『不空見、彼の精進王、是の如く、追慕極まり、悲歎し已り、方に二兒と、世尊の所に詣り、諸の香水を以て、聖身を沐浴し、復衆香を用つて、遍く尊體に塗り、更に種種殊異の華鬘、微妙の樂音を以て、虔を盡して供養し、然る後、方に[九]迦尸迦衣・妙疊(氈)を用つて纏裹し、金棺及以鐵槨に安處し、其棺をば又、七寶を以て雜廁したり。

『是の如く、彼の佛身を盛置し已り、方に清淨赤妙の梅檀を聚むること、高さ一由旬、縱廣正方にして、一[一〇]拘盧舍なり。諸種の華及以華鬘を散じ、殊勝の塗・末の香等を燒然し、灌ぐに蘇油を以てし、然る後に火を起して、寶聚如來の色身を[一一]闍維しう。

『復次に不空見、時に彼の王子師子、既に如來の般涅槃を見已り、是の如く思惟しつ、「天人大師、我を捨てゝ滅度したまへり、我れ今日に於て、何の義あつてか、苟くも存せん。今我れ若し、如來應供等正覺に隨從して、滅度を取ることを獲ば、豈に樂しからずや」と。

『不空見、時に彼の王子是の如く念じ已り、諸の名香を以て、自ら其の身に塗り、復諸の香を以て、其の衣服を薰じ。氎を以て纏裹し、然る後、周圍に大猛火を放ちて、其の身を焚燒しつ。火熾盛にして、已に猛焔の中に方り、大弘誓を發し、諸の衆生を救ひ、如來の功德を、歌讃し歸依して、偈を以て頌して曰く、

世間寶中の最上の尊は、　今日放捨して無餘に入りたまへり、
天人大師は法輪を轉じたまへるに、　我等此れより復覩まつらず。
法王は無量の衆を利益し、　今已に棄置して涅槃に入りたまへり、

【九】迦尸迦衣 Kāśika 地方に產する織物にて作れる衣の謂。

【一〇】拘盧舍 krośa 里程の名、牛又は鼓の音の聞き得る最大距離、五百弓又は五里とせらる。

【一一】闍維 ghāpita 茶毘とも寫す。焚燒の義。

して、神通を具足し、大威德有るものと、[五]善住城に近づき、說法敎化したまへり。

『復次に不空見、爾の時、寶聚如來應供等正覺は、即ち食時に於て、衣を著し鉢を持し、彼の七十二億百千の、大聲聞衆の與めに、前後圍遶せられ、威容詳雅にして、善住城に入り、次第に乞食したまへり。

『彼の精進王、適々二子と、高樓の上に在り、遙かに、彼の寶聚如來、大衆に圍遶せられ、端嚴殊特にして、威德魏魏、行人觀視して、樂見せざるは莫く、諸根淸淨にして、心慮澹然、上下調伏して、奢摩陀に勝れ、第一功德の彼岸に到りて、一切種地を、具足し圓滿したまへるを望見しつ。

『王既に見已りて、奇特の心を生じ、喜勇すること無量、即ち二子と、諸の華鬘・塗香・末香及び餘の名香を取り、倶に宮門を出で、速疾に持して、寶聚如來應供等正覺の所に詣り、佛及び大衆に、奉獻し供養し、佛足を頂禮し、却きて一面に住しつ。

『復次に不空見、彼の精進王及び其の二子は、即便寶聚如來と、諸の大衆とに、[六]盡形供養せんことを要請したり。謂ゆる衣服・器具・飮食・醫藥の、凡そ是れ須つ所のもの、悉く皆給し奉り、庶事・隆厚にして、聖衆安きことを獲たりき。是の精進王と其の二子とは、德本を宿植し、常に佛法を求めたるに、今既に遭逢して、又受請を蒙り、心に歡喜を生じ、慶幸持に深かりき。

『復次に不空見、時に彼の寶聚如來應供等正覺、天人中に於て、說法敎化し、應に作すべきを「作し」已り、便ち中夜に於て、[七]無餘涅槃に入りたまへり。

『不空見、時に精進王、彼の世尊の般涅槃と聞き已り、即ち夫人及び其の二子と、竊ら群臣及び諸民衆を率ゐて、彼の世尊般涅槃の處に詣り、至り已りて、世尊の足下に敬禮し、悲號啼哭、胸を椎ちて大叫し、擧身投地すること、[八]樹の中摧するが如く、地に躄れ、宛轉して而傷歎して曰く、「世尊の滅

【五】善住城、宋譯は善建に作る。

【六】盡形、終生を意味す。盡二其形壽一と宋譯は云へり。

【七】無餘、無餘依の略、煩惱障を斷じて得たる涅槃。五蘊和合の身體、すべて滅して、全く所依なき故にこの名有り。

【八】樹の云云、宋譯には如二大山崩一と云へり。

卷の第二[一]

不空見本事品の餘[二]

『復次に不空見、彼の精進王は、慈愛憐愍を以て、多く好んで檀[三]を行じ、常に大會無礙の施主と爲り、天下の所有沙門・婆羅門・貧窮・疾病・乞求者の、須つに隨ひて給與し、休厭有ること無かりき。

『復次に不空見、彼の精進王の、凡て統領する所の、八萬四千の城邑・聚落は、皆是れ淨業勝因の所感にして、七寶をもつて合成したり。諸城の上に於て、一一に、復八萬四千の栴檀の樓觀を造り、諸門の左右の亭傳・路次には、悉く堂舍有り、衆寶をもつて莊嚴したり。門は晝夜無く、常に開きて閉ぢず、以て一切の等しく大安を獲るに擬したり。

『又諸城內の衢巷・街陌には、恆に燈燭を然したれば、大光明有り、彼の人民をして、各々力めて作すべきを爲し、同じく共に、斯の安隱快樂を受けしめたり。

『復次に不空見、彼の精進王、時に二子有り、一を師子と名け、二を師子意と名け、諸根明利にして、身相圓滿、大威德有りて、神通を具足し、皆已に先づ阿耨多羅三藐三菩提を發したり。

『復次に不空見、爾の時に當つて、佛世尊有り、號して寶聚[四]如來・應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ひ、世に出現して、常に天人・梵魔・沙門・婆羅門・諸龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅乃至一切の人・非人等の爲に、正法を宣明したまふに、初・中・後善く、義味深奥にして、其文亦善く、純ら無雜淸白の梵行を備へたまへり。

『復次に不空見、時に彼の寶聚如來應供等正覺は、常に七十二億百千の、諸大聲聞の、皆阿羅漢に

【一】宋譯、卷第一つゞき。

【二】同には品を分たず。

【三】檀 dāna 施。

【四】寶聚、宋譯は寶肩に作る。

是等の華果、香鮮愛す可く、人民の取用するに、遮禁する者無かりき。

『復次に不空見、彼の精進王は、禀性仁愛にして、衆生を慈念すること、母の子を愛しむが如く、亦常に深心もて、沙門・婆羅門・刹利の長者などに敬事したること、子の父に事ふるが如くなりき。

『復次に不空見、彼の王の形量は、魁偉にして、常人に挺異し、身體圓滿にして、衆相具足し、面目端正にして、顏色光榮、威德弘普して、天人愛敬したり。

『復次に不空見、彼の王は、德本を宿植して、刹利の家に生れ、種姓尊高にして、世に勝る者無く、所生の父母は、七世のあひだ、清淨にして、妻子眷屬の福慶合同し、一人として、過非を行ずる者無かりき。

『復次に不空見、彼の王は、福業を以ての故に、天下豐饒、凡て是の百味、恒に倉廚に滿ち、綺錦諸珍など、府庫に盈溢したり。

大集經菩薩念佛三昧分卷第一

『復次に不空見、彼の王の城外の多羅樹林は、行人の遊處、下に在りて休息し、若は飲み、若は食い、或は臥し、或は坐するに、此の寶樹の諸の微妙の音を聞きて、皆五欲の妙樂を受けざる莫かりき。

『復次に不空見、彼の精進王は、大城の内、近遠皆一射箭の如き所に於て、一の華池を置き、四岸及び底は、皆四寶をもつて成じ、四面の階道、七寶をもつて莊飾したり。謂ゆる黄金の階道は、白銀をもつて莊飾し、白銀の階道は、琉璃をもつて莊飾し、琉璃の階道は、頗梨をもつて莊飾し、頗梨の階道は、馬瑙をもつて莊飾し、馬瑙の階道は、珊瑚をもつて莊飾し、珊瑚の階道は、虎珀をもつて莊飾し、衆寶雜厠して、見る者歡喜したり。

『復次に不空見、彼の池には、復諸種の妙華有り、謂ゆる優鉢羅華・鉢頭摩華・拘物頭華・分陀利華など、是の如きの衆華、香氣芬馥として、衆生の聞く者、愛樂せざるは無かりき。

『池の岸上に於て、諸の華を植ゑたり。謂ゆる〔六三〕伊尼摩迦、乃至達毱迦利華など、衆華の愛す可きこと、猶し天華の如くなりき。

彼の華池の門は、常に開きて閉ぢず、人民往來するに、遮禁する者無かりき。

『復次に不空見、彼の精進王は、大城の内に於て、遊觀の園を置き、諸園の中に於ては、復種種七寶の樹林有りて、常に華果有りき。王は夫人・後宮の侍御と同じく、遊處に觀欣取樂を共にし、門も亦限らず、彼の人民の遊歡・嬉戲に任せ、等しく快樂を受けしめたり。

『復次に不空見、又彼の園の內面、各一箭の所に於て、別に花池を置き、亦金等の四寶を以て、成ずる所なりき。復七寶を用つて、階陛を嚴飾したれば、衆色光麗にして、見る者樂觀したり。彼の池水內の、種種の諸華は、謂ゆる優鉢羅華乃至分陀利などにして、是等の衆華、芳鮮愛す可かりき。池岸に、復多種の林樹、及び諸の華果有りき。謂ゆる婆尼斫迦華・陀摩那伽・乃至達毱迦利華など、

【六三】伊尼摩迦、宋譯には伊尼曾花樹に作る。

『復次に不空見、彼の精進王の、其の塹の岸上には、種種の華を植ゑたり。謂ゆる[五七]尼文迦多華・鉢帝劍華・阿地目多迦華・瞻波迦華・[五八]婆梨師迦華・[五九]拘毘羅陀華・[六〇]達奴迦利迦華なり。是の如きの諸華、香鮮にして愛すべきこと、猶し天華の如く、民人の取用するに、亦遮護する無かりき。

『復次に不空見、彼の城には、各〻七重の行列有り、多羅寶樹をもつて周匝し圍遶し、鮮明愛す可く、七寶をもつて合成したり。其の黃金の樹は、白銀をもつて、葉及以華果と爲し、白銀の樹には、眞珠をもつて、葉及以華果と爲し、眞珠の樹には、琉璃をもつて、葉及以華果と爲し、琉璃の樹には、頗梨をもつて、葉及以華果と爲し、頗梨の樹には、馬瑙をもつて、葉及以華果と爲し、馬瑙の樹には、車渠をもつて、葉及以華果と爲し、車渠の樹には、赤眞珠をもつて、葉及以華果と爲し、赤眞珠の樹には、珊瑚をもつて、葉及以華果と爲し、珊瑚の樹には眞金をもつて、葉及以華果と爲したり。

『復次に不空見、諸の多羅樹は、光茂きこと觀る可く、微風觸るれば、動じて妙なる音聲を出し、若し聞くことを得ん者、歡喜愛樂すること、人の樂を作して、能く種種微妙の音聲を生ずるに、若し聞くことを得る有らば、愛樂せさる無きが如くなりき。彼の多羅樹は、風來りて觸るゝ時、微妙の音を出し、人をして聞かんことを樂はしむること、亦復是の如くなりき。

『復た次に不空見、彼の王城の中には、常に是の如き、種種諸の聲有り、未だ曾て斷絕せざりき。謂ゆる象聲・馬聲・車聲・步聲・鼓聲・貝聲・箜篌聲・琴・瑟・琵琶・[六一]箏・笛・[六二]笳・簫など、是の如き、一切種種の音聲、未だ曾て暫くも息まざりき。

『王は恒に國內の民人に宣令し、誰れか所須有らば、飮食・衣服・象馬・車乘など、意の所須に隨つて、皆悉く給與したり。

【五七】尼文迦多、鉢帝劍に代へて、宋譯には尼曾花樹、迦多曾尼花樹を擧ぐ。
【五八】婆梨師迦 Pāruṣaka
【五九】拘毘羅陀 Kovidāra の誤なるべし。起世經等、波利質多羅の別名とす。
【六〇】達奴迦利迦 Dhānuṣkāri
【六一】箏、十二、又は十三弦の琴。
【六二】笳、蘆の葉を卷いて作れる一種の笛。

の重は別つに皆七寶を以てしたり。謂ゆる・[五一]金銀・琉璃・頗梨・馬瑙・車渠・眞珠・珊瑚なり。盡く是の如き衆寶を用ひて、間錯したり。

『復次に、不空見、當に知るべし、彼の城を知るべし。城に四面有り、面に三門を別ち、門は各ゝ皆二[五二]闕有つて相對す。樓閣は高廣にして莊嚴殊に麗しく、具足して咸妙寶を以て合成したり。

『其の門の中堅に當り、帝釋の勝幢を以て、門限と爲し、乃至所有楣・棖・樞・閫は、一切皆是れ衆寶を以て、[五三]厠塡したり。

『復次に不空見、彼の城の諸門には、咸金銀二種の絡網有りて、其上に羅覆せり。復網上に於て、種種嚴飾し、金網には銀鈴、銀網には金鈴あり。清風吹きて動けば、微妙の音を出し、具足和雅なること、猶し天樂の如くなりき。

『復次に不空見、彼の城は七重にして、七重の內に於て、寶階を具足し、斯に[五四]欄楯有りて、鏤綺分明なりき。七寶所成の雜色、愛すべく、[五五]金欄の處に於ては、白銀の茸を垂れ、銀欄の所に於ては、眞珠の茸を懸け、珠欄の處に於ては、琉璃の茸を懸け、乃至種種の諸綵交錯し、衆寶間り懸りて、互相に映發したり。

『復次に不空見、彼の城には、七重に周匝して、皆寶[五六]塹有つて圍遶したり。謂はゆる金・銀・琉璃・頗梨・馬瑙なり。諸種の莊嚴、皆寶を用ひて、其の塹を成じぬ。各ゝ七寶の階陛有り、雜色分炳にして、微妙なること觀る可し。

復次に不空見、彼の精進王の、諸の塹の水中には、妙華盈滿したり。謂ゆる優曇鉢花・鉢頭摩花・拘物頭花・分陀利花なり。是の如き衆花、光明愛す可く、鮮潔柔軟にして、芳烈遠く聞え、衆生の受用するに、遮護する者無かりき。

【五一】金等、大集部、第三、一三頁參照。

【五二】闕、宮門外の兩旁にある臺。

【五三】厠塡、まじへ、うづめるなり。

【五四】欄楯、欄干の謂。

【五五】金欄云云、宋譯には、金階道者、銀爲欄楯とす、以下も同じ。

【五六】塹、堀なり。

不壞の難思議を得たまへるに由つて、　應に今日我をして請はしめたまふべからず。
我れ世尊の週顧したまふ時を觀るに、　大地便ち隨つて六反動く、
神足の如來の如きもの有ること、　是の如き自在は人中の最たり。
世尊の光明の照觸する所、　能く狂者をして心を失せざらしむ、
但だ能く暫く如來の光を覩るに、　或は時に失念するも旋りて卽ち復る。
世尊の行きたまふ時、足蹠を動かすに、　衆生の遇ふ者七日樂しむ、
乃至壽終つて意に隨つて生ず、　故に我れ與樂者に歸命しまつる。
若し人病に遭ひて大苦を受け、　衆の痛酸迫りて堪ふる能はざるも、
暫く世尊の手を以て摩したまふを蒙るに、　卽ち安隱を得ること不可說なり。
世尊の法身に斯の力を具したまふは、　皆曠劫より長時の修に因る、
是の處終に疑惑有ること無し、　導師應に我に請を勸めたまふべからず。
人中の獨尊は種種の能あり、　調伏の大仙は一切を度したまふ、
我今還天人師に白す、　是の故に我に請を勸めたまふべからず』と。

爾の時、世尊、復不空見菩薩に、告げて言はく、『善い哉・善い哉、汝不空見、快く是の事を說けり。善く之を思念せよ、吾れ當に解說すべし』と、不空見言さく、『是の如し、世尊、惟だ願くは、廣く我に釋き給へ、今諦かに受けん』と。

佛、不空見に告げたまはく、『我れ過去無量無邊阿僧祇劫を念ずるに、時に彼に王有り、[五〇]無邊精進と名け、大神通有りて威德を具足し、正法を以て治化したり。所居の大城を、名けて善住と曰ひ、其城寬曠にして東西は具さに十二由旬に滿ち、南北は惟だ七由旬半有り。城には七重有り、其の城

【五〇】無邊精進、宋譯は無量力に作る。大城の善住をば同は善建に作る。

『世尊は百福の金色身あり、
功德、智慧、斯れ滅ずる無し、
等類有ること無き人中の尊は、
法王の功德已に究竟す、
佛は滅清淨にして禪第一、
解脫知見先づ圓滿したまふ、
法王は威儀咸具足したまひ、
既に能く自利し亦利他したまふ、
世尊の慈悲は久しく淳至なり、
無障礙の辯も稱量し難し、
能く一切の貧乏に財を施し、
勝尊能く怖るゝ者をして安からしめたまふ、
佛身は滓穢も汚す能はず、
生るゝ處は王中の聖王の家なり、
聖衣の身を離るゝこと四指の間にして、
旋嵐巨風吹けども動ぜず、
世尊尋常に路を行きたまふ時、
或は高阜を經るに卽ち坦然たり、
世尊の身相は悉く圓滿して、

慈悲あり、妙に第一義を覺したまふ、
忽ち我をして請はしめたまふ、何の因緣ぞや。
世間の勝智も超ゆる者靡し、
何に緣つてか今日我に請ふことを勸めたまふや。
智慧深妙にして解脫も眞、
何が故にか今日諮問を勸めたまふや。
一切世間最尊の雄なり、
大師何に因つてか我に請ふことを勸めたまふや。
曠劫常に行じて怨親なく、
何に因つてか世尊我をして請はしめたまふや。
亦世間の生盲の眼をば開き、
何に緣つてか世尊我に請ふことを勸めたまふや。
衣服も本來塵垢を離る、
何に因つてか今方に請ふことを勸めたまふや。
終に體に近づくこと無くして能く住し、
聖尊何なる事か請ふことを勸めたまふや。
至る所窊凸自ら平滿、
何に因つてか今日我をして請はしめたまふや。
行步するに支節動搖することなし、

比丘、汝ら諦當に善く聽くべし、
是の處に於て驚疑を生ずる莫し、
往昔、諸佛所行の道は、
現在一切人中の尊の、
當來に大悲もて世を愍む者の、
我れ今無礙智を具足す、
世間に超出して與に等しき無し、
我れ過去の諸佛の說を聞いて、
諸如來の智は測る可きこと難し。
我れ先づ知り盡して復た疑ふ無し、
所得の菩提を我れ已に證す、
自然法身を我れ覺知しつ。
是の如きの大智は稱量し難し、
一切衆生能く測ることなし」と』。

〔四八〕不空見本事品　第二の一

爾の時、世尊、尊者舍利弗、尊者大目犍連、尊者大迦葉、尊者須菩提、尊者富樓那彌多羅尼子、是の如き等の、神通を具し、大威德有る、諸大弟子に告げて、言はく『汝諸比丘、汝の知る所の如きは、汝の境界に依る。當に我が前に於て、各〻師子吼すべし。何を以ての故にとならば、若し汝說かば、此の一切の天人大衆と、諸聲聞の人とをして、咸信解を得しむるが故なり』と。

爾の時、世尊、復〔四九〕彌勒菩薩摩訶薩、文殊師利菩薩摩訶薩、越三界菩薩摩訶薩、超不思議菩薩摩訶薩、善行歩菩薩摩訶薩、初發心卽轉法輪菩薩摩訶薩、善思惟菩薩摩訶薩、大音聲菩薩摩訶薩、持世菩薩摩訶薩、不空見菩薩摩訶薩等に、告げて言はく『不空見、汝今當に、大師子吼し、決定して、諸佛世尊所得の功德、眞實の相貌を說かんことを請ふべし。汝若し請はゞ、則ち能く一切世間の、諸の衆生輩をば利益せん。是の故に、我れ今躬自ら、汝に勸む』と。

時に彼の不空見菩薩、聖教を聞き已り、卽ち佛前に於て、偈を以て讃じて曰く、

〔四八〕品名、宋譯同じ。

〔四九〕彌勒以下、宋譯は越三界、不思議、不空見の三菩薩を出せるのみ。

欲したまひてなり。今我が世尊も、亦當に此の天人大衆の爲に、是の如く念佛法門を演說したまふべし。諸の衆生を、安樂にし利益せんとしたまふが故に」と。

『彼の諸天子、是の如く念じ已り、即便ち我に、此の法門を說かんことを請へり。時に我れ、默然として、其の爲に說かんことを許したり。諸天知り已るや、是に於て現れざりき』と。

爾の時、世尊、即ち頌を說いて曰く、

「比丘知るや、昨の中夜の後、　淨居天王の摩醯羅、
諸天衆及び眷屬——　難陀及び須難陀、
須摩那天、栴檀等、　乃至難勝、須多波を將ひ、
普く世間に勝光明を放ちて、　直ちに此土の耆闍崛を照したるを。
彼の天既に我が所に來至し、　天の華香を以て供養しつ、
然も始に我を右遶すること三周、　頂禮恭敬して一面に住しつ。
彼の諸天子、默して念を生ずらく、　今此の念佛修多羅は、
過去の最勝曾て廣宣したまへり、　世間の衆生を憐愍したるが故に、
今我が釋尊は十力具はる、　寧ぞ斯の法門を演說したまはざる、
世間の諸群生を利益し、　一切の天人を安隱にせんための故にと。
諸天念じ已つて便ち請を發しつ、　時に我れ默然として遂に之を許す、
我れ故に耆闍山に於て、　先の諸佛の演說する所の如くせんと欲す。
天我れ已に之を許すを知るが故に、　大歡樂、尊敬の心を生じ、
一切咸復恭敬し禮し、　右遶すること三周にして然る後に去りつ。

大地六反動き、衆生をして歡喜せしめたまふ。
如來斯の座に處し給ふに、法王は光明を放ちたまへり、
當に知るべし、是の如き時、衆生等しく樂を受くるを。
正覺斯の座に處し給ふに、大智歸依の處は、
光を放ちて世間を利し、遍く此佛刹を照したまへり。
奇なる哉、是の大乘や、最勝の乘にして無上なり
如來斯の座に處し給ふに、利益思議し難し。
奇なる哉、是の大乘や、最勝の乘にして無上なり、
沙門婆羅門は、此に於て能く測るなし』と。

爾の時、世尊、廣長の舌を出して、遍く此の三千大千世界を覆ひ已り、諸の菩薩摩訶薩、及び諸の大聲聞衆に、告げて言はく『諸の善男子、汝等當に知るべし、昨中夜の後、欻ち淨居諸天の、難陀天子、須難陀天子、梅檀天子、須摩那天子、難勝天子、乃至須多波天子等有り、無量の諸天子と與に、大威德有りて、大神通を具し、盛光明を放ちて、直ちに耆闍崛山を照し、我が所に來至して、即ち種種天上の妙香——所謂天の末梅檀、乃至天の多摩羅跋香等を以て、我が上に散じ、復種種の天華、所謂優鉢羅華、乃至大曼殊沙華等を以て、我を供養し、右遶三周して、我が足を頂禮し、退いて一面に住したり。

『彼れ退き住し已るや、更に我が所に於て、敬上の心を增し、十指の掌を合せ、默然として住し、住し已つて、即ち是の如きの思惟を作さく「今此の一切菩薩念佛の法門は、過去の諸如來・應供・等正覺も、已曾て彼の天人大衆の爲に、宣揚し解釋したまへり。惟だ彼の諸の衆生を、安樂にせんと

衆相莊嚴を見て、愛樂すべきや不や』と。不空見の言く『是の如し、世尊、是の如し、婆伽婆』と。

佛復告げて言はく『不空見、汝應に知るべし、此の地の方所には、往古の諸如來・應供・等正覺、已會て受用し敎化し遊居したり』と。

爾の時、不空見菩薩、佛の敎を聞き已り、速疾に行いて彼の方處に趣き、彼の方に至り已つて、便ち三昧に入る。三昧に住するの時、自然に上妙の寶座を成就し、種種の莊嚴皆悉く具足し、座を嚴飾し已つて、還佛の所に詣り、頭面もて足を禮し、佛に白して言さく『世尊、今此の方處の莊嚴は是のごとし、惟だ願くは、世尊、亦當に時に及んで、斯の勝地に處し給ふべし』と。

爾の時、世尊、便ち方所に往き、方所に至り已つて、法の如く座に昇りたまへり。是の如來・應供・等正覺の、此の座に昇り給へる時に於て、此の如く、三千大千世界の一切の大地は、六種に震動したり。所謂、[四〇]動・遍動・等遍動、[四一]震・遍震・等遍震、[四二]涌・遍涌・等遍涌、[四三]吼・遍吼・等遍吼、[四四]起・遍起・等遍起、[四五]覺・遍覺・等遍覺。[四六]東涌西沒、西涌東沒、南涌北沒、北涌南沒、中涌邊沒、邊涌中沒なり。

時に此の大地、是の如く動じ已るに、佛神力の故に、此の世界に、遍く大光明有りて、諸の衆生等をして快樂を受けしめたり。下阿鼻大地獄中に至るまで、所有衆生、光觸を身に蒙るに、諸苦消滅して、等しく快樂を受けたり。是の如き、一切の諸地獄中の、苦を受くるの衆生、及以諸の畜生輩の、更相に殘害するもの、[四七]閻羅王界の諸の餓鬼等、斯の光に遇ひ已るや、所有の苦、具に皆悉く消除し、飢渴も充滿して、衆生の、樂を受けざる者、有ること無かりき。

爾の時に當り、一切の衆生、悉く惡念を捨て、皆慈心を生じ、遞相に樂を受けて、各〻悲愍を懷くこと、猶し親屬の相視て、歡欣し和合して、同座するが如くなりき。是に於て、讃じて曰く、

『世尊斯の座に處し給ふに、　能く大光明を放ち、

【四〇】動、遍動、等遍動、Kampitā, Pra-k. Sampra-k.
【四一】震、等の三動、Kṣub-hita. Pra-k, Sampra-k.
【四二】涌等の三動、Vedhita, Pra-v. Sampra-v.
【四三】吼等の三動、Ranita, Pra-r, Sampra-r.
【四四】起等の三動、Calita. Pra-c. Sampra-c.
【四五】覺等の三動、Garjitā, Pra-g. Sampra-g. 遍、等遍は、その程度の、更に甚だしきを分つて云へるなり。
【四六】東涌西沒、以下の六は、地動の方向によつて區別したるもの。
【四七】閻羅王、Yamarāja 罪人を縛するの義。地獄の總司。

上に散じ、供養し恭敬し、至心に瞻仰したり。

爾の時、大衆の中に、尊者舍利弗、尊者目犍連、尊者大迦葉、尊者[三三]須菩提、尊者[三四]富樓那彌多羅尼子、尊者羅睺羅、尊者[三五]大劫賓那、尊者大迦旃延、尊者[三六]阿泥樓陀、尊者護世、尊者[三七]守籠那、尊者難陀、尊者阿難等有り、上首たり。及び餘の一切の、諸大聲聞も、皆是れ大德にして、大神通を具し、一切皆、斯の會坐に來集したり。

爾の時、大集中に、復た尊者有り、彌勒菩薩摩訶薩、越三界菩薩摩訶薩、初發心卽轉法輪菩薩摩訶薩、善思菩薩摩訶薩、大音聲菩薩摩訶薩、[三八]善行步菩薩摩訶薩、超三世菩薩摩訶薩、不空見菩薩摩訶薩を上首と爲しつ。及び餘の、無量無數の菩薩摩訶薩も、皆過去無量の諸如來の所に於て、諸の善根を種ゑ、衆行熏修して、功德成滿し、久しく已に、阿耨多羅三藐三菩提に住することを得たるなり。

爾の時、尊者不空見菩薩摩訶薩、佛世尊の、復微笑し給へるを見已り、座より起ちて、容を整へ服を理し、偏袒右肩して、右膝を地に著け、合掌して、佛に向つて偈を說いて曰く、

『最勝無上の兩足尊は、　緣無くして微笑を現じたまふべからず、
一切世間に等侶なし、　惟だ願くは我が爲に笑因を演べ給へ
常に貧窮に諸の須つ所を施し、　亦大乘最妙の寶を說き、
能く生盲の與めに[三九]眼膜を抉り給ふ、　今事の微笑は何の因緣ぞや、
世尊は三界に倘ほ比無し、　何に況んや世間に論勝を得、
能く世間の大導師と作りたまふ、　今應に笑を顯したまふは何の緣か有る』と。

爾の時、世尊、卽ち不空見菩薩摩訶薩に告げて言はく『不空見、汝今斯の勝地の方所、左右滲動、

【三三】須菩提、大集部第一、一四頁參照。

【三四】富樓那、同、第二、六六頁參照。

【三五】劫賓那 Kapphina 房宿と譯す。憍薩羅國人、よく星宿を知ること、衆僧中第一と云はる、宋譯相當文には摩訶金毘羅(Kumphila)に作り次の護世の相當文に劫賓那を置く。

【三六】阿泥樓陀、大集部、第一、七二頁參照。

【三七】守籠那、Śuroṇakoṭi-viṃśa 宋譯輸盧子に作る。佛世に阿羅漢果を證し、足地を踏まず、精進第一なりと云はる。

【三八】善行步、超三世の二菩薩の代りに、宋譯は持地と文殊との二菩薩を擧ぐ。

【三九】眼、麗本のみ胎に作る、今三本による。

爾の時、拘尸那城に、復無量の、諸力士末羅子有り、亦曾て、無量百千の諸佛世尊を供養し、久しく諸善根を、熏修したるを以ての故に、大威德有りて、勢力を具足したるが、亦無量の眷屬の與に圍遶せられ、拘尸那より、王舍城に詣り、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。亦如來を恭敬し供養して、正法を聽聞せんが爲の故なり。

爾の時、東方なる、過無量恆河沙の、諸世界中の、一切大梵天王、並びに餘の天衆など、大威德有り、大神通を具したるが、世尊の大師子王のごとき、謦欬の聲を聞ける時、咸大に驚愕して、擧身の毛竪ちつ。佛の威神を承けて、各々無量千萬の天衆の眷屬の與に、圍遶せられ、皆本處より發ちて、此の娑婆世界の、王舍大城に來詣し、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。

是の如く南西北方、四維上下にも、皆是の如き、無量恆河沙の世界有り、所有一切の大梵天王、及び餘の天衆など、大威德及び大神通有り。佛世尊の大師子王のごとき、謦欬の聲を聞ける時、亦驚悚して、擧身の毛竪ちつ。佛の威神を承けて、各々無量千萬の、天衆眷屬の與に、圍遶せられ、皆本處より發ちて、此の娑婆世界の、王舍大城に來詣し、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。

爾の時、耆闍崛山は、其の地弘博にして、縱廣正等なれども、此の如く、三千大千世界の大衆充滿して、容處の杖頭許の如きも、有ること無かりき。然も彼の大衆は、皆無量の大威德力、及び大神通有りて、一切の天人・諸龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人の輩、皆悉く充滿しつ。

爾の時、世尊、諸の世間天人の大衆、一切の集るを知り已つて、復是の如き大師王の謦欬の聲を發し、大聲を發し已つて、精舍より出で、一方所に至つて、復た微笑したまへり。

時に諸世間天人大集、是の事を見已り、各々己が服、及び諸の華鬘を捨て、種種の香を以て、佛

【三】拘尸那 Kuśinagara 角城、茅城など譯す。佛入滅の地なるによつて知らる。この國の族を Malla 末羅と名く。

聲を聞き、心に驚[二六]悚を生じ身の毛皆竪ちつ。各々無量百千の眷屬の與に、前後圍遶せられ、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。

爾の時、此の三千大千世界の、所有諸の大龍王、及び其の眷屬たど、彼れ各々佛の謦欬の聲を聞ける時、心に驚悚を生じ、身の毛皆竪ちつ。佛の威神を承け、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。

爾の時、[二七]舍婆提大城の、[二八]給孤獨長者も亦無量百千の眷屬の與に、前後圍遶せられ、舍婆提より、王舍城に詣り、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。如來を恭敬し供養して、正法を聽聞せんと欲したるが爲の故なり。

爾の時、[二九]毘舍離大城に、亦無量の諸梨車子有り、皆大淨婆羅門家に生れたり。其の名を善思梨車子、伏怨少壯梨車子、功德生梨車子、無邊手梨車子、擧手梨車子、然手長者子と曰へり。是の如き等を上首と爲し、皆已に久しく、無上の大乘に住したるが、各々無量百千の眷屬の與に、前後圍遶せられ、毘舍離より、王舍城に入り、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。

爾の時、[三〇]瞻波大城に、復無量の、諸長者子有り、已に過去に於て、無量無邊の諸佛を供養し、諸善根を種ゑ、大威德を具し、大勢力有りき。其の名を善住長者子、利益長者子、無邊精進婆羅門子と曰へり。是の如き等を上首と爲し、及び餘の無量の長者居士など、各々無量百千の眷屬の與に、前後圍遶せられ、瞻波城より、王舍城に詣り、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。如來を恭敬し供養して、正法を聽聞せんと欲したるが爲めの故なり。

爾の時、[三一]波羅奈城に、無量種の、異類の人衆有り、已に過去に於て、無量百千の諸佛を供養し、諸善根を植ゑて、皆已に純熟したるが、波羅奈より、王舍城に詣り、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。如來を恭敬し供養して、正法を聽聞せんと欲したるが爲の故なり。

【二六】懼なり。

【二七】舍婆提 Śrāvasti の音寫、舍衞國と普通に云はる。

【二八】給孤獨、Anāthapiṇḍada 佛の爲に祇園精舍を建立したるにて知らる。能く孤獨の者に給與したりといふ。

【二九】毘舍離 Vaiśālī 廣嚴と譯す、中印度に在り。六大城、或は十六大國の一。第二結集の所として知られ維摩、こゝに在りしと云へり。この國の種族を離車、又は跋闍子といふ。本文に梨車といへるこれなり。

【三〇】瞻波 Campā 中印度に在つて恒河に邊す。この國の城は、印度に於ける諸城の初なりと云はる。

【三一】波羅奈 Vārāṇasī 中印恒河流域の國、佛初轉法輪の鹿苑はこの國に在るに依つて有名なり。

して、是の諸天子の請を受けたまへり。

時に諸の天子、佛の默然たるを見、聖の哀許し給へるを知つて、佛足を頂禮し、圍遶すること三匝、耆闍崛山に於て、忽然として、見れず、天宮に還りぬ。

爾の時、世尊、[13]夜の後分を過ぎて、將に明旦ならんとするの時、便ち大師子王謦欬の聲を作して、復微笑し給へり。時に佛・如來・應供・等正覺、忽ち是の如き殊異の聲を發し已るに、須臾の間に、是の耆闍崛山なる精舍の所有比丘衆は、佛の威神を承けて、一切皆悉く、如來・應供・等正覺の所に集りぬ。

爾の時、復衆多の、異なれる[14]阿蘭若處の、諸比丘等有り、大神通を具へ、大威德有るが、亦皆佛の威神を承けて、倶に阿蘭若處より來り、耆闍崛山に入りて、如來の所に集りつ。

爾の時、王舍大城の、一切の諸比丘尼も、亦皆佛の威神を承け、耆闍崛山に入りて、如來の所に集る。

爾の時、[15]摩伽陀國主なる、韋提希の子・[16]阿闍世王も、無量百千の眷屬の與に、前後圍遶せられて、耆闍崛山に入り、如來の所に集れり。

爾の時、復諸の夜叉大將有り、其名を[17]阿陀婆迦・曠野居夜叉大將、[18]伽陀婆迦驢形夜叉大將、[19]金毘羅摩竭魚夜叉大將、[20]須脂路摩針毛夜叉大將、[21]摩羅陀梨持華鬘夜叉大將と曰へり。是の如き等の、諸夜叉を首と爲し、並びに餘の諸の夜叉輩、大威神有り、大勢力を具したるが、各々無量百千の眷屬の與に、前後圍遶せられ、耆闍崛山に入りて、佛所に集りぬ。

爾の時、復諸の阿修羅王有り、其名を大叫の[22]羅睺阿修羅王、種種可畏の[23]毘摩質多阿修羅王、[24]須婆睺善臂阿修羅王、[25]波訶羅舒展陀阿修羅王と曰ひ、大威神有り、大勢力を具したるが、佛の警

【一三】夜の後分、夜を初・中・後に三分したる中の後夜をいふ。

【一四】阿蘭若、大集部第一、三三二頁參照。

【一五】摩伽陀、同、第三、二一三頁參照。

【一六】阿闍世、同、第二、五一頁參照。

【一七】阿吒婆迦 Âtavakā-yaksa 曠野居とはその譯なり。以下同じ。

【一八】伽陀婆迦 Gardabha

【一九】金毘羅 Kumbhira

【二〇】須脂路摩 Sūciroma

【二一】摩羅陀梨 Mālyadhāri

【二二】羅睺 Rāhu

【二三】毘摩質多 Vemacitra

【二四】須婆睺 Subāhu

【二五】波訶羅舒展陀、宋譯、波呵羅頭に作る。

婆羅華、[一〇]曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、[一一]阿地目多華を以て、是の如き等の種種の衆華を以て、亦慇懃に、再三佛上に散じ已る。

而して復漸進し、前みて佛所に詣り、右遶三匝し、一心に恭敬して、十指の掌を合せ、稽首して佛を禮し、退いて一面に住したり。

爾の時、諸の天子衆、各々是の如く念じぬ『今此の菩薩、一切佛の三昧の法門を念ずるに、過去の諸如來・應供・等正覺は、已曾て彼の天・人大衆の中に於て、宣揚分別したまへり。一切の諸衆生を利益せんがための故に。今我が世尊、豈に斯の天人・大衆・梵・魔・沙門・婆羅門・[一二]諸龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の爲に、是の如き妙典を敷演し宣說したまはざらん。一切世間の天人大衆をば、利益せんと欲したまふが爲の故に。亦未來世の、一切衆生をして、咸利益を蒙らしめんとしたまふが故に』と。

爾の時、難陀天子、須難陀天子、栴檀那天子、須摩那天子、自在天子、大自在天子、難勝天子、善威光天子など、是の如き一切の諸天子衆は、是の思惟を作し已り、卽ち佛に白して言さく、『世尊婆伽婆、今此の菩薩、一切佛三昧の法門を念ずるに、過去の諸如來應供等正覺は、已曾て諸の天・人の大衆・梵・魔・沙門・婆羅門、諸龍・夜叉・乾闥婆、乃至一切の人非人等の爲に、是の如き經典を、敷揚し演說したまへるは、世間の諸の衆生を、利益せんとしたまへるが故なり。

『惟願くは、世尊、大慈もて哀愍して、今亦此の天人の大衆、梵・魔・沙門・婆羅門、及び彼の一切の人非人等の爲に、是の如き方等の法門をば、演說し給はんを。諸の世間をして、多く利益・安隱・快樂を獲しめたまはんが故に』と。

爾の時、世尊、大悲心に薰じ、一切世間の諸衆生を・利益せんと欲したまへるが爲の故に、默然と

【一〇】曼陀羅華等、同、第一、二八頁參照。

【一一】阿地目多 Atimuktaka 善思花、龍舐など譯す。大麻の如く、赤華青葉なりといふ。

【一二】諸龍等の八部、大集部第一、二八頁參照。

大集經菩薩念佛三昧分[一]

隋天竺三藏達磨笈多譯す

卷の第一[二]

序品第一[三]

爾の時、[四]婆伽婆、王舍城・耆闍崛山の中に在して、大比丘衆、千二百五十人と倶なりき。一切皆是れ、大阿羅漢にして、諸漏已に盡き、復煩惱なし。[五]心も善く解脱し、[六]慧も善く解脱して、一切を調伏すること、猶し大龍の如し。重擔を捨離して、後有を受けず、所作已に辦じて、眞に己が利を獲、平等智に住して、解脱の門に入り、自在に衆苦の彼岸に、度ることを得たり。惟尊者阿難一人を除く。

復無量の諸菩薩摩訶薩衆有り、皆十方世界より來れる者にして、各々一切の菩薩摩訶薩衆と倶なりき。

復無量の[七]淨居の諸天子あり、其名を難陀天子、[八]須難陀天子、栴檀那天子、須摩那天子、自在天子、大自在天子、難勝天子、善威光天子と曰ふ。是の如き等の諸天子衆は、夜半を過ぎて、已に大光明を放ち、直ちに此の耆闍崛山を照し已り、咸佛所に詣りて、尊の足を頂禮しつ。

卽ち天の[九]多摩羅跋香、天の沈水香、天の多伽羅香、天の末栴檀香、及び牛頭栴檀香の、是の如き等の種種の諸香を以て、慇懃に再三、佛上に散じ已り、復天の散華、及び天の雞婆羅華、摩訶雞

【一】菩薩念佛三昧經、五卷、宋天竺三藏功德直譯、參照。

【二】同卷第一。

【三】序品、宋譯亦同じ。

【四】婆伽婆 Bhagavat 世尊と譯す。

【五】心解脱、心、貪愛の煩惱を離れて自在を得るをいふ。

【六】慧解脱、無漏の智慧力を以て、見思二惑を斷じ、煩惱障を離れたる羅漢をいふ。

【七】淨居天、色界第四禪の上に在る五種の天。

【八】須難陀以下、宋譯には修難陀、栴檀、修摩那、……阿逸多、修行天子などに作る。

【九】多摩羅跋等諸香、大集部第一、八七頁參照。

所説と極めて相近きものがある。

更に同第二十七卷の無盡意菩薩品（同上第二、一八九頁）では、東方不眴世界の菩薩は、念佛三昧を得たるを説き、續いて佛を念ずる方法を述べ、菩薩得二是念佛三昧一、一切法中得二自在智陀羅尼門一、聞二佛所説一、悉能受持、終不二忘失一、亦得レ曉二了一切衆生言辭音聲無礙辯才一（同上一九〇頁）を示し、舍利弗をして、示現一切佛土三昧に入り、その土の佛と衆生とを見せしめたとあるが如きも、亦本經の説く所と、大半相通ずるものがある。

不眴品の如きは、一切法自在三昧と名けたくらゐで、未だ佛身・佛土をのみ觀ずることには至つて居ないが、無盡意品になると、名も念佛三昧又は示現一切佛土三昧と云ふまでに進んで居るけれども、要するに一切所緣の境界に著せず、法性は平等にして虚空の如く、六根六境の法を超えたることを思惟するに在る。本經になると、更に一段を進めて、色身觀に近くべき傾向が見える。かくて、不眴品では一切法自在三昧とあつたものが、無盡意品では念佛三昧となり、本經ではそれが、次の階段たる色身觀に至る過程を示すものとなり、此等の二品の豫想のもとに、この三昧の功德善根を示すのが即ち本經であると考へられるのである。

昭和七年二月上旬

譯者　蓮澤成淳　識

(卷第八)、次でこの三昧門所作の功德の不思議がとかれる。

[修習三昧品] 玆には不空見に對して、無貪・無瞋・無癡、無常・苦・無我・過・現・未の諸佛に對する隨喜等の三法によつて、此の三昧が成就せられ、この三昧こそ、よく一切の善根を生ずることを說き、次で正法・像法の世に住することを述べ[卷第九]、此の三昧の善根・功德を觀察すべきこと、この三昧は諸佛の所說・所行の處・印可する所・正敎・辯才・所覺・選擇・所作・財寶・府庫・伏藏・倉庫・印璽・舍利であることを云ひ、[菩薩本行品] 佛が如意定智神通佛の爲に、此の法を持する過去・未來の諸佛を列擧して終る(卷第十)。

宋譯によると、この次に尙ほ二品があつて、[正念品]衆會の中の思議菩薩等が、玆に言ふ諸佛の所說とは云何、佛とは何、云何なるをか念佛と爲す、身念を起するや法念を起するや等を質すので、佛が是に答へられる。諸菩薩は四方の佛國でも、亦佛が各念佛三昧を說かれるのを見る。[大衆奉持品] こゝでは上下四方の國から來り集つた大衆の爲に、此の法を尊重敬恭すべきこと、佛と法とは異らざるが故に、我が(佛)身を求めん者は、法を敬事すべきことを說かれるので、會中の一切の人天が、皆歡喜頂戴する事を述べて終るのである。

三

經にいふ念佛三昧は、主として卷第七・八に說かれて居るが、それに依ると、法身を觀ずるにあつて、未だ色身の相好を觀ずることが見えて居ない。一切の諸佛を覩んと欲する者の修すべき法として、一法より一法を擧げ(卷七)、不㆔以㆑色觀㆓察如來㆒、不㆔離㆑色觀㆓察如來㆒、……不㆔以㆑地觀㆓察如來㆒、不㆔離㆑地觀㆓察如來㆒(卷八)など云へるは、正しく法身を觀ずるのであるが、護㆓得如㆑是一切菩薩念佛三昧㆒……彼諸世尊、常現㆓在前㆒(卷四)。住㆓三昧㆒已、常不㆔遠㆓離見㆒一切諸佛㆒、常不㆔遠㆓離聽㆒聞諸佛所說妙法㆒(卷八)。爾乃讃㆓誦三昧經㆒、彼見㆓無量億數佛、無邊淨光若㆒日輪㆒(卷九)などともあるから、法身觀から一歩を進めて、色身觀に近いて居ることを示すものであり、開元錄がその次に置くべしと云つて賢護分に說かれる、諸佛現前三昧に連絡するものである。

遡つて大集經卷第七の不眴菩薩品(大衆部第一、一四八頁)を見ると、有㆓三昧㆒、名㆓一切法自在㆒、菩薩修㆓習此三昧㆒者……亦得㆓無量無邊福德㆒……成佛之時、世界所有一切具足と云ひ、成㆓就何法㆒獲㆓得如㆑是一切諸法自在三昧㆒として、一法から十法に至る諸法聚を擧げて詳說して居る(同上一五二頁以下)所などは、本經の

つて、曾て乞食して婆羅門の家に至り、彼をして發願せしめた事、並に然燈佛の所に於て、一切菩薩の念佛三昧を得た事、この三昧を得れば、諸方の一切諸佛が現に說法し、乃至は現在前したまふ事、及び此の三昧に住すれば、無邊の神變を現じ得る事などを述べる。

〔歎佛妙音勝辯品〕 不空見菩薩が、阿難に向つて、佛の三轉十二行の法輪には、無量の文字・名句や義趣・解釋があつて、無敎の法をば敎を以て說き、無言の法をば言を以て說き、無相の法をば相を以て示し、無證の法をば證得せしめる爲に、衆生の根・欲に隨つて、自然に微妙の圓音を出し、種々の辯才を具したまふことを述べ(卷第四)て、佛音を讃歎すると共に、〔讃如來功德品〕不空見の佛德の讃仰が續く(卷第五)。

〔佛作神通品〕 佛が不空見菩薩に對して、如來は衆生の救護者であり、大歸依と作ることを說いて、その頂を摩せられると、不空見は四維上下の佛國土に在る、三世の諸佛とその刹土とを見、佛說法の音聲を聞く。〔見無邊佛廣請問品〕そこで不見空は、種々の功德神力を具する爲には、何等の三昧を思惟し、修行すべきや、を尋ねる(卷第六)。

〔讃三昧相品〕 之に答へて佛は、菩薩には念一切佛菩薩と名くる三昧こそ、當に親近修習し、思惟觀察すべき法であつて、是によつて無量の功德を得べきことを說かれる。〔正觀品〕此の念佛三昧を成就して、常に一切の佛を覩、それに承事供養すべき方法として、當下住二正念一遠二離邪心一斷二除我見一思中惟無我上から始まつて、勸造二作十善業道一に至るまで、廣く十法に互つた法數の聚が擧げられ、當レ知如レ是念佛三昧、則爲レ攝二一切諸法一といひ、若人暫聞レ說二此法一者、是人當來、決定成レ佛、無レ有レ疑也と結んである。

〔思惟三昧品〕 更にこの三昧を思惟するには、三世十方の如來を念ずべく、而もこの如來をば、五陰、五塵、四大に卽せず、亦此等を離れずして、觀念すべき事を說き(卷第七)、更に我見を捨離するが爲に、住著を離れ、身の不淨を觀ずべきを以てしてある。

〔示現微笑品〕 阿難の爲に佛が我當レ說二是正念三昧法門義一と云はれたのを聞いて、無量の衆生が益を得た事、〔神通品〕不空見に對して無慚愧を遠離すれば、當に此の三昧に住し、三寶を遠離せさることが說かれ、次で過去の善觀作王歸佛の物語があつて、如來と法を信じ、止と觀とを修し、斷常二見を離れ、慚と愧とを修して、此の三昧を得たことを述べ

大集經菩薩念佛三昧分解題

一

本經は隋の大業年中（西紀六〇五―六一六）に、達磨笈多が譯出に係り、劉宋の大明六年（同四六二）に功德直譯の菩薩念佛三昧經（五卷）と同本異譯であつて、廣略の違こそあれ、兩者は文文句句相對照し得るのみならず、譯語の一一も、共通なるもの極めて多いのを見るのである。內典錄の第六には、大方等大集菩薩念佛三昧經（十卷）として、念佛三昧經と幷べ擧げて、同本異譯なるを示し、開元錄第十一には、隋譯十卷者後闕二品と註記して居る。現存の三昧分の方は、三昧經に對照すると、いかにも開元錄の云ふ通り、二品を缺いて居るが、この二品は初めから譯されなかつたものか、譯されたのが後に失はれたのかは、俄に決定し得ない。けれども缺けて居る部分が經の最後である點から考へて、一度は譯出されたものと見ねばならない。現存の經は、宋譯が十六品、隋譯は十五品から成つて居るけれども、品の分け方が、相違して居るので、一方に在る正念品と奉持品との二品の相當文が、他方には無い譯である。

さて經題に云ふ念佛とは、如何なるものかを見る便宜上、先づ一經の大要を見ると、次の如くである。

二

［序品］　王舍城耆闍崛山に於ける說法であつて、天龍八部、聲聞・菩薩の外に、舍衞城なる給孤長者、毘舍離の諸梨車族、瞻波の長者子、波羅奈の異類の人、拘尸那の末羅族と、四方世界の諸天衆との集まつた會座で、不空見菩薩に對して、過去に於ける無邊精進王の善住城の美觀と（卷一）［不空見本事品の餘］この王の歸佛の因緣（その中に不空見の前生が示されて居る）とを說き、最後に若人欲レ見三三世佛一……必先受三持此三昧一と云つて、菩薩の念佛三昧に說き及ぶのみで、其の室に還つて定に入られる（卷第二）のである。

［神變品］　不空見菩薩は神通を現じて、この國土をば莊嚴する。是をば阿難が不思議なりとして、目連をはじめ、舍利弗、大迦葉、富樓那、羅睺羅（卷第三）、須菩提などに、その所以を尋ねる。

［彌勒神通品］　そこで彌勒が阿難に向

一

沙數の諸菩薩衆有つて、彼の會に來入し、上方には百倶胝殑伽沙數の諸菩薩衆有つて、彼の會に來入したり。

是の時、藥王軍菩薩、彼の佛に白して言はく『世尊、云何ぞ虚空は、周匝して皆[三九]赤・黑の二色と作れる』と。彼の佛の言はく『善男子、汝今知らざるや、是の如きの因緣を』と。答へて言はく『世尊、我れ知る能はず』と。彼の佛の言はく『唯佛如來のみ、自ら知察す。善男子、汝今當に知るべし、諸方の世界に、各若干倶胝殑伽沙數の諸菩薩衆有りて、佛會に來入すればなり』と。

是の如き諸菩薩衆は、方に隨つて來り已り、空より下つて、佛前に住立し、彼の佛足を禮して、各一面に住しぬ。

是の時、藥王軍菩薩、彼の佛に白して言はく『世尊、何の因緣の故にか、又復此の大菩薩衆有り、來つて集會する』と。彼の佛の言はく『善男子、此の諸菩薩大衆の集會は、初生の者を以て、係と爲して發起した事が故なり』と。

彼の佛、是の言を作したまへる時、有らゆる、會中の諸の初生の者、即時に皆、諸法を具足し、十地に安住するを得、又復彼の佛會中の、無數の菩薩行を修せる者も、皆諸菩薩の法に安住するを得、大神通を得て、見聞隨喜し、一切の衆生は、皆利樂を獲、諸有の已に菩薩地に住したる者、復退轉せず、菩薩の行法を增勝し堅固にしたり。

佛、此の經を說き已りたまふに、普勇菩薩等の諸の大菩薩、阿若憍陳如等の諸大苾芻、乃至世間の天・人・阿修羅等の一切の大衆は、佛の所說を聞き、皆大に歡喜し、信受奉行したりき。[四〇]

大集會正法經（終）

大集會正法經卷第五　八七

【三九】赤、異譯には、黃色に作る。

【四〇】元魏譯、卷第四終。

是の如くしたまはさる。豈に此等の類は、佛の正法を、了知する能はざらんや』と。

彼の佛の言はく『善男子、汝今何の故にか、是の如き言を作して、如來の前に於て、請問を伸べたる。此は柔順等の語とは名くるを得ず、何を以ての故にとならば、如來は諸の衆生に於て、平等に化度し、方便に隨順して說法を爲したまひ、諸の聞く者に者、皆利益を獲、具足して諸の總持の門に入り、一切の功德、皆悉く成就するを得ればなり』と。

爾の時、虛空中に、復無數の、廣大殊妙の七寶の樓閣有つて、佛の上に現はれぬ。是の時、彼の佛、藥王軍菩薩に告げて言はく『善男子、汝今此の殊妙の樓閣を見るや不や』と。藥王軍菩薩、答へて言はく『已に見まつる、世尊』と。

彼の佛の言はく『汝今當に知るべし、此等は皆是れ、諸の初生の者の、共に變現する所たり。何を以ての故にとならば、此の諸の初生の者は、皆是の日に於て、一切の善法を圓滿したればなり。又復我も、今日に於て、大法鼓を擊ちたるに、無數の天人有つて、法を具足するを得、無數の地獄の衆生は、苦惱を離るるを得たり、復無數の衆生有り、暫くなりとも正念を生じ、佛智に歸依して、皆解脫を得たればなり』と。

彼の佛、是の語を說きたまへる時、會中に九萬九千俱胝の久生の衆生有りて、須陀洹果を證得し、法を具足するを得、業情を斷除し、衆苦を遠離したり。是の如き等の類は、皆如來の正法より出生したるなりき。

爾の時東方には、五十俱胝の殑伽沙數の諸菩薩衆有つて、彼の會に來入し、南方には六十俱胝殑伽沙數の諸菩薩衆有つて、彼の會に來入し、西方には七十俱胝殑伽沙數の諸菩薩衆有つて、彼の會に來入し、北方には八十俱胝殑伽沙數の諸菩薩衆有つて、彼の會に來入し、下方には九十俱胝殑伽

最上の大悲もて、　　　　　　　　　　廣く諸の群品を度したまふ。
佛の威容高顯なること、　　　　　　猶し妙高山の如く、
智慧は窮り有ること無くして、　　　復彼の大海の如くなり。
善く諸の方便を開き、　　　　　　　隨順して衆生を化したまふ、
瞻禮すると歸依するとは、　　　　　皆安樂の果を得るなり』と。

爾の時、月上境界如來、迦陵頻伽の如き、清妙の音聲の、普く十方に聞ゆるを出し、又面門より八萬四千の種種の色光を出したまへり。所謂青・黄・赤・白・紅・紫・碧綠など、是の如き光明の、廣大熾盛なるをもて、普く三千大千世界を照したまへるに、有らゆる三十二の大地獄も、光の所照を蒙つて、皆悉く破壞し、諸天の宮殿も、光の所照する處、廣大明輝なりき、是の如き光明もて、三千大千世界を照し已り、復光の中に、一切衆生の有らゆる樂具を出して、虚空に現じ、是の如き變化を作し已るに、其の光、旋還して、佛を繞ること七匝にして、復彼の佛の頂門より入りぬ。

爾の時、藥王軍菩薩、復座より起ち、合掌恭敬し、彼の佛に向して言はく『世尊、何の因緣の故にか、是の如く、重ねて復、大光明を放ちて、普く世界をば照したまへる』と。爾の時彼の佛、藥王軍菩薩に告げて言はく『善男子、我れ今日、大佛事を作しつ。今此の會中に、法の衆生有つて大利樂を得るなり。是の緣を以ての故に、重ねて復光を放てり』と。

藥王軍菩薩、復佛に向して言はく『我れ疑ふ所有り、當に請問しまつらんと欲す。唯願はくは世尊、我が爲に開決したまはんを』と。彼の佛の言はく『善男子、汝疑ふ所の如く、當に汝の問を恣にすべし』と。藥王軍菩薩の言はく『世尊、何の故にか、此の會の諸の初生の者に、世尊爲に、種種希有等の事を現じ、復爲に微妙の法門を宣說したまふに、諸の久生の者には、云何ぞ、世尊は皆

【三七】　妙高山 Sumeru 須彌山。

【三八】　迦陵頻伽 Kalaviṅka 好聲鳥美音鳥など譯す。此の鳥もと雪山に出づ、その聲、一切の鳥の及ぶ所に非ず、早く已に縠中に在つて鳴く、その聲、和雅、聞くもの厭く無しと云はる。

寂靜の行を修せざれば、　識滅して苦惱增し、
無數の劫を經る中にも、　解脫する能はざるなり。
佛は世に出現して、　彼の天・人の師と爲り、
父母の子を愛するが如くに、　正覺の道をば開示したまふ。
復大法寶を雨らして、　普く諸の群生を濟ひたまへど
彼の邪智の人と、　正法を攝受せざるとを除きたまふ。
菩提心を發さん者は、　正法の門に入るを得、
一切の行の空なるを了し、　空に於ては亦無礙なり。
若し空・無我を了すれば、　一切は所依無く、
諸の煩惱も亦空にして、　諸の過失を遠離せん』と。

爾の時、諸初生の者、復伽陀を說いて言はく、

『菩薩大悲者は、　普く諸の衆生を救ひ、
精進の大醫王は、　長時にも懈倦無く
彼の輪廻の苦を念じ、　功德を以て攝持す。
我れ諦に信じて歸依し、　勇猛の精進を起すなり』と。

爾の時、藥王軍菩薩、復爲に伽陀を說いて曰はく、

『汝等、今當に知るべし、　佛をば最上の尊と爲す、
世間・出世間の、　福智をば皆具足したまふ。
[三五]三十二相及び　衆の[三六]好もて莊嚴し、

【三五】三十二相、佛身に於て、常人に異る特殊の點を數へて、三十二に及べるもの。大集事第一、一三六頁以下參照。
【三六】好、種好、又は隨形好ともいひ、相の中に、更に別細別して、八十を數ふ。

死しては惡趣の中に墮し、　正法を聞くを得ざらしむ。
此の三種の病に由り、　展轉して諸の病生じ、
益愚癡闇冥なるに、　我れ皆法の藥を施すなり。
普く過失を離れしめ、　一切の業因を滅し、
苦惱を息めて生ぜざらしめ、　永く諸の怖畏をば絕つ。
旣にして諸の病を離るるを得なば、　速に正覺の尊を見ん、
我れ妙醫王に因り、　病に應じて藥を授けられん。
一切の有情の類は、　常に火の爲に焚かれ、
熾然にして息むる能はず、　轉諸の苦惱を生ず。
貪欲重擔と爲り、　解脫する時有ること無く、
瞋・癡の法も亦然り、　展轉して過失を生ず。
常に重擔を負ふと雖も、　解脫の門を求めず、
復無常を念ぜず、　出離の道をも思はず。
煩惱・業は隨逐し、　苦惱も亦知らず、
衆の病、其の身に逼つて、　妙藥を求むる能はず。
無明の因に由るが故に、　諸行卽ち隨つて生じ、
行等の法旣に起れば、　貪愛は過失を生ずるなり。
諸行は究意すべからず、　一切の法は皆空なるも、
智無ければ知る能はず、　正念を生ずるに由し無し。

大集會正法經卷第五

廣大の慈悲を具し、　衆生皆樂見す、
汝の名字は何等なる、」　願はくは尊、我が爲に說かんを、」
若し見聞し隨喜せんに、　諸根清淨なることを得ん』と。

爾の時、藥王軍菩薩、復伽陀を說き、初生の者に答へて言はく、

『汝今我が名字を聞かんと欲せば、　彼の一切の名をば、唯佛のみ知りたまふ。
百千俱胝の衆の初生の　彼の名をも一一、佛能く了したまふ』と。

彼の初生の者、又伽陀を說いて曰はく、

『我れ曾て佛より親しく聽受したり、」　初生と久生との一切の名を、
唯汝の名字最も甚深にして、　未だ曾て佛の、爲に廣說したまへるを聞かず』と。

是の時、藥王軍菩薩、復伽陀を說き、初生の者に答へて言はく、

『當に知るべし、我が名字は、」　號して藥王軍とは爲す、」
妙藥もて衆生を救ふ、」　是の故に其の號を得たり。」
一切衆生の類は、　種種の病に纏はる、
我れ方便の門を以て、　隨順しては救濟するなり。」
貪は病の最大なるものと爲し、」　世間を惱害す、
此の病に由つて因を爲し、　諸の過失を生ず。
瞋の病は大火の如く、　寂靜の心を焚燒す。」
唯甘露の法藥のみ、」　能く諸の苦惱を除く。」
癡の病は大に怖るべく、」　智慧の心を覆沒し。」

苦惱轉增して、　業報をば脫する能はず。
過去業の照らす所には、　救無く所依無し、
識の法滅せん時に當つては、　徒に悲惱と怖とを增さん。」
我れ寧ろ珍寶、　金銀及び玻瓈を以て、
廣く一切の人に施し、　終に悋惜を生ぜざらん。
我れ寧ろ身力を以て、　他人の爲に僕使せられ、
設ひ彼の長時を經とも、　終に疲倦を生ぜざらん。
若し貪愛の想を起し、　廣く諸の珍財、
及び飲食・上味を集めんに、　我れ卽ち怖畏を生ぜん。
願はくは尊者、諦に聽け、　我等所言の如くんば、
假使彼の諸天、　勝妙の樂報を受け、
諸の妙寶の器を以て、　種種の上味の、
甘美にして復馨香あるを盛らんに、　食者適悅を生じ、
天人の身分、　色力及び威力を益せんも、」
彼の受報若し終らば、　一切皆實に非さらん。
是を以ての故に、　我等は飲食を愛樂せず、
唯正法の門を樂ひ、　衆苦を解脫し、貪愛の縛を遠離し、
自在を得て無礙ならんことを求め、　佛世尊・大佛・眞の聖者に歸依しまつる。
汝尊者は大智あり、　我に恭敬して頂禮す。

壽命若し盡きん時は、
尊者、我が說の如くんば、」
唯諸佛如來のみ、
父の如く復母の如く。」
平等に愛憐したまひ、」
譬へば日月の光明は、」
有らゆる輪廻の苦をば、」
彼の煩惱の根を拔き、
普く有情の類をして、」
正法の門を宣說し、」
世間の飮食等は、
諸天に生ずるを得ず、」
世間には樂無くして、
壽命を損減して、
富樂の貪愛を生じて、
最勝の業をば造らず、
過失を離れんことを念せず、
壽命旣に盡き已れば、
無業の杖の打つ所、

自力もて救ふ能はざるなり。」
一切は所依無し、
是れ眞に歸依すべき所、
能く養育出生し、
一切は皆子の如くなり。
普く諸の冥闇を照らすが如く、」
斷滅して生ぜざらしめ、
諸の怖畏を離れしめ、
無上の菩提を證らしめ、
不退轉に住せしめたまふ。
利無くして過失を生じ、
可愛の果と爲すべからず。
當に極苦の報を招くべし、
不善の業因を造り、
無常を了する能はず、
妙法を了知せず、
寂靜の心に住せず。
諸趣に諸の苦を受けん。
五欲の繩の縛する所、

色の力を増長すと雖も、　而も惡法は隨つて生じ、
[三四]三途惡趣の中に、　當に大怖畏を生ずべし。
諸の衆生の罪業は、　皆飲食よりぞ生じ、
所有の貪愛の心も、　飲食に由つて起る所たり。」
世間の愚癡の者は、　種種の貪心を生じ、
廣大の田園　舍宅樓閣等を營み、
諸の妙好の服飾、　及び最上の莊嚴、
衆の妙寶七珍、　眞珠瓔珞等、
象馬及び車乘、　奴婢なぞ數甚だ多し。
富貴は暫時なりと雖も、　終に無常に歸するの法なり、」
其の壽の如きは、命盡くれば、　諸趣の中に流轉し、
正法をば聞く能はず、　善知識を遠離す。
假使四大洲に、　彼の轉輪王と爲り、」
七寶皆具足し、　千子の衆を圓滿し、
富貴にして大自在、　勇猛にして復威嚴あり、
一切に歸依せられ、　悉く恭敬稱讚せられんとも、」
一生の勝報を盡くせば、」　是れ等も亦無常なり。
彼の壽限既に終れば、　善惡の業をば隨つて受けん。」
富んで珍寶有り、　勇猛にして大威德あるも、」

【三四】三塗、地獄、餓鬼、畜生の三惡道。

是れ如來の神通方便の所作にして、諸の衆生をして精進地に住し、法を得ること具足して、佛世尊の如くならしめたまへり』と。

爾の時、六十五倶胝數の中に、五千の初生の者有り、座より起つて合掌向佛し、佛に向して言さく『世尊、我等は身有るを、重擔と爲し、深く大怖と爲す、何に由つてか解脫せん。又復一切の衆生は、輪廻の中に處りて、暫くも寂靜なること無く、所欲の疑心をば、了知する能はず、黑闇の地に住しては、明了ならしむる能はず。唯願はくば世尊、我等及び諸の衆生を攝受し、施すに無畏を以てし、安樂を得しめたまはんことを。世尊に勸請しまつる。如法を宣說し、諸の少慧の衆生をして、正慧を增長せしめ、苦惱の衆生、皆解脫するを得て、世世に生る所に、佛を見、法を聞きまつらんを』と。

爾の時、藥王軍菩薩、彼の初生の者に向ひ、是の伽陀を說いて曰はく、

『[三]汝等、樂して正法を聞かんと欲すれば、　先づ飲食を須つて身命を資け、
後に無畏廣大の心を起さんに、　深く最上の妙法味をば得ん』と。

彼の初生の者、亦伽陀を說き、藥王軍菩薩に答へて言はく、

『汝、尊者は大智あり、　善く諸根を調寂にし、
廣大の名稱有つて、　一切皆愛敬しまつる。
已に善法を圓滿して、　一切知らざる無きに、
云何ぞ是の言をば作せる、　飲食もて身命を資けよと。』
我等の意の如くんば、　飲食は過の因たり。
食し已れば復中に於て、　種種の雜穢を成す。

【三】汝等云云の偈、異譯には散文を以てす。以下卷末に至るまで、本文に偈を以てする所、異譯はすべて散文を以てしたり。

故に、是の如き事有るやを、了知する能はず。又復我れ今少しく疑惑有つて、世尊に向ひまつらんと欲す、願はくは爲に開決したまはんを』と。彼の佛言はく『善男子、汝今疑有らば、汝の所問を恣にせよ。若しは過去・未來・現在の三世等の事ならんも、我れ當に汝の爲に、一一如實に分別演說すべし』と。

藥王軍菩薩、彼の佛に白して言はく『世尊、今此の會中には、何の故に八萬四千の天子衆、八萬四千俱胝の大菩薩衆、一萬二千俱胝の龍王衆、一萬八千俱胝の[二九]部多衆、二萬五千俱胝の[三〇]必舍左衆有り、何の義を以ての故に、是の如き等の衆、其の數甚だ多きや』と。彼の佛の言はく『善男子、汝今當に知るべし、此の諸の大衆、俱に來つて集會せるは、皆是れ此に於て、佛の說法を聽き、即ち是の日に於て、大利樂を獲て、永く輪迴を出でんとてなり。又復其の中には、十地に安住するを得たる者有り、涅槃界に安住するを得たる者有り、老病死の苦を解脫して、安樂の法に住するを得たる者有り、煩惱の縛を解脫するを得たる者有り、深く佛の正法に入るを得たる者有り』と。

藥王軍菩薩、復彼の佛に向して言はく『世尊、如來は善く一切衆生の爲に、諸の善巧方便の事業を作し、隨順して攝化したまふ。云何ぞ是の中に懈倦無き』と。彼の佛言はく『善男子、諦に聽け、如來は大悲の心を起し、諸の方便を設け、普く有情を攝して、皆解脫すること得しめて、常に懈倦する無し。但だ諸の異生、善法に愚にして、如來に遇ふと雖も、親近する能はず、聽受修習して、解脫を求めず。

善男子、如來は今日、大衆の中に於て、大法螺を吹き、大法鼓を擊ち、大法聲を出し、大法義を演べつ。若しは天、若しは龍、乃至[三一]八部[三二]四衆、及び諸の初生の者など、是の如き一切の大衆は、咸今日に於て、大總持を得、善法を圓滿して十地に安住し、普く一切を利樂することを獲たり。皆

【二九】部多 Bhūta 有情をいふ。
【三〇】必舍左 Piśāca 食肉鬼なり。餓鬼中の勝者なりとも云はる。
【三一】八部、天神又は龍神八部と稱せらるもの。天龍夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦。
【三二】四衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。

薩・聲聞の大衆、大神通有つて、威德具足するを見る。是れ我が樂う所たり。我等も亦、趣進修習し、生死を遠離せんと欲す』と。

爾の時、藥王軍菩薩、復諸の地より生じたる者有り、即時に五百の大菩薩と、各各自の通力を以て、其の會中に於て、又復身を虛空に踊らすこと、高さ二萬由旬、其の空中に於て、或は[二七]經行の相を現じ、或は跏趺の相を現じ、或は師子王の步む相を現じ、或は象王の步む相を現じ、或は諸の異獸等の步む相を現じ、是の如き等の諸相を現じ已つて、復空中に於て、諸の神變を作せるを見たり。時に此の菩薩等、各身光有りて、虛空中に於て、百千俱胝の日月の光明の如くなりき。

爾の時、諸の地より生じたる者、俱に彼の佛に白して言はく『世尊、何の因緣の故にか、是の廣大の光明有り、及び空中に於て、諸の神變・希有等の事を現じたまへる』と。佛の言はく『諸の善男子、汝等諸の菩薩、空中に住するを見たるや不や』と。答へて言はく『已に見たり』と。佛の言はく『此の大光明は、是れ諸の菩薩の各各の身光なり、此の諸菩薩は、一一に皆能く諸の神通變化等の事を現じたり』と。

是の時、藥王軍等の諸の菩薩衆は、即ち空中に於て、微妙の聲を出だし、俱に彼の佛に白して言はく『願はくば佛、慈悲もて、諸の衆生の爲に、法要を宣說したまはんを。若しは天、若しは人の、法を聞くを得ん者、皆最上の利益と安樂とを得ん。我等今時は、皆是れ如來の大悲方便と、精進願力との建立したまふ所なるが故に。願はくば佛、今法の光明を顯はし、普く世間を照らしたまはんことを』と。是の言を作し已り、俱に空より下つて佛前に住しぬ。

彼の佛、藥王軍菩薩に告げて言はく『善男子、汝は今此の三千大千世界の[二八]六種に震動したるを見たるや不や』と。藥王軍菩薩の言はく『已に見まつりぬ、世尊、然も今我等は、何の緣を以ての

【二七】經行、一定の地を、旋遶、往來すること。

【二八】六種震動、大地の、六方に動ずとすると、六相に動ずとするとあり。前者は東涌西沒、南涌北沒、邊涌中沒とその反對との六種。後者は動涌震の形によるものと擊吼爆の聲によるとの六種。

佛は大悲者にして、　最上世間の尊たり、
普く諸の有情を觀じて、　等同に佛子と爲し、
平等にして二有ること無く、　一切をして歸依せしむるなり』と。

爾の時、彼の佛、是の法を說きたまへる時、三千大千世界は、六種に震動したり。時に藥王軍菩薩、合掌恭敬し、彼の佛に白して言はく『何の因緣有つてか、大地は震動すなる。願はくは佛、慈悲もて、當に我が爲に說きたまふべし』と。彼の佛言はく『善男子、汝當に四方に、何の見る所か有るやを觀察すべし』と。

是の時、藥王軍菩薩、佛の聖旨を受けて、卽時に四方を觀察したるに、此の大地、震動して、少時間に復破裂し、六十五倶胝の人有り、地より生ずるを見たり。

爾の時、六十五倶胝の初生の者、卽ち皆合掌し、倶に佛に白して言はく『我等は何所より生ぜる』と。佛會中に於て、前の初生の者を指し、彼の地より生じたる者に告げて言はく『諸の善男子、汝等は此の諸の人衆を見るや不や』と。答へて言はく『已に見たり』と。

佛の言はく『彼の所生の如く、汝等も亦然り』と。地より生じたる者、又言はく『此の諸の人衆は、應當に滅すべきや不や』と。佛の言はく『是の如く是の如し。彼等は皆滅せん。諸の善男子、唯に此の衆のみに非ず、一切の有情、悉く皆滅に歸す』と。

是の時、先より佛會に在りし諸の初生の者、各起つて合掌し、彼の佛に白して言はく『世尊、佛所說の如くんば、生死の二法は、我等の厭患して、愛樂すべき所に非ず』と。佛の言はく『汝等旣に能く生死を厭患しつ。云何ぞ能く精進を發起せざる』と。

此の諸の初生の者、又佛に白して言はく『世尊、我等は如來の前に於て、正法を聽受し、此の善

饑しては鐵丸を呑み、　渇しては復銅汁を飲む。
身より猛火焰を出だし、　惡業の故に自ら燒き、
身分皆破壞して、　驚怖と大苦とを受く。
彼は樂境を見ず、　正法の名を聞かず、
唯苦身心に逼り、　一切皆非愛なり。
衆生にして善法を作せば、「定んで善趣の中に生れ、
善知識に會遇し、　善法を修せんことを勸導せられ、」
正信と解とを發生し、　戒と慧と多聞とを具し、
諸の煩惱滅除して、　正等覺を成ぜん。
精進の行は最上にして、　佛出世して宣ぶる所、
諸の善根を策發し、　退屈をば生ぜず。
慈悲は眞の梵行なり、　一切の衆生を攝し、
自ら利し復他をも利し、　皆解脫を得しむ。
善男子、諦に聽け、　佛の所說は眞實にして、
微妙の法音を出だし、　一切をして調伏せしむ。
大悲の心をば父と爲し、　菩提の心を母と爲し、
善法をば知識と爲して、　能く衆生を救護す。
正覺もて世に出で、　最勝の法門を說き、
方便もて衆生を化し、　寂滅の地に住せしむ。

我れ實に福慧無くして、　虚しく人身を受けつ、
佛は方便の門を宣したまへど、　布施・持戒等をば、
我れ自ら作す能はず、　隨喜して見聞せず。
正法は聽く能はず、　愚癡の日は增長し、
[二六]無明等の煩惱は、　隨轉して窮無し。
善法の因緣を障えては、　何に由つてか能く解脫せん、
迷惑の心散亂しては、　少時も靜に住する無く、
煩惱の火に燒かれては、　種種の纏縛を受け、
身には少しの樂も無く、　樂法暫くも生ぜず。
命將に久時ならざらん、　一切皆破壞せん。
唯諸佛の勝法のみ、　能く苦の衆生を救ひ、
戒と法との眞實の門に、　登らん者大樂を得ん。
我が造る所の業の如きに、　深く自ら追悔を生ず、
今善知識に遇ふ、　是の故に實の如くに說きつ」と。』

爾の時、月上境界如來、藥王軍菩薩に告げて言はく『善男子、諸の異生の類は、命終の時に臨み、大驚怖を生じ、其の心を苦惱せしむるも、救護せらるゝ無し。唯諸の善法のみ、能く所依と爲り、殊勝の果報こそ、失ふ所無し』と。
爾の時彼の佛、即ち伽陀を說いて曰はく、
『衆生にして惡業を作せば、　定んで地獄中に墮ち、

【二六】無明 Avidyā 癡の異名、闇鈍の心、諸法の事理を照了する明無きをいふ。

果報をば自ら當に受くべく、　誰人か能く代らん。
我れ愚癡にして智無く、　但だ其の身を資養したるのみ、
一日死の苦來らば、　識滅して身破壞せん、
唯諸の苦惱を集めたるのみ、　一の可愛の心も無し。
父母及び諸親は、　相見るも救ふ能はず、
良醫・妙藥等も、　亦唐く其の功を設けん、
徒に悲惱の心を增すのみにして、　救濟の方便無けん。
我れ若し命斷すれば　〔二三〕尸陀林に棄てられ、
鳥獸諸蟲の爲に、　充足して食噉されん。
一切所有無く、　空幻の法現前し、
諸境悉く皆空しく、　唯果報のみ失せざらん。
是の時には託すべき所無く、　唯善法のみ依るべし。
我れ造れる惡因の如きは、　當に地獄に墮すべく、
廣く罪業の積を積んでは、　後の苦惱隨て生ぜん。
彼の三世の中に、　善法の種を破壞したり、
〔二四〕受想行の〔二五〕三法は、　諸の觸を以て因と爲す、
觸の故に諸の愛生じて、　憂苦の縛を成ず。
善法は良藥の如く、　能く貪愛の心を治す、
貪等旣に生ぜざれば　諸惡をも能く作さず。

〔二三〕尸陀林 Śitavana 寒林と譯す。死屍を棄つる所。

〔二四〕受・想・行、五蘊の内の三。受は境に對して事物を受け込む心の作用。想は境に對して事物を想像する作用。行は境に對して貪り瞋る等の善惡に關する一切の心の作用。
〔二五〕三、麗・宋・元本二に作る、今明本に依る。

復、妙好の衣　謂はく最上の細[二]氎の、
鮮白にして復、清潔　皆妙香の薫ずる所たるを著けたり。
飲食は最上味　甘美にして復、馨香なり、
侍者は須つ所を供し、　暫くも饑渇の想無く、
地には好き[三]茵蓐を敷きて、　履踐して游行し、
左右には侍人有り、　自在にして復尊貴なりき。
是の如く廣く嚴飾して、　其の身を愛樂し、
常に保惜護持して、　破壞の想を生ぜざりき。
旣にして富樂具足し、　餘に復思ふ所無く、
其の染欲の心を恣にして、　不善の過失を造りつ。
眼は色境を貪り、　諸根も亦復然りき。
彼れ過失の因を爲すも、　自ら覺了する能はず、
見聞覺知する處に、　諸の煩惱隨つて生じ、
順・違の境中に、　貪瞋癡の法を起し、
柔軟等の諸觸　身心に觸れては愛を起し、
彼の愛想旣に生ずれば、　諸の罪業皆作しつ。
我れ曾て一時に、　故無くして有情を害し、
箭を以て鹿身を射、　彼の命をして斷滅せしめ、
但だ其の肉を取つて食して、　後世の中を念ぜざりき、

【二】氎、劫波有より取れる纖絆を以て作れる衣（大集部第一、二九二頁參照）。

【三】茵蓐、共にしきもの、むしろなり。

我れ諸の惡業を造りつ、
善知識、今ぞ時なり、
我れ曾て貪心を起し、
彩畫に復彫鏤に、
復諸の園林に、
牛馬などの生類を畜へて、
父母及び眷屬は、
奴婢と妓人とは、
常に晝夜に、
但だ己が樂心を縱にし、
彼の富貴ならざるを恃んで、
凡そ受用する所の物、
香水を以て澡沐し、
及び彼の麝香等を塗り、
次第に身を嚴じ、
皆珍寶を用つて作し、
項の莊嚴と爲し、
復耳璫等と爲し、
諸の妙華〔二〇〕蘇摩那・瞻波

定んで彼の趣中に墮ちん。」
造る所の業を聽說せん。
廣く舍宅を造り、
金寶を以て莊嚴し、
倉庫及び產業を置き、
皆以て資具と爲し、
內外に數甚だ多く、
其の數限有ること無く、
種種の歌音を動かして、
他の苦をば念ぜざりき。
種種の莊嚴を作し、
悉く金銀珍寶にして、
復諸の妙香龍腦と栴檀、
香水もて澡沐し已つて、
手釧及び指環も、
眞珠の瓔珞を以て、
最上の好眞金をば、
身分を莊嚴し已つて、
及び諸の異香の者を頂戴したり。

【二〇】蘇摩那 Sumanā 悅意華、相思など譯し、花色黃白にして甚だ香しと云はる。瞻波 Champaka 金色華と譯す是れ亦香氣あり。遠く薰ずといふ。異譯には瞻蔔須摩那、以ㇾ此塗二其髮一と云へり。

非法の語言を出して、　諸の賢善を輕謗す。
此の惡因を造すが故に、　必ず地獄の中に墮し、
自ら苦惱の身を受くるも、　能く救護する無けん。
[一六]可畏と衆合と、　[一七]炎熱と阿鼻と、
是の如き諸の獄中に、　展轉して諸の苦をば受く。
是の大獄より出でて、　復小獄中に入る、
謂はく[一八]刀兵と[一九]蓮華などにして、　苦を受けて相續す。
是の如き大小の獄には、　無數の衆生有り、
自の業の因緣に隨つて、　輕重に報をば受け、
或は百劫・千劫、　或は復更に長時のあひだ、
惡業の繩に纏はれて、　能く解脫するに由無し。
彼の獄の門をば見ず、　縱廣百由旬、
彼の刀兵地獄は、　唯諸の苦を受くる者、
百千俱胝の數あり、　劍の山と刀の林とに、
彼の罪人を驅つて登らしむるに、　身分皆斷壞す。
暫時は死滅すと雖も、　復業の風に吹かれては、
即時に還復生じ、　諸の苦惱をば受く。
地獄は邊際無く、　衆生も亦窮無し、
惡業の因緣を以て、　相續して間斷せず。

【一六】可畏、異譯は大叫喚に作る。以下の地獄、大集部第二、三二〇頁參照。
【一七】炎熱、同は是に大蓮華、黑繩を加ふ。
【一八】刀兵、異譯は刀劍に作る。刀劍林立して、踏むに處無き樣なるをいふ。
【一九】蓮華、寒地獄なり、嚴寒逼迫して身分折裂すること、蓮華の如しと。

て、依怙する所と爲さん。況んや復世間諸有の苦法をば、一一分明に盡く觀察すべきをや。汝、豈に聞かずや、大地は若し擊てば、能く大聲を發し、善法若し作せば、大勝力有るを。是の故に諸の如來の淸淨刹中に、諸の善法を種え、所謂其の華鬘・塗香、飮食・衣服、臥具・醫藥などを以て、如來及び諸の苾芻・苾芻尼、優婆塞・優婆夷などの淸淨の四衆を供養せんに、是の如き供養をば、是を佛刹中に於て、諸の善の種を種うと爲し、當に能く一切の善果を出生すべし。汝今此に、大法王の、世間に出現したまふに遇ひて、若し諸の善根を種えざれば、益する所無けん」と。

『時に諸の善知識、彼の異生の爲に、伽陀を說いて曰はく、

「如來は世間に出で、　廣大の法鼓を擊ち、
微妙の法門を開き、　一切をして趣入せしめ、
廣く諸の衆生を度し、　涅槃寂滅に歸せしめたまふ、
汝今此の事を見て、　何ぞ精進を起さゞる」と。

『爾の時、彼の人、亦伽陀を說き、善知識に答へて言はく、

「若し愚癡にして智無く、　復惡友に會遭すれば
廣く染法の因を造り、　貪欲等の事を謂ひ、
我見を起すこと增盛、　和合の僧伽を破し、
寺塔を毀壞し、　深く三寶を信ぜず。
但だ衆の惡業を造り、　善の因緣を作さずして、
一切の時中に、　常に諸の過失を生じ、
父母を惱亂して、　孝敬の心を生ぜず、

大苦と爲し、生に由つて發起し、法の聚集に緣つて命根連持するも、而も其の實無く、愛と相應するに非ず。是の如き等の法を、假に名けて身とは爲す』と。

諸の初生の者の言はく『世尊、云何が【一〇】命と名くる。復何をか滅と名くる』と。佛の言はく『識の連持する所をば、是を名けて命と爲し、業報衰【一一】謝し、識法離散し、命根斷絕し、身分破壞するが故に、名けて滅とは爲す。

『諸の善男子、我れ今復、汝の爲に身分の所有を說くべし。當に知るべし、人身の諸分筋脈は、一俱胝の數有り、八萬四千の毛孔有り、【一二】千二百の身分の支節有り、三百八の身骨有りて、此等共に人身を成ず。復八萬四千の族蟲有り、是の如き生類は、同じく人身に依り、人身の中に於て、【一三】晝夜【一四】唼食し。其の中に、二の大なる者有り、七晝夜に於て、互に相交鬪し、第七日に至つて、彼の一の蟲死す。復一蟲あつて、共に鬪を交へ、一蟲死し已れば、一蟲復生じ、是の如く展轉し、乃至人の命斷ぜんとする時、此の諸の蟲類も、一切壞滅して、依止する所無きに、諸の異生の類は、覺了する能はざるなり。內外の苦法、相續生滅するに、老病死の法をば、皆能く怖れず、若しは順じ、若しは違して、互に相交鬪すること、身の二蟲の如く、苦惱は生に隨ふを、而も覺了せざるなり。身壞し命終れば、都て所有無し。

『諸の善男子、一の異生有り、命將に久しからざらんに、善知識有り、來つて安慰し、其の人に問ひて言はん「汝現生の中に、曾て生・老・病・死の諸艱苦を知見せざりしや不や」と。彼の人答へて言はん「我れ曾て知見したり」と。【一五】善知識の言はん「汝今既に自ら、是の如き等の苦を知見して、何ぞ厭を生じ、勝心を起增し、二世の中に於て、少善根を種え、諸の惡法を斷ち、諸の正行を修せざる。若し能く是の如く、此の報を捨て已らんに、他の勝處に生れ、諸の怖畏を離れ、其の善法を以

【一〇】命 Jivita（　）

【一一】謝、おとろふの義。

【一二】千二百の支節と、三百八の身骨とは、異譯之を缺く。

【一三】晝夜唼食云云、異譯には人將ㇾ死時、諸蟲怖畏、互相啖食云云と云へり。

【一四】唼、するなり。

【一五】善知識、知識とは其の心を知り、その形を識るの義、即ち朋友をいふ。善は我を益し、我を善道に導くものをいふ。

[一]卷の第五

爾の時、月上境界如來、藥王軍菩薩に告げて言はく『汝等當に知るべし、一切の衆生、身有れば皆苦あり、生・老・病・死、憂惱・悲痛、怨憎のものと會ひ、愛するものと別離し、欲する所成就せざるなど、是の如き等の法は、悉く皆是れ苦にして、衆生に逼迫して、解脱する能はざらしむ。此一切の苦は、甚だ怖畏すべし。而も諸の衆生は、是の苦の義に於て、聞かず知らず』と。

爾の時、會中なる諸の初生の者、佛の是の諸の苦法の名を說きたまへるを聞き、卽ち皆合掌し、前んで佛に白して言はく『世尊、我等此の諸苦の義を聞かんことを樂ふ。願はくは佛、爲に說きたまはんを』と。佛の言はく『諸の善男子、唯に汝等の樂聞するのみに非ず、一切の衆生も、皆亦是の如くなり』と。

諸の初生の者、復佛に白して言はく『世尊、言ふ所の死とは、其の義云何』と。佛の言はく『諸の善男子、所謂[二]識滅し身壞するが故に、名けて[三]死とは爲す。一切の衆生、命終らんと欲する時、三種の風有り、來つて破壞す。所謂識を滅するの風と、識を動轉するの風と、[四]識を起すの風となり。此の三種の風は、衆生の命、盡きんと欲する時、[五]識をして散滅・動轉・改易せしむるなり』と。

諸の初生の者の言はく『世尊、[六]彼の識を滅するの風は、云何がして能く衆生をして、識滅し身壞せしむるや』と。佛の言はく『彼の識を滅する風にも、亦三種有り、所謂[七]刀と針と大力となり。是の三種に由り、能く其の識を滅するなり、識にして既に滅し已れば、[八]身卽ち破壞するなり』と。

諸の初生の者の言はく『世尊、云何が身と名くる』と。佛の言はく「身は所謂[九]幻の如く焰の如く、又重擔の如く、復涎涙・腐爛等の物の如くなるも、諸の無智の者、覺了する能はざるなり。生を

【一】元魏譯、卷第四。

【二】識滅し云云、異譯には、臨レ死之時、滅二行識一風起と云へり。

【三】死 Mrta 母陀、普通には壽と煖と識と去るを、身の死といふ。

【四】識を起すの風、異譯には識相應風に作る。

【五】識をして云云、同に動二於行識一と云へり。

【六】彼の識を滅するの風、同には何等三法、臨レ死之時、惱二於身識一と云ひ、先の三風と別に說けり。

【七】刀針大力、同に一者刀惱、二者針惱、三者杖惱と云ふ。

【八】身 Kāya 迦耶、積聚の義、依止の義なりと。

【九】幻の如く云云、異譯には身をば、火聚、燒然、愚痴、崩壞、刺聚、丘塚、水泡、重擔、生惱、老病苦惱、死愛別離、怨憎會などと名くることを云へり、

皆佛會に來至したり。」　月上境界佛は、
初生の衆生の爲に、　妙法門を說かんと欲したまへり、
是の故に皆雲集しつるなり』と。

爾の時、藥王軍菩薩、是の伽陀を說き已り、空より下つて佛前に住立し、合掌恭敬して、彼の佛に白して言はく『世尊、今此の會中なる諸來の菩薩、乃至一切の龍王鬼神など、皆已に來集し、各各樂うて佛の說法を聽かんと欲す。今正に是れ時なり、願はくは佛、爲に說きたまはんを』と。彼の佛の言はく『善男子、汝今當に知るべし、此の初生の衆は、已に一切の罪業を遠離するを得、梵行具足して、大總持を得、一切の善法、皆已に圓滿して、我れ今彼の爲に[四一]大法蘊を說かん』と。

時に藥王軍菩薩、復彼の佛に白して言はく『世尊、此の諸の大衆は、渴仰して聞きまつらんと欲す、願はくは佛、爲に說きたまはんことを』と。

大集會正法經卷第四

【四一】法蘊、異譯には法聚に作る。

各各恭敬して世尊を頂禮したり。是の時十方に、諸の菩薩有り、乃至一切の龍神・夜叉等・又悉く雲集す。時に藥王軍菩薩、虛空の中に於て、合掌し、一心に彼の佛に向つて、是の伽陀を說かく[三七]

『善い哉、佛の神力や、　光を放ち大聲を出したまふに、
三千世界の中、　聞かざる者有ること無し。
三十二の地獄なる、　苦を受くる諸の衆生は、
是の音聲を聞くを得て、　苦惱皆停息しぬ。
三界の諸天衆も、　亦是の音聲を聞き、
各恭敬の心を起し、　歡喜し稱讚したり。
三千大千界は、　普く廣大の聲を聞き、
佛の大神通を以て、　皆六種に震動しつ。
三萬倶胝數の　大海の諸龍王も、
是の大音聲を聞きて、　皆佛會に來至し、
三萬倶胝數の、　諸の[三八]囉刹婆王も、
是の大音聲を聞きて、　皆佛會に來至し、
二萬五千數　倶胝の[三九]必隸多も、
是の大音聲を聞きて、　皆佛會に來至し、
毘沙門宮内の無數の諸[四〇]夜叉も、　是の大音聲を聞いて、
皆佛會に來至し、　十方の諸世界に、
百千倶胝の菩薩有り、　神通を以て、

【三七】次の偈、異譯は散文なり。

【三八】囉刹婆 Rākṣasa の音譯、婆は娑の誤なるべし、略して羅刹といふ。惡鬼の總名。

【三九】必隸多 Preta 餓鬼をいふ。

【四〇】夜叉、Yakṣa 捷疾鬼、能噉鬼など譯す。毘沙門天は夜叉の八大將を統領して、衆生界を護ると云はる。

佛の境界は清淨にして、　微妙の法門を開き、
大悲の方便を以て、　諸衆生の類を度したまふ。
次第して開導し、　皆涅槃に至らしめ、
常に世間を寂靜にしたまひ、　諸の所作に染無し。
自ら無始の劫より、　若しは久生・初生の、
三界六道中なる、　無數の衆生の聚をば、
佛は悲願の力の故に、　咸解脫の門に歸せしめ、
若しは世と出世間とを、　普く大利益を得しめたまふ』と。

爾の時、月上境界如來、即ち會中に於て、大希有なる淨妙の光明を放ち、其の光の中より、廣大の聲を出して、普く十方を震はしたまふに、復聲の中より、是の如き[三六]言を出しぬ『善い哉、諸佛の神通力や。善い哉、妙法の功德力や。善い哉、和合の大集會や。種種の神變は不思議なり。善い哉、妙法門を宣說したまひて、一切の衆生、利樂を得ることや』と。

爾の時、藥王軍菩薩、大光明を見、又空中に是の如き聲を作すを聞き、稱揚讃歎、合掌恭敬し、彼の佛足を禮し、前んで佛に白して言はく『世尊、何の因緣の故にか、是の光明を放ちたまへる』と。彼の佛の言はく『善男子、汝今此の會中なる、諸の初生の者を見るや不や』と。答へて言はく『已に見まつる』と。彼の佛の言はく『善男子、此の諸の人衆は、根・緣成熟し、即ち是の日に於て、我が說法を聞き、一一に皆當に十地を圓滿すべし』と。

爾の時、藥王軍菩薩、即ち座より起ち、身を虛空に踊らすこと、高さ八萬由旬なりき。是の時に復八萬俱胝の天・人有り、虛空中に於て、諸の妙華を雨らして、彼の佛を供養しつ。時に諸初の者、

【三六】この言、異譯は偈文を以てす。

受等の想を思念せず、生じ已つて住する無し。是の如きより來るが故に、說く所も無く、乃ち諸法を了知する能はず、亦復我と我所との想を生ぜざるなり』と。

藥王軍菩薩、復彼の佛に白して言はく『世尊、此れ旣に名けて初生の者と爲さば、何に從つて生ずると爲し、復何に從つて滅するや』と。

彼の佛の言はく『善男子、佛の生ずる所の如く、彼も是の如くに生じ、佛の滅する所の如く、彼も是の如くに滅す。善男子、譬へば人有つて、王法に違背するに、王の爲に繫閉せられて、久しく牢獄に處るが如し。彼の獄中、極めて甚だ黑闇にして、日光の能く照燭する所と爲らず、大苦毒を受けて、多く驚怖を生ず。是の時其の獄、忽ち火の爲に焚かれ、四面熾然にして、人皆驚喚するに、彼の繫がれたる人、尙ほ未だ出づる能はず。時に王聞き已り、卽ち力士を遣し、諸の方便を作して救はしむるに、是の人旣に彼の獄火の難を離るゝを得已つて、王に見ゆるに、王の言はく「汝を赦さん、今より已往、復更に是の如き罪犯を作す勿れ」と。若し更に作さば、彼の爲に繫縛せられて、出づる期有ること無けん。

『善男子、如來も亦復是の如し。已に貪瞋癡等の一切の煩惱を斷じ、一切出世の善法を圓滿し、又能く一切の病苦を息除し、復種種大悲の方便を以て、六趣の中に於て、一切受苦の衆生を救度し、一一に皆諸の纒縛を離れしめんこと、彼の日光の、諸の冥闇を破せんが如く、諸の罪垢を滅して、善の作意を生ぜしむ。善男子若しは久生、若しは初生の一切の衆生を、皆解脫せしむ』と。

是の時、彼の佛、是の法を說きたまへる時、空中に聲有りて是の伽陀を說かく

『如來大悲者は、　淸淨の刹中に處り、
善法の種より生じ、　因果失したまふ所無し。

藥王軍菩薩、復彼の佛に白して言さく『世尊、諸の衆生の類には、初生の者有り、久生の者有り』と。彼の佛の言はく『是の如し』と。藥王軍菩薩の言はく『知らず、何者をか是を初生と名け、又復何者をか久生と名くるを得る』と。彼の佛の言はく「今此の會中なる百千倶胝の人衆、適一臂を舒べて、各香を雨らす、是を久生と爲し、彼の娑婆世界なる釋迦牟尼佛の所に、樹より生ずる者、是を初生と爲す』と。

藥王軍菩薩、重ねて彼の佛に白して言さく『世尊、我れ今、此に於て復彼の初生の者を見んと欲す。願はくは佛、顯示したまはんを』と。

爾の時、月上境界如來、即時に復右臂を舒べたまふに、是の時四方に百千倶胝の人衆有り、上方下方にも、亦各二十五倶胝の人衆有り、時を同じうして佛の會中に來入し、亦復佛に於て、問訊を伸べず、亦説く所も無く、寂然として聲無く、佛の一面に住したり。

是の時、藥王軍菩薩前んで彼の佛に白して言はく『云何ぞ是れ等無數の人數は、刹那の間に佛會に來入し、亦各寂然として、佛の一面に住するや』と。彼の佛の言はく『善男子、此の諸の人衆は、是れ初生の者にして、生の法を知らず、滅の法を知らず、亦復老・病・死・憂・悲・愛別離、怨憎會等、是の如きの諸法を知らず、亦復苦及び苦受を知らず、苦より生ぜず、一切の法に於て、修習する所に非ず。了知する所に非ず。云何ぞ今能く説く所有らん。是の故に各各、寂然として住するのみ』と。

藥王軍菩薩、復彼の佛に白して言はく『世尊、佛所説の如くんば、此の諸の人衆は、是れ初生の者にして、此等は何所より來れるを知らず、一切の法に於て、皆知る能はず』と。彼の佛の言はく『善男子、此等の衆生は、業報の生に非ず、諸の[三四]工巧の能く造作する所に非ず、[三五]亦彼の父母の緣に由つて生ぜず、諸の受より相應して生ずる所ならず、亦過去の業の因緣より生ずるに非ず、亦苦

【三四】工、麗、宋二本功に作る、今元、明本に依る。本文に工巧の造作と云へるを、異譯には、金師・鐵師・木師・陶師の作に非ずと云へり。
【三五】亦彼に云云以下、異譯は否定の語を用ひず。尚ほ次の段との間に、異譯は、數次の問答を加へたり。

とて無し。此の諸の人衆、僅に其の身を究るるに、皆彼の二手臂を見ること能はず。是の事云何、願はくは佛、爲に說きたまはん』と。彼の佛の言はく『善男子、此の諸の人衆、若しは行じ、若しは住し、或は復屈伸せんに、皆悉く無碍なり』と。

藥王軍菩薩、復彼の佛に白して言はく『世尊、我れ未だ是の義云何なるやを了せざる所なり』と。彼の佛の言はく『善男子、汝今樂うて此の諸人衆の、其の臂を伸ばすを見るや不や』と。藥王軍菩薩の言はく『我れ今見んことを樂ふ。願はくは佛、顯示したまはんを』と。

爾の時、月上境界如來、卽ち會中に於て、金色の臂を舒べて、普く大衆に示したまへり。是の時、會に在る百千倶胝の人衆、卽ち各一時に、亦一臂を舒ぶるに、一一に皆無數百千種の香を雨らしぬ。所謂塗香・末香等もて、佛を供養したり。

是の時、彼の佛、藥王軍菩薩に告げて言はく『善男子、汝今此の人衆の、各一臂を舒べ、衆し妙香を雨らして、世尊を供養しまつる是の如きの事を見るや不や』と。答へて言はく『已に見まつる』と。彼の佛の言はく『善男子、汝今當に知るべし、此の諸の百千倶胝の人衆は、皆是れ化生にして、夢に見る所の如くなり』と。

爾の時、藥王軍菩薩、是の事を見已り、卽ち彼の佛に白して言はく『世尊、此の諸の人衆は、須臾の間に、各一臂を舒べ、尙ほ能く彼の無數の妙音を雨らしぬ。何に況んや、盡く其の二臂を舒べしめんに、是の香等を雨らすこと、倍復甚だ多からん』と。彼の佛の言はく『是の如く是の如し。善男子、是の如き等の類は、皆是れ如來の神力の所化にして、限量すべからず。諸の衆生界も、亦復是の如くなり。若しは生じ、若し滅するも、夢の如く幻の如くなり、一切の〔三三〕有爲は皆實法無ければなり』と。

【三三】有爲、爲は造作の義、造作を有するものを凡て有爲といふ。因緣所生の事物は、皆有爲にして、本來自爾の性無し、是を實法無しといふ。

彼の隨方の世界に往き、一一に親しく彼の佛世尊に問ふべし、必ず當に汝の爲に、實の如く宣說したふべし』と。

藥王軍菩薩、佛に白して言さく『世尊、我れ佛の旨を承けて、今當に自ら隨方の世界に往き、彼の世尊に問ひまつるべし。然も我れ何の神力を以てか、能く彼に往かん』と。佛の言はく『汝當に自の神力を以て、諸の世界に往くべし。我れ復世の爲に、神力もて加被せん』と。

藥王軍菩薩、卽ち會中に於て、佛を遶ること三匝し已り、身を隱して現れず、是より東方に、九十六俱胝の世界を過ぎて、一世界の名けて[三一]月燈と爲すに到る。彼に佛有し、[三二]月上境界と名け、十號具足し、八十俱胝の大菩薩衆有つて、圍遶せられ法を說きたまふ。

藥王軍菩薩、旣にして彼に到り已り、卽時に頭面もて彼の佛足を禮し、合掌恭敬して、彼の佛に白して言はく『世尊、我れ娑婆世界なる釋迦牟尼佛の所に於て、此の東方に、一大樹有り、殊妙に莊嚴せられ、其の量は高廣七千由旬、二萬五千俱胝の人衆有り、周匝圍遶して、佛會に來入するを見たり。南西北方、上下方等も、亦復是の如くなりき。我れ是の事の因緣を知る能はざりければ、化主の釋迦牟尼佛は、我を遣して此に來り、自ら其の故を問はしむ。唯願はくは世尊、爲に所疑を決したまはんを』と。

爾の時、月上境界如來、藥王軍菩薩に告げて言はく『善男子、彼の佛會中に來る所の大樹は、廣大殊勝にして、能く彼の方に於て、佛事を施作す。彼の諸の人衆は、樹より生ずる所、諸佛の神通力を顯をさんが爲の故なり』と。

藥王軍菩薩、復彼の佛に白して言はく『世尊、是の事希有なり、我れ昔より未だ聞かず、況んや復能く見んをや。又復世尊、今此の會中に、無數の人衆、世尊の前に住し、周匝圍遶して、空隙の處

【三一】月燈、異譯には日月明に作る。
【三二】月上境界、同に日月土とす。

彼の一一の光に、各無數百千種の色有り、所謂青・黃・赤・白・紅・紫・碧綠など、是の如き等の種種の色光もて、普く無邊の諸世界を照し已るに、其の光旋つて還佛身を右遶し、復世尊の頂門よりして入りぬ。

爾の時、藥王軍菩薩、合掌恭敬し、世尊の足を禮し、佛に白して言さく『世尊、何の因緣の故に是の希有なる廣大の光明を放つて、普く世界を照したまへる。若し因緣無くんば、如來・應供・正等正覺は光明を放ちたまはざらん。願はくは佛、慈悲もて、略して爲に宣說したまはんことを』と。

佛の言はく『藥王軍、汝は今彼の、方に隨つて來る者——諸世界中の無數の人衆、咸來つて此の大衆の會に集まるを見るや不や』と。藥王軍の言はく『不よ、世尊、我れ今見ず』と。佛の言はく『汝當に、審諦に重ねて復觀察すべし』と。

爾の時、藥王軍菩薩、佛の聖旨を承け、四方上下を、皆悉く觀察したるに、即ち東方に於て、一大樹の、殊妙に莊嚴せられ、其の量は高廣七千由旬、二萬五千倶胝の人衆有り、周匝圍遶して、佛の會中に入り、佛・世尊に於て、問訊を伸べず、亦說く所も無く、寂然無聲にして、佛の一面に住するを見たり。南西北方、上下方等も、亦復是の如くなりき。

爾の時、藥王軍菩薩、是の事を見已り、前んで佛に白して言はく『世尊、我れ少疑有り、請問を伸べんと欲す。願はくは佛・世尊、爲に分別して說きたまはん』と。佛の言はく『藥王軍、汝今疑有れば、汝の所問を恣にせよ。我れ當に汝の爲に、一一開示せん』と。

是の時、藥王軍菩薩、復佛に白して言さく『世尊、今此の四方上下の世界なる一一の大樹に、諸の人衆有り、周匝圍遶して會中に來入し、寂然無說にして、各一面に住まれり。何の因緣の故にか、其の事是の如くなる』と。佛の言はく『藥王軍、汝今其の事の因緣を知らんと欲すれば、自ら

二六倍等に復生長して。王は我心を以て亦樹を種うるに、
芽莖及び華菓をば生ぜず。是の如き事を見て、不生を信ぜば、
徒に煩惱を增して瞋恚を起すなり、王の善力の故に、後には信を生じたり、
當來には定んで最勝の果を獲ん」と。

『爾の時、王の言はく「空中の聲は是れ大賢善なり、我れ本何の心もてか、故に破壞を生じたる。我れ今已に信じて深く自ら悔責す」と。時に王又、空中に是の如きの言を作すと聞けり「大王、彼の先に樹を種えたる者は、即ち當に成佛し、世間に出現して、天・人の師と爲るべし」と』。

『王即ち仰いで、空中の賢者問ふらく「彼の次に樹を種えたる人、何の緣を以ての故にか、樹を種えたるも生ぜざりしや」と。空中に答へて言はく「大王、當に知るべし、(三〇)此の人は廣く罪業を造りて、少しの善根も無かりき。是の緣を以ての故に、一切破壞したり」と。

爾の時彼の王、善根力久しく成熟したるを以ての故に、是の如き希有の事を見るを得已り、又空中の是の如き言等を聞き、最勝の善心を發起し增上し、是の時即ち十地平等の善法に安住するを得、彼の三十俱胝の臣寮も、亦善根成熟の力を以ての故に、亦復彼の十地の法に安住したりき』と。

爾の時藥王軍菩薩、佛世尊の、是の說を作したまへるを聞き已り、大歡喜を生じ、未曾有なりと歎じ、合掌恭敬し、前んで佛に白して言はく『世尊、昔時の王等は、何の緣を以ての故に、即ち彼の十地の法に安住するを得たる』と。佛の言はく『藥王軍、彼の王と臣とは、諸佛如來、久しく已に記を授け、皆成佛を得たり。藥王軍、當に知るべし、彼の所種の樹とは、皆是れ諸佛神力の所現なり、我れ今日に於て、復是の事を現はし、彼の昔時と等しくして異有ること無からしめん』と。

爾の時、世尊、衆の會中に於て、其の面門より大希有なる八萬四千の淨妙の光明を放ちたまふに、

【三〇】此の人云云、同に、彼是提婆達多、種レ雜不レ生云云と云へり。

王、是れ我が福徳力の致す所の故なり」と』。

『時に諸の臣寮、是の語を聞き已り、皆大に瞋怒し、咸是の念を作しぬ「如何ぞ此の人、王に對して自ら、我が福徳の力なるを矜るや」と。即ち共に彼を責めて、是の言を作さく「汝愚癡の人かな、如何なれば、王に對して自ら福徳を矜るや。若し是の如くんば、汝は王に勝る莫きや、或は王と等しきや」と。爾の時、彼の人、諸の臣寮に向ひ、稽首恭敬して是の伽陀を說かく。

「我れ王位を樂はずして　廣く諸の財寶を集め、
久しく最勝の願を發して、　佛・二足尊[二七]とは成りつ。
我れ涅槃界に至る、　而も寂滅に住せず、
方便願力を以て、　世間に出現し、
縛を離れて自在、　咸彼岸に至り、
法を說いて衆生を度し、　最上の安樂を得しむ。
我れ宿業を以ての故に、　今王に持縛せらるるも、
勝れたる願力旣に然り、　我が業盡く銷滅しぬ」と。

『爾の時、復二十四倶胝の　金啄鳥[二八]有り、空中を飛んで清妙の聲を出し、諸の音樂を奏したり。是の時復、三萬二千の妙寶樓閣有つて、時を同じうして出現し、一一の樓閣は、其の量の高廣二十五由旬なり、彼の樓閣の間には、一一別に二十五倶胝の金啄鳥有り、其の上を翔集して、是の伽陀を說きつ

[二九]「大王、何の故にか惡心を起し、　彼の可愛を伐るに、
卽ち樹を生ず、　佛神力の故に、刹那の間に

【二七】二足尊、二足の中の最尊の謂、佛に對する敬稱。

【二八】金啄鳥、異譯には、有二二十五億鷄而在二其上一、以レ金又觜云云と云ふ。觜金色の鳥なるべし。

【二九】次の偈、異譯散文を以てす。

に詣り、親しく自ら觀察したまはんを」と。』

『時に王、卽ち三十俱胝の臣寮と、同じく樹の所に詣り、既に彼に至り已つて、卽ち其の樹、枝葉滋茂し、果實繁多なるを見、見已つて信を生じ、其の希有なるを歎じたり。王も時に彼に於て、亦一樹を種えたるに、亦卽ち莖幹・枝葉を生ぜず、況んや復華菓をや』。

『王既に見已り、慚ぢて臣寮に對し、大瞋恚を生じて、卽ち勅して伐らしむ。彼の先に樹を種えたる諸の力士等は、咸王の命に遵ひ、斧を持つて競ひ伐るに、一樹を伐る時、十二の樹有つて、同時に復生じ、七寶もて莊嚴せられ、廣大殊妙なりき。時に王、見已つて轉復瞋を生じ、又勅して、是の如き等の樹を伐らしめぬ。時に諸力士、又共に斧を持つて、十二の樹を伐るに、此の樹を伐る時、是の處に復二十四の樹有つて、同時に還生じ、彼の一一の樹の、枝葉華菓、轉復繁茂したり。』

『又復皆一の[二六]命咏鳥有つて、其の上に遊戲し、衆色もて其の身を嚴じ、音聲清妙なりき。王時に見已り、復甚だ瞋恚し、自ら一の斧を索いて、一樹を斷たんと欲したるに、斧所及の處より、甘露流溢したり。』

『時に王、見已つて便ち信悔を生じ、勅して彼の先に樹を種えたる人を召さしむ。是の時、此の人、先には持縛せられたるに、今方に解を得、奔つて王の所に詣る。王復問ひて言はく、「汝何の緣の故に、始めに一樹を種えたるに、卽ち莖幹・枝葉・華菓を生じ、我れ伐らしむるに十二の樹を生じ、七寶もて莊嚴せられ、廣大無比なる。是の如くして又伐るに、卽ち復又生じて、轉前に倍し、異鳥奇音など、甚だ希有たり。我れ亦樹を種うるに、卽ち生ずる能はず、況んや復華果莊嚴等の事をや。是の義云何なる。汝當に實のごとく說くべし」と。

『彼の人答へて言はく「大王、是れ我が福德力の致す所なるが故なり」と。是の如く又言はく「大

【二六】命咏鳥、次にいふ命咏鳥か。

し、又復盤根、一由旬の量たり。我れ是の事を見、内に自ら羞愧し、即ち其の樹を移して、他處に種えんと欲したるに、彼れ意の如くにして、復異を生ずるを獲たるなり。是の縁を以ての故に、共に相諍競せるなり、願はくは王、我を禁して罪罰を賜ふ無からんを」と』。

『時に王、即ち勅して、臣寮を召集したるに、是の時諸の臣寮等、三十俱胝有り、王の命有るを聞き、齊しく王の所に至り、倶に王に白して言はく「何の宣令か有る」と。王の言はく「汝等當に知るべし、今我が國中に、適一事を聞くに、甚だ希有と爲す。此に一人有り、纔に一樹を種えたるに、少時間にして、即ち芽莖を生じ、枝葉・華果、悉く皆具足し、又復盤根は一由旬の量なり。汝等頗し曾て是の事を見る有りや不や。我が見る所の如くんば、諸の樹木有り、開華結菓に、極めて甚だ疾き者も、亦半月の分、或は一月の分なり。今此の樹のごときは、昔より未だ見聞せず。汝等云何」と』。

『是の時臣寮の中に一人有り、前んで王に白して言はく「我れ是の事に於て、亦未だ實の如く信すべしと決定せず。王所說の如く、我も亦疑を生ず。願はくは王、更に此の樹を種えたる人を召し、審諦に其の實を知るや不やを問ひたまはんを」と』。

『王即ち宣して、先に樹を種えたる人を召し、復問ひて言はく「汝種うる所の樹は、少時間にして華を開きたり等の事、當に如實なるべきや不や。汝、若し虚妄ならんに、我れ必ず汝を罪すべし」と。時に彼の人の言はく「王は父母の如くにて、能く我を生みたまへり。我れ今王に對し、何ぞ敢えて虚妄ならん。願はくは王、是の事誠實なるを疑ふ無かれ」と』。

『王の言はく「我れ昔より未だ聞かず、況んや復見んをや。我れ是の事に於て、如何ぞ信を生ずべき」と。是の時彼の人、復王に白して言はく「大王にして若し實に信ぜざらんに、願はくは王、彼に

[17]預流果を精進の處と名け[18]一來果を精進の處と名け、[19]不還果を精進の處と名け、[20]阿羅漢果を精進の處と名け、[21]緣覺果・[22]緣覺智果を精進の處と名け、菩薩果・[23]菩薩智果を精進の處と名く。藥王軍、諸の菩提を修する者、是の如き等の處に於て、能く廣大の精進を發起するなり』と。

爾の時佛、藥王軍菩薩に告げて言はく『我れ往昔を念ずるに、一時の中に、[24]一の摩拏嚩迦あり、平實の地に、纔に一樹を種えたるに、即ち芽莖・枝葉・華果を生じ、光潤にして愛すべかりき。其の樹の盤根は、應さ一由旬なりしが、少時間に於て悉く皆具足したり。次に復一の摩拏嚩迦有り、前樹の側に寄せて、亦一の樹を種えたるに、根纔に地に置くや、忽ち大風の爲に、[25]偃拔せられ、芽莖・枝葉も尙ほ生ずる能はざりき。況んや復華果の、能く成就せんことをや。

『彼の次に樹を種えたる人、是の事を見已り、即ち其の樹を移して、他の處に種えんと欲したるに、是の時、先に樹を種えたる人、是の如き言を作しぬ、「云何ぞ我が平實の地上に、破壞を致せる」と。彼の次に樹を種えたる人の言はく「我れ今自ら種うる所の樹を移さんが爲にして、特に汝の平實の地を破壞せんとするには非ず」と。是の如く往來して、互に相諍競したりき。

『是の時、人の潛に王に告ぐる有り、王既に聞き已り、勅して往いて捉へしむ。使者命を奉じ、奔つて彼に至る。時に二の諍人、各大に驚き怖る。使者執持して王の所に來至したるに、是の時王、彼の二人に問ひて言はく「汝等何の故に互に、相諍競するや」と。

『先に樹を種えたる人、具に實の如くに說けり。次に樹を種えたる者、是の如きの言を作せり「大王、當に知るべし、我れ自ら地土の種植すべきもの無きが故に、暫く此の人より、地を借りて樹を種えたるに、我が種うる所は、風の爲に拔かれて、根固まる能はず、芽莖・枝葉・華菓に至つては、皆生ずる能はざりしに、此の人、樹を種うるや、少時間に、即ち芽莖を生じ、枝葉華菓など、悉く皆具足

【一七】預流果 Srotāpanna 異譯には須驢多波帝に寫す。此等に就ては、卷二の註參照。
【一八】一來果 Sakṛdāgāmin 同に娑訖利陀伽彌果とす。
【一九】不還果 Anāgāmin 同に阿那伽彌果に寫す。
【二〇】阿羅漢 Arhat 同に阿羅訶果に作る。
【二一】緣覺果 Pratyekabuddha 同に波羅提迦佛陀果に作る。
【二二】緣覺智果、同に緣覺之智、名ニ精進處一と云へり。
【二三】菩薩智果、同に菩提薩地果に作る。
【二四】この說話、異譯には云何逆流、云何逆流果の問に答へて、佛の說かれし所たり。
【二五】偃、たふるるなり、ふするなり。

を受くるも能く救護する無し』と。

藥王軍菩薩、佛に白して言はく『世尊、佛所說の如く、天神を祀らば、此等の異生は、死して何處に墮する』と。佛の言はく『藥王軍、止めよ、須らく問ふべからず』と。藥王軍、復佛に白して言はく『世尊、我等の衆中に、聞かんことを樂う者有り、願はくは佛、爲に說きたまはんを』と。佛の言はく『藥王軍、汝今當に知るべし。時に彼の父母、既に命終し已り、倶に衆合地獄に墮し、大苦惱を受け、時に彼の子は、炎熱地獄の中に墮ちて、大苦惱を受け、彼の天祠の中に、守門たりし者、導引せるを以ての故に、見て歡喜を作したるが、命終已後、阿鼻地獄に墮ちて、大苦惱を受けん』と。

藥王軍、復佛に白して言はく『世尊、彼の祭られたる人、當に何處にか生るべき』と。佛の言はく『藥王軍、此の人、命終して三十三天に生れ、六十劫の中、勝妙の樂を受けん』と。藥王軍、復佛に白して言はく『世尊、此の人は何の因緣を以てか、彼に生ずるを得る』と。佛の言はく『藥王軍、此の人、命終の時に臨み、純ら善く相應して、淨信の心を發し、如來に歸依して、一たび那謨沒馱耶と稱へたるが故に、是の人卽ち善根を種えたりと爲す。又復八十劫の中、宿命智を得、在在所生に、諸の煩惱を離れ、一切の苦を息めん』と。

爾の時、藥王軍菩薩、前んで佛に白して言はく『世尊、諸の衆生有り、樂うて涅[一六]槃の法に趣證せんと欲すれば、當に何の行をか修すべき』と。佛の言はく『藥王軍、當に精進の行を修すること勇猛堅固なるべし』と。

藥王軍の言はく『云何なるをか精進の行とは名く。又何處に於てか能く發起すべき』と。佛の言はく『精進の行とは、諸の果法に於て懈退せざる、是と精進の行とは名く。精進の處とは、所謂

【一六】 槃・麗本盤に作る、今三本に依る。

『時に彼の父母、既にして金を得已り、復家に還らず、即ち是の金を持つて一人を得たり。其の牽がれたる人、何を作すやを知らず、即ち其の主に隨ひて、彼の天祠に詣りぬ。天祠に至り已り、守門者に謂つて言はく「我等今、祭る所の物を持つて來る。天神を祀らんとす」と。守門者の言はく「汝當に意に隨へ」と』。

『時に彼の父母、天神の前に於て、香を焚き、啓願して是の如き言を作せり「願はくは我が此の子病苦より免るるを得、天神歡喜したまはんを」と。言ひ已つて即時に、祭らるる人、及び彼の鉢の戊を以て、自手もて命を斷ち、祭祀と爲しぬ。祭らるる人、命を斷たんとする時、既に持縛せられて、能く避くる所無く、唯諸佛を念じて、一たび是の言――[一五]那謨沒駄耶――を稱へ、言ひ已るや命斷す。

『時に彼の天神、其の祭を受け已り、父母に謔いて言はく「汝が子の疾む所は、是れ我が執る所、我れ今放捨し、子をして脫るることを得しめん」と。是の時、父母、其の言を聞き已り、歡喜踊躍し、拜謝して出で、父母相慶んで、互に相謂つて言はく「我が子、今より既に病愈ゆるを得、又復決定して長命を得ん。我等は今、復金の富人に還すべき無ければ、當に本の言の如く、彼の婢僕と爲ると雖も、恨む所無し」と』。

『是の時、父母、方に共に相議し、未だ家に還るに及ばざるに、忽ち人の告ぐるに逢ふ、「子の命已に盡きたり」と。時に彼の父母、一たび是の言を聞き、大苦惱を生じ、倶に死して他に蹙れたり』と。

佛、藥王軍に言はく『我れ世間の愚癡の異生を觀ずるに、惑業に纏はれ、不善知識と、共に相集會し、互に衰損を爲すこと、亦復是の如くなり。此等の異生は、身壞命終して惡趣に墮し、大苦惱

【一五】那謨沒駄耶 Namo Buddhāya 佛に歸依しまつるの謂。

言はく「我が子、此に於て怖畏を生ずる勿れ。汝の命未だ盡きざれば、我れ皆汝を救はん。汝が今の苦惱は、必ず是れ虐疾ならん、心識迷亂して、妄に所見有り」と。時に子答へて言はく「我れ虐疾にも非ず、亦所見も無し。諸の可愛の境は、皆現前せず、唯死苦の、大に怖るべき事を見るのみ。定んで命終に趣き、能く救ふ者無からん」と』。

『父母告げて言はく「我が子の苦しむ所は、多く是れ天神の持する所たり、世間に諸の執持せらるる者有らば、皆天の祠に詣つて、以て救護を求む。若し是の如くせば、方に免るるを得ん」と。子の言はく「爾るべし」と』。

『是の時、父母、妙香を持以て、即ち天祠に詣り、既に彼に至り已つて、守門の者に告げ、引かれて天の前に至り、香を焚きて啓願し、悔謝を祈求したり。時に守門者、父母に謂つて言はく「汝若し子の病、脫免を得、天神を歡喜せしめんと欲すれば、當に祭祀を設くべし、必ず意の如くなるを獲ん。其の祭る所の物は、法として應當に須らく[四]一人の命及び一鉢の戍を斷つべし、方に名けて祭と爲す」と』。

『是の時、父母、彼の言を聞き已り、共に相謂つて言はく「我れ今若し彼の天神を祀らずんば、我が子は何に由つてか、斯の苦を免るるを得ん。然も我れ今、家復窮困すれば、何ぞ能く彼の祭に須つ所の物を辦ぜん。宜しく共に家に還り、諸の方計を作すべし」と』。

『既にして相議し已り即便家に還り、其の家中の一切所有を盡し、貿易を爲して、一鉢の戍を得、復共に家を出で、一富人に詣り、是の告言を作せり「我れ今黃金の少分を貸さんことを求む、當に期すること十日にして、即便歸還せん。若し是の言に違ひ、十日を過ぐれば、我れ皆、身を以て君が婢僕と爲さん」と。是の富人即ち與へぬ。

【四】一人の云云、異譯には須下殺レ羊、殺レ羊、以用祭祀上と云ふ。

『藥王軍、汝今諦に聽け、我小往昔を念ずるに、一の商人有り、利を求めん爲の故に、千兩の金を借り、他國に往いて貿易を爲さんと欲したるに、其の人の父母、意念を以ての故に、其の子に謂つて言はく「此等の金寶は、己が所有に非ず。若し自ら持つて往かんに、或は時に散失して、苦惱倍增さば、後悔するも何の益かあらん」と。是の時其の子、反つて恚恨を生じ、是の言を聽かず、卽ち此の金を負ひて、便ち他國に往き、旣にして彼に至り已り、時分未だ久しからざるに、其の負ふ所の金、皆已に散壞して、復得る所無く、漸く住まる能はず、卽便追悔して大苦惱を生じたり。其の人後時に、復國に還ると雖も、自ら舍に歸らず、苦惱の心を以て大疾病を生じたり。

『時に彼の父母、子の還ると雖も、便ち舍に歸らざるを知り、又金寶、皆已に散壞したるを聞き、憂愁迷悶し、竊に相謂つて言はく「此は我が子に非ずして、是れ大惡友なり、我が族を破壞して、悉く貧匱[二]ならしむ。復他の怨を致し、何所にか依賴せん。我等は今、何の方便をか作して、斯の苦を免かるるを得んや」と。

『是の時父母、憂苦を以ての故に、已が身命を厭ひ、自ら殞滅せんと欲したり。時に彼の商人、旣に父母の憂惱すること、此の如くなるを聞き、卽便家に還り、彼の父母に向ひ、哽[三]然として住まりぬ。父母忽ち其の子を見、頓に前の怒を失ひ、卽ち同じく謂つて言はく「我が子は何ぞ能く斯の病苦を受けたる。我れ是の事を聞きて、汝命終せんを恐れたり。汝今旣に來り、我が憂慮を寛したり」と』。

『時に彼の商人、父母に告げて言はく「我が身と心とは、苦惱すること是の如く、支節痛逼し、命將に救はれざらん。何を以ての故にとならば、我れ今時に於て、眼視るを欲せず、耳聞くを欲せず、心識迷悶して、衆苦の所集たればなり。設使父母なりとも、云何が救護せん」と。父母告げて

【二】匱・乏なり・竭なり。

【三】哽・かたきなり。

以て、廣く諸法を說き、諸の衆生をして、諸佛の淸淨刹中に生れ、勝妙の樂を受くるを得、能く諸の滅道の法を了知し、勝妙の諸根本の法を了知し、勝妙の善處の法を了知し、勝妙の神通の法を了知し、勝妙の善處・寂滅の法を了知せしめたり。

『藥王軍、言ふ所の滅とは、其の義云何』。藥王軍菩薩の言はく『世尊、所謂法處なり』と。佛の言はく『[八]法處とは何ん』と。藥王軍菩薩の言はく『法處とは、所謂精進と持戒との二法なり。若しは已に發起し、若しは未だ發起せざるもの、戒行具足する、是を法藏と名く。世尊、諸法は是の法藏より生ずる所なり』と。佛の言はく『善い哉・善い哉、藥王軍、如來の前に於て、能く是の義に答へたり』と。

[九]藥王軍菩薩、復佛に白して言はく『世尊、諸佛如來は、何の義を以ての故にか、世間に出現したまふ』と。佛の言はく『藥王軍、諸佛の世に出づるは、諸の衆生をして持戒・多聞をば具足するを得しめんと欲するが爲の故なり、悉く勝妙の樂處を了知せしめんための故なり、一切の勝妙の法門に、通達趣入せしめんための故なり、是の法門に入り已れば、卽ち能く廣く一切の善法を修し、方便力を以て、善根を增長し、世と出世との最勝の妙法に於て、皆悉く通達するなり』と。

『藥王軍菩薩、佛に白して言はく『世尊、云何が出世の法とは名くる』と。佛の言はく『藥王軍、出世の法とは、所謂涅槃の法なり、若し諸法の自性を了すれば、是れ卽ち涅槃の勝法を了知するなり。彼の諸法は、卽ち正法の[一〇]蘊なり、若し是の法に於て、如實に知り、如實に證すれば、出世の法中に於て、是を第一と爲す。藥王軍、諸の[一一]異生の類は、佛世尊の深妙の法中に於て、自ら信じて趣向・修習を生ぜず、亦復轉他人に勸むる能はず。此等の異生、身壞命終するも、善法の依怙する所と爲るもの無し。

【八】法處、同に勤行ニ精進一、勤持レ戒、勤忍辱、是名ニ法處一と云へり。

【九】以下、元魏譯、卷第三。

【一〇】蘊は聚を意味す。

【一一】異生 Pṛthagjana 凡夫といふに同じ。凡夫は六道に輪轉して種々別異の果を受け又凡夫は種々に變異して邪見を起し、惡を造るが故に異生といふ。

せん。彼の善法の種は、多劫を經と雖も、終に能く壞するもの無し。藥王軍、當に知るべし、是を[三]初發心の菩薩とは名く。而も彼れ所行の一切の善法は、聚集了知すれば、轉倍增勝し、復夢に見る所有りと雖も、而も能く諸の怖畏を離る。何を以ての故にとならば、一切の[四]業障は、悉く清淨なるを得、惡法を造らず、法の苦惱を離れ、惡境現前するも動かす能はざればなり。

『若し夢中に、大火聚の光焰熾盛なるを見んに、菩薩は見已つて怖畏を生ぜず、何を以ての故にとならば、諸の煩惱の薪は、智慧の火の爲に焚燒せられて、能く亂す無きが故なり。又夢中に、若しは大水の、清潔ならず、徹底して濁穢なるを見んに、菩薩は見已るに、亦怖を生ぜず。何を以ての故にとならば、已に一切所作の業を盡すが故なり。牛の軛を撤すれば自在を得んが如し。『又夢中に、利刀を持以て、自ら其の[五]頭を斷す、復は他の頭を斷たんに、菩薩爾の時、亦怖を生ぜず。何を以ての故にとならば、貪・瞋・癡の法、煩惱の中にて、根本たるに、菩薩は已に斷じて、懼る所無きが故なり。

『藥王軍、彼の初發心の菩薩は、六趣の輪迴をば、已に解脫するを得るも、而も復中に於て、順に隨つて生を受く。皆是れ菩薩、方便力を以て示現し、一切の衆生を化度するなり。而も實には菩薩、常に諸佛の清淨刹中に生じ、一切の如來に共に攝受せらるるなり。

『[六]藥王軍、汝今當に知るべし、後の末世に於て、若し衆生有り、能く迴向菩提の心を發さば、是れ即ち一切の佛智に安住し、諸佛の善法を圓滿するを見ることを得、永く復諸の疑惑の心を生ぜらん。

『藥王軍、我れ無數百千那庾多劫に於て、勤めて苦行を行じ、諸の善法を修し、[七]一切の法に於て、自性を覺了し、即ち阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得、既に圓滿し已つて、復方便善行の智慧を

【三】初發心・異譯は初發意とす。
【四】業障・修道の障となる業。
【五】其の頭、異譯には自見㆓剃髮㆒と云ふ。
【六】この段、異譯缺。
【七】一切の法に於て云云、異譯には爲㆑知㆓諸法實相㆒故と云ふ。

卷の第四

一六

爾の時、藥王軍菩薩摩訶薩、座より起ち、益恭敬を加へ、膝輪を地に著けて、世尊の足を禮し、禮し已つて合掌し、前んで佛に白して言さく『世尊、何の因緣を以てか、此の諸の菩薩、能く空中に於て、諸の神變を現じ、如來の前に於て、諸の色像をば現ずる』と。佛の言はく「諦に聽け、藥王軍、此の諸善男子は、已に一切の如來に共に攝受せらるるを得たれば、久しからずして卽ち阿耨多羅三藐三菩提を成じ、大法座に處りて、如法輪を轉じ、法の光明を以て普く群品を照さん。是の因緣を以て、能く變化をば生ずるなり』と。

是の時、藥王軍菩薩、復佛に白して言はく『佛世尊の如きは、長夜の中に於て、三界の一切衆生を度脫せしめたまふこと、其の數甚だ多き』に、云何ぞ是等は窮盡有ること無き』と。佛の言はく『善い哉・善い哉、藥王軍、譬へば人有り、諸の穀麥を以て、種蒔を爲し、各各分別して間雜無く、其の後、時に依り、彼の種子、皆悉く成熟せんに、是の人、卽時に次第して收め、若しは穀、若しは麥など、亦間雜無からん。是の如く展轉して收め已つて復種し、種し已つて復收め、窮盡有ること無けんが如し。

藥王軍、此の諸衆生も、亦復是の如く、業の因緣の故に、諸の種子を布き、若しは善、若しは惡など、間雜有ること無く、彼の時、成就して諸の果報を受くるに、亦間雜無く、是の如く、展轉して生じ已つて復生じ、亦窮盡する無きなり』と。

『藥王軍、諸の菩薩行を修習する者有り、能く一切善法の種子を布くに、一一成就し、既に成熟已らば、卽ち能く一切の善法を出生せん。善法にして生じ已れば、大歡喜を生じて、彼の佛法を愛樂

【一】 元魏譯、卷第二のつゞき。

【二】 群品、衆生の類。

[四九]三摩地と願力とを、　皆悉く已に具足し、
一切勝義の法「を了し」、　餘の知りたまはざる者無し。
一切衆生の類は、　無始より輪廻して苦しむを、
佛、善巧方便もて、　普く解脱を得しめたまへば、
婆羅門・外道など、　咸大利樂を得つ』と。

大集會正法經巻第三

【四九】三摩地。Samādhi 定をいふ。

衆生は、大善利を得、久しく已に、彼の輪廻の苦惱を盡して、大精進を具したり。是を初生と名くるは、今日佛を見まつり、刹那の間に於て、卽ち解脫を得たればなるべし』と。

是の時、諸の婆羅門・外道・尼乾陀等の衆中に、諸の盲たる者有り、聞法を以ての故に、忽に光明を見、各佛の殊妙の色相を觀ずるを得、佛の相を見已つて、咸是の言を作せり『如來・應供・正等正覺は、是れ最勝の師にして、我等歸依しまつる』と。卽ち起つて合掌し、淨信の心を生じて、倶に佛に白して言さく『我等は今、世尊を見まつるを得んを』と。

佛の言はく『汝等應當に、重ねて復審諦に、佛如來の殊善の色相を觀ずべし。汝等當に知るべし、汝等は今、諸の善根の力、已に成熟したるが故に、世尊を見るを得、又大集會の法を聽聞するを得たるなり』と。是の時、諸の盲たる外道、是の利を得已つて、大歡喜を生じ、各各皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。

爾の時、復會中に、諸の婆羅門・外道・尼乾陀等有り、佛の說法を聞き、亦皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、無生法忍を證得し、悉く皆十地を圓滿し、卽時に又、大菩薩衆と成り、乃ち各身を、虛空に踊らすこと、高さ七多羅樹、其の空中に於て、各種種の神通・變化を現じ、及び種種の華鬘瓔珞、傘蓋幢幡、七寶の樓閣等を化し、佛の上に住まつて供養を爲し、各是の念を作しぬ『今の我が此の身は、佛智より生じ、正法より生じたるなり。一切の如來は、是れ眞の歸處なり』と。是の念を作し已つて、空より下り、世尊の足を禮し、退いて一面に住まりぬ。

是の時、會中に無數百千の天子有り、是の事を見已つて、卽ち伽陀を說かく[四八]

『我が佛は大沙門にして、　最上の善利を得たまひ、
一切の世間に於て、　最尊にして與に等しきもの無し。

【四八】次の伽陀、異譯には散文を以てす。

爾の時、諸の婆羅門・外道・尼乾陀等、佛の是の說をなしたまふを聞き已り、即ち佛に白して言はく『何者か初生にして、何者か[四五]久生なる』と。佛の言はく「彼の[四六]六趣の中に、相續展轉して、苦を受くる衆生をば、名けて久生と爲す。何を以ての故にとならば、此等の衆生は、六趣の中に於て、厭離を生ぜず、解脫を求めざればなり』と。

時に諸婆羅門・外道等、復佛に白して言はく『世尊、佛所說の如くんば、久生の衆生は、輪迴の中に於て、諸の苦惱を受け、解脫する能はずと。初生の衆生をば、願はくは佛、顯示したまはんことを』と。

是の言を作し已るに、爾の時、忽ち九十四千倶胝の摩拏嚩迦有りて、會中に來入し、世尊の前に於て、禮敬を伸べず、復問ひまつる所も無く、默然として住したり。是の時、藥軍王菩薩、是の事を見已り、即ち佛に白して言はく『世尊何の因緣の故にか、今此の輩等、佛會に來入し、禮敬もせず、復所問も無き。其の事云何』と。佛、藥王軍に言はく『此の諸摩拏嚩迦は、是れ初生の者にして、佛世尊に於ては、未だ問ふ所有らざるなり』と。

是の時、彼の諸摩拏嚩迦、即ち是の言を作せり『世尊我等は是れ[四七]初生の者か』と。佛の言はく『是の如く・是の如し。汝等は初生にして、日の初めて出でたるが如く、光明普く照して、一切に遍く、無量の衆生、共に瞻覩する所たり。汝等久しく佛道に於て、心已に成熟し、諸菩薩の法には、昔已に通達して、初生と名くと雖も、而も久しく修習しつるなり』と。

是の時、九十四千倶胝の初生の摩拏嚩迦は、即ち各身を虛空に踊らし、空中より下つて、一一に皆十地を圓滿するを得たりき。

爾の時、藥王軍菩薩、合掌恭敬して、希有の心を生じ、前んで佛に白して言さく『世尊、此等の

【四五】久生、異譯にいふ「老」なり。
【四六】六趣、衆生の轉生する六種の世界をいふ。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天。
【四七】初生、異譯にいふ「小」衆生なり。

はず、生滅に［四二］悶損して、種々の苦惱を受け、煩惱を增長して、休息有ること無し。我れ是の輩を觀じて、深く悲愍すべしとなすなり』と。

爾の時、世尊、是の言を作し已り、諸の外道・尼乾陀等に告げて言はく『汝等當に知るべし、閻浮提中には、大珍寶有りて、能く護る者無ければ、意に隨つて當に用ふべし。我が宣說する所は、是れ大法聚なり、諸の求むる有る者には、悋惜する所無し。汝等若し疑惑し、及び希求する所有らば、當に汝の問を恣にすべし。如來は大慈もて、一一汝の爲に、分別開示すべし』と。

爾の時、諸の外道・尼乾陀等、各座より起ち、合掌して佛に向ひ、是の問を作して言はく『世尊、佛は長夜に於て、諸の衆生を度し、輪迴より出でしめたまふに、云何ぞ衆生は、生滅相續して、間斷有ること無きや。我れ是の事をば、了知する能はず、願はくば佛、宣說したまはんことを』と。

爾の時、世尊、即ち會中に於て、［四三］藥王軍菩薩に告げて言はく『今此の會中の諸外道輩は、我が大法の光明、威神もて照らすを以ての故に、漸く能く開解し、精進の鎧を被り、疑惑の心を息め、能く此の義を以て、佛・世尊に問へり。藥王軍、一切の生者には、略して二種有り、一は［四四］久生、二には初生なり。譬へば人有り、富貴自在にして、忽ち一時に於て、水を以て髮を沐ひ、復鮮潔なる上妙の衣服を以て、嚴飾を爲して乃ち其の舍を出づるに、時に貧人有り、見已つて欣樂し、即ち自ら家に還り、亦其の髮を沐ひ、復故衣を以て、洗濯して淨ならしむるに、是の人、復多く其の水を汲むと雖も、彼の故衣を濯ぐに徒に疲勞せしめて、終に嚴飾をして新好ならしむる能はざるが如し。一切の生中にて、若し久生の者のごときは、彼の貧人に同じく、其の故衣を濯ぐも、終に淨ならしむる能はず、初生の者のごときは、彼の富人の、新好衣の、未だ塵垢を生ぜざるを衣んが如くなり』と。

【四二】唐にむなし、損はすつるなり。

【四三】藥王軍、異譯には藥上に作る。

【四四】久生と初生、異譯には老と少とに作る。

正等正覺の、世間に出現したまふに値遇すと雖も、佛の殊妙の色相に於て、尊重の心を起し、難遭の想を生ずる能はず、設ひ佛の、正法を宣說するを聞くを得と雖も、法に依つて修行する能はず。復取相を生じて、我慢の心を起し、暫は聽聞するを得るも、妄に多解を生ず。復易く得る所たりとの想を起し、疑惑して信ぜず、是の如きの言を作す「佛所說の如き、若しは[37]契經、若しは[38]祇夜など、我れ昔より、何の所說なるやを聞知せず。我れ今聽受記念する能はず。我は諸法に於て、悉く自ら了知したり」と。

『此の人、是の迷惑の心を以ての故に、己が愚癡を恣にして佛の法に違背し、罪業の因を作し、自ら經書を造つて、義理を撰集し、世間の中に於て、正說と爲し、是の如きの言を作す「我が造作する所は、是れ巧便の智なり、轉他人に勸めて修習せしめん」と。復己が所造の經書を以て、人に勸めて修習せしむるに、種種の方便を設使すと雖も、終に一[39]補特伽羅をして、利樂を獲しむる能はず、多生の中に於て、自ら其の身を壞し、業の因緣の故、命終に臨んで、大苦惱を受けしむるなり。

「普勇、此の諸の外道は、迷惑の心を起し、不正の見を生じて、解脫する能はざること、彼の初生の飛禽の如く、未だ翅羽を生ぜざるもの、其れ何ぞ能く飛ばん。能く飛ぶと說かん者は、是を虛誑と爲す。此の外道の輩、若し迴心して、佛の正法に歸せざれば、其れ何ぞ能く、無上・清淨の涅槃を究竟するを得ん。彼れ常に自ら計して涅[40]槃と爲す者、亦虛誑と爲す。何を以ての故にとならば、此の外道の輩は、不正の因を造り、[41]禁戒の取を起し、自身を破壞して、正法を斷滅し、堅く我見に著して、解脫するに由無ければなり。設ひ人身を得んも、尙ほ勝報には非ず、云何ぞ實に清淨の涅槃を得ん。其の自身に於てすら、猶ほ未だ、本何所より來り、當に何所に往くべきやを知る能

【三七】契經 Sūtra の譯。經は人の機に契ひ、法に契ふを以て契經といふと。

【三八】祇夜 Geya 重頌、應頌などいふ。前文に說示せる所を、重ねて偈もて示せるものの稱。

【三九】補特伽羅 pudgala 又富伽羅に作る。人の謂なり。

【四〇】槃、麗・宋二本は盤に作るも今元・明本に依る。

【四一】禁戒の取、誤れる戒を取つて之に執するをいふ。

是の時、十方の諸佛及び諸の菩薩、皆是の言を聞き、各各稱讃すらく『善い哉、善い哉、釋迦牟尼如來、能く衆生に、利益と安樂とを與へたまふことや』と。及び普勇菩薩、能く十方世界に、佛事を宣揚するを讃へたり。

爾の時、普勇菩薩、普く十方世界に於て、諸の大菩薩に宣示し已り、一彈指の頃に、此の土に還復し、佛前に住立し、世尊の足を禮し、退いて一面に坐しぬ。

是の時、四方に四の風神王有つて、會中に來入し、盡く王舍城の有らゆる境界——百由旬を過ぎて——悉く清淨ならしめて、諸の塵穢無からしめ、帝釋天主は、金剛杵を持つて、會中に來入し、諸の魔・外道は、儼然として十方世界を見、虛空の中に於て、大香雲を布き、大香雨を降らし、[三四]沈水・栴檀など、喩とは爲すべからざりき。又復衆の天華を雨らしぬ、所謂優鉢羅華、[三五]倶母那華、[三六]奔拏利迦華等の種種の妙華、空中に住し、變じて傘蓋を成じ、又佛の上に於て、八萬四千の樓閣を變作したるに、一一皆是れ七寶の所成にして、衆彩もて莊飾し、殊妙に莊嚴し、又空中に於て、大寶座を現ずること無量無邊、一一の座上に悉く皆佛有し、現に衆生の爲に、妙法を宣說したまへり。時に彼の三千大千世界は、六種に震動したり。

爾の時、普勇菩薩摩訶薩、合掌恭敬し、前んで佛に白して言さく『世尊、何の因緣を以て、虛空中に、斯の瑞相を現じたまへる。甚だ希有爲り、彼の大地、忽然として震動することや。願はくば佛、慈悲もて當に爲に宣說したまはんを』と。

佛の普勇に言はく『今此の會中に、十方の諸大菩薩、及び天・人・龍神等、皆悉來集したり、我れ今當に、爲に正法を宣說すべし。又復諸の外道の爲に、彼の邪心を破して、正見に歸せしめん。是の因緣を以ての故に、斯の瑞相をば現じたり。普勇、當に知るべし。諸の凡夫の類は、如來・應供・

【三四】沈水、agaru 略して沈香と云はるゝもの。

【三五】倶母那 kumuda 普通拘物頭に寫す。その色或は青、或は黃、或は赤など云はる。

【三六】奔拏利迦 puṇḍarīka 普通には分陀利に作る。正しく開敷せる白蓮華。

つ。慈氏、是の因緣を以て、此の光明を放つ』と。

爾の時慈氏菩薩、佛の是の大衆集會して、天・人・非人等の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提の心を發す者有り、正法を聞いて信受を生ずる者有るを說きたまへるを聞き、大歡喜を生じ、佛足を禮し已つて、右遶三匝し、卽ち會中に於て、身を隱して現はれざりき。

是の時、諸の婆羅門・外道・尼乾陀・左囉迦波哩沒囉惹迦、若しは天、若しは龍、乃至五百の大國王等、佛の所に到り已り、自ら敬を修するに隨つて、各一面に坐しぬ。

爾の時、東方に三萬俱胝の大菩薩衆有り、東南方にも、亦復是の如く、南方に五萬俱胝の大菩薩衆有り、西南方にも亦復是の如く、西方には六萬俱胝の大菩薩衆有り、西北方には亦復是の如く、北方に八萬俱胝の大菩薩衆有り、東北方にも亦復是の如く、上方には十萬俱胝の大菩薩衆有り、下方には九萬俱胝の大菩薩衆有り、是の如き等の十方の諸大菩薩衆は、一一皆十地を圓滿し、方に隨つて佛會の中に來入し、佛の所に到り已つて、各各頭面もて世尊の足を禮し、退いて一面に坐せり。

爾の時、世尊、普勇菩薩に告げて言はく『普勇、汝今復十方の世界に往き、諸の菩薩衆に宣示して、是の如きの言を作せ「如來は今日、當に衆生の爲に、大集會の正法宣說して、彼の十方一切の菩薩をして、合掌頂禮して、隨喜の心を生ぜしめたまふべし」と。』

爾の時、普勇菩薩、佛の聖旨を承け、卽ち頭面もて、世尊の足を禮し、右遶三匝し、忽ち會中に於て、身を隱して現ぜず、遍く十方の世界に往き、一一の方に隨つて大音聲を發し、是の唱言を作しぬ『今、娑婆世なる釋迦牟尼如來は、當に衆生の爲に、大集會の正法を宣說したまふべし』と。是の如く三たび復、皆是の言を唱へぬ『今、娑婆世界なる釋迦牟尼如來は、當に衆生の爲に、大集會の正法を宣說したまふべし』と。

爾の時、世尊、法を說きたまへる時に當り、復八萬四千の婆羅門衆、九十千倶胝の〔三〇〕外道・尼乾陀等の衆有り、互に相議して言はく「今〔三一〕沙門瞿曇は、王舍城鷲峯山中に居し、普く大衆を會して、何等をか說きたまふを知るや。我等今、共に彼に往き、相與に論議すべし」と。正しく是の時に當り、諸の婆羅門・外道など、旣に相議し已り、乃ち無數の眷屬と、佛の所に來詣したり。是の時世尊、卽ち會中に於て、大希有・淨妙の光明を放ち、普く大衆を照したまへり。

時に慈氏菩薩摩訶薩、卽ち座より起ち、偏袒右肩・大膝著地し、合掌恭敬し、前んで佛に白して言さく『世尊、因緣無くして、是の光を放ちたまへるには非さらん。今此の大衆は、咸聞知せんと欲す。願はくは佛、慈悲もて、我等の爲に說きたまはんを』と。

佛の言はく『善男子、汝今當に知るべし、今此の會中には、無量の衆有り、皆來りて集會す』と。慈氏菩薩、復、佛に白して言さく『世尊、何等の衆たる。若しは天衆か、若しは人衆か、若しは龍神・夜叉等の衆か』と。

佛、慈氏に言はく『汝所言の如きは、皆來つて集會す。復諸の婆羅門・外道・尼乾陀等の衆有りて、會中に來入し、我と論議し、旣に調伏し已りぬ。我れ卽ち當に、〔三二〕應の如く說法を爲し、彼の人萬四千の婆羅門、九十千倶胝の外道・尼乾陀等の衆をして、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。慈氏、復萬八千倶胝の龍王衆有り、會中に來入して、我が法を說くを聞き已り、亦皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。復六萬倶胝の淨光天子の衆、三萬二千倶胝の諸天魔の衆、萬二千倶胝の阿修羅の衆有り、是の如き等は皆來つて會に入り、正法を聽受したり。復諸の大國王有り、所謂〔三三〕歡喜王、妙喜王、最上喜王、人仙王、妙色王、勝軍王、增長王など、是の如き等の五百の大國王、各千倶胝の眷屬と倶に、皆來つて會に入り、正法を聽受し、一一皆堅固なる阿耨多羅三藐三菩提に住し

〔三〇〕外道、佛敎以外の修道者。

〔三一〕沙門 Śramaṇa 出家の都名なり。

〔三二〕應、「まさになすべきが如く」なり。

〔三三〕歡喜王以下、異譯には、歡喜、善歡喜、憂波難陀、勝踊、梵將軍、梵聲、善見、善歡喜、歡喜將軍、歡喜正、頻婆娑羅、波斯那右長等の諸王を擧ぐ。

また是の言を作す有り「諸法は有に非ず、果報も亦無し因は本自ら空なり、何ぞ能く果有らん」と。因果既に無しとは、妄言の歸趣なり。

『普勇、一切の衆生、[二三]心行を差別するに、明暗相違し、因果自ら異る。彼の正說の者、眞實の見を起す、是を卽ち名けて、正法を建立すとは爲す。此の人の福報をば、汝今說くを聽け、二十劫の中、[二四]北倶盧洲に生ぜず、二十五劫の中、皆[二五]三十三天に生れ、彼の天の報盡くれば、乃ち百千の諸佛刹中に生れ、彼の諸佛を見て、正法を聽受せん。是の人は復、阿耨多羅三藐三菩提より退轉せず。

『彼の邪說の者は、[二六]斷滅の見を起す、是を卽ち名けて、正法を破壞すと爲す。此の人の罪報をば、汝今復聽け。此より命終して、[二七]大地獄に生れ、苦を受くること一劫、是の如き一劫に而も復一劫にして、正しく八劫を滿たし、一一別に一大地獄に生れ、是の如き等の八大地獄に於て、大苦を受け已り、復九千二十八劫の中に於て、倘ほ三惡趣に、展轉して復生れ、大苦惱を受け、是の劫を過ぎ已つて、人身を得と雖も、萬六千劫の中、死して母の胎藏にあり、萬四千劫の中、舌根具せず、萬二千劫の中、[二八]莽婆賓拏と爲り、萬一千劫の中、生るるも便ち目無けん。

『普勇、當に知るべし、一切の衆生は、窮盡有ること無く、若し此界に、若しは他界に、若しは生縁に、若しは死緣に、若しは是處に、若しは非處に、若しは可意に、若しは不可意にあり。唯心造作すれば、隨つて業發現するなり。或は衆生、諸の善法を修して、天趣に生るるを得る有り、或は衆生、菩提の爲の故に、諸の行願を修する有り、或は衆生、漸く究竟無上の寂滅を得る有るなり。是の因緣を以て、諸佛如來は、無數百千倶胝那庾多の衆生――若しは已に趣を發ち、若しは未だ趣を發たざるもの、若しは天・人・龍神等――の爲に、說法して化度し、[二九]刹那の頃も休息有ること無きなり』と。

【二三】心行、善惡の所念をいふ。心は念念に遷流するが故に心行といふ。

【二四】北倶盧、Uttarakuru 須彌山を周る大海の四方に四の大洲あり、北方にあるを北倶盧洲とす。

【二五】三十三天、忉利天(Trāyastriṁśa)の譯、欲界六天中の第二、須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬にあり。中央に喜見城あつて、帝釋の居城なり。四方に峯あり、峯每に八天ありて、三十三を成ず。

【二六】斷滅の見、略して斷見とも稱し、衆生の身心は、一期を限つて斷滅すと見るをいふ。

【二七】大地獄以下、盲目の頃まで、異譯には、前段と顚倒す。

【二八】莽婆賓拏 Māṁsapiṇḍa 肉塊をいふ。異譯相當文には肉搏と云へり。

【二九】刹那 Kṣaṇa、一念と譯す、時の最少なるもの。

『若し衆生有り、諸佛を見んことを樂はば、即ち佛の身を現じて說法を爲し、若し衆生有つて、菩薩を見んことを樂はば、即ち菩薩の身を現じて說法を爲し、若し衆生有つて、緣覺を見んことを樂はば、即ち緣覺の身を現じて說法を爲し、若し衆生有つて、聲聞を見んことを樂はば、即ち聲聞の身を現じて說法を爲す。又復若し天趣に在らば、即ち天の身を現じて說法を爲し、若し人趣に在らば、即ち人身を現じて說法を爲し、若し龍趣に在らば、即ち龍身を現じて說法を爲し、若し夜叉趣に在らば、即ち夜叉の身を現じて說法を爲し、若し鬼趣に在らば、即ち彼の身を現じて說法を爲し、諸趣類の一切衆生の彼彼の色相に隨つて、爲に身を現じ、善方便を以て、爲に妙法を宣し、怖畏無からしめ、深く信解せしむ。

『普勇、我れ今何の故にか、諸の方便を以て、種種の身を現じ、說法を爲すとならば、諸の衆生、是の法を聞き已り、[二〇]勝義諦に於て、大[二一]總持を得、諸の世間を觀じて、無常の想を起し、常に一切の善法を修行せんことを念じ、而も能く究竟して、諸の[二二]雜染を離れ、眞實の善根、損減する所無からしめんとするを以てなり。我れ長夜に、是の方便を以て、一切の衆生を利益し、安樂ならしむ。

『普勇、我れ上に說くが如く、此の大集會の正法は、是の如き功德有り。此の會中に於て、疑を生ずる者有り、互に相謂つて言はく「正法の果報は有と爲すや、無と爲すや。阿耨多羅三藐三菩提は、可得と爲すや、不可得と爲すや。一切の衆生は、度し能ふと爲すや、度する能はずと爲すや」と。

また是の言を作す有り、「佛所說の如く、諸法は實に因有つて、能く果を生じ、果は必ず因に從ふや。善因を種うる者、善法何ぞ失せん」と。

【二〇】勝義諦、世俗諦に對する眞諦をいふ。虛妄を離れ、決定して動かざる理性にして、聖智の所見なり。
【二一】總持、陀羅尼(dhāraṇī)の譯、善を持して失はず、惡を持して起らしめざるの謂。
【二二】雜染、一切の有漏法をいひ、善・惡無記(中性)を該ぬ。

けまつるに値遇したり。我れ時に彼に於て復出家したり。是の時閻浮提中の有らゆる衆生は、悉く皆大富にして、七寶具足し、快樂無礙にして、一衆生の、不足の苦を受くるも無かりき。彼の諸佛等、既に世に出で、廣く衆生の爲に、大集會の正法を宣說したまへり。我れ時に彼の諸如來の所に於て、恭敬・尊重・承事・供養し、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまはんことを求めたりしに、時に諸佛等、皆我に授記を與へたまはざりき。我れ卽ち白して言さく「諸佛世尊、我れ何の時にか、當に授記を得べき」と。彼の諸佛言はく「善男子、汝是より阿僧祇劫を過ぎて、佛の出世して、號して然燈と曰ふ有らん。彼の佛世尊こそ、當に汝に記を授くべし」と。

『我れ時に、是の諸佛の言を聞き已り、菩薩の行を修して、轉復精進したるに、卽時に又、阿僧祇劫を過ぎ、[15]然燈如來、世に出現したまへり。我れ時に彼に於て、摩拏嚩迦と爲り、名けて[16]勝雲と爲し、諸の梵行を修して、彼の佛を見るを得、大歡喜を生じ、恭敬・尊重して希有の心を發し、卽[17]優鉢羅華を七莖持つて、彼の佛を供養し、是の願を作して言はく「願はくは我れ、此の善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提に迴向せん」と。是の時、燃燈如來、大衆の中に於て、我に授記を與へて、是の如き言を作したまへり「善男子、汝、未來世に、阿僧祇劫を過ぎて、當に成佛するを得て、釋迦牟尼と名け、[18]十號具足すべし」と。我れ爾の時、授記を得已り、彼の佛前に於て、身を虛空に踊らすこと、高さ十二[19]多羅樹、却いて地に復し、一心に歡喜して、卽時に無生法忍を證得したり。

『普勇、當に知るべし、我れ是の如き無數の劫中に於て、諸の梵行を修し、諸の善根を種え、諸佛を供養したり。皆諸の波羅蜜を圓滿せん爲の故なり。自ら圓滿し已り、復無數百千俱胝那庾多の衆生をして、悉く皆是の如き一切の諸波羅蜜の法を圓滿せしめたり。我れ今日、已に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得て、普く衆生の爲に、廣大に最上甚深微妙の法門を宣說するなり。

【一五】然燈、梵に提和竭羅 Dipaṃkara 錠光とも譯す。
【一六】勝雲、異譯に梵音彌伽 Megha を出し(彌伽は魏に雲と云ふ)と註す。
【一七】優鉢羅、Utpala青蓮華或は紅蓮花と譯す。
【一八】十號、佛を諸方面より讃へたる十種の德號、如來、應供、等正覺、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊の十種。
【一九】多羅 Tala 岸樹、高竦樹など譯す。形椶櫚に似て、高さ七八十尺なりといふ。

『昔勇、我れ復又念ずるに、過去の劫中に、九十五倶胝の如來應供正等正覺の、同じく[九]能寂と名けまつるに値遇したり。我れ亦是の時も、勇施の行を修し、大國王と爲り、正法を以て一切を治し、自在に快樂し、世財無量なりき。亦上の如き諸の供具等を以て、一一に彼等諸佛に供養したり。時に諸の如來、亦皆與に我に、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたり。

『昔勇、我れ復又念ずるに、過去の劫中に、九十倶胝如來・應供・正等正覺の、同じく[一〇]作莊嚴と名けまつるに値遇したり。我れ亦是の時、勇施の行を修して、婆羅門と爲り、大寶藏有り、一時の中に於て、盡く所有を捨し、上の如き等の、諸妙供具を辦じて、一一に彼等諸佛を供養したり。時に諸の如來、亦皆與に、我に阿耨多羅三藐三菩提の記をば授けたり。

『昔勇、我れ復又念ずるに、過去の劫中に、十八倶胝の如來・應供・正等正覺の、同じく[一一]金仙人と名けまつるに値遇したり。我れ亦是の時も、勇施の行を修し、亦上の如き諸の供具等を以て、一一に彼等諸佛を供養したり。時に諸の如來、亦皆與に、我に阿耨多羅三藐三菩提の記をば授けたり。

『昔勇、我復又念ずるに、過去の劫中に、十三倶胝の如來・應供・正等正覺の、同じく[一二]吉祥光と名けまつるに値遇したり。我れ亦是の時も、勇施の行を修し、亦上の如き諸の供具等を以て、一一に彼等諸佛を供養したり。時に諸の如來も、亦皆與に、我に阿耨多羅三藐三菩提の記をば授けたり。

『昔勇、我れ復又念ずるに、過去の劫中に、二十五倶胝の如來・應供・正等正覺の、同じく[一三]妙華と名けまつるに値遇したり。我れ爾の時、初めて信心を發し、出家して道を修し、常に精進を行じて、是の如き等の諸如來の所に於て、一一に恭敬・承事・供養したること、彼の阿難の如く、等しくして異有ること無かりき。時に諸如來、亦皆與に、我に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたり。

『昔勇、我れ復又念ずるに、過去の劫中に、十二倶胝の如來・應供・正等正覺の、同じく[一四]勝觀と名

【九】能寂、同に釋迦牟尼(Sākhyamuni)に作る。能寂はその譯なり。

【一〇】作莊嚴、同に迦羅迦鳩村陀(Krakucchanda)に作る。略して拘樓孫といふ。

【一一】金仙人、同に迦那伽牟尼(Kanakamuni)に作る。略して拘那含に作る、

【一二】吉祥光、同に光明德に作る。

【一三】妙華、同に弗沙に作る。

【一四】勝觀、同に毘婆施(Vipaśyin)に作る、

巻の第三[一]

爾の時、世尊、普勇菩薩に告げて言はく『汝今諦に聴け、我れ過去を念ずるに、無量無數阿僧祇劫前に、十二倶胝の如來應供・正等正覺の同じく寶上と名けまつるに値遇したり。[二]我れ爾の時、勇施の行を修し、卽ち飲食・衣服、殊妙の莊嚴・珍寶・瓔珞及び諸の華鬘・塗香等を以て、一一彼等の諸佛を供養したり。時に諸如來、皆我が與に阿耨多羅三藐三菩提の記を[三]授けたり。

『普勇、我れ復又、過去の劫中を念ずるに、十八倶胝の如來・應供、正等正覺の、同じく[四]寶光と名くるに値遇したり。[五]我亦是の時にも、勇施の行を修し、亦上の如き諸供具等を以て、一一彼等の諸佛に供養したり。時に諸如來、皆與に我に、阿耨多羅三藐三菩提の記をば授けたり。

『普勇、我れ復又念ずるに、過去劫中に、二十倶胝の如來・應供・正等正覺の、同じく[六]頂生と名けまつるに値遇したり。我れ亦是の時にも、勇施の行を修し、亦如上の諸供具等を以て、一一に彼等諸佛を供養したり。時に諸の如來、亦皆與に、我に阿耨多羅三藐三菩提の記をば授けたり。

『普勇、我れ復又念ずるに、過去の劫中に、二十倶胝の、如來・應供・正等正覺の、同じく[七]飲光と名けまつるに値遇し、我れ亦是の時も、勇施の行を修し、亦上の如き諸の供具等を以て、一一に彼等諸佛を供養したり。時に諸の如來、亦皆與に、我に阿耨多羅三藐三菩提の記をば授けたり。

『普勇、我れ復又念ずるに、過去の劫中に、十六倶胝の如來・應供・正等正覺の、同じく[八]無垢光と名くるに値遇したり。我れ亦是の時も、勇施の行を修して、大長者と爲り、甚だ大に財富めり。亦上の如き諸供具等を以て、一一に彼等諸佛を供養したり。時に諸の如來、亦皆與に、我に阿耨多羅三藐三菩提の記をば授けたり。

【一】元魏譯、巻第二のつゞき。

【二】同に我於二爾時一、名曰二淨月一とあり。

【三】授けたり、同には授けざるを云ふ。以下の諸佛に就ても亦同じ。

【四】寶光、同に寶明に作る。

【五】同に我於二爾時一、名曰二龍正一と云へり。

【六】頂生、同に式棄に作る。

【七】飲光、同に迦葉（Kāśyapa）を出す。

【八】無垢光、同に淨光に作る。

の五業を造れる者をして、重罪を滅するを得しめたるは、我れ實に、何等の位に居するやを知らず。願はくは佛、慈悲もて當に開示を爲したまふべし』と。佛の言はく、『普勇、彼の仙人は、既に不退轉地を得、久しく已に大集會の正法を成就したるなり。普勇、當に知るべし、諸佛の語言は、甚深微妙なり、若し此の正法を聞いて、深く信受を生ずる有らんに、是れ即ち彼の仙人を見、亦同じく彼の砧佃沙等の諸佛如來の、殊妙の色相を見、諸佛に愛敬せられ、諸佛に稱讃せられ、常所に諸佛の三昧に安住して、能く是の如き大集會の正法に通達せん』と。

大集會正法經卷第二

法は甚深にして解し難く了し難く、一切の如來、共に尊重する所たり。若し復人有りて、須臾も聽受せんに、卽ち是の如き廣大の利益をば得るなり』

普勇菩薩、復佛に白して言さく『世尊、彼の五大河とは、其の名何等なる』と。佛の言はく『五大河とは、所謂殑伽河・[三七]細多河・[三八]嚩芻河・[三九]閻牟那河・[四〇]賛捺囉婆誐河なり。此の五大河には、一一各五百の小河有りて、共に圍遶し、其の水流注して大海に入る。彼の五大河の一一の河中には、復各一の大龍王有り、所謂[四一]歡喜龍王・商珂龍王・嚩漢底龍王・唧怛囉西那龍王・法思惟龍王などにして、是の如き等の龍王は、各一千の眷屬と俱に、閻浮提に於て、時に甘雨を降らし、百穀の苗稼、皆悉滋茂し、乃至山川・溪壑・林藪・泉池・花卉・菓[四二]蓏・枝葉・根莖など、雨の及ぶ所、豐足せざる無し。

『普勇當に知るべし、若し衆生有り、此の正法に於て、不善の語業を起し、輕謗を生ぜんに、彼の獲る所の罪、無量無邊ならん。又復若し衆生有り、此の正法に於て、善の語業を發し、讃歎を行ぜんに、彼れ獲る所の福聚、亦無量無邊にして、是の人卽ち能く善友に親近し、如來を見るを得ん。若し佛を見るを得なば、卽ち能く一切の罪障を銷滅せん』と。

『普勇、譬へば四大洲の中に、[四三]鐵輪王有つて、一洲の主と爲り、威猛自在にして廣大に快樂し、復能く一切の人民を利益せんが如し。今此大集會の正法も、亦復是の如くにして、閻浮提の中に於て、諸の衆生の爲に、大利益を作さん。若し此の正法を聞くを得ずんば、是の人、阿耨多羅三藐三菩提を成ずる能はず、菩提場に住し、師子座に處つて、大法輪を轉じ、大法鼓を擊つ能はざらん。亦復涅槃界に入つて、大光明を放ち、普く世間を照す能はざらん』と。

普勇菩薩、復佛に白して言はく『世尊、彼の蓮華上世界なる、蓮華藏如來所說の仙人の、能く彼

【三七】細多 Sītā 阿耨達池の北面より流れ出でて東北海（或は西面より出でて西海）に入るもの。異譯には私陀に作る。

【三八】嚩芻 Vakṣu, Vaṅkṣu かの池の西面より出でて西海に入るもの。異譯には博叉に作る。

【三九】閻牟那、Yamunā 恒河の一支流、異譯には耶牟那とす。

【四〇】賛捺囉婆誐、異譯には月分河と譯す。

【四一】歡喜以下の五龍王の名は、異譯に在つては、復有二五大河一、在二虛空中一、一河各有二一千小河一と云へる五河の一一に當る。卽ちその第一河を須陀羅、第二河を躧佉、第三河を婆呵底、第四河を質多斯那、第五河を法蓋となす。その中、歡喜は nanda, 商佉は Śaṅkha, 唧怛羅西那は Citrasena

【四二】蓏うり。

【四三】鐵輪王、鐵の輪寶を感得して、閻浮提一洲を統御する帝王。四輪王の一。

若し人、一偈に於て、　隨喜し聽受せば、
乃ち名けて、　深く善根を種うる者と爲すべし。
何に況んや更に一心に、　尊重・恭敬を生じ、
華鬘・塗香、　栴檀の末香等、
珍寶の蓋・幢幡などを以て、　此の正法を供養し、
自らも作し、及び他にも勸め、　見聞して隨喜を生ぜんに、
獲る所の諸の福報は、　廣大にして窮り有ること無からんをや。
善い哉、汝仙人は、　眞實に[三三]悲を具する者なりと。
天子・龍王の衆、　及び夜叉等は、
是の稱讃を作し已り、　仙を禮して現ぜざりき」と[三四]。

爾の時、普勇菩薩、釋迦牟尼佛の前にして、蓮華藏如來の、大集會正法の、是の如き功德を稱讚したまへるを廣說し已り、合掌恭敬し、前んで佛に白して言さく『若し復、人有り、此の正法に於て、但だ能く合掌して、頂禮恭敬せんに、獲る所の善利は、復云何なる』と。佛の普勇に言はく『是の人獲る所の福聚は、亦復無邊にして、譬へば[三五]無熱池龍王所居の如くなり。彼の宮殿は、日の照さざる所にして、[三六]五の大河有り、池水流出して、窮盡有ること無く、假使人有り、池水の一一の滴數を知らんと欲するも、汝是の人、能く知らんと謂ふや不や』と。普勇白して言さく『不とよ、世尊』と。

佛の言はく『此の大集會の正法所有の善根、廣大無比なること亦復是の如くなり。假使人有り、此の法の功德の限量を知らんと欲し、縱千劫を經とも、終に盡すこと能はざらん。又復普勇、此の

【三三】悲、大悲。

【三四】以上、普勇菩薩の、蓮華藏世界に於ける說話は、異譯にては、佛の一切勇（卽ち普勇）に對する說法となす。

【三五】無熱、Anavatapta 阿那婆達多の譯、雪山の頂に池有り、無熱と名く、中に五種の堂あり、龍王常に其の中に居ると。その所居より名を取る。

【三六】五大河、次參照。

若し人能く一心に、
大集會の法の、
一の四句の偈をも聴かんに、
無量の福聚を獲、
五逆の重罪を滅し、
廣大の果報を得て、
一切の諸蓋纏より、
刹那に能く解脫せんと。
時に彼の業を造れる人、
仙の言ふ所を聞き已つて、
卽ち合掌恭敬し、
一心に頭面もて禮し、
是の如き讃言を作せり。
善い哉、善知識、
能く我に大集會の
法門を引示したまへることやと。
仙人此を說き已るに、
時に萬二千の
諸天子の衆等有り、
仙人の所に來詣し、
各恭敬合掌し、
頭面もて仙の足を禮したり。
復四倶胝の
諸大龍王の衆有り、
亦仙人の所に來詣し、
頭面を以て足を禮しぬ。
又萬八千
倶胝の夜叉王有り、
仙の所に來詣し、
亦頭面を以て足を禮し、
倶に是の如く白して言さく、
善い哉、大仙人は、
深く諸佛の法を了し、
善く天界の門を開き、
及び億倶祇の三塗受苦の趣を滅し、
大集會の微妙にして最上の法、殊勝の功德有り、
能く諸の重罪を息むるを
稱揚したまふことやと。

其の事を知るは云何、　願はくは尊、我が爲に說きたまはんをと。
無垢月、答へて言はく、　汝等今當に知るべし、
提舎を付して子に與ふるは、　亦因緣無きにしもあらず、」
我れ往昔を念ふに、」　囉惹を(三)蓮華と名け、
境界甚だ廣大、　自在にして富貴なりき。
而も彼れ一時に於て、　亦一子を生めり、
其の手漸く長大して、」　卽ち其の父母を害したり。
我れ今若し、　此の提舎を以て、子に與へざれば、」
當に彼の蓮華の如く、　無量の苦惱を受くべし。
我れ常に自ら思惟すらく、」　應に後悔を生ずべからじと。
是の因緣を以ての故に、」　我れ今當に彼に付すべしと。
是の時、彼の仙人、　五業を造れる者の爲に、
是の因緣を說き已り、」　復彼の人に告げて言はく、
汝今、五業を造つて、」　極重なること、彼にも過ぎたり、」
我れ悲愍の心を生じ、」　汝の爲に方便を設けん。
汝、佛の所に詣り、　大集會の法を聽くべし。
若し聽受するを得なば、　罪業皆銷滅し、
所有の煩惱障、　悉く皆無礙なるを得ん。
正法を聞くを以ての故に、」　惡趣を墮せんことを免る。

【三】蓮華、異譯に缺く。

相師是の白を作さく、　此の子、七歲に至らば、
當に癡害の心を起し、　父母の命を斷ぜんと。
囉惹復告げて言はく、　其の相是の如くなりと雖も、
寧ろ我が身命を棄てんとも、　此の子をば終に壞せじ。
我れ若し是を棄つれば、　當に人趣に復せざるべし、
卽ち諸の眷屬をして、　善く我が子を養育せしめんと。
其の後、彼の童子、　久しからずして漸く長大したるに、
是の時、無垢月、　彼の相師の言を憶ひ、
卽ち是の如き念を生じたり、　今や我が業の至らんを恐る、
何の悋惜する所か有らんと。　既に是の念を作し已り、
乃ち童子に勅令すらく、　汝今我が位を繼げと。
復童子に謂つ言はく、　汝今當に諦に聽くべし、
今の我が此の境界は、　廣大にして復殊異なり、
日月の如くに世を照らし、　富貴にして自在なり。
今我が此の提舍をば、　悉く當に汝に付すべし、
我れ此の境中に於て、　復所有を爲さじと。
「時に諸の臣僕等、　忽ち是の事を聞き已り、
無垢月のもとに來詣し、　咸この白言を作さく、
我が尊、今、何の故にか、　境界を棄捨する。

重罪銷滅するを得なば、
佛に妙法門有り、
是れ最上の方便なり、
彼の人、仙に答へて言はく、
仙人復告げて言はく、
人の、火もて已に焚かれたらんが如し、
我れ今、悲心を以て、
汝、今當に善く聽け。
無量無邊
時に一の[三〇]羅惹有り、
眷屬甚だ熾盛にして、
羅惹、一時に、
即ち相師を召して、
乃ち相師に問ひて言はく、
善と爲すや、惡相と爲すや、
相師前んで白して言はく、
我が觀ずる所の如くんば、
羅惹復謂つて言はく、
汝所觀の相の如く、

我は即ち是れ所歸たればなり。
名けて[二七]大集會と爲す。
汝、昔より曾て聞けるや不やと。
我れ昔より未だ曾て聞かずと。
哀い哉、罪業の者、
誰か當に爲に說法すべき。
汝に微妙の法を示さん、
[二八]我れ往昔の時を念ずるに、
[二九]阿僧祇數の劫を過ぎて、
[三一]無垢月を名と爲せり。
正法を以て世を治したり。
一子を生育し、
彼の善惡の相を觀せしめ、
今我が此の一子、
汝の觀ずるところ、當に云何なるべきと。
怪しい哉、此の一子、
其の相極めて不善なりと。
不善の相とは云何、
諦に實に我が爲に說けと。

【二七】大集會、異譯には僧佉吒(Saṃghāṭi)に作る。

【二八】以下、元魏譯卷第二。

【二九】阿僧祇asaṃkhya 無數、又は無央數など譯す。

【三〇】羅惹、Rāja 王なり。

【三一】無垢月、異譯に後月とす。

是の時、彼の仙人、　食し已つて手足を濯ぎ、
即ち[二三]跏趺して坐し、　彼れ親しく自首するを聽きぬ。
彼の人、時に右遶し、　仙を禮して退き坐し、
白して言さく、我れ愚癡にして、　父を殺し及び母を害すると、
[二四]和合の[二五]僧伽を破すると、　菩薩の三昧を毀すると、
如來の正智を壞するとの、　此の五種の業をば造りつと。
彼の仙、是の說を聞き、　即時に謂つて言はく、
汝實に不善の人なり、　此の如き等の罪を作せるはと。
彼の人、仙の言を聞き、　又復憂惱を生じ、
所救無くして、必ず當に　惡趣に墮すべきを恐畏したり。
「是の時、座より起ち、　彼の仙人の足を禮し、
轉復恭敬を生じて、　是の如きの白言を作せり、
仙人、悲念したまへ、　我れ極重惡業の者、
疑惑と苦惱との深きもの、　唯願はくは依[二六]怙と作らんを。
我れ是の如く悔ゆと雖も、　出離の方便とて無し、
仙人、大慈悲もて、　我が罪をして銷滅せしめたまはんをと。
仙、是の說を聞き已り、　彼の人を安慰して言はく、
汝、今、怖畏する勿れ、　我れ能く救護を爲さん、
一心に汝を開導し、　汝をして衆の苦より離れしめん。

【二三】跏趺、趺を左右の髀上に結加して座するをいふ。
【二四】和合の僧伽云云、異譯に破塔と云へり。
【二五】僧伽 Saṅgha 僧團なり。
【二六】怙、たのみとするなり。

汝今我が言を聽け、
佛、菩薩の聖道には、
今一の山に往くべし、
汝當に親しく敬禮すべし、
かれに最勝の方便有り、
能く諸の怖畏を離れ、
「彼の人、是の時に於て、
卽ち山中なる
到り已つて一仙を見、
合掌しして是に白して言はく。
我に怖畏と苦惱とあり、
必ず惡趣に墮せん、
我れ晝夜の中、
常に憂ひて苦惱を生じ、
我れ今仙人に於て、
我が所聞の如くんば、
我が爲に說きたまはんを、
如何して、
時に彼の仙、答へて言はく、

汝の爲に方便を設けん、
汝未だ能く趣向せず。
仙人修行の處たり、
彼れ能く救護を爲さん。
上妙の正法とは謂ふ、
極惡の業を銷除せん。
空中の聲を聞き已り、
仙人修行の處に詣り、
卽時に頭面もて禮し、
願はくは我を救護したまへ。
極重の惡業を造りぬ、
云何が免離するを得る。
飲食及び坐臥に、
暫時も少しの樂とて無し。
信心と尊重とを生ず、
願はくは仙、
我が造れる衆の惡業をば、
銷滅するを得るやと。
汝問へるを、我れ當に說くべしと。

親友の力も能はず、　一切依止すべき無しと。
復是の思惟をば作しつ、　我れ、如かず、今時に、
彼の高山の頂に往き、　身を墜して此の命を終り、
惡業を增長し、　苦惱に轉生して、
此世及び他世に、　惡業の爲に壞せられんを免れんには、
內には旣に依怙無く、　身外も亦復然り、
現に過失を爲せる因のため、　當に極惡の報を受くべしと。
彼れ是の念を作し已り、　而も復自ら啼泣したり。
卽時に虛空の中に、　天人有り、告げて言はく、
悲しい哉、汝、愚癡の心より、　諸の苦惱を生じて、
歸するもの無く、復救ふもの無し、　汝自ら五業の、
父を殺し、母を害する等を作して、　苦惱を今自ら受くるに。
何の故にか是の思惟を作して、　高山に命を殞さんとは欲する。
我れ今、汝に勸む、　愚癡の見を起す勿れ、
但だ悔過の心を生ぜんを、　何ぞ身命を損することを須ひん。
貪・瞋・癡の三毒は、　汝の心より生ずる所なり、
惡趣中の苦惱は、　免離するを得るに由無し。
身命を絕たんと欲すと雖も、　精進とは名くるを得ず、
此處の命は速に盡き、　後の惡報は速に生ぜん。

謂はく父を殺し、母を害し、
菩薩の三昧を毀ち、
彼の人、是の罪を作して、
憂惱し復啼泣して、
後世及び多劫にも、
我れ衆の惡業を造りたれば、」
苦よりして苦を生じ、」
衆の善友を遠離して、
出世と世間の法とを、
無量劫の善因も、
世間の舍宅は、
而も忽ち火の爲に焚かれては、」
我が作せる罪も亦然なり、」
業火の爲に焚かれて、
在在世の所生に、
常に貧困・飢渇など、
是の如き等の報應は、
皆五業より生じたる、
我れ今苦しむこと既に然り、」

和合の僧伽を破し、
如來の正智を壞したるなり。
後に卽ち追悔を生じ、
心に是の如きの念を生じたり。
唯に此の身を壞するのみには非ずして、
其の身皆破壞せん。
苦の受轉復深く、
世の爲に輕[二]誚せられん。
我れ悉く皆已に焚きつ、
破壞して增長せざらん。
衆彩もて莊嚴せらるるも、
人皆愛樂を絕ちなんが如くなり。
此の世と他の世とは、
自も他も愛樂するところに非ず。
人のために譏罵・[三]捶打せられ、
苦惱の衆のために侵さる。
別因の所感には非ず、
不善の果の失する無き」を示すなり」。
誰か救護者とは爲る、

【二】誚、責なり、呵なり。

【三】捶、むちうつなり。

「又人有りて大海に臨み、手勺を以て、水を盡く枯渇せしめんと欲するが如し。汝は是の人、能く就すと謂ふや不や」と。我れ復答へて言はく「不とよ、世尊」と。「是等の愚人は、海水に於て、邊際を知らんと欲し、盡く枯渇せしめんと欲すと雖も、終に就す能はずして、自ら疲勞し、深く大失を爲さん」と。

『時に彼の佛の言はく「諸凡夫の類も、亦復是の如くにして、此の正法をば聽受する能はずして、生死の海に於て、妄に顚倒を生じ、愚癡を增長して、深く[一八]大失を爲す。是の人、百千倶胝那庾多を經て、如來・應供・正等正覺の、世に出現したまふと雖も、善根を種ゑず、佛を見るを得ず、是の法を聞かず、諸佛の爲に護念せられず。若し智有らん者、能く百千倶胝那庾多の佛所に於て、淨信の心を發し、彼の諸佛を見て、大歡喜を生じ、乃ち諸佛に從つて、是の法を聞くを得、是の法を聞き已つて、卽ち如實に知り、輕謗を生ぜざらん。是の人は、大善根利を得て、卽ち諸佛の爲に、共に護念せられん。若し人、此の正法に於て、能く一つの四句の偈をも、聽受・書寫せんに、是の人當生には、九十五千倶胝の佛刹を過ぎ已つて、[一九]極樂世界に生れ、佛より法を聞くを得、壽命八萬四千劫ならん」と。

『彼の蓮華藏佛、復我に告げて言はく「若し人、五逆罪に於て、或は自の所作たり、或は他に敎へて作さしめ、或は見聞隨喜せんには、是の人當に五無間の苦を受くべし。若し此の大集會正法の、一四句の偈をも聞くを得る有らんには、卽ち是の如き等の業を、銷滅するを得ん」と。

『是の時、彼の佛、卽ち我が爲に、伽陀を宣說したまはく[二〇]

「汝、今、我れ　此の經を聞くの功德を說かんを聽け、
往にし劫に一人有つて、　具に五種の業を造りぬ。

【一八】大、麗本太に作る、今三本に依る。

【一九】極樂 Sukhavatî 阿彌陀佛の本願に由つて造られたる世界、異譯には如阿彌陀國と云へり。

【二〇】以下、本經の偈文を以てせる所、異譯に在つては、一部分のみ偈にして、餘は長行（散文）たり。

三千大千世界に遍滿する、前の如き數量の斯陀含に施したらんには如かず。若し是の如き斯陀含に施さんには、一[二六]阿那含に施したらんには如かず。若し一阿那含に施さんも、彼の三千大千世界に遍滿する、前の如き數量の阿那含に施したらんには如かず。若し是の如き阿那含に施さんも、一の[二七]阿羅漢に施さんには如かず。若し一阿羅漢に施したらんも、彼の三千大千世界に遍滿する、前の如き數量の阿羅漢が施したらんには如かず。

「若し是の如き阿羅漢に施さんも、一の緣覺に施さんには如かず。若し一の緣覺に施さんも、彼の三千大千世界に遍滿する、前の如き數量の、有らゆる緣覺に施さんには如かず。若し是の如き緣覺に施さんも、一の菩薩に施さんには如かず。若し一の菩薩に施さんも、彼の三千大千世界に遍滿する、前の如き數量の、有らゆる菩薩に施したらんには如かず。若し是の如き菩薩に施さんとも、一の如來に於て、淨信の心を發し、布施供養せんには如かず。

「若し一の如來に於て、信心もて供養せんも、彼の三千大千世界に遍滿する、前の如き數量の、一切の如來に、信心もて供養せんには如かず。是の如き如來に於て、信心もて供養すと雖も、人有り、此の大集會の正法に於て、暫くも聞持するを得て、獲る所の福聚の、倍彼よりも多からんには如かず。何に況んや、更に能く、書寫讀誦せんに、是の如き功德の、稱計すべからさるをや」と。

『此の時、彼の佛、又我に告げて言はく「善男子、汝此の正法に於て、淨信の心を發し、宣揚流布すべし。諸の凡夫の類は、此の正法に於て、聞くことを得る能はず。設ひ聞く者有るも、疑を生じて信ぜず。如何ぞ能く此の大法聚に入らんや。譬へば人有りて大海に入り、盡く其の水の邊際を見んと欲するが如し。汝は是の人、能見んと謂ふや不や」と。我れ即ち答へて言はく「不とよ、世尊」と。

【二六】阿那含 Anāgāmin 不來、又は不還と譯し、九品の中、後の三品の惑を斷じたる位。
【二七】阿羅漢 Arhat 不生と譯す、色・無色界の一切の修惑を斷じたる位。

「乃至命終の時に臨んで、正念現前して、心顚倒せず、即時に東方には十二殑伽沙數の佛有つて、面其の前に現じ、南方には二十殑伽沙數の佛有り、西方には二十五殑伽沙數の佛有り、北方には八十殑伽沙數の佛有り、上方には九十千倶胝の佛有り、下方には百倶胝の佛有り、是の如き等の諸佛、皆爲に現前し、其の人を安慰して、咸是の言を作さん――汝、善男子、怖畏を生ずる勿れ、汝は先に已に能く大功德有りて、依怙たりき。汝今此の百千倶胝・那庾多・殑伽沙數の佛世尊を見まつるや不や――と。彼れ答へて、見まつると言はん。時に諸佛の言はく――善男子、此の諸如來は汝の功德力を以ての故に、倶に此に來至したまふなり――と。彼の人復言はん――我れ今何の善根力を以ての故にか、是の如くなるを獲る――と。彼の諸佛の言はく――汝久しく大集會の正法を聞ける大善根力を以ての故なり――と。彼の人又言はん――我の如く、一人すら、正法を聞くを得て、尚ほ是の如き無量の功德を獲んには、何に況んや能く、有情界を盡して、普く聞知するを得しめたらんをや――と。」

『時に蓮華藏如來、彼の命終に臨める人の、諸佛を見已りて廣說したまひ、又我に告げて言はく「善男子、若し人の、此の大正法の一四句の偈を聞くことを得なば、彼の十三殑伽沙數の如來・應供・正等正覺を供養して、獲る所の福聚と等しくして異有ること無けん。又若し人有り、此の大集會正法を聞くことを得んに、所有の福聚は、譬へば三千大千世界に遍滿して、悉く胡麻を置き、是等の麻の量、一一皆是れ轉輪聖王ならんが如し。假使人有り、諸の珍寶を以て、各是の如き輪王に布施を行じて、所獲る所の福聚は、唯一の[一四]須陀洹に施したらんには如かず。若し一の須陀洹に施したらんには、彼の三千大千世界に遍滿する、前の如き數量の須陀洹に施さんには如かず。若し是の如き須陀洹を施したらんも、一の[一五]斯陀含に施したらんには如かず。若し一斯陀含に施したらんも、彼の

【一四】須陀洹 Srotāpanna 逆流又は預流と譯す。三界の見惑を斷じたる位。
【一五】斯陀含 Sakṛdāgāmi 一來と譯す、欲界九品の中、六品の惑を斷じたる位。

に、復は彼よりも多くして、算數譬喩の知る能はざる所たり。但だ能く此の正法に於て、一字を書寫せんとも、是の人獲る所の福聚は、已に彼に勝る。況んや復人有り、此の正法に於て、一の四句の偈を受持せんに、是の人の功德は、稱計すべからずして、一切の寶藏、常に出現する所、一切の煩惱、皆消滅するを得、一切法炬の光明、普く照らし、一切の天魔、能く勝る者無く、一切の菩薩、盡く觀察する所、一切の法門、皆悉く能く入らん」と。

『彼の佛、是の言を作し已りたまへば、我れ卽ち白して言さく「世尊、若し衆生有り、能く是の如き大集會の正法に於て、正行を修せんに、乃ち名けて最上梵行と爲すを得ん。而も彼の[八]梵行は、卽ち如來の行なり。若し勤めて修習し、間斷無からんには、是の人卽ち、百の佛如來、晝夜の中に於て、常に現在前したまふを得ん。若し如來を見まつれば、卽ち佛刹に入り、佛刹に入り已れば、一切の法藏を、皆能く了知せん」と。

『我れ爾の時に於て、是の言を作し已るに、彼の蓮華藏佛、又我に告げて言はく「善男子、諸佛如來は、時あつて一たび出現す。若し遇ふことを得んは、是れ亦難しと爲す。此の正法を說かんこと、復甚だ難しと爲し、聞持するを得んこと轉復甚だ難し。何を以ての故にとならば、若し此の正法を聞く有らば、是の人は[九]六十萬六千八十劫の中に於て、或は宿命者を得、或は轉輪王・帝釋・[一〇]常光天・[一一]大梵・[一二]世主等と爲つて、能く正信を壞せず、諸の惡趣に墮せず、阿修羅に生ぜず、刀杖・鬪諍無く、又復愚癡を遠離して、大智慧を得、相好端嚴にして、猶し諸佛の如く、一一の色相も、等しくして異有ること無く、眷屬・癡惱の所纏と爲らず、常に病苦を離れ、常に天眼を得、[一三]那誐と爲らず、瞋恚を生ぜず、又常に一切の貧窶を遠離し、銅輪王と爲つて、大快樂を受け、諸根圓滿にして、忍辱具足せん。

【八】梵行、涅槃を證せんが爲の萬行をいひ、殊に婬欲を斷ずる行を謂ふ。

【九】異譯相當文には、次の宿令智を得より忍辱具足の各項に、夫々の劫數を配して說けり。

【一〇】常光天、異譯には淨居天に作る。淨居天は色界第四禪に、不還果を證したる聖者の生ずべき處なり。

【一一】大梵 Mahābrahmā 色界初禪の一。

【一二】世主、世間の主となる天なり。或は四天王天、梵天、或は大自在天、通じて世主となる。

【一三】那誐 nāga 龍をいふ。

我に問へり。我れ當に汝の爲に、亦分別して說かん。

『譬へば人有り、[七]四大洲に於て、遍くに胡麻を以てして、悉く皆充滿せしめ、是の如く相合して、都て一聚と爲さんに、是を多しと爲すや不や」と。我れ即ち答へて言はく「甚だ多し、世尊」と。時に彼の佛の言はく「假使人有り、一の胡麻を取つて、他處に置き、是の如くして、一より一に至り、其の數を知らんと欲せんに、善男子、汝の意に於て云何、是の人能く、其の數を知るべきや不や」と。我れ復答へて言はく「不とよ、世尊、是の人、其の力を竭して、多劫を經と雖も、終に是の如き數量を知る能はざらん」と。

彼の佛、又言はく「善男子、此の大集會の正法所有の福聚も、亦復是の如くにして、算數譬喩の、能く知る所には非ざるなり。正しく上に說く所の如き數量ならしめば、一一は皆是れ諸佛如來の「所知」なり。復俱胝那庾多劫を經て、此の大正法聽受の功德を稱量讚歎せんも、亦盡す能はざらん。何に況んや人有り、書寫・讀誦せんに、其の福甚だ多し」と。

『我れ復又問ひまつるらく「若し書寫せんに、幾所の福をか得ん、願はくは佛、略說したまはんを」と。時に彼の佛言はく「善男子、譬へば三千大千世界の、有らゆる草木叢林をば、盡く取つて、斷ちて一指節の量と爲さんに、一一の量數は、皆是れ轉輪聖王「の所知」なるが如し。又三千大千世界所有の土石を、盡く碎いて微塵とせんに、一一の塵數は、皆是れ轉輪聖王「の所知」ならんが如し。是の如き等の有らゆる福聚をば、若しは算師等、其の數を知らんと欲せんに、汝は、是の人、其の數を知ると謂ふや不や」と。我れ時に答へて言はく「不とよ、世尊、是の如き福聚は、算師等と雖も、亦知る能はず」と。

『彼の佛、又言はく「若し此の大集會の正法を書寫する者有らんに、獲る所の福聚、亦復是の如く

【七】四大洲、大集部第一、二七頁參照。

したり。

『時に彼の佛、蓮華座を指して、我に謂つて言はく「善男子、此の座に就くべし」と。我れ爾の時に於て、既に座に就き已り、卽ち彼の佛を見まつるに、其の左右に於て、復無量の寶蓮華座有り、殊妙の莊嚴は、甚だ希有たり。急ち是の念を作しぬ「是の如き等の座は、云何が皆空にして、能く登る者無きや」と。卽ち彼の佛に問ひまつるに、我に答へて言はく「善男子、此の如き等の座は、皆是れ不可思議・上妙功德の建立する所、少善根の、能く成就する所には非ざるなり。若し人、佛法の分に於て、未だ入らざる者有らんも、尙ほ見ること能はず、況んや復、能く登らんをや」と。

我れ時に又、世尊に問ひまつるらく「當に何の善根をか種えて、此等の座に、乃ち昇るを得る」と。彼の佛、答へて言はく「善男子、若し人有り、能く此の大集會の正法に於て、暫くも聽受せば、是の善根を以て、此の座に昇るを得るなり。何に況んや、更に能く書寫・讀誦して、常に修習する所あらんをや。善男子、汝は過去無量劫より來、ここに能く是の如き大集會の正法をば受持したり。若し是の善根の力を以てするが故にあらんずば、我が此の佛刹にも亦未だ到る能はざりしならん。況んや復、此の座を見て、昇らんと欲するを得んや」と。

『彼の佛、是の言を作し已りたまふに、我れ卽ち白して言さく「是の如く、是の如し、世尊」と。我れ復又彼の佛に問ひまつるらく「此の大集會の正法には、幾所の功德か有り、能く諸の善法をば生ずるや」と。

『爾の時、彼の蓮華藏如來、亦希有・淨妙の光明を放つて、普く佛會を照し已り、我に謂つて言ふらく「善男子、汝は大菩薩にして、大勢力を得、智慧無碍にして、能く一切の諸佛刹土に於て、諸の衆生の爲に、佛事を稱揚す。汝先に已に曾て、彼の娑婆世界の釋迦如來に問ひ、今是の法を以て、還復

一、我れ時に還復、一一に彼に於て恭敬供養し、是より復、九十五の佛刹を過ぎて、彼の如來、皆久しく滅度したまひ、有らゆる正法の、將に滅壞せんと欲するを知りぬ。我れ是の時に於て、竊に自ら思惟すらく「此の佛の正法、將に滅壞せんと欲するは、深く大苦と爲す」と。是の念を作し已り、大悲愍を生じたり。是の時、復欲・色界の天・人・龍神・夜叉等有り、皆大に憂惱しつ。

『又其の中に、一の佛刹有り、彼の佛の正法、久しく已に滅盡し、[四]劫火熾然として四面より起り、乃至大地・須彌山王、大海・江河、一切の樹木など、皆悉く已に焚かれて、依止する所無く、唯一の空界のみ、蕩然として際無かりき。是の刹を過ぎ已り、即ち下方に到るに、一の世界に於て、百千倶胝の如來、各寶蓮華の座に坐したまへるを見、又四方を見るに、亦復是の如くなりき。彼等の諸佛、各各現に、一切衆生の爲に、法を說いて化度したまへり。

『世尊、我れ既に彼の佛刹に到り、即ち是の念をば作しつ「今此の佛刹たる、名字は何等なる」と。彼に一佛有し、我に告げて言はく「善男子、今此の佛刹をば、[五]蓮華とは名く」と。我れ時に即ち、化主の世尊は、其の名若何なるやを問ひまつりぬ。彼の佛答へて言はく「蓮華藏如來・應供・正等正覺とは名く」と。我れ爾の時に於て、善く皆禮を作し、一心に恭敬して、是の白言を作しつ「我れ今、此の百千倶胝・[六]那庾多の佛、一一皆、寶蓮華の座に處たまふを見るも、而も復何者をか即ち蓮華藏佛と名けまつるやを知らず。唯願はくは、我に化主の世尊を示したまはんことを」と。

『時の彼の蓮華藏如來、多佛の中に於て、是の告言を發したまはく「善男子、蓮華藏佛とは、即ち我が身こそ是なり」と。是の言を作し已りたまへるに、彼の諸佛等、各忽然として、如來の身を隱して菩薩の相を現じたまへり。我れ是の時に當り、唯化主の蓮華藏如來を見まつるのみ。一の佛世尊、大衆の中に居したまふに、相好・威神、能く勝る者無かりき。即ち頭面を以て禮を作し、恭敬

【四】劫火、一切の盡くる時に起る火災をいふ。三災（大衆部第一、八五頁）參照。

【五】蓮華、異譯には花上に作る。

【六】那庾多 Nayuta また那由他に作る。數の目、億に當るとせらる。

卷の第二

爾の時世尊、諸の尼乾陀衆を化し已り、卽ち方便善巧を以て、善く法を說き、心三摩呬多に住し、金色の臂を舒べて、七晝夜を經たまへり。乃至普勇菩薩は、十方の世界に遊び、廣く佛事を作し已つて、此の土に來還しつ。

是の時、普勇菩薩、彼の蓮華上の佛刹より、譬へば力士の、臂を屈伸する如き頃に、佛前に到り、佛足を禮し已り、右遶三匝して、一面に住立したり。

是の時世尊、三摩呬多を出で已りたまへば、普勇菩薩、前んで佛に白して言さく『世尊、我れ佛の旨を承けて、彼の十方の世界に往き、自の神通力を以て、九十九千倶胝の佛刹を過ぎ、佛の神通力を以て、又百千倶胝の佛刹を過ぎ、乃至最後に、下方の蓮華上世界に到り、其の中に八千倶胝の佛刹を過ぎ、彼の諸佛、大神通を現じたまへるを見、又九十二千倶胝の佛刹を過ぎて、諸の如來、現に衆生の爲に、深妙の法を說きたまへるを見、又八十千倶胝の佛刹を過ぎて、一時の中に、八十千倶胝の如來・應供・正等正覺の、世に出現したまへるをば見まつりぬ。我れ時に、彼の一一の佛前に於て、恭敬・供養し、又三十九倶胝の佛刹を過ぎて、三十九千倶胝の菩薩摩訶薩、同時に出現して、皆阿耨多羅三藐三菩提を證したまへるを見つ。

『我れ卽ち彼の初めて道を成じたまへる者、是の如き等の如來、應供・正等正覺の所に於て、一一に恭敬禮拜して供養し已り、卽ち復自の神通力を以て、身を隱して現ぜず、又六十倶胝の佛刹を過ぎ、諸の如來を見ては、一一に恭敬し、又百倶胝の佛刹を過ぎて、彼の諸佛、般涅槃に入りたまへるを見まつりぬ。

【一】元魏譯、卷第一つゞき。

【二】三摩呬多 Samāhita 譯定の一種等引と譯す。

【三】倶胝 Koṭi また倶致に寫す。或は十萬なりとし、或は千萬又は億なりとす。

して現れざりき。

爾の時、世尊、諸の尼乾陀衆に告げて言はく『汝等當に知るべし、所謂[五三]生を大苦とは爲す。生苦に由るが故に、諸の怖畏をば起すなり。謂はく生あれば病怖有り、病怖有るが故に、老怖有り、老怖有るが故に、死怖有り。生は何に緣つてか怖なるとならば、謂はく衆苦の爲に逼らるるが故なり。生を以て因と爲して、即ち諸の怖有るなり。生の法にして若し無ならんに、怖は何よりか起らん。是に由つて即ち[五四]囉惹の難怖、[五五]陬囉の難怖、惡毒の難怖、火難の怖、水難の怖、風難の怖、乃至雷雹等の難怖、及び自ら作せる諸の不善業の怖有り、是の如き等の怖は、生に因つて有り、若し生の法を了せば、即ち諸の怖を離るるなり』と。

是の時世尊、諸の尼乾陀衆の爲に、是の怖畏の法を略說し已りたまへり。時に諸の尼乾陀衆、廓然として開悟し、過を悔いて自ら責め、倶に佛に白して言はく『世尊、我等愚癡にして、不正の見を起し、眞實の道に背き、佛の正法に違ひて、深く過咎を爲しつ。願はくは佛、慈悲もて我等を攝受したまへ』と。

是の言を作し已れる時、十八倶胝の尼乾陀衆、倶に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、即時に十八倶胝の大菩薩衆と爲り、一一に皆十地を圓滿するを得、乃ち神通力を以て、各種種の神變を現じ、及び[五六]種種の身――佛身・菩薩身・緣覺身・聲聞身、乃至天人龍神など、一切の趣類等の身――を現じ已り、復各自ら寶蓮華座を變じて、等しく其の半を分ち、佛の左右に於て、佛足を禮し、各其の座に坐しぬ。

大集會正法經卷第一

【五三】生を云云、異譯には生苦生レ惱と。

【五四】囉惹 Rāja 王をいふ。

【五五】陬囉 Caura 賊なり。

【五六】種種の身、異譯には詳しく種々の形を示したり。

樹木皆摧折せんに、
飛禽の止る所無きが如く。
我等今の怖畏と
苦惱とも亦是の如くなり
佛・世尊を見まつらずして、
誰をか救護者とは爲ん』と。

是の時、諸の尼乾陀衆、是の伽陀を說き已り、座より起たんと欲し、彼の二膝輪(五〇)、適地を按へたる時、其の按へたる所の地、忽に大聲を發して、普く一切の人・天大衆を震はしめたれば、諸の尼乾陀、咸是の念を作しぬ『如來は最勝にして、二足の尊者たり。唯願はくは、慈悲もて我等を救度したまはんことを』と。

爾の時、世尊、卽時に身を現じて、本の座に還復したまひ、普勇菩薩に告げて言はく『汝は諸の尼乾陀衆の爲に、法を說いて化度すべし』と。普勇菩薩、佛に白して言はく『不とよ、世尊、譬へば(五一)須彌山王は、殊妙高顯にして、小黑山有り、其の側に居するが如くなるを、云何ぞ相與に等比なりとは言ふべけん。今佛・世尊の、大衆の中に居まし、我を遣して法を說かしめたまはんこと、亦復是の如くなり』と。

佛の言はく『止めよ、止めよ、善男子、如來の(五二)方便・善巧は、十方世界に於て、所說の者に隨ふ。皆是れ如來の慈悲願力の建立する所なればなり。此の諸尼乾陀等は、我を欣樂す、我れ當に爲に無上の法要を說くべし。汝今十方の世界に往き、諸佛に親近して、法化を宣揚すべし』と。普勇菩薩、佛に白して言はく『世尊、我が神通力は、甚だ微小なり、佛の大慈に非ずんば、我が神力を假つては、終に行く能はず』と。佛の言はく『普勇、汝今自の通力及び佛の神力を以て、是の如くに往くべし』と。

普勇菩薩、佛の聖旨を承け、卽ち座より起ち、佛を遶ること三匝にして、忽ち會中より、身を隱

【五〇】二膝輪、兩膝の謂、兩膝は、兩肘並に頭と共に五輪又は五體と呼ばるるに依り、輪の字を加ふ。五輪著地、五體投地などゝ呼ばるるは、この五體を地に著けて禮するをいふなり。

【五一】須彌山、Sumeru は世界の中心にして、九山八海を以て周らさる。

【五二】方便、梵に傴和 Upāya 究竟の旨歸を眞實とし、假を設け暫くして廢するを方便といひ、善巧、善權などいふも意亦同じ。眞實に入る能通の法、俗にいふ「てだて」卽ち是なり。

の如き言を作せり『瞿曇、我等は汝に勝る』と。是の如く三たびして、復是の言を作せり『我等汝に勝るなり』と。

是の時、佛諸の尼乾の衆に告げて言はく『唯佛・如來のみ、「眞に勝れたるもの」の名をば得、一切の處に於て、能く勝るゝ者無きなり』と。尼乾陀の言はく『汝一の瞿曇は、云何ぞ勝るゝを得たらん』と。佛の言はく『若し汝尼乾陀の、定んで勝者なりと計せんには、是れ顚倒の見にして、眞實の見には非ず。汝等は何を以て勝と爲し、恣に汝等說くや』と。

是の時、尼乾陀の衆、咸一しく默然として、互に竊に相視たり。

[四六]佛の言はく『汝等當に知るべし、唯佛・世尊のみ、一切の衆生の――若しは已に佛慧に入り、若しは未だ佛慧に入らざる――利根・鈍根のものを、咸[四七]度を得しめ、平等に利益して、差別有ること無し。是ぞ名けて無能勝者とこそ爲すべけれ。汝善く思惟せよ、自の身心の、諸苦に逼らるゝだに知る能はずして、云何ぞ能く此に勝とは稱する。我れ今汝に、諸佛の微妙廣大の正法をば示さん』と。

諸の尼乾陀衆、佛の是の言を聞き已り、忽ち大に瞋恚し、不信の心をば生じたり。是の時、帝釋天主、[四八]善法堂に居り、天眼を以て見、即ち[四九]金剛杵を持つて、會中に來入し、諸の尼乾陀衆を破壞せんと欲したれば、咸皆驚怖して大憂惱を生じ、啼泣すること良久しかりき。即時に世尊、大衆の中に於て、身を隱して現はしたまはざるに、諸の尼乾陀衆、佛・世尊に於て、方に瞻仰を生じ、忽に佛を見まつらざれば、轉憂苦を增し、即ち伽陀を說いて曰はく、

『譬へば人の、獨り　空寂なる曠野の中に處り、
父無く復母も無く、　救ふ者無からんを恐畏するが如し。
江河に水無ければ、　游魚の依る所無く、』

【四六】この段に相當する所、異譯には偈文を以てす。
【四七】度、生死界を度するの謂。
【四八】帝釋、三十三天（忉利天）の主、須彌山頂の喜見城に在つて、他の三十二天を統領す。喜見城の外角に善法堂あり、諸天此に集まつて四天下の善惡を商量す。
【四九】金剛杵、伐折羅 Vajra 戟に似たる武器、後世密教に於ては、是を假りて、煩惱を斷じ惡魔を伏する堅利の智を象徵するに用ひたり。

普勇又言はく『[illegible]も復云何がして、法師に於て、尊重・恭敬する』と。佛の言はく『若し人、出世の道に於て、[illegible]間の心を發せば、是れ即ち法師の所に於て、尊重・恭敬するなり。普勇、是の如き等は、皆能く善根を圓滿するなり』と。

佛普勇に言はく『此の大集會正法には、大功德・利益の一切有り。若し人能く聽受・書寫・讀誦せば、是の人、大福聚を獲んこと、稱計すべからず。普勇、正しく四方の一一の方に、各十二殑伽沙數の如來・應供・正等正覺有り、皆住すること十二劫にして、此の大集會正法を說かしめんも、聽受の功德は、盡す能はず。又復四方に、各上の如き殑伽沙數の如來・應供・正等正覺有り、皆住すること上の劫の如くにして、此の書寫の功德を說かんも、亦盡す能はず。又復四方に各上の如き殑伽沙數の如來・應供・正等正覺有り、皆住すること上の劫の如くにして、此の讀誦の功德を說かんも、亦盡す能はざるなり』と。

普勇菩薩、佛に白して言はく『世尊、願はくは佛、讀誦の福聚、其の數幾何なるやを略說したまはんことを』と。爾の時世尊、即ち伽陀を說いて言はく、

『若し人、能く　一の四句の偈を讀誦せんに、
彼獲る所の福聚は、　彼の八十四
殑伽沙數の佛の　福聚と等しくして異ること無けん。
何に況んや能く一心に、　正法に安住せんには、
彼の福聚無盡ならん、　諸佛の、世に出で、
無邊の法を宣說せんこと、　實に値ふを得ること難し』と。

爾の時、十八俱胝の[四五]尼乾陀の衆有り、佛の所に來詣して、咸會中に入り、各一面に坐して、是

【四五】尼乾陀、略して尼乾ともいふ、梵に Nirgrantha 離繫と譯す。佛在世當時の六子外道の一、裸行、塗灰等、離繫の苦行を修する一派。

佛の最上智を念じて、永く惡趣に墮せず。
普勇、汝當に知るべし、前前世の[四二]業感もて、
少しく一善の因を種ゑたれば、定んで廣大の果を獲ん。
世の種增長すれば、百穀皆失無きが如し、
善因もて佛刹に生ずれば、果を獲んこと亦是の如し。
智者は善法を修して、諸苦の因を遠離す、
彼衆德の本を成じて、最上の安樂を獲。
若し能く平等に、廣大の財富を獲ん。
八萬劫の中に於て、善法の一毫量をも施さんに、
在在所生の處に、常に念じて布施を行ぜよ、
三寶に施すを以ての故に、展轉して報盡くる無けん』。

頌の時、普勇菩薩、佛の是の伽陀を說きたまふを聞き已り、即ち佛に白して言はく『世尊、云何が此の大集會正法に於て、乃ち能く了知して聽受するを得る』と。佛普勇に言はく『若し人、[四三]十二の殑伽沙數の如來・應供・正等正覺の圓滿したまふ善根もて、即ち此の大集會正法を聽聞することを得ん』と。

普勇菩薩、復佛に白して言はく『世尊、云何がして、能く是の如き善根の圓滿をば得る』と。佛の普勇に言はく『若し能く[四四]一切の如來に於て平等の知見あらば、是れ即ち善根の圓滿なり』と。

普勇復言はく『云何がして能く一切の如來に於て、平等の知見あるや』と。佛の言はく『若し法師に於て、尊重・恭敬すれば、是れ即ち一切の如來に於て、平等の知見あるなり』と。

【四二】業感、業の因によつて感ずるをいふ。

【四三】この段、異譯には十二億の諸佛を供養すると、此の法門を聞くと、得る所の福德同じと云へり。

【四四】一切の如來云云、異譯には、功德如レ佛者、當レ知滿足、と云へり。

是の如くして漸く能く、一切の生死を離るゝの法に趣向するなり。

『復次に普勇、世間の人の如きは、壽報を捨し已るや、父母の、憂惱し涕泣する有りと雖も、而も更に依と爲り怙と爲る能はず。彼の凡夫の類は、自ら利する能はず、亦他をも利する能はず、善業を造らざること、亦復是の如く、命終の時に臨んで、依怙たる所無きには、略して二種有り、一には自ら諸の不善業を造り、復他に作さんを勸め、二には佛の正法に於て、輕謗の心を起すなり』と。

普勇菩薩、復佛に白して言はく『世尊、若し佛の正法に於て、輕謗の心を生ずる者有らん、是の人命終せんに、當に何處に墮すべき』と。佛の言はく『普勇、彼の謗法の者、命終已後、當に地獄に墮し、大苦惱を受くべし。所謂[三八]大可怖地獄、衆合地獄、[三九]炎熱地獄、極炎熱地獄、黑繩地獄、阿鼻地獄、[四〇]嚕摩訶哩沙地獄、[四一]呼呼尾地獄、是の如き等の八大地獄の中、一一の地獄に一劫の苦を受くべし』と。

普勇菩薩、復佛に白して言はく『甚だ苦し、世尊、我れ今此に於て聽聞するに忍びず』と。爾の時世尊、即ち普勇菩薩の爲に、伽陀を說いて曰はく

『我れ說く所の地獄、　汝怖れて聞くに忍びず、
彼の地獄の苦惱は、　衆生の業ぞ自ら造る。
若し諸の善業を作せば、　定んで安樂の果を獲、
諸の不善を作す者は、　必ず苦惱の報を得ん。
生苦と死苦と、　憂苦等纏縛し、
諸樂の因を造らざる、　愚人は、常に苦惱す。
智者は安樂を得、　大乘の法を信樂し、

【三八】大可怖、異譯には大叫喚に作る。
【三九】炎熱、同に燒然に作る。
【四〇】嚕摩訶哩沙、同に毛竪地獄に作る。
【四一】呼々尾、同に睺々に作る。八寒地獄の一、(虎々婆 huhuva 寒増の故に口を開くを得ず、虎々の聲を作す地獄)なるべし

爾の時、普勇菩薩摩訶薩、益恭敬を加へ、右膝を地に著けて、世尊の足を禮し、前んで佛に白して言はく『世尊、若し人有り此の正法に於て、輕謗を生ぜん者、是の人幾ばくの罪をか得ん』と。佛の言はく『甚だ多し』と。

普勇菩薩、復佛に白して言はく『彼れ獲る所の罪、其の數幾何なる』と。佛の言はく『普勇、若し人、十二の殑伽沙數の諸佛の所に於て、大惡心を起さんも、其の罪尚輕し。若し是の正法に於て、輕謗の心を起さんには、其の獲る所の罪、甚だ彼よりも多し。何を以ての故にとならば、普勇、若し人、彼の正法に於て、輕謗を起さば、是れ卽ち大乘を破するの心を發起するものにして、煩惱の火を以て、自ら焚燒すべければなり』と。

普勇菩薩、復佛に白して言はく『世尊、[三五]一切の衆生は、[三六]業習の纒はれ、生死に輪轉して、解脫すること能はず』と。佛の言はく『普勇、是の如く是の如し。譬へば人有つて、自ら其の頭を斷たんに、時に一人有り、[三七]良藥——所謂摩叱迦良藥・虞尼那嚩良藥・竭哩多嚩良藥・帶梨那嚩良藥など——是の如き等の良藥を持以て、所斷の頭に塗らんが如し。普勇、汝の意に於て云何。汝是の人還其の命を活すと謂ふや不や』と。普勇菩薩、佛に白して言はく『不らず、世尊』と。『是の人、良藥を塗ると雖も、其れ何ぞ能く活きんや。普勇、彼の輪轉せん者も、亦復是の如くなり』と。

『復次に普勇、譬へば一時に二の丈夫有り、各利刀を持つて、互に命を害せんと欲するも、力相敵するを以ての故に、俱に害する能はず、唯瘡損を致し、苦痛も亦甚だしきが如し。時に忽ち人有り、良藥を持以て、爲に其の上に塗らんに、其の瘡卽ち愈えん。彼の二丈夫、既に愈ゆるを得已り、往にし苦を憶念して、互に相謂つて言はく「我等今より復、更に相殺害の心を起さゞらん」と。諸の智有る者も、亦復是の如くなり。復業を造ると雖も、卽ち能く追悔し、正法に於て棄背を生ぜず、

【三五】一切の衆生云云の句、異譯には如レ是衆生、云何可レ救とのみ云へり。
【三六】業習、惡業の習氣なり。
【三七】良藥、異譯には、たゞ塗以二石蜜・酥油諸藥一とのみ云へり。

胝の佛有り、面其の前に現れて、彼の人を安慰し、是の告言を作さん「怖畏を生ずる勿れ、汝は先に已に、大集會の正法を聞いて、大福聚有ればなり」と。是の時、彼の九十五倶胝の佛、皆爲に授記して、一一「我が佛刹中に來生せん」と。何に況んや、此の正法を以て、有情界を盡して、廣大流布し、皆悉く聞くを得しめんをや』と。

普勇菩薩、復佛に白して言さく『世尊、我れ今此の大集會の正法をば、樂うて聽受せんと欲して、心に厭足無し』と。佛の言はく『善い哉・善い哉、唯に汝の心、法を樂うて厭くこと無きのみに非ず、我れ此の法をば、喜んで大に宣說して、亦復厭く無し。何に況んや諸の凡夫類、正の正法に於て、厭足の心を起さんことをや。

『又復普勇、若しは善男子・善女人有り、此の正法に於て、深く信樂を生ぜんに、是の人、千劫の中に於て、正信を壞せず、五千劫の中、[三二]惡趣に墮せず、萬二千劫の中、愚癡を遠離し、八千劫の中、[三三]邊地に生ぜず、二萬劫の中、勇猛に布施し、二萬五千劫の中、常に天界に生れ、二萬五千劫の中、常に梵行を行じ、四萬劫の中、眷屬のために纏縛せらるゝことを遠離し、煩惱の爲に、能く昏蔽せられず、五萬劫の中、正法を受持し、六萬五千劫の中、正念に安住せん。普勇、彼の善男子・善女人は、更に復罪業を作すの心を起さず、一切の魔怨も侵害する能はず、在在の所生に、矜護に處らざらん。

『又復人有り、此の正法に於て、聽受・讀誦せんに、是の人、八萬劫の中、聞持・具足するを得、千劫の中、殺生の業を離れ、九萬九千劫の中、[三四]妄語の業を離れ、一萬三千劫の中、兩舌の業を離れん。普勇、當に知るべし、是の事を以ての故に、此の大正法は、遇ふことを得べからず。名字に至つても、亦聞くを得べからざるなり』と。

【三二】惡趣、趣とは往く所の謂、衆生が惡業の因を以て、趣くべき所を名け、地獄、畜生、餓鬼などをいふ。是に三、四、五を數ふ。

【三三】邊地、邊隅の地をいふ。

【三四】妄語、十惡の一、他を欺く意を以て不實の言をなすもの。

以ての故に、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得たるなり』と。
爾の時、普勇菩薩、是の説を聞き已り、復佛に白して言はく『世尊、彼の佛世時の衆生の壽量は、其の數幾何なりしや』と。佛の言はく『衆生の壽量は、八十劫を滿せり』と。
普勇菩薩、又復問ひて言さく『何の劫量を以てか、彼の壽をば登むる』と。佛普勇に言はく『彼の劫量は、譬へば人有り、一大城の、廣さ十二[二九]由旬、高さ三由旬なるを造り、彼の城中に於て、置くに胡麻を以てして、悉く皆充滿せしむるに、忽に一人有り、百年に一たび來り、一の胡麻を取つて外に擲ち、是の如く一たび來つて一を擲ち、乃至胡麻を擲ち盡し、城も亦破壞せんに、此の劫數の量、亦復未だ盡きざらんが如し。又復譬へば、一大山の、廣さ二十五由旬、高さ十二由旬なる有り、長壽の天あり、百年に一たび來つて、一たび其の上に坐し、[三〇]憍尸迦衣を以て其の山石を拂ひ、是の如く一たび來つて一たび拂ひ、乃至彼の山を拂ひ盡さんも、其の劫の數量、亦復未だ盡きざらんが如くなり。普勇、是の如きを名けて劫量と爲すなり』と。
是の時普勇菩薩、又佛に白して言はく『世尊、若し人、一の善根を以て菩提に迴向せんに、大福聚を獲、壽命八十劫なるを得ん。何に況んや人有り、佛の深妙の法中に於て、廣く大に修習せんには、其の所得の福は、稱計すべからざらん』と。
佛の言はく『普勇、若し衆生有り、是の大集會の正法を聞くを得んには、獲る所の壽命、八萬四千劫ならん。何に況んや、更に能く是の正法に於て、書寫・讀誦せんに、彼の獲る福聚は、轉前に倍して、等比すべからざらん。又復普勇、若し人此の正法を聞き、淨信の心を起し、恭敬・尊重せんには、是の人、九十五劫のあひだ、宿命智を得、六萬劫のあひだ、轉輪王と爲り、一切人の爲に尊重せられ、悉く皆愛敬し、刀杖・毒藥の、能く侵害する所と爲らず、命終の時に臨んで、九十五[三一]倶

【二九】由旬、Yojana 里程をはかる單位。帝王一日行軍の里程をいふと。

【三〇】憍尸迦、Kauśika 帝釋の姓なり。或は憍奢耶 Kauśeya（野蠶より取つて作れる絹衣の名）の寫誤か。異譯は輕綃帛となす。

【三一】倶胝、Koṭi また倶致に作る。數の名、或は千萬なりとし、或は億なりといふ。

て言はく『世尊、我等は深心もて正法を樂求す。佛世尊の如きは、大慈大悲もて、能く一切衆生の心願をば滿したまふ。願はくは我等の爲に、廣く分別して說きたまはんを』と。

爾の時世尊、即ち會中に於て、大希有の淨妙光明を放ち、普く大衆を照したまへり。是の時、普勇菩薩、佛に白して言はく『世尊、何の因緣を以てか、是の光明を放ちたまへる』と。佛、普勇菩薩に告げて言はく『汝今當に知るべし、今此の會中に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發す者有り、佛世尊に於て、難遭の想を生じ、尊重恭敬して、說法を勸請す。是の因緣を以て、斯の光明をば放つなり』と。

普勇菩薩、復佛に白して言はく『世尊、諸の衆生有り、阿耨多羅三藐三菩提心を發さん者、云何が修習してか、能く成就する』と。佛の言はく『善い哉・善い哉、汝大に勇猛にして、大衆の中に於て、能く此の義を以て佛・世尊に問ひ、一切を利益して、疾く佛道を成ぜしめたり。汝も今亦、能く此の善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提を成就したり。汝所問の如く、今汝の爲に說かん。汝當に諦に聽くべし。

『我れ往昔を念ずるに、[二四]阿僧祇劫を過ぎて、佛有つて世に出でたまひ、[二五]寶吉祥[二六]如來・應供・正等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號したり。我れ彼の時に、[二七]摩拏嚩迦たり、諸の衆生をして、佛智に安住せしめ、忽ち一時に、一鹿王の、諸の苦惱を受くるを見たり。我れ是の時に於て、竊に是の念を作して「云何がして當に能く、此の鹿王に代つて諸苦をば受くべき」と。復自ら思惟すらく「一切の衆生の、[二八]三界に輪轉して、未だ苦を離れざる者、皆亦是の如くなり」と。即ち發願して言はく「願はくは我れ當來に、佛を成ずるを得已つて、一切の衆生をして、諸の苦惱を離れ、我が佛刹に生れて、佛智に安住せしめん」と。普勇、我れ是の如き善根・大願力を

【二四】阿僧祇、Asaṃkhya (°yeya) 無數又は無央數と譯す。劫は Kalpa 年時の稱。極めて長き年時をいふ。

【二五】寶吉祥、異譯は寶德に作る。

【二六】如來、以下の稱は、佛德を諸方面より讚へたる稱號、十種あれば佛の十號といふ。

【二七】摩拏嚩迦 Māṇavaka 摩納とも寫し、儒童、年少など譯す。

【二八】三界、欲界、色界、無色界の三種の世界、この三種は何れも衆生輪廻の範圍なり。

伏し、善法を圓滿せん。是の人、卽ち能く、生滅の理に於て、悉く皆了知し、一切皆阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得ん』と。

爾の時、會中の諸菩薩衆、座より起ち、俱に佛に白して言さく『世尊、一佛の福聚の如きは、共の量幾何』と。佛の言はく『善男子、汝等諦に聽け、一佛の福聚所有の數量とは、譬へば人有り、大海の水を竭して、盡く閻浮に灑ぎ、此の水中に於て、唯一渧を取り、一殑伽河沙の數量と作し、是の如き一渧を、而も復一渧として、大海の水を窮めて、一一の渧をば一殑伽河と成し、此の一一の河の、中に滿てる沙數を、盡く菩薩と爲して、皆[二二]十地に住せしめたらんが如し。彼の諸菩薩所有の福聚は、寧ろ多しと爲すや不や』と。諸の菩薩衆、俱に佛に白して言はく『甚だ多し、世尊』と。佛の言はく『諸の善男子、一佛の福聚は、復彼よりも多く、法を聞く有らん者、轉是の數に倍せん。又復諸の善男子、若し衆生有り、後の末世に於て、是の正法を聞きて、信解の心を生ぜんもの、獲る所の福聚は、轉彼よりも增さんこと、無量無邊にして、稱計すべからず』と。

爾の時、普勇菩薩、復座より起ち、佛に白して言さく『世尊、[二三]諸の衆生有り、法を樂求せんもの、當に云何が求むべき』と。佛の言はく『普勇、諸の求法の者、略して二種有り、一は一切衆生に於て、平等の心を起すもの、二は所聞の法の如く、衆生の爲に說くものなり』と。

普勇菩薩、佛に白して言さく『世尊、所聞の法の如く、又復云何が衆生の爲に說かん』と。佛の言はく『普勇、亦二種有り、一は所聞の法を以て、菩提に迴向し、二には大乘の法に於て、愛樂・趣求し、而も復長時に、心に懈退無きなり。若し能く是の如く、衆生の爲に說かば、是を名けて、眞の求法の者と爲すを得るなり』と。

爾の時、會中の諸天子・天女衆など、各座より起ち、佛前に住立し、合掌して佛に向ひ、佛に白し

此を提彌羅に作り、以下に、君婆婆羅、君婆尸利沙、須難陀、須除佉、伽婆尸利の諸龍を擧ぐ。

[一七] 普勇、異譯は一切勇に作る。

[一八] 正法の云云、異譯相當文には「有二法門一、名二偕伽吒一」と云へり。

[一九] 閻浮提 Jambudvipa 瞻部洲ともいふ。須彌の南方に住する大洲の名、この洲の中心に閻浮樹の林あればこの名ありと。

[二〇] 五逆、五種の惡業。罪惡の極、理に逆ふこと甚しければ逆といひ、無間地獄の苦果を感ずる惡業なれば、無間業ともいふ。

[二一] 殑伽、Gaṅgā の音寫。

[二二] 十地、菩薩修行の階梯を十種に分てるもの。大集部、第三、一二頁參照。

[二三] 諸の衆生云云、異譯には「何等衆生、渴二樂正法一」と云へり。

象頭龍王など、是の如き等の、八千の龍衆有り、俱に來つて集會し、佛所に到り已つて、咸各頭面もて、世尊の足を禮し、右遶三匝し、退いて一面に坐したり。是の時、世尊は默然として住したまへり。

爾の時、會中に菩薩摩訶薩――名けて[一七]普勇と曰へる――有り、即ち座より起ち、偏袒右肩し、右膝を地に著け、合掌恭敬して、佛に白して言はく『世尊、此の會には、菩薩及諸の聲聞・天・人衆等、悉く皆來集し、樂うて、佛の妙法を宣說したまふを聽かんと欲す。此の諸大衆は、咸一に、如來・應供・正等正覺の、殊善の色相を諦觀し、佛の法に入らんことを樂ふ。法を樂び、心に佛の相を觀ずるを以ての故に。久しく修習しつる者は、即ち能く一切の障染を遠離し、初めて修習せん者は、即ち無上の修善法の心を起して、復暫くも諸の不善の想を起さゞらん』と。是の白を作し已る。

爾の時、佛、普勇菩薩に告げて言はく『我に[一八]正法の大集會と名くる有り、[一九]閻浮提に於て、廣く大に流布す。若し衆生有り、暫くも聞くを得なば、是の人、設ひ[二〇]五逆の重罪有らんも、皆消滅するを得、復阿耨多羅三藐三菩提を退轉せじ。普勇、汝の意に於て云何。汝謂ふや、是の人、法を聞くを得、獲る所の福聚、一佛と等しと。

普勇菩薩、佛に白して言はく『是の如し、世尊』と。佛の言はく『普勇、汝是の見を作す莫れ。是の見を作すは、眞實の見に非ざればなり』と。

普勇菩薩、復佛に白して言はく『世尊、當に云何が見て、即ち是の人、眞實の福聚なるを知るべき』と。佛の言はく『普勇、彼の法を聞かん者、獲る所の福聚は、[二一]殑伽沙數量の如來・應供・正等正覺所有の福聚と等しくして異有ること無し。又復普勇、若し是の正法を聞く者有らば、一切皆、不退轉地に住し、即ち一切如來の、常に觀察したまふ所を得、一切の如來、常に現に前に在し、魔軍を降

して、十大弟子中、密行第一となる。

【八】善容以下、異譯には婆俱羅。跋陀斯那賢德、歡喜德、綢指、須浮帝、離提斯那を擧ぐ。

【九】滿慈子。富樓那 Pūrṇa の譯、十大弟子の中、說法第一の阿羅漢。滿願子ともいふ。

【一〇】哩嚩諦 Revata また離婆多に作る。坐禪入定して心の亂れざること、佛弟子中第一なりと云はる。

【一一】慈氏、以下の諸菩薩をば、異譯には彌帝隸、一切勇、童眞德、發心童眞、童眞賢、無滅、文殊、普賢、金剛斯那などを擧ぐ。

【一二】最勝樹以下の諸天子をば、異譯相當文には、[illegible]阿那、跋陀、須跋陀、希法、栴檀藏、栴檀を擧ぐ。

【一三】妙身以下の諸天女は、同に、彌隣陀、端正、發大意、歲德、護世、有力、隨賢脅などを擧ぐ。

【一四】優鉢羅、Utpalakon-garāja 異譯阿波羅に作る。

【一五】伊羅鉢怛羅 Erāpattra.

【一六】底民祇羅、帝彌祇羅（Timiṅgila）の音寫なるべし。婆沙論百四十には是を耆羅に作れる例あればなり。異譯には

[一]大集會正法經

西天の譯經三藏、朝奉大夫・試鴻臚卿・傳法大師、臣・施護

詔をうけたてまつりて譯す

卷の第一

是の如く我れ聞く、一時、佛、王舍城[二]鷲峰山の中に在し、大[三]苾芻衆、萬二千人と倶なりき。尊者[四]阿惹憍陳如、尊者[五]摩訶目乾連、尊者舍利子、尊者摩訶迦葉、尊者[六]思勝、尊者[七]羅睺羅、尊者[八]善容、尊者賢護、尊者賢吉祥、尊者月吉祥、尊者大勢至、尊者[九]滿慈子、尊者善吉、尊者[一〇]哩嚩諦、尊者栴檀軍——是の如き等の、皆大阿羅漢なりき。

是の時、菩薩摩訶薩あり、其の名を、[一一]慈氏菩薩摩訶薩、普勇菩薩摩訶薩、童子吉祥菩薩摩訶薩、童子住菩薩摩訶薩、童子賢菩薩摩訶薩、無所減菩薩摩訶薩、妙吉祥菩薩摩訶薩、普賢菩薩摩訶薩、善觀菩薩摩訶薩、金剛軍菩薩摩訶薩、藥王軍菩薩摩訶薩と名け、是の如き等の、六萬二千の菩薩摩訶薩衆なりき。

復[一二]最勝樹王天子、賢天子、善賢天子、法愛天子、栴檀藏天子、香住天子、栴檀香天子など、是の如き等の、一萬二千の天子衆有りき。

復[一三]妙身天女、極信天女、自在主天女、吉祥目天女、世吉祥天女、大世主天女、大力天女、妙臂天女など、是の如き等の、八千の天女衆有りき。

復[一四]優鉢羅龍王、[一五]伊羅鉢怛囉龍王、[一六]底民誐羅龍王、勝器龍王、最上器龍王、妙喜龍王、妙枝龍王、

【一】僧伽吒經、四卷、元魏優禪尼國王子月婆首那譯。

【二】鷲峰山、靈鷲山又は耆闍崛(Gṛdhrakūṭa)山とも云はれ、山形鷲に似たるが故に、又山上鷲多きが故に、この名ありと。摩竭陀の東北に位する新都・王舍城の東北に在り、摩竭陀を周ぐる五山の中最高なり。

【三】苾芻・比丘、(Bhikṣu)新譯、乞士道士など譯す。出家して佛弟子となり、具足戒を受けしものゝ汎稱。

【四】阿惹憍陳如、ajñāta-kauṇḍinya 阿惹は名、譯して已知、了本際といひ、憍陳如は姓にして、火器と譯す。佛成道後、最初に濟度を受けし五比丘の一。

【五】摩訶目乾連、略して目連ともいふ異譯には摩訶謨伽略に寫す。佛十大弟子の一。佛弟子中、舍利子の智慧第一たるに對し目連は神通第一として知られ、この兩者は、佛左右の弟子なりと云はる。之に對し、摩訶迦葉は、佛弟子中、頭陀第一を以て知らる。

【六】思勝、異譯に缺く。

【七】羅睺羅　Rāhula　佛の嫡子、舍利弗を和上として沙彌となり、遂に阿羅漢果を證

藥王軍菩薩に對する說法がつゞいて、衆生の數甚だ多くして、窮盡なき所以を述べた後、善根の種子を成熟せしむべきことを云ひ、寂滅の法、出世の法（出世の法とは涅槃の法なり、諸法の自性を了すれば、卽ち涅槃の勝法を了知す。彼の諸法とは正法の蘊なり）などが說かれ、次で他國に往つて貿易せん爲に、千金を借りて出た息の物語があり、涅槃を證せんが爲の精進の行に就て、同じ場所に樹を植えた二人の物語（一方は少時の間に繁茂し、一方は然らず）が出される。續いて四方上下の世界から、多數の人の周匝圍繞せる大樹が、此の會座に現れた因緣で、藥王軍は東方の月上境界如來の所に至つて、その所由を尋ね、一切有爲の法は皆實法無きことを敎へられた上に、初生の者と久生の者とに就ても開く所がある（卷第四）。

月上境界如來は續いて諸の初生の者の爲に、苦・死・身・命・滅の法に就て說き、諸佛の勝法のみ、能く苦の衆生を救ふことを述べ、藥王軍菩薩大悲心を父とし、菩提心を母とし、善法を知識として、能く衆生の救はるることを云ひ、更にこの菩薩と初生の者との間に諸種の問答があり、最後にこの初生の者が皆、十地に安住する事を說いて終る（卷第五）。

昭和七年二月上旬

譯者　蓮澤成淳　識

思想と系統を同じくし、而も全體に於て、主としてかの一類の經典の功德を示すものと見得る以上、本經は大集部の最後の一分として作られたものと見て、大過ないであらう。

此の意味から云へば、本經は「大集部」の最終の卷末に置かるべき性質のものではあるが、今は諸譯者の都合と編輯上の關係より、強いてその位置を固執しないこと、豫め讀者諸彥の御了解を得ておき度い。

三

説法は王舍城の鷲峯山中に於てなされる。會座に大衆が集ると、普勇菩薩が、佛の説を請ふ。佛は我に大集會と名くる正法が有り、閻浮提に流布して居る。是の法を聞かん者は、五逆の重罪を免れ、不退轉地に住し、一切の如來に觀察せられ、一切の如來が、常に前に現在したまふといふ樣な利益があり、その得る所の福聚は、恒沙數の諸佛所有の福聚と等しい事を述べられる事から始まつて、佛が過去に寶吉祥如來の所に於ける物語があり、次で此の正法を毀謗する者の得る罪が説かれ、次で尼乾子が勝者と稱するを誡められてから、普勇菩薩が、諸佛に親近して法化を宣揚する爲に十方の世界に遣はされ、更に生を大苦と爲すとの旨の説法を聞いて、尼乾子等に發心し、十地圓滿の大菩薩となりて、種々の身を現ずる（卷第一）。

かの普勇菩薩が、七晝夜の間に、十方の世界に遊んだ中、下方の蓮花上世界なる蓮華藏佛から聞いた、大集會正法の種種な功德利益を述べる。その中には、此の法を聞く者は臨終に於て、正念現前して心顚倒せざれば、上下四方から無數の佛が來つて、その前に現じ、種々に安慰護念せられることなども説かれて居る。

次で佛が更に、此の正法を恭敬し、聽受し、讃歎し、信受して得る善利・功德を説いて、或は一切如來に尊重・稱讃せられ、或善友に親近し、如來を見るを得、或は諸佛の色相を見、諸佛の三昧に安住することを説かれる（卷第二）。

次に過去の諸佛の所に於て修行した結果、菩提の記を受けた事を説かれた中、勝觀如來がこの正法を説かれた事を記し、進んで正法の果報の有無、菩提の得否などに就ての説法がある。そこへ無數の婆羅門、尼乾子、諸天並に諸大國王が來り、更に四方より多數の菩薩達が集まるので、佛は諸外道の不正見を破し、我が宣説する所の大法の聚をば、求むる者有らんに、惜しむ所無く與へんと云はれる。外道輩は衆生が、生滅相續して間斷無き所以を尋ねるので、一切の生者を初生者と久生の者とに分けての説法（藥王軍菩薩に對し）がある（卷第三）。

問答のある中、「若し衆生有りて、暫くも聞くを得れば、是の人は、たとひ五逆の重罪有りとも、皆銷滅するを得、また阿耨多羅三藐三菩提に就て退轉せず、……若し此の正法を聞く有らば、一切皆、不退轉地に住し、即ち一切の如來に、常に觀察せられ、一切の如來、常に前に現在し、魔軍を降伏して、善法を圓滿するを得ん。是の人即ち能く、生滅の理に於て、皆悉く了知し、一切皆、阿耨多羅三藐三菩提を、成就するを得べし」と云つて居る。此に如來に常に觀察せらるるとか、諸佛が常に前に現在するとかいふのは、次に出す菩薩念佛三昧分に「菩薩の念佛三昧を成就せんには、常に諸佛世尊より遠離せず」(卷第十)といひ、或は「是の如き一切菩薩の念佛三昧を獲得すれば、諸方の有らゆる一切の諸佛、常に前に現在したまふ」(卷第四)といふが如き思想、乃至は「我れ今、大蓮花座に處り、……觀察して十方界を盡す」(卷第三)とあるが如き、佛國土を觀ずる思想などを前提とするものであらう。而して此の佛國土を觀ずることは、次に出す念佛三昧分、並に先の不眴品乃至は無盡意品とも關係あるものであつて、此等の關する限りに於ても、本經は亦如上の諸品の後に來るべきものである。

本經卷第二には「若し衆生有りて、能く是の如き大集會の正法に於て、正行を修すれば、乃ち名けて最上の梵行と爲すを得。而も彼の梵行は、即ち如來の行なり。若し勤めて修習し、間斷無ければ、是の人即ち、百の佛如來、晝夜の中に於て、常に前に現在せん。若し如來即ち佛刹に入りたまへば、佛刹に入り已つて、一切の法藏をば、皆能く了知せん」と云ひ、又かゝる人は、諸根圓滿にして、忍辱具足し、乃至命終の時に臨んで、正念現前して、心顚倒せず、即時に東上恒沙の佛、其の前に現前し、南西北方、四維上下の諸佛も、亦皆現前せん。久しく大集會正法を聞ける善根力を以ての故になどともある。

こゝには明に念佛或は觀佛の事は云はないが、先に引いた開元錄に擧げてある。念佛三昧品の次に置かるる賢護分では、「今菩薩の三昧有り、名けて思惟諸佛現前三昧といふといひ、又其の身は此の世界中に住して、暫くも彼の阿彌陀佛の名號を聞くを得て、能く心を繫けて相續思惟し、分明に彼の佛を見る、是を菩薩思惟具足成就諸佛現前三昧と爲すとあるが如きと、同じ思想系統にあるものと云ひ得る。

此等の經典がすでに大集經の一部として認められて居るのであるから、かゝる

成した一類の大事な經典があるために、特に其の利益功德のみを說いたものの存し得ることとも、極めて自然であり、この大集會正法經こそ、正にこの地位を占むるものと云ひ得るのである。

本經に於ても、大法聚（卷第二、第三）とか、大法蘊（卷第四）とかの語で以て、この法門の內容を示したと見得る所もあるから、大集會なる語の意味する所が、たとひ明瞭を缺くにしても、本經にいふ法門は、例の法の聚、法の蘊と關係あるものであり、大集經の大集も、亦かゝる意味を持つと見る限り、大集會なる語も、かの大集經と極めて密接の關係あることを語るものと云ひ得るであらう。

開元錄卷十一には、僧就が編んで六十卷本としたるに就て、「既無二憑准一故、不レ依レ彼」に依るべからずと云つて、次で若し合せんと欲すれば、前の大集中より、日密分を除いて、二十七卷有り、日密分を以て、處を替へて次に續け、次に月藏、次に地藏十輪、次に須彌藏、次に虛空孕をおくべし。後の四經は、其の說次を知らずと雖も、意を以て之を合するに、亦將つて失無かるべし。虛空孕の後には念佛三昧を次ぎ、次には賢護、次には譬喩王、末に無盡意をおいて、總じて八十卷を成ずる、亦將つて契はん」と云つて、大集經關係の諸典を、殆んど網羅して居るが、本經の異譯たる僧伽吒經に就ては、何等言說する所がない。

僧伽吒經は、元魏に於て既に譯出されて居るのであるから、本來から云へば、玆に加へられて居るべきであるが、當時は未だ明に知られて居らなかつたからであらう。貞元錄卷二十二の、有譯有本錄の、大乘經重單譯の下にも、僧伽吒經四卷、月婆首那譯とあるのみで、大集部とは關係付けられて居ない。

麗藏目錄に依ると、其の最後の部に、施護譯の諸經が、一括して編入せられて居る中に、右の大集會正法經も列せられて居るから、此の經は麗藏の原本となつた蜀本に於て、始めて入藏せられたものと考へられる。

二

本經は旣に、一類としての大集經の、功德福聚を說くのが主であつて、經の各所には、それが、種種に說かれて居り、之を誹謗するものが、大罪を得べきことも、亦述べて居るが、この事は大乘の諸經典に在つては、決して稀ではなくて、むしろ普通に見らるる所であるが、特に注意すべきものに就いて略說しやう。

先づ卷第一には、大集會と名くる正法に就て、佛と普勇菩薩との間に、種種の

大集會正法經解題

一

茲に譯したのは、宋の施護が、太平興國五年(西紀九八〇)に譯出したと云はれる五巻本である。此の經は、既に早く元魏の朝、元象元年(西紀五三八)優禪尼國王子、月婆首那が譯出し大僧伽吒經（Saṅghāṭisūtra dharmaparyāya.?）四巻があり、其の內容を比較するに、兩者全く平行し、僅に巻を分つに於て異るのみである。

經題にいふ大集會とは何を意味するかは、必ずしも明瞭とは云ひ難い。巻第一の首に、佛が普勇菩薩に對して「我に正法の、大集會と名くる有り。閻浮提に於て、廣く大に流布す」(異譯には、法門の、僧伽吒と名くる有り）と云はれるのを始めとして、屢ゝこの名が示されて居るけれども、その「大集會なる正法」の內容に就ては、殆んど說かれたところが無い。却つて大集會と名くる正法を「豫想」して居るが如き態度が、極めて濃厚である。

普勇菩薩が「云何於二此大集會正法一、乃能了知、而得二聽受一」と云へる問に對し、佛は「若人於二十二殑伽沙數如來……所一、圓二滿善根一、即得三聽聞二此大集會正法一」と說かれた後で、直に「此大集會正法、有二大功德一、利益二一切一」と云はれた外、大集會正法の句は、殆んどその功德・利益の叙述と相伴つて出だされて居る。言ひ換へれば、この正法を聽受し、讀誦して得る、功德と福聚とを示すが當面の問題であつて、今更にこの正法の內容を說示するが如き箇處の無いのも、畢竟これに因由するものと考へられる。

既に此の經典は、別な大集會の正法なる法門を豫想して居るとすれば、その法門は何であるか。恐らくは大集經なる、一類の經典であらうと見ることは、必ずしも不當ではない。大集部第一の巻頭に於いて述べた如く、大集經なる、經典は、暫く現存の六十巻本を措いて、諸經錄にいふ如き三十巻內外の本に就いて見るも、漸次に纂輯された痕の存する以上、現在の六十巻本が、直ちに首尾完結したものでない事は、例の校正後序に云へるが如くであり、從つて六十巻以外に、尚ほその一部を成すものがあつたとしても、決して不當ではない。現存の六十巻に含まれて居る各品は、大體、夫ゝ首尾の整つたものではあるが、それ等を集大

目次

（本丁）（通頁）

大集部　六

蓮澤成淳譯

(33)

國譯一切經

大東出版社藏版